
七つの災厄

秋涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七つの災厄

【コード】

N1090W

【作者名】

秋涼

【あらすじ】

これは、アドベンチャー×タイムズの物語 彼等は何も知らない…… 無知とは無力、すなわち罪である。 ようやく訪れた束の間の平穩、しかしそれは仮初だった。 蘇る原初の闇…… 子供たちは再び、戦いへと身を投じる事となる。 新たなる出会いに悲しき別れ、幸福なる結末ははたして来るのだろうか？

プロローグ（前書き）

デジモンアドベンチャー02とデジモンテイマーズのクロスオーバー作品です。

が、二つの作品が重なるのはまだまだ先のこととなります。

また、オリジナル設定がございますので不快にならえる方はお手数ではありますが、「戻る」を選択してください

プロローグ

遙か昔

世界が未だ混沌とし、不安定だった時代より語り継がれた真実の話しかし、永き時を経て真実は脚色を加えられ、暗黒記と呼ばれる物語へと変質した

未来を担う幼き者よ、心の片隅でもよい…… しかと覚えておくのだぞ

この世には決して犯してはならぬとされる“罪”が存在する

その罪とは、“傲慢” “暴食” “嫉妬” “色欲” “憤怒” “強欲” “怠惰”である

これらは“七つの大罪”と呼ばれ、生きとし生ける者全てが禁忌とせねばならぬもの

今よりはるか昔…… この“七つの大罪”の冠を頭上に掲げし者が存在した

彼の存在は自らの力を誇示し、このデジタルワールドを再構築せんとする野望の下、破壊の限りを尽くした

事態を重く見た世界の安定を望む者 すなわちホメオスタシアは抑止力として十の闘士をこの世に生み出された

この世界に現れた初の究極体と呼ばれる勇猛果敢な闘士達であったしかし、彼の者の力は絶対的なものであった

一人、また一人と倒れていく闘士達……

事態を静観していたホメオスタシアも諦めかけたその時、奇跡は起きた

十の闘士は一つの存在となり、彼の存在を己が全てを賭け、彼の存在を世界の裏側に追い遣ること事に成功する
だが、それは同時に闘士自身の死を意味するものであり、彼の存在を後世に残す事と同意義

語り継がねばならぬ

彼の存在は死ぬ事無く、裏に追い遣られたのみ
いつの日か必ず、七つの災厄となつてこの世界に舞い戻る
その時こそ、全てが終わり、全てが始める時

“罪”とは決して消えることなどないのだから……

ブログ（後書き）

初めまして、秋涼と申します。

キャラクター達が出てくるのは次回からです。

更新速度は遅くなると思いますが、よろしくお願いいたします。

平穏な日々

彼等は気付かない。

既に闇が胎動している事に……

かのベリアルヴァンデモンとの死闘から早一カ月
世界を脅かした騒動は収まり始め、待ちに待った平穏な日々が戻ってきた。

振り返ればこの1年は本当に楽しくも苦しい日々だった。
デジモンカイザーを止める戦いから始まり、ようやく手に入れた平穏はアルケニモン等によって崩され、悲しき存在であるブラックウオーグレイモンとの出会いそして別れ……

デーモン軍団襲来に伴い、関係ない子供たちに埋め込まれた暗黒の種、全ての元凶ベリアルヴァンデモンとの最終決戦

破壊されたホーリーストーンの代わりに植えられた光の種は順調に育ち始め、位相の乱れも修復に向かっている。

何事もなく、毎日が平凡に過ぎていく……

「さーて、今日も復興作業頑張ろうぜ！」

「任せておけ！ 大輔っ！」

腕の筋を伸ばしながら元気のいい声を上げる少年、名を本宮大輔という。

尊敬する先輩より受け継いだゴーグルが太陽光を反射し光る。

そのすぐ横では青い小竜型デジモン、ブイモンがこれまた元気よく頷いている。

「じゃー、元気が有り余っている君たちには今、一番力仕事を必要

としている場所に向かつてもらいまーす」

「この場所は今最も、損傷が激しい場所なようですから頑張ってください」

Dターミナルの情報をチェックし、担当地区を振り分ける最年長者、井ノ上京。

次々と送られてくる情報を迅速にかつ的確に分けていく。

翼を上下させ、空中を飛ぶ彼女のパートナーデジモン、ホークモンが情報を補足する。

「任せとけっ！」そう、力強い返事を返した大輔とブイモンのペアはさっさとその場所へ向け、走り去る。

「では、僕とアルマジモンは昨日の続きをしますね」

「まだまだ崩れたところもたくさんあるだぎゃ」

この場にいる子供の中で最も若い少年、火田伊織は礼儀正しい口調で告げる。

視線を下ろし、自分のパートナーと目を合わせる。

伊織の言葉にアルマジモンがのんびりとした口調と態度で返し、作業が途中となってしまうている場所へ歩いていく。

その後ろ姿を見届けた帽子をかぶった少年、高石タケルは同じく伊織の姿を見届けた京に告げる。

「僕も昨日作業していた場所で少し気になる部分があるので、」

「あの崩れそうになってるところだよ、タケル」

特等席である彼の頭の上に乗っているパートナー、パタモンが言葉をこぼす。

いつも笑顔な彼にしては珍しく硬い表情でパタモンの言葉に頷く。

彼等の表情から察するにその場所は相当崩れやすくなってしまっ

いるようだ。

「じゃあ、タケル君と伊織は昨日と同じ場所ね。ヒカリちゃん達はどうか？」

「私達が昨日担当した地区の復興はほとんど終わっている、別の場所でも大丈夫だ。」

ヒカリ、それでいいか？」

「うん、大丈夫だよ。テイルモン。他の場所ってどこがありますか、京さん」

「ちよ〜つと、待ってね」

各々の場所を確認した京は今まで静かに話を聞いていた少女、八神ヒカリとそのパートナーデジモンに声をかける。

ヒカリが口を開ける前にパートナー、テイルモンが自分達の担当した地区について把握した上で提案する。

自分を見上げるテイルモンと目を合わせ一つ頷くと、情報を持っている京に尋ねる。

女の子であるヒカリにはさほど重労働なところを当てるわけにもいかず、送られてきた情報にもう一度目を通す。

「そうね……今のところここから近くでそこまで人手がいる場所ってないみたい

ヒカリちゃんさえよければ、他の人の手伝いに行っておいてくれない？」

「と言っても、僕か京さんしかもう残っていないんだけどね」

「本当だね。なら、京さんを手伝おうかな」

「ビンゴッ！ よろしくね、ヒカリちゃん」

「はい、こちらこそ」

「それじゃ、みんな分担する場所も決まったみたいだし……僕達も行こうか、パタモン」

「そうだね、タケル。じゃあ、またね」

前足を器用に動かし、手を振るパタモンを頭に乗せ走っていくタケル。

その姿を確認した京は気合を入れるように手を叩くと、ヒカリに向き合う。

「私達も行こうか」

平穏な日々（後書き）

ボランティア活動開始編です。

及川の力で再生されたといっても、まだまだ破壊された場所はある
と思ったので

次回はもう少し話が進むはず……
遅くてすみません。

復興作業

傷ついた大地に蝶が舞い降りる。

蝶は光となり、デジタルワールドに溶け込む。

一羽で足りなければ二羽、三羽と増え少しずつ丁寧に確実に傷を癒していく。

かつて、この蝶は人間だった……

デジタルワールドに恋い焦がれ、憧れ続けた一人の男 及川悠

紀夫

心の隙を突かれ、悪事を繰り返し、焦がれた地を傷つけ続けた者の残滓……それがこの蝶。

犯した罪を償うため、焦がれた地を救うため、残された自身の生を異界の地にて変換することで変化した存在。

今となっては及川悠紀夫としての意識はなく、ただデジタルワールドの再生のために最後の一匹まで飛び続けるのだ。

力自慢なデジモン達が折れた大木や瓦礫を一つ一つ丁寧に運んでいく。

時に協力し合い、力を合わせながらの共同作業だ。

そこに種族の差など関係ない。

木材として使える大木、建物の再構築に使えるような瓦礫、もう使い物にならないものと分けていく。

「おーい、手伝いに来たぜーっ！」

手を振りながら、デジタルワールドを救った選ばれし子供のワンペアがこちらに走ってくる。

デジモン達は各々の作業を止め、走り寄ってくる大輔とブイモンを

迎え入れる。

今日も復興の手伝いに来てくれたのだろう。

彼等の行動は既にデジタルワールド中に知れ渡っており、何も言わずにこの場にいる全員が直感する。

案の定、この場で唯一の完全体であるアンドロモンの前で息を切らせながら到着すると、眩しいまでの笑顔を向ける。

「復興作業の手伝いに来たぜ！ 京が言うにはこの辺りで一番力仕事が必要なのってここだろ？」

「ああ、その通りだ。手伝いきてもらい、感謝する」

「そんなお礼なんていいって！ なあ、大輔」

「おう、ブイモンの言うとおりだぜ。で、俺等は何を手伝えればいいんだ？」

見渡す限りの瓦礫の山…… 順当に考えれば、この瓦礫の撤去だろう。

しかし、散乱する瓦礫は小さいものも多いが、大体が1メートルを超えるものばかり。

大きいものでは5メートルを超すものもある。

更に加えてコンクリート製なものが多く、重量もある。

ブイモンの成熟期、エクスブイモンならば活躍できるだろうが、人間である大輔にそこまでの力はない。

結果、

「エクスブイモンはガードロモン達とでかい瓦礫の撤去、俺は小さい瓦礫や木の回収か」

「へへ、一緒に頑張ろうぜ」

「そうだな。しっかり、滅茶苦茶多いな」

額から流れる汗を拭きながら、一息つく大輔。

その周りにはガードロモンほどの体格も力もない成長期デジモン、ガジモンが一緒に作業している。

しかし、小さな瓦礫や木材と言ってもそこそこ大きさのあるものや重さがあるものもある。

現在、大輔はガジモンと力を合わせて少し大きめの瓦礫を運んでいる最中だ。

自分達が住むデジタルワールドの復興ということでウィルス種であるガジモン達も積極的に働いている。

「結構、片付いてきたな」

自分達が到着した当初と比べると確実に瓦礫の数は減っている。

しかし、まだまだ復興には時間がかかりそうだ。

破壊しつくされた建物にはほほ更地となってしまった大地。

これが元通りになるには年単位の時間が必要となる。ベリアルヴァンデモンが残した爪痕は重い。

場所は移り変わり、ここは比較的被害が小さかった場所。

理由として上げるとすれば、この近くはデジモン達が住む集落が少なく、とても小規模なものだったことが一つ。

もう一つはここには破壊されてしまったが、ホーリーストーンが安置されていた場所に近いことだろう。

四聖獣の一人、東のチンロンモンが巻いた種がすすくと順調に育っている。

ここは先日、タケルとパタモンが担当した地域。

「ああ、やっぱり昨日よりも危なくなってる」

「ちよつとした衝撃で崩れちゃいそうだね。気を付けないと」

「そうだね、パタモン。」

でもこの遺跡はジジモン達にとって、とても大切な場所みたいだしこのままにはおけないからね」

そう、先日この場所を手伝った際、二人は集落に住むジジモンとババモンに頼まれたのだ。

崩れかけている遺跡を助けてほしいと……

この遺跡は遥か太古に作られたものらしく、とても貴重で重要なものだという。

しかし、入口が嚴重に封印されているようで中に入ることはできない。

アーチ状の門がいくつも設けられており、例を挙げるとすればギリシア神殿によく似ている。

元々、古いものなので耐久性が低かったのだろう。先の戦いで予想以上の被害を受けてしまったようだ。

倒壊の危険性があるが、一先ずどれだけ被害を受けているのか調べるのが先だ。

二人はグルリと遺跡の外周を回ってきたのだ。

どこもダメージがあるが、一番ひどいのはこの入口近くだろう。

「少し近づいてみるか……」

「タケル、僕が行くよ。僕なら飛べるしタケルが行くより安全だと思っ」

「そうだね。じゃあ、頼むよ。危なくなったら、すぐに戻るんだよ」

「わかってるって、タケルは心配性なんだから」

翼の役割も果たす耳を器用に動かし、入口付近まで飛んでいくパタモン。

心配そうに見守るタケルの視線を感じながら、近付いてく。

入口付近の柱には大きな亀裂が入り、多少の振動でも崩れてしまいそうだった。

よくまだ建っているものだと感心しながら固く閉ざされた入口まで
辿り着く。
次の瞬間、

「うわっ！」

「パタモンッ！」

入口から侵入を拒むように電撃が放射され、突然のことに反応が遅
れたパタモンを直撃する。

地面に落下したパタモンを目撃したタケルは周りのことなど目もく
れず、一目散にパタモンに駆け寄る。

それが最悪の事態を招くとは思ってもせずに……

復興作業（後書き）

復興作業開始早々にアクシデント発生です。

大輔とブイモンには額に汗をかきながらの作業が似合うと思います。

次はもう少し早く更新できれば……

崩れる場所

果てしなく続く退屈な日々

……

自由に動くこともできず、ただ時の流れを感受する

しかしそれも次期、終わりを告げる

遠く離れた同胞の気配を敏感に感じ取りながら、ゆっくりと笑むのだった

慌てた事が全ての原因だ。

大きな亀裂が入った柱は電撃の衝撃と、走ったことで起きた揺れに対応できなかつたのだ。

一本の柱が倒れたことで他の場所もドミノ倒しのように崩れたのだ。しかし、逆にそれが彼等を救ったともいえる。

この遺跡にはどうやら巨大な地下空洞が存在し、崩れたことで発生した瓦礫の重さに耐えきれず、先ほどまで二人がいた場所が見事に倒壊したのだ。

重力の影響で倒壊した部分から真つ逆さまに落ちたことよって地上での倒壊に巻き込まれずに済んだ。

あのまま地上で倒壊に巻き込まれていれば、複数の瓦礫に押しつぶされおそらくは生きていなかっただろう。

エンジエモンの腕から降ろされたタケルはほつと胸をなでおろした。落ちた瞬間、デジヴァイスから進化の光が溢れ、パタモンは成熟期であるエンジエモンに進化し、なす術なく落ちていくタケルをその腕に抱いたのだ。

同時に自分達と共に落ちてくる瓦礫を避けながら、地下空洞を下り、瓦礫が落ちてこない地点まで移動する。

幸いにも掠り傷程度で済んだのはいいが、瓦礫により行く手を塞が

れしまった。

「ありがとう、エンジェモン。でも…… 出口なくなっちゃったね」

「そうだな、タケル。Dターミナルでみんなに連絡を入れ、助けを待とう」

地下で下手に暴れれば、遺跡そのものが完全に崩壊してしまう。今の彼等には助けを待つ他、打つ手はなかった。

タケルはDターミナルを取り出し、伊織とアルマジモンに連絡を入れる。

デイグモンにアーマー進化してもらえば、地下と地上を結ぶ穴をほれるだろう。

そうすれば、飛んで外へ出られる。

しかし、それはこの遺跡を少しではあるが、壊すということ。

ジジモンとババモンにあれほど貴重で重要な遺跡であるから守って欲しいと頼まれておきながら、不可抗力とはいえ破壊してしまった。その事実にもメールを送り終えたタケルは下唇をかみ、表情を悔しげに歪ませる。

「タケル、すまない。」

「私がおう少し気を配っていれば、こんな事には……」
「……違う。僕がもっと慎重に行動していれば、こんな事にはならなかったんだ」

日の光が差し込まぬ、地下。心を照らす光などあるはずもなく…… エンジェモンは悔しげに両手を握りしめるパートナーを見ることしかできなかった。

固い岩盤を削る音がする。
土砂や瓦礫で埋まってしまった地下水路の復興、それが伊織とアルマジモンが行っている作業だ。
機能から引き続き行っているが、この部分は他よりも固いらしく中々作業が終わらない。
ふと、上着のポケットに入れていたDターミナルが振動した。
これはメールが来た合図。伊織は慣れた手つきで取り出すと、メールを読み取る。

【遺跡の倒壊に巻き込まれた

作業の途中ですごく悪いんだけど、助けにきて欲しい

タケル】

SOSを知らせる緊急メール。
読み終えた伊織は眼を見開くほど驚くと、慌てた様子でデイグモンに声をかける。

「デイグモン！ 緊急事態です！」

一度、デイグモンからアルマジモンまで退化させるとD-3の反応を手掛かりにメールの差出人、タケルの下へと急ぐ。

メールを打てるということはそれほどひどい怪我をしたわけではないだろう。

頭ではそう理解していても感情はそうではない。

彼等は無事なんだろうか？ 早く行かないと……！ 早く、早くっ！

「パタモン達なら、きっと大丈夫だぎゃ。」

伊織がしっかりせんとあかんでよ。焦っとならいい結果はでんって伊織のじいちゃんが言ってただぎゃ」

「アルマジモン…… そうですね、焦っていいは見落とすものが出

てきてしまう。

もう大丈夫。さあ、急ぎましょう」

「了解だぎゃ、伊織！」

程なくして、倒壊した遺跡へたどり着いた。

D・3の反応もこの辺りを示しており、まずこの遺跡で間違いないだろう。

倒壊している部分は入り口部分の門の辺りだけで、遺跡自体はそれほどダメージを受けていないように見える。

「タケルさん！」

「パタモン！」

口元に手を当てて、この辺りにいるだろう二人の名前を呼ぶ。

二度、三度と何度も呼ぶ。

何度目かの声に微かに誰かの声が答える。

「お、く」

「タケルさん!？」

「伊織君っ！来てくれたんだね！」

崩れる場所（後書き）

地下へと転落したタケル達を助けるべく伊織とアルマジモン登場
彼等は本当に活躍できる場所が幅広くて重宝します。

冒頭部分では何者かの存在を示す一文を入れました。

しかし、この存在が表舞台に出るのはまだまだ先だったりします。

救援要請

農作業は足腰を使うことがよくわかった。

二人の少女とそのパートナーデジモンは荒廃した畑を他のデジモンと協力しながら、耕していた。

闇の力によって荒廃してしまったこの土地は生命力の高い雑草ですら、早々生えることはない。

天に上る太陽の光で徐々にだが、浄化されてきているといってもやはり根深い部分にくすぶっている様子だ。

それを耕す事で掘り起し、少しでも太陽光に当てることで浄化を促進するのが今の作業だ。

昔のようにたくさんのお作物が取れるようになるにはまだまだ時間がかかるだろう。

「ふう…… それにしてもまだ闇の力は消えてくれないのね」

「全く持ってその通り！ 本っ当にしつこいんだから」

にじみ出てくる汗を拭うため、手を休めたヒカリが呟いた言葉に即座に反応を返す京。

帽子の中が蒸したのか、今は脱いでいる。

ここ数日、徹底的に耕してはいるがまだまだ作物を植える段階まで回復していない。

だが、やり始めた当初は雑草すら生えていない状態だったものが、今では少しずつではあるが雑草が生え始めている。

間引くという作業が増えはしたが、内心そのことが嬉しくて仕方がない。

農作業で雑草を嬉しがるなど普通ならありえないが、自分達の行動によって芽吹いた生命だ、嬉しく思わないはずがない。

「でも、いつかきつと前のように緑一面の場所になる。そう信じて頑張るしかない」

「結果として、雑草といえども生えてきてますから、もう少しですよ」

彼女等と同様に農作業をしていたパートナーが口々に答える。

光の紋章を持つために闇の力を特に感じやすいヒカリはそう励ましてくれるティルモンの存在はとても大きい。

確かにデジタルワールド全体として闇の力は収縮してきている。

だが、どうしてもどこか不安があるのだ。

この平穏がまるで嵐の前触れのような気がして……

そこへ二人のDターミナルに誰かからメールが入ったのを感じた。

「伊織から？ どうしたんだろっ……」

えっと、『タケルさんが作業中の遺跡の倒壊に巻き込まれました。救出に人手が必要なのでこちらに来てください』って…… 大変じゃない！」

「作業場所を決める時、パタモンが“崩れそうになっている場所”と言ってたわね。」

きつとそこだ。ヒカリ、行こう」

「うん。行きましょう、京さん」

同じく水田の作業にあたっていた数体のデジモンに席を外す事を伝えると、D・3を掲げ、進化を起こす言葉を口にする。

この進化は太古の力。デジメンタルと呼ばれる力の源を開放し、パートナーをアーマー体へと進化させる。

この一年間、デジタルワールド中に建てられ次元を乱れさせた原因、ダークタワー。

主な働きは先に記したとおり、次元を乱れさせること。そしてもう一つ、デジモンの通常進化を抑制すること。

これにより、デジモン達は通常進化を禁じられ、誰一人として進化することができなくなってしまった。

これを解消するため、四聖獣が用意した新たな進化の形　それがアーマー進化。

「デジメンタルアープ！」

Dターミナルよりデジメンタルが引き出され、D-3を介してデジモン達へ装備されていく。

『ホークモン　アーマー進化　羽ばたく愛情、ホルスモン！』

『テイルモン　アーマー進化　微笑みの光、ネフェルティモン！』

愛情の紋章が記されたデジメンタルがホークモンと合わさり、飛行能力を得た風のアーマー体、ホルスモンへ

光の紋章が記されたデジメンタルはテイルモンに合わさり、通常進化と同じく光を帯びたアーマー体、ネフェルティモンへとアーマー進化する。

彼女たちはそれぞれのパートナーの背に乗ると、急いで連絡のあった場所へ向かう。

「ちょっと、休憩……　って、伊織からメール来てんじゃねえか。何々？」

肉体労働で悲鳴を上げている筋肉をほぐすため、両手を高く上げ伸びをする。

そういえば、Dターミナルが揺れていたような気がしていたので確認してみると案の定、伊織から連絡が入っていた。

珍しいこともあるもんだと、メールを開き何の用だよと内心で考え

ながら、軽い気持ちで読み始める。

だが、読み終わる頃には気楽だった表情が険しくなり慌ててブイモンの名前を呼ぶ。

「ブイモン！ タケルとパタモンがピンチだ！ 助けに行くぜ！」

「ピンチ？ なあなあ、ピンチってどういうことだよ大輔っ！」

「なんか建物の倒壊に巻き込まれたらしいぜ。って訳で疲れてるだろうけど行くぜ！」

「任せとけて！」

「それでこそ、俺の相棒だぜ！ デジメンタルアーツ！」

大輔がD-3を掲げ、宣言する。

Dターミナルに保存されている二種類のデジメンタルの内の一つ、友情のデジメンタルが現れブイモンと合わさる。

『ブイモン アーマー進化 轟く友情、ライドラモン！』

黒き鎧を纏った青き稲妻を走らせるアーマー体、ライドラモン。

飛行能力は持たないが、地上での機動力は全アーマー体中、トップクラスを誇る。

大輔は慣れた様子でライドラモンの背に乗ると、近くにいたガジモンに事情を伝え、タケル達の下へと急ぐ。

遺跡の地下空間に事実上、閉じ込められたタケル達は駆けつけてくれた伊織達の声を聞き、冷静さを取り戻ることができたのか広くスペースの取ってある空間を調べていた。

暗さに目が慣れてきたことと、崩れた個所からかすかに伸びる光によって少しではあるがこの地下空間の様子がわかってきた。

どうやら、この地下空間も遺跡の一部らしく割ときれいに塗装されていることがわかる。

勿論、地下なだけあり砂埃などですいぶんと汚れてはいるが……
そんな中、タケルよりも率先して調べていたエンジエモンが声をかけた。

「タケル、」

「どうしたんだい？」

「この壁を見てくれ…… 暗くてよく見えないが、何か絵が描いてある」

「…… 本当だ。 暗くてよく見えないけど、確かに絵が描いてある」

そこで辺りを見回してみると、全ての壁になんらかの絵が描かれている事がわかる。

光の届かない奥の方はわからないが、この調子だとおそらく描かれているだろう。

この時、彼等は知らなかった

この絵が、太古に起きた暗黒記を表現していることを……

救援要請（後書き）

話が中々進まなくて大変、申し訳ないです。

一つの場面を詳しく書こうとするからこうなるんだ……

でも、ただ救援を呼んできたよだけじゃ物足りなく感じるから仕方がない！

救出難航

ゆらりと蠢く

紅き法衣を纏った悪魔は黒に染まった海を見る

静かに揺れる波を無感情な瞳で見つめ、おもむろに右の手を頭上へと掲げる

邪悪な焰が掌に集まり強力な力として凝縮される

ある一定量が集まり、おもむろに音も立てずに悪魔は焰を海へと放出する

焰は海を割り、その場にいた全ての生物を無慈悲に焼き尽くす

悪魔はゆっくりとした動きで宙に浮くと、割れた海の底へと降りていく……

「これで、皆さんに連絡はできましたね……」

「相当崩れやすくなつとるだぎゃ。下手に手を出すと、更に崩れかねんだぎゃ」

「すいません、タケルさん。僕達だけの力では…… 本当にすいません！」

頂垂れ、自分の無力さに歯噛みする伊織はただタケルに謝ることしかできない。

そう、先の倒壊の影響なのかただでさえ崩れかけていた遺跡は更にもろくなってしまっている。

たとえ、地面に穴を空けるとしてもそこには遺跡全体の本格的な倒壊の危険性がある。

ここは他にも救援を呼び、力を合わせる事が最良の選択だろう。心配なのはタケルとパタモンの状態だ。

流石に大声での会話は体力を使うので、今はメールで情報のやり取

りを行っている。

今、わかっていることはタケル達がいる地下には広大な空間が広がっており、壁に何らかの絵が描かれていることだ。

一体、どのような絵なのかは残念ながら暗くてよくわからないそう
だ。

ともかく今、伊織達がすべきことは他のみんなが来てくれることを待つこととどうすれば安全にタケル達を救い出せるか考えることだろう。

おそらく最も安全なのは遺跡の扉を開き、中から救出することだ。

地下の空間が遺跡の一部とするのならば、きつと地上の建物には下に降りるための階段があるはず。

しかし、タケルの話では入口に近付けば防御システムが作動し、電撃が走るといふ。

うかつに近づくことはできない。

そうすると残るは地下空間に繋がる穴を空けること。

しかし、これにも問題がある。

それは穴を掘る作業で遺跡が倒壊する可能性が極めて高いことだ。

一体、どうすればいいのだろう…… 時間だけが過ぎていく。

そんな思考の袋小路に入り始めてしまった伊織に二人の声が響く。

「伊織　！」

「伊織君！」

「京さん、ヒカリさん！ 来てくれたんですね！」

ホルスモンとネフェルティモンが地面に着地し、その背から京とヒカリが慣れた様子で降りる。

その姿を目撃した伊織は二人に駆け寄っていく。

現在の様子を伊織から聞くと同時に無残に崩れている遺跡入口へ視線を向ける。

入口少し手前辺りに大穴が空いており、ここから落ちたのだろう。

だが、その部分は崩れた瓦礫に埋もれ、ここから助け出すのはまず無理だ。

「初めはディグモンの力でそのすぐ傍に穴を空けようとタケルさんと話していたのですが、見てのとおり遺跡自体が古いので……」

「ちよつと掘っただけで嫌な音が聞こえてきたんですぐやめたんだぎゃ」

「作業の揺れで崩れそうになったってところね。」

うーん、場所が場所だけに手荒なことができないし……

先輩に相談してみるわ。先輩なら何かいい案を出してくれると思う」

京はそう言うと、同じ選ばれし子供の先輩であり、自身が所属するパソコン部の先輩である泉光子郎にメールを入れる。

その提案にヒカリと伊織も頷く。

光子郎なら、自分達よりもずっと現実的で安全な案を出してくれる。唯一つ問題なのが、彼がこのメールにいつ気づいてくれるかだ。早く気付いてくれればいいが、中々気付かないかもしれない。

彼は自分達と違い、中学生で忙しい身だ。

「先輩に完全に頼りっぱなしってというのはダメだし。私達もどうすればいいか考えよう」

「京さんの言うとおりだわ。」

とりあえず、まず情報を整理してみましよう。そうすることで何かわかるかもしれない」

「はい。」

では、最初に留意しておくべき点は……「おおーい！」

状況整理のため情報を提示し始めた伊織の言葉を遮るように聞こえた声。

現状に似つかわしくないほど元気な声を上げているのはライドラモ

ンに乗りながら、こちらへ手を振っている少年、大輔。
3人のところまでやってくると、頭をかきながらライドラモンの背
から飛び降りる。

「遅れちまってわりいな。で、今どうなってんの?」

救出難航（後書き）

赤い悪魔が動き出しました。

これからはこの二つの出来事を並行して進めていきたいと思えます。並行と言っても、メインは悪までも子供達です。

次話ではまだ出ていない選ばれし子供、彼が登場する予定です。

戦闘シーンが早く書きたいです……

紋章の異常

連なる木々の間を疾走するデジモンが一体。

背の羽を高速で動かし、飛翔する昆虫型デジモン、名をステインゲモンという。

その腕には彼のパートナーである一時、世間を騒がせた天才少年、一乗寺賢が大切に抱かれている。

彼は大輔達とは違う小学校に通っており、住んでいる場所も異なるため自宅のパソコンから直接デジタルワールドに通っているのだ。しかし、一つのエリアに開けるゲートは一カ所のみであるため、大輔たちと同じエリアに直接行くことはできない。

だからこそ、まず大輔達から事前に行先を教えてもらい、隣接するエリアにゲートを開け、合流するという手段をとっている。

そのため、大輔達よりも作業を始める時間が遅くなってしまふ。

「賢ちゃん、メールが来ていたみたいだがどうかしたのか？」

「うん。ステインゲモン、タケル君達が作業している場所で遺跡倒壊事故が起こってそれに巻き込まれたという連絡だったよ……」

もう大輔達もそこにいるみたいだ。僕たちも、

「わかった。……賢ちゃん、ブイモン達もそこにいるならそんなに心配することはないよ。」

場所は？」

「そうだね。場所は、ここからだと……ッ!？」

「賢!？」

タケル達が心配なのだろう、元々優しい性格の賢だ。

心を痛めているのが手に取るようにわかる。

ステインゲモンはそんな賢を安心させるように優しく言葉をかけ、

彼等のいる場所を聞く。

そんなパートナーの心遣いに小さく笑みを返しながら、D-3の反応から導き出されるルートを告げようとした瞬間、そのD-3から強い光りが発せられる。

あまりの眩しさにステイングモンは急停止し、賢は眼を反射的に閉じてしまう。

数秒間に渡り、光りは放出し続けたが徐々に落ち着き、ふつりと切れる。

同時に賢がポケットに入れ、肌身離さず持ち歩いているあるものがD-3ほどの強さはないものの淡く光り出す。

「優しさの紋章が…… 一体どうして？」

今まで一度たりともこんな現象は起きなかった。

呆然とする二人を前に優しさの紋章が放つ光はある一方向を指し示し始める。

その方向になるものとは何なのか？

好奇心が疼いたのがわかる。しかし、今はタケル達を救出するのが先だ。

賢は動揺した気持ちを抑えるように一度深く息を吸い込む。

まずは大輔達と合流するのが先だ。

倒壊に巻き込まれてしまったタケルとパタモンを救い出した後に調べればいいだろう。

それに紋章に関してなら、自分よりもタケルやヒカリの方が知っているはず。

そう判断し、沈黙していたステイングモンに今度こそ大輔達のいる場所へ行くためのルートを説明しようとする。

「あれ？」

「賢、どうしたんだ？ さっきのD-3の事といい紋章の事も含め、

具合でも悪くなったのか？」

「具合は悪くなつてないよ、大丈夫。」

ただ、紋章が指す方向と大輔君達の反応がある方向と同じだったから…… 何か関係があるんじゃないかなつて」

「なるほど。具合が悪くないのならいいんだ、賢ちゃんはよく無茶をするから。」

……同じ方向なら早く行つた方がいいんじゃないのか？」

「そうだね。もしかしたらこの紋章が必要な事態になっているのかもしれない。」

急ごう、ステイングモン」

紋章が示す方向、そこには大輔達がいる。

そして倒壊した遺跡…… 何の因果があるのだろうか？

謎だけが先行して、置いて行かれていく。

ただ一つ彼等に言えるとするならば、その紋章はデジタルワールドに存在する唯一のものということだけ

それが何を意味するのかは、まだわからない

紅き悪魔は進む

自らが割つた海底の奥底を

悪魔にはわかつていた、この進む先には自らと同じ暗黒の存在がいることを

そしてその存在は自らと限りなく近い存在であることを……

僅かに見える残虐な瞳が嗤う

そうだ、我等は同胞なのだ

太古の時代、反逆の徒に選ばれ、大罪をその身に司つた

悪魔は嗤う

戒めは破られ、闇が奮起する時は近い

待っているがいい、選ばれし子供たちよ
今に我等は甦る

その時こそ、全ての復讐は果たされ、世は暗黒へと沈むのだ……

紋章の異常（後書き）

よく考えれば、優しさの紋章ってなんであるんでしょう？

他の八つの紋章は四聖獣の解放に使われたり、色々使用されているにも関わらず

優しさだけデジモンカイザー関係以外で使われていないんですよ。そのためだけに作られたわけがありませんし、謎だ……

話が進まず、本当に申し訳ないです。

しかもあるう事が、タケル救出までが導入部分なので、本編始まってさえいません。

優しさが示すもの

僅かな光りしか差し込まない地下、そこに二人はいる
地上がすごく騒がしくなってきたている事を、話し声から二人は感じていた。

当初は伊織とアルマジモンだけにメールを入れたが、先の倒壊で更に崩れやすくなったためみんなの力を借りると決め、メールを入れてもらったのだ。

どうやらようやく大輔達も到着したようで更に騒がしくなっている。

「おーい！ タケルーツ！ 大丈夫かー？」

「僕たちは、大丈夫だよ！ 助けにきてくれてありがとうっ！」

大声で安否を尋ねられ、こちらも大声で返事を返す。

伊織とも初めはこうやって意思疎通を図っていたが、双方とものを痛めるだろうとメールによる方法に切り替えたのだが、大輔にはそのことがまだ伝わっていなかったらしい。

まあ、メールでやりとりをするよりもこう大声で会話する方が彼らしいといえれば彼らしいが。

「助けに行くからっ！ そこで！ 待ってるよッ！」

威勢よく言い放つ大輔。

おそらく…… いや、絶対に救出のために必要な作戦など考えていないだろうが、こつも清々しく言い切られると勇気付けられる。

そして、彼ならどうにかしてくれそうな気分になさせてくれるのだ。

そこが大輔の長所なんだろう。

タケルは向こうにはわからないが、地下に落ちてから初めて微笑み、力強く「待っている！」と返事を返す。

「じゃー、とつとと助けちまおうぜ！」

「とつととつて…… できないからこうやって相談してるんでしょ
うがっ！」

「なんでできないんだよ？ 普通にディグモンが掘ればいいんじゃない
ね？」

「あのですね、大輔さん。」

遺跡自体が凄くもろくてタケルさん達のいる場所近くに竪穴を作るのは不可能なんです。

下手をすれば遺跡が完全に倒壊します」

「なら離れたところに竪穴掘って、そこからタケルのとこまで横に掘ればいいじゃねえか」

「そんな事したら、地下の遺跡を傷つけるわ。」

タケル君がいうには地下の壁には絵が描かれているみたいだし……

……
「タケルの命がかかってるんだぜ！？ 遺跡を守ることも大切だけど、まずはタケルとパタモンの救出が先決だろ？」

やはり、威勢だけで特に何も考えていない大輔に京が突っ込みを入れる。

最近は大輔に突っ込みを入れるのは専ら賢の仕事になってきていたが、このように彼がない場合は京に突っ込み役が回ることが多い。なんでやらないんだと疑問が浮かんでいる大輔に伊織が噛み砕いた説明をする。

遺跡を守るためにはそう簡単にディグモンの力で穴を開けられない事を聞くと、大輔は遺跡から少し離れた場所からすればいいと提案する。

しかし、それも即座にダメだしを受ける。

タケルからの情報で地下には希少価値の高い絵が描かれているのだ。横穴を空けるとなると、壁に描かれている絵を砕くということ。

保全のために動いているのにそれでは本末転倒だ。

ヒカリにダメだしを受け、多少凹む気持ちがあるようだが、ここはタケル達の命がかかっているところ、大輔も食い下がる。

命に勝るものはない。

みんなそんな事わかつている。沈黙の時間が続く。

そこへ聞こえてきた羽音、みなは注意が音の聞こえてきた場所へ向く。

木々を掻き分け、現れたのは緑と黒の昆虫型デジモンとそのパートナーである一人の少年。

「賢！」

「大輔！ 遅れてすまない、状況は？」

「見てのとおり、手がだせねえ状況だぜ。なあ、賢なんかいい手なにかつて…… 何か光つてねえ？」

賢は停止したステイングモンの腕から地面に降り立つと大輔達に駆け寄る。

一時は天才少年と呼ばれた彼だ。現状を打破する案を出してくれるかもしれない。

大輔は表情を輝かせ、賢にざっくりにもほどがある説明をする。

まず何故、手が出せないのかの理由がなく、更に遺跡の状態も何も伝えていない。

多少、困ったような表情の賢を横目に大輔は何か気付いた声をあげる。

彼が握りしめている右手から淡い光りが漏れ出ている。

その漏れ出ている光はまっすぐに遺跡を示しているように見える。

「ああ、どうしてかはわからないんだけど僕の持つ優しさの紋章がついさつきからずっと光っているんだ。

どうやら、あの遺跡に向かっていているようだけど……」

「紋章が反応しているの……？」
「もしかすると、この遺跡と優しさの紋章は何か深い関わりがあるのかもしれない」

ヒカリ自身も今は持っていないとしても紋章を持っていた選ばれし子供だ。

紋章が反応していると知り、どこか不安げな様子を見せる。

そんなパートナーとは逆にテイルモンは冷静にそのことを受け止め、自分の考えを口に出す。

だが、その考えは限りなく正解に近いだろう。

何せ優しさの紋章が反応したのは今も昔もあの時だけ…… 黄金のデジタル、奇跡のデジタルが生み出された時だけ。

ある時、知識の紋章の持ち主泉光子郎が優しさの紋章について考えを口に出したことがある。

『優しさの紋章はもしかすると、僕達が持っていた紋章とは違うのかもかもしれません。』

ご存じのとおり、僕たちの紋章は自分のパートナーを完全体へ進化させる力がありました。しかし、一乗寺君のパートナーデジモンは完全体へ進化したことがありません。

タグがないのが原因かもしれませんが、そもそもゲンナイさんが作った紋章は全部で八つだけでした。

そしてその目的はアポカリモンを倒し、デジタルワールドの歪みを正すため。そのために、僕達は再度デジタルワールドへ導かれ、四聖獣を紋章の力を持って開放しました。

しかし、それにも優しさの紋章は関わっていないどころか存在すら知りませんでした。

と、なるともしかしたら優しさの紋章にはデジタルワールドの歪みとは関係なく別の目的のためにデジタルワールドの安定を望む存在が新たに作ったのかもかもしれません』

あの時はまだベリアルヴァンデモンの存在を知らず、ダークタワー関係だと誰もが考えていた。

しかし、ベリアルヴァンデモンを倒しダークタワーがなくなった後でも優しさの紋章は存在している。

まるで役目はまだだとも言いたげに……

「なあ、賢。優しさの紋章を遺跡の入り口に向けてみるよ。

もしかしたら空いたりして……」

「……そう、だね。もしかしたら何か起こるかもしれない」

大輔が賢に促し、一度この場にいる全員顔を回すと皆、一同に頷いた。

きつと何か起きる。

特にヒカリとテイルモンは確信を抱いていた。

進み続けた先には封じられた同胞の姿が

悪魔はゆっくりと手を伸ばし、同胞を手取る

残虐な瞳は更にその残虐さを増し、食い入るように見つめる

ついに見つけた

悪魔は紐解かれる自身の記憶を辿る

七つの大罪を背負う同胞の姿がはっきりとわかる

我が司るは憤怒

そして、この同胞が司るは……

優しさが示すもの（後書き）

優しさの紋章と遺跡の関係はまだ謎です。

次回、タケル救出完了の予定です。

そして、物語の歯車が動き出す時でもあります。

早く更新できるよう鋭意努力していきます。

しかし、光子郎さん万能すぎる……

救出、そして… 前編

ソレはゆっくりと目を覚ます
否、

今までまどろみの中にいた意識が完全に覚醒した…… そう捉える
のが正解だろう
実感はないけれど、随分と永い時が経ってしまったようだ

『よくぞ同胞と会いまみえた…… 大義であるぞ、憤怒よ』

同胞同士が再会を果たした

その事は既に他の同胞も感じ取っているだろう

永い眠りは終わりを告げる

愛しい者達よ、待っているの良い

余の復活を…… !

皆に促され、賢は遺跡の入り口前に立った。

入り口前といってもその部分は崩落しており、更に倒壊した瓦礫がある
るので少し離れた場所ではあるが。

未だ光りを保ったままの優しさの紋章を入口の門に向かい、恐る恐る
ゆっくりと掲げてみる。

すると、淡かった光りが強みを帯び、光りは一つの直線を描き、門
に吸い込まれていく。

10秒ほどそうしていただろうか、紋章の光りは徐々に弱まってい
き、やがて光りは静かに消え失せた

同時に門には優しさの紋章と同じマークが徐々に浮かび上がる。

『 System Kind Certify Attest

優しさの紋章を認証しました。』

優しさのマークの頭上に上記の文字が浮かび上がるとともに、門が素粒子状に分解され、消滅していく。

今、永きに渡り守られてきた遺跡の入り口が開いたのだ。

久々に入り込む太陽光によって徐々に中が明らかになっていく。

埃が積もってはいるが、見る限り瓦礫が散乱しているということはなさそうだ。

呆然としながら、既に何の反応も示さない紋章を見つめる賢。

一体、何が起こったんだとでも言いたげな疑問に満ちた表情をしている。

そしてそれは他の若干一名を除く子供達も同じ。

その若干一名は満面の笑みを顔に浮かべ、呆然としている賢の肩を勢い良く叩く。

「よっしやーっ！ 遺跡が開いたっ！ 賢、お前すげえな！」

「えっ？ 僕が凄いというか紋章のおかげだよ……」

それにしても大輔、何か疑問に思ったりしないのかい？」

「んー？ そりゃ、不思議には思うけどよ。ここであーだこーだ考えたってわかんねえよ。」

それに今は考えるより先にすることがあんだろ？」

勢いよく肩を叩かれた反動でふらりとよろけた賢が、テンションがただ上がりの大輔に問う。

一応、大輔自身も疑問に思っただけはいたようだが、今はそんなことを考えるよりもやるべきこと……つまり、タケル達の救出に重きを置いているようだ。

彼の場合、立ち止まって物事を考えるということは苦手な性分なため彼等の救出という事がなくともこの調子だと予測されるが。

そんな大輔の言葉に他のこの現象に呆然としていた子供達も正気を

取り戻し、二人の下へ駆け寄ってくる。

既に大輔は行動を開始しており、ひよいひよいと瓦礫の山を踏み越え、遺跡の内部を覗いている。

「大丈夫そうだな……」　　「訳で、ちよつくら遺跡の中見てくるぜ。

多分、地下に行く階段みたいなもんがあると思うから、そのままタケルとパタモンを助けてくる！」

「ちよつと待て、大輔！」

この遺跡は凄く崩れやすそうになっているんだ、うかつに動くのはやめた方がいい」

「だけど、このままここにいたって仕方ねえだろ！」

大丈夫だって、ほら」

無謀にも何の策も準備もなしに遺跡内部へ突撃しようとする大輔をすかさず賢が止める。

まだ崩れていないとはいえ、いつ崩れるかわからない遺跡……

そこを何の準備もなしに飛び込むのは勇気ではなくただの無謀ではない。

彼の行動は理性的に考えて正しい。

だが、大輔にも言い分はあった。

そう……彼は早く助けたいのだ、地下にいるタケル達を

もちろん、この場にいる全員彼と同じく早く助け出したいと思っている。

だが、ここで自分達まで倒壊に巻き込まれれば、助けに来た意味がなくなってしまう。

他のみんな、特に伊織の眼は無謀な行動に出ようとする大輔を非難している。

そんな視線に気付いたのか大輔は更なる無謀……　　いや、無謀を通り越した行動を起こした。

遺跡を構成している入り口近くの壁を叩いたのだ。

それも一度ならず二度、三度と連続で。

「ちょっと、大輔っ！ 何してるのっ!?!」

「大輔さんっ!」

「大輔君っ!」

その行動に全員が大輔を咎める声を出す。

もちろん、デジモン達もその無謀な行動には非難めいた視線をむけている。

当然だ。この行動が下で遺跡が完全に倒壊してしまったらタケルと助けるどころではなくなくなってしまいう可能性もある。

全員からの非難を浴びた大輔は少しやりすぎたとうやく思い立ったのだろう。

申し訳なさそうな表情をするが、

「で、でもよ。これで中に入っても大丈夫だってわかっただろ？」

それに誰かが行動しなきゃ動けなかったじゃねえか。折角、賢が入口を開けてくれたっていうのによ」

「それは… そうですが。それでも無謀な行動でした!」

「とにかく! 俺は行くぜ! ある程度の衝撃じゃ、壊れないってわかったんだから!」

確かに大輔の言い分も正しい。

たとえば、入口が開いたとしても自分達は中に入ることにしり込みしていた。

タケル達を助けたいという思いとは裏腹に、無意識のところでは保身に走っていたのだ。

しかし、大輔は違う。

彼は自身の危険を顧みず、彼等を助けるため行動を起こした。

それが無謀と言える行動でも、だ。

いつもそうだ。彼の無謀ともとれる行動は危機に対してしり込みしてしまいがちな自分達に勇気を与えてくれる。

あのベリアルヴァンデモンとの戦いといい、キメラモンとの戦いといい……

彼自身も怖いだろう。だが、それでも前に進むことのできる心、それこそが大輔の力なのだ。

既に大輔は遺跡内に入り込んでおり、既に止められる状態ではない。

「僕がついていきますので、京さん達はもしもの事を考えてここで待機しててください」

「えっ？ だけど……」

「大丈夫。大輔の無謀な行動である程度の強度は残っているみたいですし、それに大輔一人だと何をしでかすかわかったもんじゃありませんから。」

誰かストッパー役が付いていかないと。ジョグレスのパートナーでもありますしね。

「それでは、後はよろしくお願いします」

「一乗寺君！？ 行っちゃった……」

軽いフットワークで瓦礫の山を乗り越え、大輔よりは幾分か慎重に中へ入っていく。

後を任された三人はというと、さっさと行ってしまった二人を今更追えるはずもなく、もしもの場合の備えも必要と理解しているため、その場に残るしかない。

最年長者である京が一つ大きなため息を吐きながら、一言。

「なんとというか、一乗寺君…… 大輔に感化されてきた？」

「確かにそうですね」

「でも、いい方向に向かっていると思うわ」

口元に手を当ててくすくすと笑うヒカリを残し、京と伊織は同時に大きなため息を吐くのだった。

既に日も暮れ始めてきており、親が知っているとはいえ早く帰らなければならぬ。

何もできずにいる自分たちの不甲斐なさを心の奥底で嘆きながら、三人とそのデジモン達は遺跡を見つめる。

せめて全員が無事に出てくることを祈りながら……

救出、そして… 前編（後書き）

前編です。

まだタケルは救出されていません。

後編で救出されます。

それと同時に遺跡の謎もちょこちょこ…

救出、そして… 中編

「大輔っ！ 待ってくれ」

「賢！ お前、来てくれたのか！」

遺跡の中をブイモンと共に興味深そうに眺めながらふらふらと歩いてきた大輔の背に声をかける。

聞き覚えのある声に嫌味のない笑みを浮かべるとすぐに振り返り、その姿を確認する。

なるべく衝撃を起こさないように慎重に歩いてくる友の姿。

自分よりも格段に頭のいい彼が来てくれたのなら、百人力だ。

彼等の足元ではお互いのパートナーデジモンがじゃれあっている。

「相変わらず、君は無茶なんだから…… 誰かが見ていないと危なっかしくて仕方がないよ。」

それで、何か見つかったかい？」

「へへっ、俺の無茶はいつもの事だ。」

まだ入ったばかりだし何も見つかってねえな…… 階段か何かあると思ったのに……」

ぐるりと薄暗い室内を見回してみる。

天井や壁から落ちてきたと思われる色のついたタイルのようなものがそこら中に散乱し、ほこりがこれでもかというほど積もっているが特に調度品など大きめな家具などは見当たらない。

不自然なほどに……

あれほど嚴重に入口を封印していたのだ、椅子や何らかの調度品があると思っていた二人にとってこの何もない室内に薄気味の悪さを感じていた。

おそらくこのワンフロアしかないだろうと思われる遺跡内は調度品

どころか椅子一つ存在していないのだ。

「もう少し奥まで行ってみるか」

「そうだね。」

しかし、おかしい……話を聞いてみると少し近付いただけでも攻撃するほど強固な封印を施しているにしてはこの広間には何もなさすぎる。

そして建物以上に広い地下。もしかして、この遺跡は地下こそ重要な拠点なのかもしれない」

難しい表情をしながら今までの事を繋ぎ合わせ、推測する。

パタモンが調べるため、少し門に近付いただけで攻撃してきた封印のシステム。

その封印は優しさの紋章の力によって消えた。

それは選ばれた存在でなければ、開くことはできないということ。しかし、予想に反して遺跡内には何も無い。

そして不自然なほど巨大な地下の存在……

「おーい、大輔っ！ こっちこっち！」

「賢ちゃんもこっちに来てっ！」

相変わらずキョロキョロと辺りを見回している大輔とこの遺跡について考えをまとめていた賢に少し離れた場所を見ていたブイモンとワームモンが呼びかける。

どうやら何かを発見したようだ。

ひどく慌てていると同時にどこか嬉しさが滲み出ている様子にもしかして地下に降りるための階段でも見つけたのだろうか？

わき目も振らず走り出そうとする大輔を捕まえ、少々早足でそこまで進む二人。

「ほら、ここだよ！ 扉みたいだろ？」

「まさに地下に続く階段はここにあるって感じだな！

よっしゃ、俺に任せろ！」

「大輔、気をつけるよ」

ブイモンとワームモンが発見したのは床に備え付けられた木製の扉だった。

埃を大量に被り、一目ではそこに扉があるとはわからないほど周囲と同化していた。

これは入口の封印とは違い、後天的なものだろう。

錆び付いた鉄のドアノブを恐る恐る両手につかむ大輔。

封印は施されていないらしく、何の反応も示さない。

深く息を吐き出して、気合を入れると、両手に力を入れ、扉を開こうとする。

ギシリと重い音を立てながら、徐々に扉が開いていく。

「大輔！ 僕も手伝うよ！」

「俺も！」

「僕も！」

歯茎を見せるほど歯を食いしばっている大輔を助けようと、一人と二匹は大輔の両手に手を添える。

かなりの重さがあるらしく、少しずつしか上がらない。

「いいか、せーので一気に行くぞ」

「ああ！」

「任せろ！」

「うん、わかった！」

おそらく全員が一斉に力を入れないとこれ以上、上がらないと判断

した大輔は再度力をいれ直しながら、声をかける。
賢やブイモン、ワームモンも同意見だったらしくもう一度体制を整えながら力強く頷きを返す。
全員の体制が整ったのを確信し、大輔が音頭を取り、口を揃えて勢い良く声を出す。

「いくぜ……」

「……せーのっ！」「……」

今まで力を合わせていたつもりであつてもどこか波長がばらばらだった全員の力が今、合図と共に一つとなる。

1+1が2というわけではないように相乗効果が合わさり、扉が徐々に開いていく。

既に山は超え、後少し。

「うおおおおりゃあああああー!!」

一際大きな声を上げ、最大限の力を込める。

金具部分が錆び付き、中々開かなかつた扉がようやく開いた。

重力に伴って落ちるところをゆっくりと丁寧に下ろし終えると、扉が隠していた場所をのぞき込む。

そこには予想通り地下へと通じる階段がその姿を現した。

遺跡と同じく石で出来た階段となっており、賢が強度を確かめるため幾度か叩いてみる。

「強度は……問題なさそうだね」

「よしっ！ それじゃ、いよいよ地下へGOだ！」

気合を入れるように右拳を左の掌に打ち付ける。

未知なる地下へ行くという冒険心をくすぐられると同時にようやく

仲間を助けに行ける。

その両方が合わさり、大輔のテンションをどんどん上げていく。しかしやはり地下というだけあって、階段の上3段目くらいまではかろうじて目視できるがそれ以上は暗闇に満ちており見ることはできない。

ここにアグモン、もしくはガブモン辺りが入れば炎を木にでも移すことができるというのに……

懐中電灯なんて便利なアイテムもない。

流石にテンションだけで底の見えない地下に降りるのは危険だ。

折角、地下への階段を発見したのにと肩を落とす大輔達だったが、ワームモンが一体どこからともなく蠟燭を二本取り出す。

「大丈夫だよ。僕が明るくしてあげる」

「ワームモン……」

「おう、どつから出したソレ」

「何か怖いよ」

蠟燭二本を額にまいたタオルによって止めているワームモンの姿に大輔が珍しくツッコミを入れ、ブイモンが体をブルリと震わせる。その姿はまさに丑の刻祭りをする鬼女を思わせるものだ。このままハンマーと藁人形を持ち、木に打ち付けに出かけるような雰囲気醸し出している。

対する賢は以前、その姿を見ているため特にツッコミも驚くこともしず普通に受け入れている。

「ま、まあ…… 何はともあれ、これで灯りは確保したってわけだ！
今度こそ、行くぜ」

「少し待ってくれ、大輔。」

ワームモン、すまないけどこの扉のドアノブ辺りからずっと糸を出してもらってもいいかな？」

「もちろん、いいよ」

粘着性のある糸をドアノブに巻きつけるのを確認すると、ずっと出し続けてくれるよう頼む。

どうやらこの糸を道標にするようだ。

あの、ミノタウロスを幽閉したラビリンスから脱出する際の手段と同じように。

確かにどれほどの広さがあるのかわからないところへ行くのだから、こつした備えは必要だろう。

大輔とブイモンは賢の機転に関心の声をあげる。

「さっすが、賢。あつたまいいぜ」

「大輔じゃ、こつは行かないもんね」

「待てせてすまない。それじゃ、行こうか」

ワームモンを両腕に抱え、笑みを浮かべる賢に頷きを返し、二人と二匹は地下へと下っていく。

階段はざつと数えて10段以上、埃を大量に被っており進むたびに埃が舞う。

大輔と賢が遺跡の中に入って早五分……

外で待機するよう言われた三人と三匹はそれぞれ複雑そうな表情で不安気に遺跡を見つめる。

そんな中であつても落ち着き、余裕を持っていたテイルモンが右の耳をピクリと動かした。

誰かがこちらに近づいてくる……

「ヒカリ、」

「どうしたの？ テイルモン」

「誰かが近付いてくる」

自分のパートナーに呼び掛け、緊張した声音でそのことを伝える。その言葉にホークモンやアルマジモンも気配を感じ取ったのだろう、パートナーを守るように立つ。

ガサリと生い茂った緑が揺れる。

すぐにでも攻撃できるような体制を取る三体のパートナーデジモンだったが、出てきた人物を見て驚いた様子で構えを解く。子供たちもまた、驚いた様子でその人物の名を呼ぶ。

「ゲンナイさん……」

救出、そして… 中編（後書き）

まだ続きます。

本来の予定では前編・後編で終わらせる予定だったので……
アレ？

デジタルワールドには何もデジモンだけが住んでいるわけではない。確かに個体数としてはデジモンが圧倒的に多いだろうが、全く異なるデータプログラムを持つ存在も少数ながら存在するのだ。

ゲンナイ…… 彼はデジタルワールドの安定を望む者 ホメオスタシア が生み出したエージェント。

人間の成人男性によく似た姿形をしており、様々な事柄に精通しながら、日々デジタルワールドの安定に力を注いでいる。

そのためなのか、デジモンのような戦闘能力はなく、普通の一般成人男性程度の力しか持っていないのだ。

3年前は彼、ゲンナイと呼ばれるエージェントのみが存在していたが、アポカリモンが倒されたことよって徐々にその機能を拡大。

今では確認されている個体数だけでゲンナイを含め、6体が世界各地で活動している。

そのため、彼等が選ばれし子供達の下を訪れるのはデジタルワールドに何らかの危機が迫ってきている事を示すことが多い。

今回、彼等の目の前に現れたのもきつと何かが起ころうとしているのだろう。

子供達を見つめるゲンナイの瞳は憂いを帯びていた。

「久しぶりだな、選ばれし子供達よ……」

思ったよりも長かった階段を降りた先には、踊り場のように余裕のある空間が取られていた。

壁には見事な彫刻が施されており、掲げられるアーチからは四方へ繋がる通路が見える。

長き年月の末、所々崩れている部分もあるが、施されている彫刻は

見事というしかない出来前だ。

しかし、今の彼等には彫刻をゆつくり堪能する暇はないらしく、一つの通路の前で話し合っていた。

「確か、こつち側だよな…… 入口の方って」

「僕の記憶が正しければ、そつちで間違いないよ」

「おーいっ！ パタモン！ 聞こえたら、返事をしてくれーっ！」
「パタモンッ！」

ただでさえ薄暗い中、彼等が降りてきた階段は螺旋状になっており、少々方向感覚が麻痺してしまい、元々さほど記憶力がお世辞にもいいとはいえない大輔が自信なさげに賢に問う。

賢も賢で、やはりこの薄暗さと螺旋階段によつて方向感覚が多少ずれはしていたものの持ち前の頭脳で降りてきた方向を見ながら言い切る。

ここでコンパスか何かがあれば、わかりやすいだろうが、デジタルワールド内では磁場が乱れており効果が得られず、壊れるのがオチだ。

お互いのパートナーが話し合う中、ブイモンとワームモンは同じデジモンであるパタモンの名を大声で呼ぶ。

どれだけ距離があるのかも定かではないが、何もしないよりはマシという事だろう。

二体の声が通路に反響し、木霊する。

すると、しばらく間を置きはしたが、確かにこちらへ呼びかける聞き覚えのある声がある。

「……………おーい」

かすかであるが、確かにこれはパタモンの声。

それも彼等が今、目の前にいる通路の奥から聞こえてきたのだ。

大輔と賢は顔を見合わせると、パートナーに合図を送り、急ぎ足でその先へと向かう。

ワームモンの蠟燭の灯りが二つの影を映し出す。遠目ではあるが、あれは確かにタケルとパタモン。

「タケルーッ！ 助けに来てやったぜ！」

「高石君！ 大丈夫かい？」

「おーい！ パタモン！ 大丈夫かー！？」

「パタモン、怪我はない？」

大げさなほど大きく手を振りながら、声を出す大輔と心配気な表情の賢が並走してくる。

その下には同じように併走しているブイモンとワームモンの姿が。

徐々に近付いてくる灯りと姿に思わずタケルも元気なことを伝えるために、大輔と同じように手を振りながら歩み寄る。

パタモンもパタモンで助けに来てくれたことが嬉しいのか、タケルの頭より離れ滞空しながら声を張り上げる。

「大輔君！ 一乗寺君！」

「ブイモン！ ワームモン！ 大丈夫、僕たち二人とも元気だよーっ！」

蠟燭二本の灯りでは心許ないが、見える限りさほど大きな怪我などはないようだ。

ふうと安心したように息を吐く。

「ったく、心配させやがって。ヒカリちゃん達も心配してるしさっさと出ようぜ」

「そうだな。ごめんね、作業中だったんだろ？」

「まあ、そうだけだよ。仲間がピンチなんだ、復興作業はまた明日

頑張ればいいさ」

助けに来てくれた嬉しさと共に彼等に迷惑をかけてしまったという悔恨。

二つの感情が入混ざった表情をするタケルにあっけらんとした表情で軽く言い放つ。

元々、フォローのような言葉を発するのは苦手だ。

気の利いた台詞なんて出てくるはずもなく、ただ思ったことを伝える。

それが大輔であり、彼の長所であり短所なのかもしれない。

その言葉をフォローするように賢がタケルの肩を、元気出せというように軽く叩く。

彼も大輔と同じように気の利いた言葉が出てこないのだろう。

優しくはにかむような表情がそれを色濃く映し出している。

その表情を見て、タケルもようやく悔恨の感情を追いやり、笑みをこぼす。

「ああ、そうだね。

ヒカリちゃんや伊織君、京さんも心配しているだろうし早く出よう」

蠟燭を持つワームモンを先頭に出口を目指す。

賢が機転を利かせ、ワームモンに頼んだ糸もあり、迷うことなく螺旋階段までたどり着いた。

大輔達が一度降りてきたとはいえ、まだまだ埃を被っている階段はすべりやすく慎重に上がっていく。

徐々に日が暮れ、赤くなつた太陽光が差し込んでくる。

入った時よりも薄暗い室内は先程よりも薄気味悪さを倍増させ、彼等の目に飛び込んできた。

早くこの遺跡から出たいという気持ちに駆られながらも、遺跡を壊

さないよう静かに歩いてく。

「おい、タケル達助けてきたぜっ！ …… ってゲンナイさん？」

「心配かけてごめん。 …… ゲンナイさん！？」

入口前に重なる瓦礫をよじ登り、ひよこりと顔を出す。

そこにいるのは残してきたヒカリ、京、伊織とそのデジモン達だけだと思っていた彼等は一人増えている事に驚きの表情を見せる。それもそうだろう。

あの世界中にダークタワーがそびえ立ったその日以来、再開を果たすゲンナイさんがいるのだから。

驚かれた張本人であるゲンナイさんは驚かれて当然だろうとどこか達観しているように、軽く右手を上げ挨拶する。

「実は君達に悪い知らせを持ってきた」

「悪い知らせですか……？」

「ああ」

全員が揃ったことを確認したゲンナイが渋い表情をしながら、話出す。

折角、ベリアルヴァンデモンを倒し平和が戻ったというのにまた何か起こるのだろうか、もしくはもう起こった後なのだろうか……

子供達の顔が真剣な表情に変わると共に、どこか一抹の不安を覗かせる。

「君達も覚えているだろう。デーモンの事を、」

「デーモン！？」

忘れたくとも忘れられない名前……

賢の首に埋め込まれた暗黒の種を狙い、数多の暗黒デジモンを率い

てリアルワールドに侵略してきた存在。

インペリアルドラモン、シルフィーモン、シャッコウモンが東になつてかかつて倒すことができず、やむを得ず賢が暗黒の海へのゲートを開き、そこへ追いやったデジモンの名だ。

まさか、その存在が再び戻ってきたのか？

「そう、君達の予想通り…… デーモンは暗黒の海からこのデジタルワールドへ戻ってきた。

それも最悪な形でね」

「そんな…… 折角、ベリアルヴァンデモンを倒してようやく、平和が訪れたと思ったのに！」

「タケル……」

暗黒の存在であるデーモンが帰ってきたと聞き、怒りの表情をあらわにするタケル。

傍にいるパタモンが落ち着かせるようにその名を呼ぶ。

だが、この場にいる全員がその気持ちを持っている。

彼はその経験上、この場にいる誰よりも暗黒の力を禁忌とし、また恐れを抱いている。

それが原因となり、暗黒の存在に対して視野が狭くなり、ひどく感情的な部分を見せるのだ。

「あの、最悪の形ってなんですか!？」

「まさかまた、あの時みたいにリアルワールドに……?」

「落ち着いてくれ。ここで焦っても事態は好転しない。」

詳しいことは他の選ばれし子供達を集めてからだ。彼等の力も必要となる。

明日、この場所に他の選ばれし子供達と共に来て欲しい」

救出、そして…… 後編（後書き）

終わりました…… 長かった。

ゲンナイさんの設定はオリジナルです。

本編でも彼等に対して、どういった存在なのか明確に描かれなかったので勝手に解釈しました。

次回はいよいよ今回の敵について掘り下げていきます。

幕間：杯を掲げよう

ここは空も土地も何もかもが黒に染まった世界

負の感情からなるデータプログラムもしくはエネルギーから作られた魔のエリアであり、死したデジモン達のデータが行くつく墓場
通称、ダークエリアと称される

生ある者は真の暗黒の存在でない限り、何びとたりとて近づくことも立ち入ることも許されない

ダークエリアへ続く道は固く閉ざされ、門番の役割を与えられた唯一人のデジモンによって管理される

そんな負のエリアに帰還した者がいる

赤き法衣を纏いし、邪悪なる者…… 時の流れからして数ヶ月前、

選ばれし子供達と対峙し、暗黒の海へ追いやられた存在

その手には一つのデジタマが握られている

暗黒の海の底より、奪還した封じられし同胞が姿

あの場で復活させてもよかったのだが、不意に届いた”声”に従い、
一旦故郷であるダークエリアへと帰還したのだ

『奴は何を考えておるのだ…… 早期に復活させた方が手っ取り早いというのに』

選ばれた者以外近付くことを許されぬダークエリアの中心部に位置する古城

とにかく豪華な家具が置かれた大広間に悪魔はいた

大広間の中央にはそれぞれ同胞の体格にあった七つの椅子が立ち並ぶ
ここは協調性皆無で好き勝手に行動する同胞が一堂に会する極めて
貴重な場

何十、何百年と全ての同胞が封じられ、誰も立ち入ることもなかつ

たというのに埃一つなく、あの頃と何も変わらず保存されていた

『久しいな、憤怒よ』

適当なテーブルにデジタマを置いた瞬間、響いた幼い声

まだ年端もいかぬ少年のような声に似合わぬ儼かな口調だが、そこからは何者も逆らうことを許さぬ傲慢さが満ち溢れている。

悪魔は周囲をゆっくりと見回すが、その声の持ち主の姿はない
ああ、まだなのか…… まだ封印は完全に解けていないのかと若干の失望を胸の内に秘め、自らの刻印が刻まれた席に腰を下ろす

『他の者はまだのようだな』

『封印とは真に忌々しい……』

だが、次期に強欲が目覚めます。そう落胆することもあるまい』

完全に覚醒し、この場にいるのは自分一人…… 悪魔は言葉を漏らす
それに応えるように多少の憤りを含みながらも、余裕ある言葉が紡がれる

静かな空間、テーブルに置かれたデジタマは未だピクリとも動かない
未だ復活の兆しは見えないが、すぐ側にいる同胞の気配は感じているだろう

『傲慢よ、』

『如何した？』

『我が力を持つてすれば、その場で封印を解くことは可能。』

『その事は承知済みのはずだろうか？』

『何故、その場で解かずダークエリアへ連れて来させたかと聞きたいのだな』

どこか苛立ちを含ませながら、姿を見せぬ声の主の名を呼ぶ

遠まわしな言い回しだが、何を聞きたいか予想を立てていた声、傲慢と呼ばれし声は淡々と言葉を発する

何らかの考えはあるのだろうか、自分たちの預かり知らぬところで動かす癖を持つ声に悪魔は前々から苛立っていた
憤怒と称されるだけあって、そこまで気は長くない

『完全なる復活のため、』

『完全なる復活…？』

『さよう、強引に解いてしまつては封印の余韻が残る。』

余韻を残さぬため、この場に連れてくるようそなたに頼んだのだ』

封印の余韻、言葉通り受け取るとするならば本来の力に制限がかかるといったところだろうか

確かに制限がかかることは歓迎すべきことではない

我等の共通する目的を果たすためにも、制限がかかった状態では足を引っ張りかねない。

苛立ちを消し、沈黙を持って納得する

『このダークエリアに入れば、ほんの数日で覚醒を果たさだろう。』

その時こそ、挨拶に行つてやらねばなるまい？』

『……選ばれし子供達に、か』

『その通り。その時、子供達は知るだろう、自らの無知と愚かさを

……

さあ、同胞諸君。杯を掲げよ、我等の復活を世界に知らしめようではないかっ！』

彼等は嗤う

もうすぐ… もうすぐで全てが終わり、全てが始まる

全てを支配するのは我等なのだ、今一度無知なる者共に教えてやろう！

幕間：杯を掲げよう（後書き）

七大魔王中心パートです。

彼等を中心に描く場合は“幕間”とタイトルに入れます。

何を考え、どう動いているのか……

子供達の知らない事柄をこうした形で明かしていきたいと思います。

また、これは悪までもアドベンチャーとタイムーズの世界なので、フロンティアやセイバースとは違う個体になります。

放課後

随分と日が暮れてしまった。

空は赤から藍に変わり始め、そろそろ家に帰らなければ親が心配する。

既にデジモン達のことを承知済みだとしても、心配させるのは本位ではない。

子供達はゲンナイの言葉を考えながら、一旦リアルワールドへ帰ってきた。

賢は他のみんなとは違い、デジタルワールド内で別れたが、その表情は浮かないものだった。

それもそうだろう。

あのデーモンが戻ってきたと聞いたのだ。本当は気が気でなく、不安で仕方ないはずだ。

何故なら、デーモンの狙いは賢の首に埋まる暗黒の種……

暗黒の海へ追いやられる際の言葉から推測すると、諦めているはずがない。

「いつか、帰ってくるとは思っていたが、まさかここまで早いとは思わなかった」

誰も何も言わない中、テイルモンがぼつりと呟く。

まさにその通り。

心の片隅でいつか戻ってくるだろうということは、何も言わずとも皆わかっていた。

だが、どこかで戻ってきてくれるなど願っていたところもある。

「でも最悪の形って一体、なんなんだろう?」

「たくさん、手下を連れてくるのか?」

当然ながら湧き出てくる疑問。

ゲンナイが言った昨悪の形とは何を示しているのか……
パタモンが呟いた言葉に即座に反応したのはチビモン。思いついた言葉をそのまま言葉にする。

前回でもスカルサタモン、レディデビモン、マリンデビモンと完全体デジモンを数体引き連れてきた。

今回はそれ以上の軍勢を率いて戻ってくるという可能性も否定はできない。

しかし、それに待ったをかけたのはタケル。

「いや、ゲンナイさんの態度からして手下とかそういう部類じゃないと思うな。」

むしろ、もつと深刻な事態な気がする……」

「ええ、そうね。」

私もタケル君の意見に賛成。大勢のデジモンを率いてくるよりも、もつと邪悪な何かが蠢いている……そんな気がするの」

確かにあの時以上の軍勢を率いてくるといふ可能性も捨てきれない。今の自分達は紋章を失い、満身に完全体になることもできない。

ジヨグレス進化もまた然り。力の源となっていたホーリーリングはテイルモンの下へ戻ってきている。

四聖獣の力を借りればいいのだろうが、彼等が協力してくれるかはまた別の問題だ。

全員が深刻な表情のまま、押し黙る。

「とにかく！ 今は先輩達に連絡を入れようぜ！

ここで悩んでたつてわかるわけじゃねえんだし……今は自分達にできることをやるうぜ！」

「……確かに大輔さんの言うとおりですね。」

「ここで悩んでいても仕方ありません。僕、丈さん辺りに連絡を入れてみます」

「あつ… じゃあ、私は泉先輩や空さんに連絡入れるわ」

重苦しい空気と沈黙に耐えかねたのか、大輔が半ば空元気のような声を出す。

だが、彼の言った言葉は現状として今、自分達が出来る唯一のことを指し占めていることは間違いない。

彼自身も不安でたまらないだろう。

おそらく、狙われるだろう賢の親友であり、最も近い立場にいるからにはここにいる誰よりも不安に駆られてもおかしくない。

だが、その逆境にも耐え、切り開く力を彼は持っている。

彼の言葉に最年少である伊織が声をあげ、駆け足でパソコン教室から出ていく。

その彼に続き、京もまた先輩である人達に連絡を入れようと立ち上がる。

立ち止まっていたとは思ってもどんだん負の方向へ傾いてしまう。

なら、どうすればいいか… 簡単だ。今、できる精一杯のことをすればいい。

「お兄ちゃんには私から言っておくわ。一緒に住んでいるんだし」

「そうだね、僕もお兄ちゃんの方は任せて。」

問題はミニさんだね」

「アメリカだもんな… 連絡は入れておいて、横のエリアに開けるか？」

インペリアルドラモンに進化できれば一発なんだけど」

「できない事を言っても仕方ない。デジタルワールドから新しくゲートを開けるのが一番だろう」

悔しげに唇をかむ大輔。

そう、選ばれし子供のうち純真の紋章の子供である太刀川ミミだけはアメリカにいるのだ。

ジグレス体唯一の究極体であるインペリアルドラモンさえいれば、すぐにでも迎えに行くことが可能なのだが、前述のとおり今は進化することはできない。

一先ず、彼女のもつDターミナルにメールを入れ、デジタルワールドから新しくゲートを開くということはこの件に関してはこの形で落ち着く。

窓から見る外の風景は既にとっぷりと日が沈んでおり、そろそろ帰らなければならぬ。

先生にはれないよう、足音を極力たてないようにしながら、学校の外へ出る。

「それじゃ、また明日」

「おう、じゃあな」

「ばいばい、」

胸に大きな不安を抱え、彼等は帰路につく。

太陽が沈み、月が浮かぶ暗い空

不気味なまでに蘭々と光る満月はどこか儚げで恐ろしくて……

ヒカリはテイルモンを両手で抱きながら、兄の待つ家へと駆け足で帰る

なんだか、とても怖くて……

そして同時に悲しみが胸を刺した

放課後（後書き）

次は前作の選ばれし子供達総出演となります。

同時にゲンナイさんの口より語られる新たな敵の存在。

物語は進み始めます。

また、今回で書きましたが今の彼等は完全体に進化できません。

もちろん、ジヨグレスもダメです。

これでどう戦えと…？

全てを知る前に

「デーモンが戻ってきた…？」

本当なのか、ヒカリ」

「ゲンナイさんが知らせてくれたから多分、本当だと思う」

ヒカリから聞かされた最悪の情報に愕然とする太一。

夕食の頃からどこか元気がない様子があったため、何かあったのかと思っていたがまさかデーモンが戻ってきたとは予想していなかった。

彼自身はパートナーであるアグモンがその場にいなかったため、口惜しいことに戦闘には参加できなかった。

だが、インペリアルドラモン、シルフィーマン、シャッコウモンのジヨグレス体三体が束になっても敵わなかったことを知っている。その存在が戻ってきた。

太一が愕然とするのも無理のないことだ。

更に今の戦力では、奴とまともに戦えることすらできない状態。最悪の自体と言えるだろう。

「…… 最悪の形で戻ってきたか。 “きた” って事は過去形だろ。いつ攻め込んできてもおかしくないってことだ」

「その通り。 それに加えて今はジヨグレス進化もできない。」

攻め込まれば守りきれぬ自身はハッキリ言っていない」

自分達の置かれている現状を正しく把握し、眉を寄せる。

そこへ更に畳み掛けるようにテイルモンが一言。

他のパートナーデジモンよりも経験、実力ともに高い彼女が言葉に出すという事は、それだけ事態は緊迫していることを示す。

太一も押し黙る中、ヒカリが言葉を発する。

「どういう形にしても、ゲンナイさんから詳しいことを聞かない限り何も分らない。

お兄ちゃん、なんだかとても嫌な予感がするの。そして、同時にすごく悲しい」

「悲しい…… そうだな。 いくら戦っても終わりが見えない。

ゲンナイは明日って言ったんだよな。今は待つしかないか、悔しいけど」

「そう、今は待つしかない。 でも待つと言っても、ただ待つだけではだめ。

どんな場合でも戦える気構えと体力を備えなければいけない。そのため時間だと思えば少しは気が楽になるはず」

「ああ、その通りだ。 ヒカリ、ちゃんと休んでおけよ。

あんまり心配すんなよ。 きっと大丈夫さ…… 今までだって乗り越えてこられたんだから」

光の紋章を持ち、ホメオスタシアの意思を唯一中継できることから選ばれし子供の誰よりも感受性の高いヒカリ。

それ故に誰にも見えない、感じないものを感じ取ってしまうのだから。

これから始まるであろう事への不安は予感として疼き、同時にどこからか沸き上がる悲しみ。

これらが何を指しているのか、ヒカリ自身もわからない。

太一とテイルモンはそんなヒカリを幼い頃からずっと見守り続けてきた。それは今も変わらない。

冷静な時には冷徹と言われるまでに現状を把握する力に長けた太一とテイルモンだからこそ、今この状態においても落ち着いていられる。

だからこそ、感受性が高く闇に引き込まれやすいヒカリを踏み止まらせ、勇気づけられるのだ。

テイルモンの言葉に頷いた太一は沈むヒカリの肩にそつと手を置き、優しく語りかける。

いつでも自分を守ってくれる手の温度に安心したのか、少し勇気づけられたか小さく一つ頷く。

それを見届けた太一はにつこりと微笑むと、「おやすみ」と告げ、部屋から出ていく。

扉が締まり、その姿が見えなくなるまでヒカリは兄の後ろ姿を見つめ続けた。

次の日、ゲンナイの言葉が気がかりだったのか予定よりも早い時刻に皆、集まっていた。

もちろん、アメリカに在住しているミミもいる。

久しぶりに勢ぞろいしたというのに、皆一様にしてそのテンションは低い。

だが、表情までも暗いといえはそうではない。

誰もが真剣な表情をし、ゲンナイの到着を今か今かと待ち続けているのだ。

「すまない、少しばかり遅れてしまったようだね」

「ゲンナイさん……」

一瞬、景色が歪みそこから現れたのは子供達を呼び寄せた張本人、ゲンナイ。

顔を隠すように被っていたフードを脱ぎ捨て、笑顔を見せる。

彼の出現に最も早く反応したのは、光子郎。

彼は自分達の冒険以降、ゲンナイとコンタクトを続けており、ほかの子供たちよりも様々な事情に精通していた。

そんな彼も、デーモンの再来は全く持って寝耳に水だったらしい。

他の子供たち同様、難しい表情だが、その瞳から今何が起こってい

るのが知りたいという欲求が見え隠れしている。

「皆、既に知っていると思うが暗黒の海へ追放されたデーモンが戻ってきた」

「ああ… 昨日、ヒカリから聞いた。で、何が最悪な形なんだよ？」

「戻ってきたというだけでも最悪な状態ではありませんが、どうなんですか？ ゲンナイさん」

「今の俺たちは究極体どころか完全体になる力もないんだ。

戦力ということだけを考えても最悪だけだな」

口々に今、自分達のおかれている状況を語る子供達。

特に闇の勢力との戦いが主だった3年前の戦いに参加した子供達の気迫は激しい。

早く、早く今の状況を知りたい。

最も年長者であり落ち着きのある丈でさえも、早く知りたいらしくいつもより前に出ている。

「まあまあ、少し落ち着いてくれ。

今の状況を説明するにはまず、この遺跡について知らなければならぬ」

子供達の後ろにそびえ立つ遺跡を指差し、落ち着いた様子のゲンナイ。

示された指先の先… 入口部分が無残な状態となった崩れかけの遺跡を振り向き見る。

聞いた話では、先日タケルが補強のために足を踏み入れ、足場を崩し地下へ落下したという。

その際、地下には暗くてよくわからなかったが何らかの絵が描かれているらしい。

「もしかして、このボロつちい場所に入るの？」

「ミミちゃん、」

「だって、見るからに崩れそうじゃない？ それにすごく汚そう…」

長い歴史を刻みあげてきた遺跡もミミの前ではボロつちい場所ではない、服が汚れると嘆いている。

彼女だけは直接デーモンの力を見ていないこともあり、まだ落ち着いていられるようだ。

その言葉に苦笑をこぼしたのは、直ぐ側にいる空。

彼女はミミとは違い、デーモンの力を目の当たりにしたが同様に身内に押し込んでいるようでこれまた落ち着きが見られる。

「もちろん。 見ながら説明したほうがわかりやすいからね。」

それに昨日の内に遺跡の補強は済ませたから、崩れる心配はない」

「流石、仕事が早いですね」

「それじゃあ、とにかく中に入ろう。 全てはそれからだ」

「そうだな。 今は一分いや、一秒と無駄にはできない」

エージェントである彼にとって遺跡の補強など朝飯前というわけだ
ろう。

淡々と語られる言葉に嘘偽りは見えない。

そうと決まれば、さっさと行動。

リーダー格である太一が歩き出すと、それに続くようにヤマトも歩き出す。

あまり乗り気ではなかったミミも空とパートナーであるパルモンに引きずられ入っていく。

パッと見ただけでは昨日と変わった部分は見つからない。

おそらくプログラムの何かで補強したのだろう。

ゲンナイを先頭にして、子供達は地下へと降りていく。
ここは昨日と違い、灯りを発生させるプログラムが順調に働き、足場がはつきりと見える。

全員が地下へ降りたのを確認すると、ようやくゲンナイがその思い口を開いた。

「この遺跡は今では失われた“暗黒記”と呼ばれる物語を保管している唯一の場所だ」

「物語？ おいおい、ここにきて物語かよ」

「そう、物語だ。だが、ただの物語ではない。」

“暗黒記”はこのデジタルワールドが出来て間もない頃、本当に起きた出来事が長い時を経て、脚色が変わり作られたもの。

事実を元に作られた物語なんだ」

全てを知る前に（後書き）

いよいよ、暗黒記を紐解いていきたいと思えます。

太古の昔…何が起こり、そして今何が起ころうとしているのか？
自分達が戦うべき新たな敵が明らかになります。

頑張つて、更新していきたいと思えます。

気が遠くなるほど昔の事…

未だ世界が安定せず、破壊と再生を繰り返していた頃の話

かつてデジタルワールド全土を巻き込んだ、人型デジモンと獣型デジモンとの戦争が起きた

何が原因だったのかは定かではない

ただ、その戦争が現存する全てのデジモンを巻き込み、終わりなき戦乱を巻き起こしたのは言うまでもない

戦いを望む者、望まぬ者関係なしに各地で繰り広げられる惨劇、虐殺
まだまだ不安定で形が定まっていなかったデジタルワールドにとってこの戦争は多大なる負荷でしかなかった

誰にも止めることはできないと言われた大戦争

勝者もなく、敗者もない

ただ、争いだけが増長していく

しかし、この大戦争は唐突に終わりを告げる事となる

もはや最後の一匹まで殺し尽くさんばかりの戦乱の中、

何の前触れもなしに神々しいまでの光を纏った一体の天使型デジモンが現れた

天使は絶対的な力を持って、誰にも止められぬと言われたこの大戦争を終焉へと導いた

誰もが望んだ戦争の終焉を、秩序と平和がもたらされたのだ

「この天使型デジモンは戦争を終わらせただけでなく、デジタルワールドを平和に導いたんですね」

「いいデジモンって事よね？」
「でも次の絵は、」

天使が戦争を終結させた後と考えられる絵では、先の絵と打って変わってわり禍々しい色が使われている。

そしてその中心にいるのもやはり同じ天使……

先の輝かしいまでの栄光に飾られた絵とはまさに真逆。

中央に鎮座する天使から多くのデジモン達が逃げ回り、全てが破壊されているように見える。

一体、何があつたというのだろうか？

「続きを始めよう」

天使によつてもたらされた秩序と平和は戦争により、深く傷ついたデジタルワールドとデジモン達を少しずつ癒していく

徐々に笑みが戻り、静かでありつたりとした時間が流れていく

しかし、その平和は長くは続かなかつた

誰もが望んだこの平和を打ち砕いたのは、もたらした天使自身

天使は言う

『余に従え。さすれば永久なる平和と幸福を与えよう……』

従わぬ者には、苦痛と絶望を与えん』

傲慢にも天使は全てを欲し、全てを支配しようとする目論んだ

従う者には、自らが定めた法律を押し付け

従わぬ者には、自らの手で死と罰を与える

世界は再び、大戦争と同じ暗黒の時代を迎える事となった

逆らう者は皆殺し

世界を救った救世主は一転して、世界を支配する暴君と成り果てた自身の意思を押し殺し、ただ天使の言うままに生きる
反発する者の数は徐々に減っていき、全てが絶望の闇で閉ざされようとした

「逆らう者は皆殺し… 酷い、酷過ぎます!」
「折角、自分で作った平和を今度は自分の手でぶっ壊しのかよ!？」
「何を考えてこんな事をしでかしてしまったんだろう……」

しかし、世界はソレを許さなかった
暴虐武人に増長する天使に対抗すべく、世界は十の闘士を降臨させたのだ

十の闘士は恐れる事なく、暴君と成り果てた天使と幾度も幾度となく戦いを挑む

されど、天使を倒すには至らない

天使は嗤う

愚かにも自身に挑む、愚者共を

幾度挑もうが、天使に決定的な一撃を加える事はできない
逆に手酷く反撃を喰らうのみ

既に十の闘士は満身創痍となり、世界の希望は絶たれようとされていた

天使が別れの言葉を告げる

両の手を合わせ、その身に宿る聖なる力をより一層高める

放たれた一撃

光り輝く十の光球は聖なる十字を描き、闘士達へと降り注ぐ

崩れ去る闘士達

その身を構成する全てが崩壊しかけ、眩き光へと還元されていく
しかし、それでも十の闘士は諦めない
彼等の使命… 命を賭してでもやり遂げねばならぬ事がある
輝きを失わない光が消えゆく闘士を一つに束ねる
眼も開けてられぬ眩い閃光が全てを覆い尽くす

閃光の中に佇むは武神

消えゆく存在が見せた最期の希望

武神となった十の闘士は存在のすべてを賭け、天使へと立ち向かう

怯む天使

挑む武神

両者の力がぶつかり合い、全てが光りの中へ消えていく
天使は麗しきその顔を醜悪な表情へと変わり、真の暗闇へと落ちて
いく

武神もまた自らの使命を全うし、光の中へと消えていく

永く続いた暴君の支配は去り、新たな平和が訪れた
だが、そこに武神の姿はなく、残りし者によって祭り奉られた

「武神と呼ばれるデジモンが天使を倒した事によって、今のデジタル
ワールドがあるということですか？ ゲンナイさん」

「確かに武神は自らを犠牲に新たな平和を作り出した。しかし、そ
れが今のデジタルワールドという訳ではない。

“暗黒記”にはまだ続きがあるんだ。次は正反対の東の通路へ移
動しよう。

そこで明かす存在こそが、君達の新たな敵だ」

暗黒記 前編 - 天使と武神 - (後書き)

ルーチエモンVS十闘士編です。

見ての通り、私独自の解釈が多量に含まれております。

後半はほぼオリジナル設定です。

そして、いよいよ選ばれし子供達の新たな敵が明らかとなります。
ぶっちゃけ、既にネタバレ済んでますよね…

東の通路は西の通路よりも狭く長い作りとなっており、子供たちは二列横隊となつてゲンナイの後を続いていた。

既に3分以上歩いているが、壁には絵は疎か文字すら見かけない。

西の通路で聞いた話の件、更にこちらの通路でようやく明らかとなる自分達が次に戦わねばならない相手…

不安と緊張で誰も口を開かない。

そして、おそらく誰もが気付き始めているおそらく自分達が戦う相手に武神と呼ばれたデジモンが命を賭けて戦った天使型デジモンがいることを…

正直言つてどれほどの力を持っているのか全くわからない。

同時に分かることもある。この存在はあのベリアルヴァンデモンを軽く超えた實力を持っている事……

下手をすればあのディアポロモンをも超えているのかもしれない。

「さあ、到着だ」

先頭を行っていたゲンナイがようやく立ち止まる。

東の通路はここで終わりらしく、壁一面に一枚の絵が描かれている。左右の壁には古代のデジ文字、

「ウハー、でつけえ絵だな」

「……そうだね」

先ほど見た西側で見た絵よりも遙かに大きく描かれた絵。

色使いも先の絵とは比べ物にならないほど精密になされ、まさに圧巻の一作と言つていいだろう。

よくよく見てみると、一つのキャンバスにいくつかの場面が描かれ

ていることがわかる。

そしてそこにはやはり、先と同じ天使の姿も……

「天使……」

「ゲンナイ、これは西の続きなのか？」

「その通り。武神に敗れた天使がその後、辿った道が描かれている。」

では、話を再開しようか」

敗れ堕ちた地は一寸先も見えぬ闇だった

天使自身の持つ光だけがこの地を明るく照らし出す
なんという屈辱

負けを知らなかった天使は初めて味わう敗北に身を震わせる

許すまじ

誇り高き余をこのような地に堕とすなど、断じて許さぬ

神よ、きつとそなたを後悔させよう

余は必ずや舞い戻る

全てを破滅させ、全てを作り直そう

既に余を貶めた武神はおらず

されど、神は別の抑止力を作り上げているだろう

余の力を三分にした写身共

取るに足らぬ存在とはいえ、ただ一人挑むのも愚かしい

そう、武神もまた一人ではなかった

ならば取るべき手段は一つのみ

“同胞”を作り上げよう

禁忌とされる悪しき大罪、それ等を分けてしんぜよう

余を頂点とする悪しき王を作り上げようではないか

神よ、余はもはや以前とは違う

必ずや舞い戻り、そなたをその座から墮としてやろう

屈辱を与え、隷従せよ

全ては余 余は全てであるのだから……

「完全に逆恨みね」

「ああ、質が悪いにもほどがある」

天使が頭上に何かを掲げている。

自らを闇へ追いやった存在…… 神に対して復讐を誓う……

何が天使をそこまで追い詰めたのだろう。

やはり、武神との戦いの敗北だろうか？ それとも、別の理由があるのか？

禁忌とされる大罪とはなんなのか？ 疑問ばかりが増えていく。

「……ゲンナイさん、続きをお願いします」

「ああ、わかった」

見つからない

大罪を受け入れる器が

その身に大罪を受け入れかつ、適合できる者が見つからない
適当な者ではダメだ

心身共に強き者でなければ、大罪は適合しない

そうだ、神への報復ついでにその部下をいただこうか？

神に仕える存在ならば、大罪を受け入れる器として最良であろう

余と同じように
きつと、適合できるはず

神に仕えるとは言っても、そこには己の意思がある
全ての者が完璧なる忠誠を誓っているはずもない
疑問を、不信を、不満を持っている者はどこの世界にもいるものだ

微笑みかけてそなた等を導こう

この永久の闇の中へ

優しくそなた等の心を包み込もう

この両の腕と深き心で

『神は何故、私の話を聞いてくれないのだ!?!』

神に疑問を抱く者よ… そなたは何も間違っていない

彼の存在に憤る事はあれど、そなたに落ち度はないのだから

怒りに打ち震えるそなたには、“憤怒”の冠が相応しい

『姿の見せぬ虚像に何を怯えることがあるのだ?』

現し世に現れぬ神に不信を抱く者よ… その考えは的を得ている

彼の存在は何もせぬ、何もできぬ なら好きにすればいい

己の欲望をただ増大させるそなたには、“強欲”の冠が相応しい

『わからない。神は何を望んでいるのか……』

そなたを顧みぬ神に不満を抱く者よ… そなたの欲求はもつともだ

彼の存在は何も直視せぬ、そなたの事など気にも止めぬ

見返りを欲するそなたには、“色欲”の冠が相応しい

堕ちてくる

心乱され、甘い誘惑に耐え切れぬ脆弱な魂が

飢えた心に屈強なる軀に大罪はもの見事に適合を果たした

同時に堕ちた者はその姿を変貌させる

大罪の冠に似つかわしく相応しい姿へと、堕ちながら変わっていく

見よ、神よ

そなたに仕えた者の末路を

余はただ後押ししただけ、すべての責任は何もできぬそなたにある

嗚呼、まだ足りぬ

まだ大罪は三つ残っている

神の領域にいためばしい存在は皆、堕ちた

ならば、この闇の領域で見つけるしかあるまい

大罪は闇のもの

相応しい力持つ者ならば、きっと適合するだろう

探さねば

残る大罪は“暴食”“嫉妬”“怠惰”の三つ

更なる深淵へ、足を踏み入れよう

思ったとおり、深淵には大罪に相応しき者が存在した

全てを妬み、飲み込む魔獣

眠りから覚め、破滅をもたらす悪夢

飽くなき探求の果て、全てを貪る王

嗚呼、なんと素晴らしき逸材

これで全てが揃った

“傲慢”の冠はまるで元からそうであったように余の躰に浸透し、
驚くほど馴染んでいる

時が満ちれば、扉は開く

深き闇が眩き光を打ち砕き、全てを飲み込むであろう

さあ、ゆこう

「ここで終わり？」

おい、ゲンナイ！ これで終わりなのか！？」

「ああ、“暗黒記”はここまです。

この後、一体何が起ころどう事態を切り抜けたかは一切記録に残っていない。

しかし一つだけわかることがある。

当時のデジタルワールドはこの恐るべき敵を前必死の抵抗をした。その結果、倒しきることは叶わなくとも全員を封印することはできたんだ」

暗黒記 後編 - 大罪の誕生 - (後書き)

オリジナル設定大爆発してしまいました。

七大魔王は太古の時代から存在し、原則として封印されています。

そして、次回からはいよいよ七大魔王が登場していきます。

ティマーズとも早く絡めていきたいです……

以下、語録説明

天使：ルーチエモン（フォールダウンモードではありません）

十の闘士：十闘士のことです

武神：スサノオモン

神：ホメオスタシア？

現れた闇

“さあ、ゆこう”

ここで唐突に終わった暗黒記。

新たな力を手にし、自らと同等とも言える同胞を作り出した一体の天使。

武神もいない中、デジタルワールドが如何なる方法を使い、彼等を撃退したのか？

肝心なところがスツポリと抜け落ちている。

「倒しきれずやむを得ず、封印したってところかな。

……ということ、」

「僕達の新たな敵とはこの天使達という事ですね」

静かに話を聞いていた丈が自分の考えをまとめるように呟き、肝心なところで言葉を切る。

だが、その言葉を引き継ぐように光子郎が補足するように言葉を発した。

暗黒記が紐解かれたことによって、おそらく一部の人を除いた全員が思った事だろう。

新たな敵は天使を筆頭とした、禁忌とされる大罪に適合した存在だということ…

そして、この存在は自分達が今まで戦ってきた中でも最強クラスの力を秘めていることがわかる。

暗黒記が紐解かれる前にゲンナイは言っていた。『デーモンが最悪の形で戻ってきた』と…

つまりそれは、暗黒記を踏まえて考えれば答えは導きだせる。

おそらくデーモンは大罪に適合した内の一体なのだろう。

そして、何らかの形で天使や他の存在共々復活したということが推

測される。

「禁忌とされる罪、“傲慢”“憤怒”“暴食”“嫉妬”“色欲”“強欲”“怠惰”」

これは、キリスト教に出てくる七つの大罪で間違い無いな」
「七つの大罪？」

何かを思い出すように悩んでいた賢が声を出す。

暗黒記の後半を聞くと共に、どこかで話される罪について聞いたことがあると考えていたのだ。

そう、あれは確か学校の道徳の授業のことだ。

熱心なキリスト教徒である先生がいて、噛み砕いた説明ではあったが、人々が生まれながらにして持つと言われる原罪について話してくれた。

面白い先生であったためか、この講義がとても印象深く残っている。

「それならオカルト好きの仲間から聞いたことがあります。

七つの大罪は罪悪そのものというより、人間を罪へ導く要因となるような感情のことを指すらしいですが……」

「それが、今後の敵とどう関係あるんだ？」

なあ、ゲンナイ…… その天使とかの名前や能力って伝わってないのかよ!？」

確かに太一の言うとおりだ。

確かに禁忌とされる罪とは七つの大罪であるという事は間違いないだろう。

だが、それがどのような関わりを持つのかはわからない。

それよりもまず知らねばならないことは、天使に関する具体的な情報だろう。

なんという名前なのか？ どういった能力を持つのか？

目的は暗黒記とほぼ同じという事で合っているだろう。ならば、更に踏み込んだ事を、この非常事態に彼自身が持つ勇気が燃え上がっているのだろうか、歳を重ねたことで冷静さこそ失ってはいるがその瞳は輝いている。だが、ゲンナイは首を左右に小さく振ると頭を下げる。

「私自身もそこまで詳しいことは知らないんだ、すまない。

彼等の情報はトップシークレットであり、更にとても古いものだからな……

だが、名前ならわかる。確か、北の通路には天使達のレリーフがあるはずだ」

「北、だな。

よし、みんな北の通路に行くぞ」

「ちよつと待て、太一」

確かに一度、デジタルワールドを救った存在が反逆したという情報はトップシークレットとなるのも当然だ。

更にその存在は未だ存命で、封印されていようと虎視眈々と復讐の機会を狙っているのだから。

それに加えて、反逆が起きたのは気が遠くなるほど昔の事だという。如何にエージェントたるゲンナイといえども、さほど事情に精通していないというのも仕方ないのかもしれない。

ゲンナイが頭を下げたことよって、一気に気落ちしてしまった子供達だったが、続いた言葉に少しだが気力を回復させる。

先手必勝と言わんばかりに駆け出そうとした太一だったが、ヤマトが待ったをかけた。

何で止めるんだよと不満たつぷりの顔でヤマトを見つめる太一だったが、すぐにその理由を悟った。

「ヒカリ、どうした？」

「……来る」

「来る？ ヒカリちゃん、落ち着いて。大丈夫だよ……」

自らの両手で自分の体を強く抱きしめながら、何かにひどく震えているヒカリ。

その尋常ではない様子に太一が慌てて駆け寄り、心配そうな声をかける。

少しの衝撃で倒れそうになるほど怯えているヒカリを優しく支えている京が、小さくつぶやいた言葉を反復する。

すると今度はパタモンが何かを感じたようにタケルの頭より飛翔し、鋭く名前を呼ぶ。

同時にヒカリが悲痛な叫びにも似た声を上げる。

「タケルッ！」

「闇が… 闇が来るっ！ もう近くだわ！」

「なんだって！？ うわっ！」

その言葉に全員が驚く中、唐突に遺跡が揺れた。

揺れはすぐに収まったが、二度三度とまるで砲撃でも受けているかのように何度も揺れる。

補強されてはいるが、こう何度も揺れが続くと天井や壁が崩れ始めてしまう。

既に天井からは細かいが、破片が落ち始めている。

「みんな、早くこの遺跡から逃げるんだ！ このままだと生き埋めにされてしまうっ！」

身を縮こまらせ揺れに耐える中、丈が彼らしからぬ大声を上げた。

そう、このままでは彼の言った通り生き埋めにされることは間違いない。

補強されたといっても遺跡そのものは古いものなのだから。

未だ揺れは断片的に続いているが、子供達とそのパートナーデジモンは走り出す。

狭い通路はそれだけで行く手を遮るが、転びそうになればすぐ近くにいる者が助け、いち早く階段のある場所へと到着する。

階段もまたさほど幅があるわけではないので、一人ずつ順番に上がらなければならない。

ここは年少者である伊織が一番初めに登り始め、小学校組から駆け足で登っていく。

「太一！ 早くしろっ！ 北なんて見に行く暇なんでないっ！」

「わかってる… わかっているけどっ」

最後に残っているのはヤマト、太一、丈の三人。

既に階段を登り始めていたヤマトが北の通路を見つめる太一に釘を指す。

どうやら、北の通路にあるという天使達のレリーフが気になっているようだ。

情報は最高の武器ではあるが、今の状況からして身に行く余裕などヤマトの言葉通りない。

しかし、それでも気になってしまう。

すぐ横にいるアグモンが心配そうな視線を向けているのがわかる。

きつと、自分がここに残り北の通路に行くと言ってもアグモンなら付いてきてくれる。

それは確信だ。

だが、同時にこれは自己満足だ。最年長者であり、太一が登るのを待っている丈が言葉ではなく瞳で語っている。

「早く行くんだ。こうなつては仕方ない」と……

一度、大きく頭を振ると急いで階段を上がり出す。

こうなればここに攻撃を仕掛けている奴をさっさと倒してそれから

見に戻ろう。

登り始めた太一の姿を見てホッとヤマトと丈が息を吐く。だが、二人にも時間はない。すぐに行動を開始して階段を登りきる。既に大輔達、小学生組は入口に向かって走り出していた。

一体、誰が攻撃してきたんだ？

ヒカリの震え方、そしてパタモンの鋭い声から考えて相当な相手だと予想を付ける。

サッカーで鍛えている大輔と賢がほぼ同時に遺跡から脱出を果たす。そこで待っていたのは…

「てめえは、デーモン！」

「久しいな、子供達よ」

あの時と同じ姿形。

忘れるはずがない。いや、忘れられない姿がそこにあった。

悠然と宙に浮き、紅い法衣が風によって煽られ揺らめく。邪悪な野心を宿した無慈悲な瞳が大輔と賢… 次々と遺跡から脱出を果たす

子供達へ向けられる。

圧倒的な存在感。

あの時以上の威圧感と力を感じる。

「まだ暗黒の種を狙ってやがるのかっ!？」

「暗黒の種か… 確かに手に入れて損はない代物だ。

しかし、今回の目的はそうではない」

「なら、なんだ!？」

賢を庇うように前に出て、声を張り上げる。

以前、姿を現した時は賢の首に埋まっている暗黒の種を狙ってきた。ならば、今回もそうだろうと予想したのだろうが、デーモンの答えは違っていた。

子供達そしてそのパートナーデジモンから激しいほどの敵意を向けられているというのに、不気味なほどの余裕を持っている。デーモンの持つ激しい闇の力に心の奥底に眠る恐れと怒りを呼び起こされたのか、感情的なタケルの声が響きわたる。

「今回はほんの挨拶だ。」

我等、七大魔王の復活を子供達に伝えてやろうと思っていたな」

紅い法衣から僅かに覗く瞳が非情にきらめく。それが戦いの引き金となった。

現れた闇（後書き）

次回はいよいよ、VSデーモン戦です。

果たして子供達は勝つことができるのでしょうか？

それにしてもデジモン達が全く喋りませんね。

登場人物が多いだけに難しいものです。

全員に喋らせようとすると、必然会話だらけになりますから……

緊迫と余裕

デジヴァイスが輝き、そこから進化の光が放たれる。

進化の光はそれぞれのデジモン達に送られ、その姿を次の段階へと進化させる。

その姿にデーモンは何の感想もなく、冷たい瞳で見つめるだけに留める。

進化している間、デジモン達は無防備の姿を晒す。

その隙について攻撃してもよいのだが、自らの力に圧倒的な自信を持つデーモンはただ静観するに留まっている。

子供達はその事実に気付いていないだろう。

デーモンがその気ならば、この瞬間に自分のパートナーは手の届かぬ場所に行っていたなど…

数秒後、成熟期へと進化を遂げたデジモン達がデーモンの周りを取り囲む。

総勢12体の成熟期体に囲まれているというのに、デーモンは余裕の表情。

指一本たりとも動かさず、ただそこに浮いているだけ。

「囲まれているっていうのに、余裕かよっ！

エクスブイモンッ！」

「任せろっ！ エクスレイザーッ！」

その姿に闘争心を刺激されたのか、拳の握り締め、自分の前に立つエクスブイモンの名を呼ぶ。

自分達も含め、先輩である太一達のデジモンに取り囲まれているにも関わらず、何の反応も示さないデーモンに対して対抗心が剥き出しになっている。

無理もない。

リアルワールドで対峙した時はインペリアルドラモンという究極体を筆頭にシルフィーモン、シャッコウモンという完全体二体をもつとしても暗黒の海へ押し込み、臭いものに蓋をするしかなかったのだから。

そして、それは問題事を後世に託すもしくは残すと同意義であり、あの暗黒記に出てきた天使型デジモンとそれに準ずる存在を封印した過去の偉人と同じということ。

後世に託すといえ、言葉の響きとしてはいいかもしれないが後世の者からすれば、厄介なことこの上ないだろう。

だからこそ、自分達の前へもう一度現れたデーモンを今度こそ自分達の手で倒さなければならぬ。

未来へ禍根を残さぬためにも。

そんな大輔の心に応えたのか、エクスブイモンは腕をクロスさせ胸にエネルギーを圧縮して打ち出す。

エクスレイザー、その言葉通りX型の光線がデーモンへ迫る。

しかし、所詮成熟期の攻撃。

迫り来るエクスレイザーに対し、デーモンは軽く片腕を上げ別方向へとはじき返す。

「ぬるい」

「何だつて!?!」

軽くはじかれた光線は遠方の木々を粉碎し、虚しくも消滅する。

驚きの声を上げるものの、究極体にそもそも成熟期の攻撃が通用するはずがない。

あの時、ベリアルヴァンデモンとの決戦では強い意志が具現化するという特殊な空間の中だったからこそダメージを与えられたのだ。

デジタルワールドにも意思を具現化する力は多少なりともあるが、あの空間ほどの力は無い。

せいぜい、子供達の服装を変化させるくらいの力だ。

「大輔、焦るな。焦ったところで奴にダメージは与えられない。与えられるとすれば……」

拳を握り締め、感情的になっっている大輔を抑えるように肩を掴み、険しい表情で言葉を切る太一。

その視線の先にはパタモンの成熟期であるエンジェモンの姿。

暗黒の力を持つ者に対し、他のデジモンの何倍も対抗力、抵抗力を持つエンジェモンならば成熟期であっても多少はダメージを与えられるはずだ。

太一の視線の先にあるものについて察したヤマトや光子郎は自分のパートナーとアイコンタクトを取る。

圧倒的な戦闘能力の差を埋めるには、コンビネーションとタイミングが重要となってくる。

如何にしてエンジェモンの攻撃を奴に当てるか…

下手に攻撃を仕掛ければ、こちらがやられてしまう。下手をすれば、パートナーが死んでしまう。

それほどまでに成熟期と究極体の差は大きい。

「つまらんな…」

まさかとは思うが、怖気付いたのか？ 選ばれし子供ともあろう者が」

「そんなはずないだろっ！」

「俺達、選ばれし子供を甘く見るな！ デーモンッ！」

中々攻撃を仕掛けてこない子供達に対し、侮蔑を含んだ言葉を投げかけるデーモン。

己の力に絶対的な自信を持つ強者の余裕といったところだろう。未だ自分から攻撃を仕掛けることはしてこない。

その発言に対し、太一とヤマトが即座に反応する。

しかし、だからといってこの挑発に乗るほど彼等は若くない。挑発に簡単に乗ってしまいそんな大輔も先ほど太一より言われた「焦るな」という忠告が効いているのか悔しげに表情を歪めるだけに留まっている。

「ほう、この状態でも威勢だけは失わないか。

ふふふ… 成熟期ばかりで張合いはないが、少し遊んでやろう」

そう、不気味に宣言するとともに一瞬で先程自身に攻撃を仕掛けてきたエクスブイモンの目の前へ移動する。

目にも止まらぬ速さに驚く暇さえ与えず、エクスブイモンへ右の手を振り抜き、同時に発生した衝撃波と共にすぐ横に待機していたガールモンへ吹き飛ばす。

凄まじい衝撃が込められていたらしく、ガールモンもまた共に遠方の木々へ吹き飛ばす。

木とエクスブイモンに挟まれ、苦しげな声を一つ上げると二体は瞬時に退化してしまう。

何の仕掛けもない張り手だが、一発で二体を戦闘不能へ追い込む威力が含まれていることがこの一撃でわかる。

大輔とヤマトが悲痛な声でパートナーの名を呼び、すぐにでも駆け寄ろうとするが既にデーモンは別の場所へ移動しており今度の標的は空中で旋回していたバードラモン。

いつ移動したのか？

デーモンはバードラモンの真上に出現し、その頭を掴むとそのまま地上へ叩きつける。

叩きつけられた地上にはアンキロモンのすぐ側。

退化の光に包まれるバードラモン。ピヨモンの姿を視覚する前にこの中で最重量を誇るアンキロモンが空へ吹き飛ばす。

あまりにも早くそして突然のことに反応が遅れたカブテリモンにぶつかり、二体は同時に地面へ落下、退化してしまう。

瞬く間に五体のパートナーが戦闘不能となり、啞然とする子供達。デーモンは法衣についた埃を払うような動作をすると、再び宙へと浮かび上がる。そして、静かに呟く。

「……遅い到着だ」

この際に退化してしまったパートナーの下へ駆け寄ろうとした子供達だったが突如として辺りに響いた荒々しい咆哮に動きを止める。

同時に彼等を飲み込む巨大な影が、木々を蹴散らし現れる。

牙が見えるという事はこの部分は口なのだろう。

しかしその口ですら全貌を拝むことはできない… それほどに巨大な体躯を持つデジモン。

以前遭遇した四聖獣チンロンモンさえも凌ぐのではないかと思われる。

巨大な口が開閉し、その体躯に似合う重苦しい声が当たりに響きわたる。

「楽しそうだな、俺も混ぜてくれ」

緊迫と余裕（後書き）

成熟期総勢12体VS究極体

数で勝ったとしても、あまりにも無謀ですね。

そこへ更に現れる巨大デジモン。

子供達、一度目の戦闘にして既に絶体絶命のピンチです。

次回もまだ戦闘が続きます。

戦闘シーンがうまく伝わればいいのですが…

恐怖の中で

巨体な体軀を誇るデジモンはただ普通に言葉を発したただけなのだろうが、子供達に恐怖を与えるにはそれだけで充分だった。

否、全貌を垣間見ることもできない体軀だけでも充分恐怖の対象であるにも関わらず、先程の咆哮と隠しても隠しきれない残忍さを含んだ声が恐怖という感情を増幅させる。

その巨体故、どこに目があるのかさえわからないが確かに見下ろされている視線を感じる。

大きなピンク色の鱗はどこか微笑ましい色合いだと感じられるが、逆にそのアンバランスさが対峙する相手に恐怖を与えているように感じてならない。

巨大な口の形と鱗に覆われた体軀からして、おそらくワニのような形をしているようだ。

全体像がわからないので正確な姿形を伺うことはできないが、ビッシリと立ち並ぶ牙とそれが収める口の形からして十中八九、ワニの姿をしていると考えられる。

「で、でけえ……」

啞然とする子供達の中で唯一大輔だけが感想を述べる。

彼自身も怯えていない訳ではない。ただ、他の子供達よりも立ち直りが早いだけなのだ。

それは持ち前の何事も後に引きずらず、ポジティブさを保てる性格が原因だろう。

デーモンの張り手で吹き飛んだブイモンを支えながら、現れた巨大デジモンを見る。

彼の言葉に現実引き戻されたのか、同じように地面に落下し退化してしまったテントモンを抱えながら光子郎が挑むような視線を向

ける。

「……お前は何者だ？」

「吾か？ 吾は嫉妬を司る七大魔王、リヴァイアモン様だ！」

高らかに宣言する巨大な体躯を誇るデジモン、リヴァイアモン。

暗黒記に出てきた七つの大罪の内、嫉妬を冠するということが奴の名乗りからわかる。

ただ、それがどういう意味を持つのかまではわからない。

先の言葉や表情は見えなくとも立ち振る舞いからして、相当な自信家であるらしい。

光子郎は一つ息を呑んだ。

一応、話は通じるということが先の問いかけで判明した。

デーモンもまた、前回の戦いでそのほとんどが一方的な要求であったが、決して話を通じないわけではなかった。

ただ、言えることは話をしたところで和解することは決してないということ。

ならば、することは一つ。

できるだけ話を引き伸ばし、何らかの情報を引き出し、デジモン達の体力を回復させる。

退化するほどのダメージを負ったパートナーには本当に申し訳ないと思うが、頑張ってもらうほか方法はない。

デーモンと同等の存在ということはあのリヴァイアモンも究極体のはず。

成熟期が例え12体いたとしても勝てる相手ではない。それでも、戦わなければならない時もある。

それが今だ。

「聞きたいことがあります！」

「聞きたいこと？ 何故、吾等が貴様等ごときの質問に応える必要

「がある？」
「…っ！」

意を決した光子郎が放った言葉だったが、リヴァイアモン気にも止めない反応を見せ、慈悲など一切存在しない冷たい言葉をもって返す。

ズンと地面が揺れるとともに地響きのような音が聞こえる。同時に上空に存在するリヴァイアモンの口が僅かに動く。

退化していないパートナー達が皆、一様にして戦闘態勢に入る中、沈黙していたデーモンが言葉を発した。

「まあ、よいではないかリヴァイアモンよ。

ワシ等の前では、子供達に出来ることは我等との会話を引き伸ばし、多少の情報を得ることのみ。

「ならばその策に乗ってやるくらい的事はしてやるうではないか」
「……物好きなもんだな。ふん、少しくらいなら待ってやってもいい」

「リヴァイアモンも落ち着いたところで、聞きたいこととはなんだ？ 知識の紋章の持ち主よ」

これこそ圧倒的な強者の余裕というものなのだろうか。

嘲笑を含んだ声ではあるが、そこにあるのは圧倒的な力を持つが故の余裕。

戦闘態勢に入っているにも関わらずそちらを気にも止めず、視線をリヴァイアモンへ向ける。

確かに今の子供達にできることはデーモンの言ったとおり、話をすることで時間を稼ぎ、情報を引き出すこと。

その事実で大輔を初めとして、冷静に事態を見ていた太一やヤマトといった先輩組も悔しげに表情を歪める。

光子郎の言葉には耳も貸さなかつたりヴァイアモンであったが、同

胞であるデーモンの言葉には耳を貸したらしく、今一度地響きを鳴らし引き下がる。

ほっと息を吐いた光子郎だったが、すぐに表情を引き締め悠然と宙を浮くデーモンと不服そうな空気を纏うリヴァイアモンに目を向ける。

ここからが情報戦の本番なのだから。

「では、まず一つ目…」

そもそも七大魔王とは一体、何ですか？」

「なんとも初歩的な質問だな。」

その遺跡にいたということは既に暗黒記は知っているだろう…

そこに出てくる七つの大罪。それに適合を果たし、魔王型デジモンとなった七体のデジモンを総称してそう呼ぶのだ。

すなわちワシならば憤怒、リヴァイアモンなら嫉妬といったように「な」

つまり、大罪の器となったデジモンを総称するのが七大魔王という単語の意味。

魔王とつくのだから、その全てがデーモンと同じく魔王型デジモンということには疑いようがないだろう。

デジモンアナライザーで調べない限り、正確な情報は出てこないがワニのような姿をしているリヴァイアモンもまた魔王型というわけだ。

そして、先の言葉でデーモンが司る大罪も判明した。

奴に適合した大罪は憤怒。リヴァイアモンは自身で名乗りの際に語ったとおり嫉妬。

一つ目の問答で得られた情報はこの三つ。

おそらく他のメンバーの名前などは聞いても答えてはくれないだろう。

それに、名前ならばゲンナイさんの言葉が正しければ、遺跡を再調

査すれば判明する。

長々と遠回りな問答はこの場合、不向きだろう。いつリヴァイアモンの堪忍袋が切れるかわかったものではないからだ。

今、この場もデーモンが宥めたからこそ得た訳であって奴はこうした面倒な事を嫌う性質のようだ。

「では、二つ目です。

単刀直入に聞きます。貴方方の目的はなんですか？」

「ふふふ、知識の紋章の持ち主らしからぬ直接的な質問だな」

どれだけ時間が残されているかわからない状況ではこれが妥当。しかし、知識の紋章の持ち主としては適正とは言えないだろう。

知識とは探求という意味。謎を自分自身の力で解き明かしていくもの。

こういった単刀直入な質問は探求とは程遠く、解き明かすということ訳でもない。

ただ、全ての答えを何の苦労もなく得ようとしていると見られても言い返すことはできない。

本来の光子郎であれば、彼等から断片的でも情報を取りまとめ、そこから自分なりの答えを導き出すだろう。

そんな彼がらしくもなく、直接的な答えを相手に求める。

なんとも異様な光景だが、それだけ事態は切迫しているのだと言葉はないが伝わってくる。

「悪いが、それには答えられんな」

「何だと！？ それはどどういう意味だっ！」

「知れたこと……目的を話せば、お前たちはそれを阻止しようとするだろう。」

わざわざお前達のためとなる情報など与えるわけがあるまい。そう

であろう？ 勇気の紋章の持ち主よ」

「くっ…！」

そう、確かに相手側に有利となる情報をみすみす渡すわけがないのだ。

みすみす渡すとすれば、余程自分の力に自身があるが、もしくは後先考えず動く馬鹿だけだろう。

それをわかっているため太一は悔しげにデーモンを睨むしかできない。

究極体の前では人の身はなんとも儂く、弱すぎる存在だから…

そしてこの時間稼ぎもこれで終わり。

今まで沈黙していたリヴァイアモンがその巨体を揺らす。

「俺は充分、待ったぞ。話は終わりだ！ ここで死ぬがいい、選ばれし子供たちよ！

カウダツ！」

高らかに宣言すると次の瞬間、轟音と共に周囲の木々が軽々と蹴散らされていく。

なんの抵抗もできない木々は粉々に粉碎されると共に、宙へその破片を舞い上がらせる。

その中を猛スピードで突き進んでくるのは二対の尾。

空を飛べる個体であるスティングモンやアクウィラモン、比較的体の小さなテイルモンは向かってくる尾をなんとか避けることに成功する。

しかし、空も飛べずリヴァイアモンほどの巨体ではないがある程度の大きさのあるグレイモン達は避けようと努力するも二対の尾に弾き飛ばされる。

なすすべなく吹き飛びそのダメージで退化し、そのまま地面に叩きつけられる。

悲鳴のような声を上げる子供達を余所に、避けることはできたが二対の尾が通った衝撃で吹き飛んだ三体もまた退化し、地面に転がる。テイルモンだけがかるうじで意識と成熟期の姿を保ってはいるものの、動けそうにないダメージを負い、周囲を見るように顔を上げる。尾が通った木々は全て例外なくなぎ倒され、粉碎された欠片が小さく残る荒地となってしまった。

衝撃波だけでもこのダメージ。まともに当たってしまったアグモン達は死ななかつただけ幸いといえよう。

テイルモンを除く全員が退化してしまい、その半数以上は気を失ってしまった。

リヴァイアモンが巨体を一步、また一步と移動を開始する。全ては子供達を抹殺するため。

「ヒカリ！ みんな！ 早く！ 早く逃げてッ！！」

声を張り上げることしかできないこの身が悔しい。

しかし、子供達は誰一人として動かない。いや、動けない。

恐怖が子供達を支配している。大輔だけがブイモンを抱えながら、天を見上げ何か見えたのか声ができる限り叫ぶ。

「逃げるおおおおおおおおお！！！！」

上空から白き体毛を持つ神々しい光を身に纏う何者かが轟音を響かせ、舞い降りた。

恐怖の中で（後書き）

戦闘シーンを中心にするつもりが、会話シーンが中心となりました。情報戦といえは光子郎です。

何の抵抗もせず、退化してしまったデジモン達が哀れで仕方ありません。

エクスブイモンくらいしか必殺技放ってませんしね……

さて、絶体絶命なこの状況にまたまた何者かが乱入！

乱入好きですね、私……

初めての逃走

白き体毛を輝かせ、舞い降りたのはリヴァイアモンほどの大きさはないにしても巨体を誇る虎型のデジモンだった。

子供達を守るようにその間に着地したデジモンは、抑えても抑えきれない激情を宿す四対の瞳で二体の魔王を睨みつける。

立ち上がるは聖なる力。

如何に強大な力を宿しているのかを示すように十二のデジコアが宙を漂う。

喉の奥から威嚇するように奏でられる唸り声と共に重い音を当て、一歩右足を前に出す。

「まさか、四聖獣の一体である貴様が出てこようとはな…… バイフーモン」

流星に驚いたのか、一歩前に出たバイフーモンとは反対にデーモンは後ろへ下がる。

警戒するとともに選ばれし子供達を守るように出てきたバイフーモンに対し、多少ではあるが感嘆しているようだ。

対するリヴァイアモンは相変わらず全てを見下すような態度を崩さず、馬鹿にするように鼻を鳴らす。

それもそのはず。

目的はなんであれ、七大魔王にとってデジタルワールドを四方から守護する四聖獣は邪魔な存在でしかない。

いずれは殲滅算段のはずだ。

しかし、今はまだ頭数が揃っていないばかりか覚醒したてである個体が圧倒的に多い。

現にリヴァイアモンもまた、覚醒したてで自らの能力を全て引き出せていない。

云わば、この場に現れたのは長年の封印で鈍った体をほぐす意味を含めると同時に、単なる暇つぶしが目的だった。だが、今は違う。

確かにリヴァイアモンは覚醒したてで全力を出せる状態ではないが、ここにはデーモンがいるのだ。

デーモンはリヴァイアモンと違い、覚醒を何年も前に済ませているためその力を存分に奮うことができる。

わざわざ、強固に守られている聖域からご足労いただいたのだ。魔王はバイフーモンをこの場で間違いなく殺すつもりだろう。

そして、バイフーモン自身その事を理解している。理解した上で乱入することを選んだのだ。

全ては子供達を守るために、

二体の魔王が戦闘態勢を整える。同時バイフーモンは一際大きな咆哮をあげた。

「覚醒したてで貴様と戦えるとは俺はツイている！」

「塵と消えよ、バイフーモン」

デーモンが両の手を構え、そこに邪悪なる炎を凝縮させていく。

この技は以前、見たことがある。

だが、そこに宿る力はある時以上の禍々しさを帯び、その威力を増大させているようだ。

同時に換気の雄叫びをあげたりヴァイアモンは先と同じように二対の尾をバイフーモン目掛けて振るう。

スピードは先の倍以上。

直撃すれば、いくら四聖獣といえども大ダメージは免れない。

唸り声を上げるバイフーモンは自身に迫る尾よりも早いスピードで跳躍し、炎を凝縮させているデーモンへ向かい鋭い爪を振り下ろす。しかし、その動きをデーモンは見切っていたのか一旦、炎の凝縮を中断させ、その身をずらす事で激突を避ける。

結果、バイフーモンの爪はデーモンが着込む紅い法衣をかするだけに留まった。

「フレイムインフェルノッ！」

充分凝縮されていないにも関わらず、避けた時の体制で地獄の業火を放つデーモン。

邪悪なる力を含んだ業火が猛スピードで迫る中、バイフーモンはその巨体を考えさせないスピードで飛び退き回避する。

しかし、広範囲に渡る業火を全て避けきるのは無理だったか白き体毛の一部分が焼け焦げる。

焼き焦げた体毛が灰となって地面に落ちる間際、再びリヴァイアモンの尾が振るわれた。

身を低くすることでなんとか避けることに成功する。

同時に強大な聖なる力を口の中へ貯め始める。

何をしようと悟った魔王はすぐさま次の攻撃へと手段を変更する。

デーモンは先程と同じように邪悪の炎を手に集め、リヴァイアモンもまたバイフーモンと同じように口の中にエネルギーを溜め込む。

「金剛！」

「フレイムインフェルノ！」

「アニマ！」

先にエネルギー充填を果たしたバイフーモンが真白き砲撃を放つ。対する魔王もまた、充分ではないにしろ集めたエネルギーを開放させる。

一つの光と二つの闇が丁度中間地点でぶつかり合う。

どちらも一歩も引かぬ大衝突の結果、膨大なエネルギーはその場で膨れ上がり大爆発を起こす。

規格外な大きさを誇るリヴァイアモンですら、このエネルギー波の

前に体を後退させる中、バイフーモンも四本の足で踏ん張り耐える。圧倒的なエネルギー波の前に子供達が後方へ激しく吹き飛ばすのを防ぐためにもバイフーモンはその身をもつて耐え抜かねばならない。デーモンもまた自らの肉体を巨大化させることによつて後退しながらも耐え抜く。

巨大な閃光と共に爆発したエネルギー波がようやく収まり、再びにらみ合う三体。

唐突にバイフーモンが二対の眼を子供達へ移動させ、威かな声を発する。

「何をしている？」

「私が此奴等を抑えている間に逃げるのだ」

「逃げる？ 冗談言つなよッ！ 俺達はまだまだ戦えるぜ！！」

そう、バイフーモンが自らの聖域を離れこの場に現れたのは子供達を守り、逃げ延びさせるため。

出てきた直後に逃げろという言葉を発することができなかったのは、魔王の動向から目が離せなかったから。

また、子供達も圧倒的な力の波に飲まれ動くことさえままならぬ状態が作り出されていた。

激突が一段落し、膠着した今の状況は子供達を逃すのに最も適した時。

だからこそ、バイフーモンは逃げろと言う。

しかし、はいそうですかとバイフーモンを一人この場に残して逃げるなどできるはずがない。

その代表を務めるように大輔が声を張り上げる。

意識を取り戻し、立ち上がったブイモンもまた大輔同様まだまだ戦うつもりらしい。

しかし、そんな大輔を止めたのは経験豊富な先輩でもなければバイフーモンでもない。

ゆっくりと伸びた手は大輔の肩を掴むと、ゆっくりとその体を自分へ向ける。

「大輔、ここはバイフーモンの言うとおり逃げるんだ。

わかるだろ？ 究極体は疎か完全体にもなれない今の僕達じゃ七大魔王に太刀打ちできない」

「だけどっ！ ここでバイフーモンだけを残せっていうのか!？」

そう、いきり立つ大輔を止めたのは賢だ。

魔王の気に当てられたのが震える手で大輔を振り返らせ、怯えているが強い意思を秘めた声でなだめる。

この場にいる誰もが目の前に横たわる実力差を理解している。そして、それは大輔も同様。

今の自分達では七大魔王には勝てない事。

だが、だからといってバイフーモンを一人残すなんてできない。

それは理屈ではなく大輔自身の心の叫びだ。

その気持ちはみな、わかっている。だけど、戦いは時に冷酷な判断をくださねばならぬ時がある。

それが今だ。

感情を爆発させている大輔を次に沈めたのは、太一の拳だった。

何の前触れもなく太一が大輔の頭を叩いたのだ。

痛みに呆然とする大輔に太一が言い聞かせる。

「大輔、お前の気持ちはみんなわかってる。

でもな……ここは逃げるんだ。ここに俺等がいたって何もできない。

逆にバイフーモンの足を引っ張るだけだ。本当にバイフーモンの事を考えるなら、ここは逃げるんだ」

「太一の言うとおりだ。ここは一度、逃げて体制を立て直すんだ。みんな、逃げるぞっ!」

真剣な瞳の中にある悔しさと悲しさ。

みな同じ気持ちなのだ。そして、今の自分達では足でまといなのだ……

初めて味わう挫折。大輔は顔をくしゃくしゃに歪ませ、俯きながら首を縦に降る。

それを確認したヤマトがみんなに号令を出す。

3年前を経験していない子供達が味わう初めての敵前逃亡。

ゲンナイが逃げる子供達を誘導する。

背を向け走り出す12人の子供達と12体のパートナーデジモン達

……

「逃げすかつ！」

その怒声と共に放たれたカウダをバイフーモンが爪を振り上げ、退ける。

再び始まった魔王と四聖獣の激闘。

凄まじい爆音をバツクに子供達はただただ逃げるしかなかった……

初めての逃走（後書き）

大輔達、新参者の選ばれし子供達が経験する初めての敵前逃亡。

太一達先輩組は既に経験したことなのでそのショックは彼等ほどではないでしょう。

それでも悔しい事に変わりはありません。

しかし、この経験が彼等をより強くさせることは間違いありません。ティーマーズと絡むのはもうすぐです。

幕間：嘆きと苦しみの幕

轟音が響き渡る

火柱が上がり、木々は蹴散らされ、全てが温もりなき金属と成り果てる

その様はまさに地獄絵図

三体の究極体デジモンが中心となり、文字通りの死闘が繰り広げられている

三つ巴の戦い

所属を同じくとする魔王は協調性など微塵も見せず、我先にと攻撃を繰り出す

破壊音が天に響く

白き虎が一瞬の間をつき、跳躍する

自身の全てを賭けた聖なるエネルギーを天より、打ち出す

頭上という死角とも言える場所を奪われ、猛り狂う魔王

赤を纏いし魔王は溢れ出す力を抑えていた法衣を脱ぎ捨て、その真の姿を見せる

吹き出すは闇の波動

抑制から解き放たれた暗黒は縦横無尽に周囲を駆け回る

白き虎が放った白き波動は禍々しき黒に犯され、消滅する

今、持てる全ての力込めた波動が消え去り呆然とする聖獣は直後、空間を喰らう深遠なる焔に飲み込まれた

『あら、お帰りなさい』

誰もいないと思っていた大広間には妖艶なる美女が優雅に自身の座席に身を預けていた

血のように赤い葡萄酒を傾けながら、耳に絡みつく甘い声を発する一体、いつの間に覚醒を果たしていたのか？

疑問が脳裏に浮かびながらも、欲のままに放出する力を抑制するため法衣を再び纏う

自身も座席に腰を下ろし、未だ埋まらぬ四つの椅子を見据える

『強欲が次期、目を覚ますと聞いていたのだが』

『…… 久々の再開だというのに、釣れないわねえ。 強欲なら、あんた達が“挨拶”に行つた直後に覚醒したわ。』

なんでも異界の進化方法に興味が沸いたそうよ。まあ、確かに人間とデジモンの融合進化なんてアイツの欲に火を点けるには充分ね』

『つまり、相変わらずの策を巡らせているという訳か』

不満を浮かべる魔獣は黒に染まる海とも見紛う湖より顔を出す

魔獣は元より、策略を好まず力押しを常とする戦闘を好む

これは未だ目覚めぬ自身と同じく深淵より生まれし、黒の魔王と同じ思考である

美女は左手に持つ葡萄酒を一気に煽りながら、優雅に足を組み直すようやく息苦しいにもほどがある封印の楔から解き放たれた自由を思う存分、堪能しているようだ

その様子を呆れた様子で見つめていた悪魔もまた近くの酒瓶を手に取り、グラスへ注ぐ

揺れる赤の液体を無感情な瞳で見つめる

そこへ、少年の声が響く

『憤怒に嫉妬よ、“挨拶”はいかがだったかな？』

適当な酒瓶をひっくり返していた魔獣がその声に巨体を揺らす怯えているわけではない

だが、どこか畏怖しているようにも見える

そしてそれはここにいる他の二体も同様のようだ
弄んでいた上等なグラスを右の魔爪で瞬時に腐食させ、嫌な音と臭
いを撒き散らす

悪魔もまたグラスを置き、その声に耳を傾ける

『四聖獣が出てくるとは予想外だった』

『まあ、いい運動にはなったがな』

当時の状況を思い出したのだろう

ふつつつと沸き上がる怒りを抑えるように、極力感情が表にでない
よう心がけていることを証明するように淡々と言葉を吐く悪魔
同じく挨拶に赴いた魔獣もまた、内容はどこか飄々としているもの
の妬みが胸中に渦巻いているようだ

彼等がこうも簡単に負の感情を抱くのは適合している大罪が原因で
ある

大罪は彼等に絶対的な力を与えると共に、その心身に重大な影響を
も与える代物

流石に大広間を破壊するわけにもいかず、抑えてはいるものの彼等
の感情は身の内だけでは留まらず、室内で荒れ狂っている

紫の衣が翻り、迷惑そうな表情をする美女

しかし、先に言葉を発したのはこの場にはいない者の声だった

『ほう… 四聖獣が、か。』

それが原因でみすみす全てを仕留め損なつたと？』

『失敗？ 何、失敗して逃がしちゃったの？』

あんた達、馬鹿？ 馬鹿よね、馬鹿丸出しだわ。うふふふ』

淡々と告げながらも、僅かに苛立ちを含む声

そう、声が言うとおりの二体の魔王は子供達のみならず殺せたとはずの
白虎をも取り逃がした

己の聖域から出ることを極力行わぬ四聖獣

あの場に白虎が現れたのも予想外であったが、それ以上に魔王の度肝を抜いたのは更なる四聖獣の降臨だった

悪魔の放った焰に飲まれ、消え去るはずだった白虎を救った者もまた同じ四聖獣

意表をつかれ、呆然とする魔王を尻目に四聖獣は己の責務は果たしたと云わんばかり退散したのだ

それはもう見事と言うしかないほどに鮮やかに身を翻したのだ

当然、魔王は仕留めるべく動いたのだが、聖域に逃げ込まれてはこれ以上の深追いは禁物

声が告げたとおり、みすみす取り逃がしたというわけだ

それを聞いた美女は先の迷惑そうな表情を瞬時に収め、馬鹿にし面白そうに嗤う

笑うなという言葉の代わりに放たれた殺気を軽く無視し、嗤い続ける

『色欲よ、そなたはこのような無様な失態を演じるでないぞ』

『心配しなくても、わかっているわ。』

うふふ、そこの脳筋と違ってわらわは理性的なのよ』

ひらりと重力を感じさせない動きで舞い降りる美女

そのまま激しい殺気をむけている魔獣の前を通り過ぎ、衣を舞うように翻らせ今一度、この場にいる魔王を見回す

妖しげな笑みを口元に浮かべ、宣言する

『位相を抜けたその先の世界、待ってなさい』

わらわ等が主演する嘆きと苦しみに満ち足りた一幕が上がるのを

………！』

幕間：嘆きと苦しみの幕（後書き）

七大魔王パートその2です。

いよいよ七大魔王も揃い始め、次の行動へと移ります。

今回は子供達に焦点が戻ります。

今回でもチラリと出ましたが、いよいよ舞台はティマーズへ

また、七大魔王パートでは名前の明言を避けます

以下、説明です

悪魔：デーモン

魔獣：リヴァイアモン

少年：ルーチェモン

美女：????（本編で名前が出ていないため伏せます）

黒の魔王：????（同文）

逃走の果て示されるもの

子供達はひたすら走る

自分達の力のなさ、敗北の苦い味そして悔しさを噛み締めながら、走り続ける

このエリアにあったリアルワールドへのゲートを開いていたテレビは魔王側にあるため、使うことはできない。

まあ、使えたとしても子供達はリアルワールドへ帰るという選択なかった。

帰れば一時的に戦いから逃れられることはできる。

しかし、それではだめなのだ。

子供達は知っている。デーモンがゲートを開くことができることを

……

奴と初めて戦った場所は他でもないリアルワールド。

思い出しても恐ろしい。

冷酷にして非常なデーモンの軍勢は関係ない人々を巻き込むだけでは飽き足らず、躊躇なく殺そうとした。

パートナーの咄嗟の判断がなければ、死人の一人や二人は確実に出ていただろう。

そして、その時奴は戦いの真っ最中に嘲笑と共に自力で楽々とゲートを開いてみせたのだ。

だからこそリアルワールドへ帰ったところで戦いは終わらない。

むしろ、リアルワールドに確実に被害がでる。

それも前回とは比べ物にならないほどの……

「子供達よ、東へ！ 東のエリアへ向かうんだ！」

「東っ！？」

「そう、東だ！ チンロンモンが君達を呼んでいる！」

子供達と共に我武者羅に走り続けていたゲンナイ突然声を張り上げる。

今まで、足並みが乱れた子供達をまとめるため適当な方向へ誘導していたが、ここに来て急に方向転換するよう求めたのだ。まるで何かの司令を受けたように唐突に……

だが、それも頷ける現象だ。

ゲンナイはデジタルワールドのエージェント、四聖獣と密接に繋がっているとしても不思議ではない。

「きつと、力を貸してくれるんだよ。前みたいにさ」

「アグモン… そうだな、みんな東だ！ 東に向かうんだっ！」

自力で動くことができなかつたため、太一に背負われているアグモンが小さく呟く。

当然といえば、当然だろう。

何せ、究極体であり今まで見たどのデジモンよりも巨大な七大魔王リヴァイアモンの攻撃をその身に受けたのだ。

先にも書いたとおり、死んでいない方が奇跡である。

これはおそらくは今までの経験によるものが大きいだろう。

アグモンだけでなく、直接攻撃を受けたトゲモンやイッカクモンもまた、今までデビモンから始まり多くの暗黒系デジモンと戦ってきた。

その影響もあって他のデジモンよりも暗黒に対する抵抗力が高いのだろう。

しかしそれでも直撃という多大なダメージを受けたことに変わりはない。

背負っている太一には直に伝わっているだろう。

今のアグモンは相当無理をして言葉を発していることに。

本当は話すことも困難なほど疲弊しているはずだ。それでも無理をして太一に話しかけたのは太一を案じたため。

パートナーデジモンとは誰よりも近くにいる存在… だからこそ、少しの変化を敏感に感じることが出来る。表面的には落ち着きを取り戻しているように見える太一でも、内心ひどく落ち込み、また焦っているのだ。

「ごめんね、空。私が進化できたら連れて行ってあげられるのに……」

「いいのよ、ピヨモン。気にしないで、今はゆっくり休んで」

「それを言うならわてもや。すみません、光子郎はん」

「テントモン……」

こちらもまたハリのない声。

無理もない。ピヨモンはデーモンに地面に叩きつけられ、テントモンは重量級のアンキロモンに押しつぶされたのだから。

だが、二体とも技を喰らわされた訳ではないので、アグモン達と比べると体力が回復してきているようだ。

それでも自力で歩くほどの体力はなく、子供達に背負われている。

周りを見ても、全てのパートナーデジモン達は子供達に背負われるか抱えられている。

成熟期に進化していたとしてもそのダメージが計り知れないものだということがよくわかる。

エリアを幾つか渡り終え、やっとの思いで東側へとたどり着く。

既に戦いが巻き起こす激しい衝突音は聞こえなくなり、子供達も少しではあるが安堵したようだ。

一旦、走ることをやめ一休みしている。

デジモン達を背負いながら、走り続けたのだ子供達自身の体力も相当消耗している。

「伊織、大丈夫だぎゃ？ 重たくないぎゃ？」

「だい、大丈夫です……」

その中で最も体力を消耗したのは伊織だった。

所々、タケルが心配しマルマジモンを背負おうと言ってくれたものの伊織は頑として譲ろうとはしなかった。

これは見栄ではなく、アルマジモンのパートナーは自分であるという自覚からだろう。

彼自身、自分が一番年下で体力が少ないことを自覚している。

そう自覚しているからこそ、自分達のために戦ってくれたパートナーを他人の手に委ねたくはない。

それが例え無理をしていると言われてもだ。

そして、その伊織の姿勢を咎める者はいない。

「それで… チンロンモンはどこにいるんだ？」

正直、これ以上走り続けるのは伊織君やヒカリちゃん達には辛いだろ」

男性と違い、さほど体力のない女の子とと最年少の伊織等の様子を察して呟くヤマト。

その背にはしっかりとガブモンの姿が。

東のエリアへたどり着いたはいいものの、肝心のチンロンモンがどこにいるのかわからない。

そもそも、大輔達が邂逅した時もホーリーストーンの波動によって降臨したようなものだ。

現実世界で力を分け与えてもらいはしたが、太一達中学生組はまだ一度もチンロンモンと対面したことはない。

ウォーグレイモンへの進化の力を授かった時でさえ、その姿を見ることは敵わなかった。

「やはりもう少し、東へ進んだほうがいいのかもしれないね」

「いや、それは必要ない」

額に浮かんだ汗を袖口で拭いながら、考えを告げる光子郎。

チンロンモンは東のエリアを守護する聖獣。

ならば、もう少し東へ行つたほうがよいのではないか… そう推測しての事だったが、ゲンナイがやんわりと否定する。

視線を移すと、ゲンナイは上空を涼しい表情で仰いでいた。

エージェントだからなのかそれとも体力が有り余っているのかは定かではないが、汗一つかいていないようだ。

子供達もまた、上空を仰ぎ見る。

微かだが、ここよりも更に東の上空には入道雲にも似た雲が立ち込めており、徐々にこちらに向かってきているように見える。

「あれは、」

雲はあつという間に子供達の頭上にまで広がり、そこから蒼く透き通る体を持つ巨大な体が悠然と泳ぐ。

光り輝く十二のデジタマ、長く雄々しいたつぷりとした白銀にも似た髭が摩く。

その全貌を雲に覆い隠しながらも、降臨した竜神チンロンモン。

神々しい光が雲から差し込み、子供達とデジモン達を照らし出す。

「久しいな、選ばれし子供達よ……」

「チンロンモン！」

パタモンを胸に抱えているタケルがその名を呼ぶ。

巨体を揺らしながら、微動だにせずこちらを見つめる二対の四つ目。そこには憂いと鋭い厳しさが滲み出ている。

誰もがその荘厳さに息を呑む中、大輔が一步前に出てずっと気に病んでいた事をぶつける。

同じ四聖獣ならきつと知っているだろうという希望をもって

「なあ、チンロンモン！ あんたならわかるだろ？

バイフーモンは無事なのか！？」

「……無傷ではないが、南を守護するスーツエモンの介入の会もあり、無事だ。

安心するといい」

「そっか、よかった」

ほっと胸をなでおろす子供達。

同じ四聖獣が助けに向かっていたのなら、本当に大丈夫なのだろう。チンロンモンの最後に紡いだ言葉は全てを安心させる優しさと暖かさに満ちていた。

「なんで俺達を呼んだんだ？ もしかしてまた…

そっだよ… ウォーグレイモン達に進化することができるのなら、きっと今度は勝てるはずだ！」

拳を握り締め、力説する太一。

今回、自分達を呼んだのはもう一度力を分け与えてくるためなら、今度は最大限の戦力を持って立ち向かうことができる。

そうすれば、きっと勝てるはずだ。

自分達は今まで数々の強敵を倒し続けてきた。

究極体まで進化し、完全体も勢ぞろいすればきっと… いや絶対に勝てる。

今まで何度も絶望したが、それでも希望を失わずに最後には勝利を収めてきた。

その経験からして今度も最大の戦力を持って、全員力を合わせれば勝つことはできるだろう。

しかし、次のチンロンモンの言葉はそれを否定するものだった。

「確かに私がお前達を呼び出したのは紋章の力を返還するため…

しかし、例え紋章の力を取り戻し進化することができたとしても
七大魔王に勝つことはできない」

「そんなっ！ だったら、どうすればいいの!？」

「チンロンモン、何か方法はないの？」

やっとベリアルヴァンデモンを倒して平和にしたっていうのに…
またこんな、」

ミミが告げられた信じがたい言葉に即座に反応を示す。
確かにさきほど見せつけられた圧倒的な力。

しかし、そこにはアポカリモンほどの力を感じることはできなかった。

だからこそ、みんなが力を合わせればきっと勝つことができると思
っていたのに… そんな感情が籠った言葉……

隣にいる空が沈んだ面持ちでチンロンモンに問いかける。

きっと何らかの方法があるはずだ…

諦めなければ必ず道は開ける。そう信じていたからこそ、ここまで
進んで来れたのだから。

「方法は確かにある。

しかし、その方法はあまりにも危険なもの…… お前達はその方
法を行う意思はあるか？」

方法があるとチンロンモンは言う。

だが、それを行う勇氣はあるのかと逆に問いかけられる。

おそらくその方法とは子供達が考えている以上に危険に満ちたもの
なのだろう。

だから、チンロンモンは尋ねたのだ。

それ以外、きっと方法はないのだとしても…… それを実際に行う
のは子供達自身。

強制することはできない。

子供達自身が選ばなければならないのだ。この方法を実行するかしないのかを。

しないという答えを出してもチンロンモンは咎めないだろう。

事態を終息させるため力を貸してくれるだろう。子供達のピンチをその力で救ったバイフーモンのように……

しかし、例え危険だからと言って方法があるのなら試すのがこの子供達だ。

及び腰になる事もあるだろう。

されど、それを凌駕する経験を積んできた。

ならば示される答えは只一つ

「危険だろうが、俺はやるぜ！

みんなもそうだろう？」

「もちろんだよ、大輔。このデジタルワールドを今度こそ救うんだ」

「危険は承知の上だ。そうだろう？」

口々に方法を試すことに賛成する子供達。

やれることがあるのなら、やらずに後悔するよりやって後悔するほうがずっといい。

彼等の瞳は強い意思を持ち、光り輝いている。

あれほどの力を見せつけられ、チンロンモンの勝てないという言葉聞いてもなお、希望を失ってはいない。

「ならば、話そう。我等、四聖獣が考えた方法を……

その方法とは、こことは別のデジタルワールド及びリアルワールドに存在する選ばれし子供達の力を借りること。

すなわち、お前達の幾人かを次元の異なる別の世界へ飛ばし、協力を要請することだ」

逃走の果て示されるもの（後書き）

後、一話か二話で第一章が終わります。

ようやくテイマーズ世界を示す言葉が子供達側に出ました。
次回ではもっと掘り下げていきたいと思えます。

別世界への道 前編

世界とは一体、なんなのだろうか？

同一の場所、同一の地名、同一の生命体……

されど、違う

そこは自分達が知っている場所ではない

住んでいる場所でもない

自分を知る者、自分が知る者… 家族、友達その誰もがない同じ

なように異なる場所

それがチンロンモンの話す別の世界

「別のリアルワールドにデジタルワールド？

そこには俺達みたいな子供がいるっていつのか!？」

「同じ選ばれし子供なら助けてくれる可能性は高いな…… でも、」

「本当に助けてくれるかわからない……」

まさかこことは違うデジタルワールドや自分達の住むリアルワールドと同じ世界が存在していたなんて…

驚きのあまりに啞然とする子供達の中、太一が代表するように疑問の言葉を投げかけた。

それに続くヤマトとタケルの兄弟。

二人ともこことは別の世界に住む子供達という存在にどこか懐疑的な考えのようだ。

以前、自分達の前にも別の選ばれし子供がいたという話を聞いたことはある。

しかし、その存在は会った事はないといえども結局は同じリアルワールドの出身者。

チンロンモンや他の四聖獣が言うからには本当に別の世界は存在し、子供達もまた実在するのだろう。

しかし、その存在が力を貸してくれるかどうかと言えばそこは首を捻るところだ。

「チンロンモン、貴方はこの方法は危険過ぎるものと言いました。どう危険なんですか？」

「もしかしてその子供達を説得できなかつたらもう元の世界には戻ってこれないとか…？」

「京ちゃん、そういうこと言うのはやめてえ……」

「でも可能性としては捨てきれないわ」

そう、チンロンモンはこの方法を話す以前に“あまりにも危険なもの”と告げた。

それが何を意味するのか…

多少の危険は承知の上だ。その言葉に嘘偽りはない。

だが、それでも不安に駆られるのは命ある者として当然の感情だ。更に今の状況は最悪の一途を辿っているという状態……

危険があまりにも大きければ、最悪の場合この方法を蹴るという場合も大いにありえる。

同時に子供達の中に広がる未だ見ぬ別世界の選ばれし子供の力と考え。

自分達の考えに共感し、その命を賭けて他の世界のために戦ってくれるのだろうかという疑問。

それが胸の中で渦を巻いている。

「別の世界へお前達を送り込むということは次元を故意に歪ませるに等しい行為。

以前、お前達をこのデジタルワールドへ導いたのは暗黒の力によって歪まされた次元を元に戻すためと話したな……

失敗すればまたあの頃のようにリアルワールドとの境界が不安定となり、二つの世界を崩壊させかねん事態へ陥るだろう。

だが、現時点で既に七大魔王の巨大な暗黒の力によって正されていた次元は歪み、掻き乱され始めている。

非情に由々しき自体ではあるが、我等はこれを逆手にとり、一時的に別世界へと繋がるゲートを作る事とした。

しかし、本来なら繋がる事のない世界へのゲート… 酷く不安定であると同時に一瞬でも気を抜けばすぐ閉じてしまうような代物だ。これだけを聞くと戻ってこれないと思うだろうが、それは違う。

何故なら、そのデジタルワールドはこの世界と同様、我等と同じ四聖獣によって守護されている。

彼等もまた、自分達のデジタルワールドを守るため君達に協力を申し出てくれている。

我等だけでは難しい事も同質の存在である存在の力があれば、ゲートの安定性は強靱なものとなり、必ずやお前達を送り届けることができるだろう」

つまり、七大魔王の復活によって既に次元は歪み始めている。

その歪みが強大なものになれば、どうなるか…… 子供達は身をもつて知っている。

次元が歪めば当然、その境界はゆるいものとなってしまう。

ならその歪みが最大まで増幅されればどうなるか？ 答えは単純だ。デジタルワールドとリアルワールドの衝突による、相互の消滅だ。

そして、これは何もこの二つの世界だけに留まるものではない。

かつてダークタワーを集められて作られた、ブラックウオーグレイモン。

彼自身、暗黒の存在であり存在そのものが歪みだった。

彼の存在によってヒカリ、京、賢の三人とそのパートナーデジモンは再度暗黒の海に招かれた。

これは世界の境界が歪みによってゆるくなったため。

それが別世界との間に起こっても何も不思議ではない。むしろ、必

然と言えよう。

歪みによって生じる境界のゆるみを逆に利用することで、子供達が通るゲートを作るといっのは理論として何も間違っていないのである。

ただ、失敗すれば相当のリスクを背負うことになるが……

「強靱なものになる、か…… それは行きと帰りも有効なのか？」
「無論」

行きは大丈夫だとしても帰ることができなければ意味はない。

そこを確認することは重要だ。

失敗した際のリスクは当然高いが、それでも試してみる価値はあるだろう。

別世界の子供達の説得は、子供達自身が頑張るしかない。

世界の安定を守るため存在する四聖獣がこうまでしてくれるのだ、その期待に応えたい。

しかし、ここで今まで黙っていた光子郎が質問を出した。

「チンロンモン、一つ聞きたいことがあります。

何故、別世界の四聖獣が協力を申し出てくれたんです？ 彼等からしてみれば、こちらの世界は関係ないはずではないですか？

むしろ、自分達の守護する世界を危険にさらす行為を行うことになりませう」

光子郎の言葉にハッとする子供達。

確かに、別世界の四聖獣の立場から言ってしまうえば、何故自分達の世界の問題でもない事に手を貸さねばならぬのだということになる。チンロンモンの説明のとおり、この方法はリスクが高いのだ。彼らからしてみれば厄介事の何物でもないだろう。

本来なら言葉は悪いが、無視してしまっていたほうがいいに決まっ

ている。

それでも、彼等は協力を申し出た。

こちらから協力を仰いだのでなく、あちらから申し出てくれたのだ。これは少し考えれば、すぐ答えは出てくる。

彼等もまた七大魔王に対し、危機感を持ち合わせ、自分たちの守護する世界までも脅かされる何かがあるのだという事。

それが何なのか？

十中八九それは子供達にとって不利なものとなるに違いない。

「流石は知識の紋章の持ち主、鋭い質問だ。

確かに別世界の四聖獣が協力を申し出てくれた背景には厄介な問題事があるに相違ない。

その問題事とは、やはり七大魔王なのだ。

七大魔王は何もこの世界にだけ封印されているわけではない。

例を挙げれば、暗黒記にて天使と称されたデジモン。彼はその危険度故にデジタルワールドではない次元の狭間に封印されている。

既にわかっているだろうが、彼等が守護するデジタルワールドにもまた、七大魔王が封じられているのだ」

「って事は最悪、その七大魔王と戦わなきゃいけないって事か？」

やはり、不利なものだった。

デーモンやリヴァイアモンといった存在と同等である七大魔王がそこに封印されている。

戦闘になれば、また完膚なきまで叩きのめされるだろう。

険しい表情をする大輔が問いかける。

考えてみれば、七大魔王にまともに攻撃を仕掛けたのは彼一人だけだった。

それだけに他の子供達以上にその力の差を感じ取ったのかもしれない。

「彼等は協力を申し出る際、一つの条件を出してきた。

それは、封印されている七大魔王を決して覚醒させないという事

……

実は最悪な情報が入ってきているのだ」

「最悪な情報…… まさか、デーモンやリヴァイアモンと言った存在がその七大魔王を蘇らせようとしているんですか!？」

「もしそうだとすれば、衝突は免れないな」

別世界の四聖獣が提示した条件。

それは彼等のデジタルワールドに封印されている七大魔王の言い方は妙だが、護衛だ。

確かにこれ以上、七大魔王を復活させたくはない。

一体だけでも倒すことに手間取るほどなのに、七体全員が勢ぞろいするなど悪夢でしかない。

伊織の指摘は最もなものだ。

おそらく七大魔王は勢ぞろいしようとして行動するだろう。

そしてそれはタケルの言うとおり、彼等との衝突は避けられぬものとなるだろう。

チンロンモンも伊織の言葉に頷きを持って応える。

「さよう、既に七大魔王は自らの力で別世界へのゲートをこじ開けようとしている。」

そしてその目的は十中八九……」

「封印されている七大魔王の復活……!」

別世界への道 前編（後書き）

いよいよ第一章もクライマックス目前です。

別世界に対する情報が明らかになってきました。

更に天使が封印されている場所、七大魔王の動きも子供達に知られました。

それにしても別世界の子供達に対する疑惑がひどい……

まあ、初めて会うのですから致し方ないですよね。

別世界への道 中編

現時点で判明している七大魔王は二体。

先程のチンロンモンの言葉からして天使はまだ復活を果たしていないようだ。

残る七大魔王は四体……

一体、どのような能力を持ち、姿形をしているのだろうか？

デーモンは赤い法衣を纏った人型に近い姿、対してリヴァイアモンは全貌こそわからなかったが十中八九、ワニの姿をしていることがわかる。

そして、天使。

遺跡に描かれていたところから察するに、エンジェモン以上の翼を持っているようだ。

「チンロンモン、他の七大魔王の名前やその… 姿形の特徴ってわかるかい？」

流石にもう一度遺跡に戻って調べるなんて時間はないみたいだし

……もし知っているのなら教えて欲しい」

「そうですね。あの戦いの後ですし、入れるかどうかさえ怪しいですし……」

チンロンモン、断片的な情報でもいいので教えていただきたい」

戦いの際、生じる爆発音を聴きながら走ってきた子供達。

その凄まじさから推測すると、遺跡が無事残っている可能性はかぎりなく低い。

更に丈の言ったとおり、時間もさほどないのが現状だ。

四聖獣として長い間、デジタルワールドを見守っている存在ならば、何か知っているかもしれない。

今はとにかく少しでも七大魔王に対する情報を仕入れておきたい。

先の会話からしてこれから向かうだろう別世界で七大魔王と遭遇し、戦う可能性は極めて高い。

そして、その存在がデーモンやリヴァイアモンではなく別の魔王である可能性も否定できないのだ。

「うむ… そうだな、確かに遺跡で七大魔王について調査することはもはや不可能に近い。

私が話せる範囲でよいのなら、話そう」

「ああ、頼む」

私の話せる範囲……

四聖獣たるチンロンモンだからこそ、言えぬ事も数多く存在する。

それは子供達にとって知る必要のないことであり、そして知ってはならない事なのだろう。

知りたいと己の好奇心が疼く反面、その感情を抑制しなければならぬ。

感情のままに行動すれば、その魂は闇に飲まれるだろう。

理性という楔で己自信を律することこそ、七つの大罪を回避する方法なのだから。

「お前たちも知ってのとおり、七大魔王とは大罪に適合したその言葉が指すとおり七体の魔王型デジモンの総称。

元は光り輝く天の申し子、“傲慢”を司る暗黒期における独裁の天使：ルーチエモン

神に仕えながら光に抗いし、“憤怒”を司る暗黒記における疑問の天使：デーモン

欲するがまま欲望を増大させた、“強欲”を司る暗黒期における不信の天使：バルバモン

己の分を弁えぬ愚かなる者、“色欲”を司る暗黒期における不満の

天使： リリスモン
全てを破壊し飲み込む魔獣、“嫉妬”を司る暗黒期における妬みの
深淵： リヴァイアモン
目覚めれば全てを破壊する悪夢、“怠惰”を司る暗黒期における情
眠の深淵： ベルフェモン
探求の末あらゆるモノを貪る、“暴食”を司る暗黒期における飢え
る深淵： ベルゼブモン

一纏めにされてはいるが、その実仲間意識などなく、そこにあるのは純粹な利益関係のみ。利害が一致した場合のみ、彼等はようやく手を組むのだ。

そして彼等は例外なく、邪悪な意思に染まり己のためだけにその力を奮う存在。

その力は凄まじく、本来の力を取り戻してしまえば、我等四聖獣とて太刀打ちできぬほどのもの。

…… 私が今、お前達に話せることは以上だ。

すまないが、彼等の能力については不明瞭な部分が多々あるため、今は話すことはできない」

ようやく判明した七大魔王の全貌。

暗黒記の記述を基準として考えれば、このルーチェモンという存在が中心であり頂点に君臨しているのだろう。

しかし、そこに仲間意識はなく、あるのは利害関係のみ。

これは裏を返せば、利害が一致しない限り協力することはないということ。

つまり、各個撃破の糸口となる重要な情報となる。

能力については残念ながら不明瞭な点が多々あるという理由で今はわからない。

今後、嫌でも相見えることとなるのだから出来れば知っておきたいが、いずれわかること。

更に言ってしまうえば、不明瞭な能力を話されればそれが先入観となつてしまいかねない。

むしろ、話されない方が逆にいいこともある。

「姿形はわかりませんが、名前と仲間意識がないということは重要な情報ですね」

「ただ、問題は今のところ彼等の目的が完全に一致している事。

仲間割れの可能性はとも低いし、協力してくる可能性も否定できないわ」

「協力されればこちらの勝率は確実に下がっちゃう……」

「あつ！　そういえば、俺達に紋章の力を返してくれるんだよね？」
「うむ、無論そのつもりだ」

現段階では七大魔王の目的は一致している。

これが示すことはヒカリが危惧した通り、先程のデーモンやリヴァイアモンのように手を組んでくる可能性が高いことを意味する。

目的さえ一致していなければ、相手にする数は一体に絞れるといっても過言ではないだけに今の状態は不利だ。

進化したとしてもどれだけ勝率を上げられるかと、戦術的なことを考えていた太一の脳裏に一つの会話が思い出された。

チンロンモンが降臨してすぐの事だ。

そういえばあの時、チンロンモンは紋章の力を返還すると言っていた。

紋章の力があれば、完全な状態の究極体及び完全体に進化することが可能だ。

別世界へ行く方法と七大魔王に対する情報を聞いている内に最初の方に交わした言葉を忘れかけていた。

一度に大量の情報が入ってくるということはそれだけ頭が飽和状態になりやすくなるということ。

どれも必要な情報だったにしろ、一度に聞きすぎたようだ。

「一旦、ここで話をまとめましょう。」

まず今回の目的ですが、皆さんご存知のとおり七大魔王からデジタルワールドを守ることです。

そのために僕は四聖獣から紋章の力を返還されます。ですが、例えば紋章の力を取り戻し完全な状態で戦ったとしても勝てる可能性は皆無。

なので、更なる戦力アップを狙うため、示された方法が別世界の選ばれし子供達に協力を求めること。

彼等のいる別世界のデジタルワールドを守護している四聖獣も、条件付きで協力を申し出てくれます。そして、その条件とはそこに封印されている七大魔王の復活の阻止です。

悪いニュースとして、既に復活している七大魔王が封印を解こうと別世界へ独自のゲートを開こうとしているということですね」

「となると、今からすべきことはどのメンバーを別世界へ送るのか決めるってところか」

別世界への道 中編（後書き）

そしてようやく七大魔王の名前が明らかになりました。

とにかく、説明パートです。ねこの辺は……

長ったらしい会話文はあまり得意ではないのですが。

もっと多数のキャラを会話に参加させたいのに……

次回は別世界へ向かうメンバー発表なので、なるべく多くのキャラを会話に参加させようと思います。

別世界への道 後編

的確に要点をまとめあげる光子郎に感心しながら、次にしなければならぬことを考える太一。

今の段階で必要な情報はこれで充分だろう。

更に詳しく深い部分は、今の状態で聞き出すには時間がなさすぎる。早急に次の段階： 別世界へ向かうメンバーを決めることに専念しなければならぬ。

また、情報とはあればあるほどいいというものではない。

ないよりはあつた方が戦いにおいても何をすることも有利ではあるのも事実ではある。

そう、結局は今の状態を直視し、その情報が本当に必要なのかそうでないかをしっかりと見極めることが重要。

これから子供達が考えなければならぬ事は別世界行きのメンバーを考えること。

今、必要な情報は別世界への行き方及びその状況、起こりうる問題の予想等だ。

別世界の状況に関しては実際に行くしか知る方法はなく、行き方及び起こりうる問題は既に把握済みだ。

後は別世界へ行くメンバーがどう対処していくかにかかっていると、言っても過言ではない。

「なら、俺が行く！ 力を貸してくれって言うだけだろ？ 簡単、簡単」

「大輔、あんたねえ…… わかってんの？ いつ戻ってこれるかもわからない、別世界に行くのよ？ ちゃんと考えなさいよね」

「そうだよ、大輔。 今までみたいにすぐに帰ってくるなんてできないんだ。」

家族だつて心配する。そう、簡単に答えが出せる問題じゃないん

だよ」

勢いだけで手を元気よく上げながら、真っ先に名乗りを上げたのはもちろん大輔。

別世界へ行く目的は協力を仰ぐこと。

なら、簡単だ。相手も同じ選ばれし子供、きっと協力してくれるはずだ。

彼等が協力してくれるのなら、七大魔王の復活を阻止するのもきつとできる。

かなり楽天的な考え方だが、大輔は本気でそう信じている。

そこへ待ったをかけたのは京と賢。

二人とも大輔のポジティブにもほどがある思考に半分以上呆れつつ、このままだとズンズン進みかねない彼を止める。

無論、二人だけでなくこの場にいる全員が彼の楽天的思考に驚きつつも呆れている。

つい先ほど、あれだけ手痛い敗北を経験し、今まで見たことのない悔しげな表情を全面に出していたというのに。

既に立ち直り、次へ進み始めている。羨ましいかぎりの前向きさだ。

「二人の言うとおりです。別世界へ行くということは僕達だけで決めている事ではありません。

家族の合意も必要不可欠です」

「俺が、俺がつていうのも大切だが、ここは家族の合意も確実に得られる奴じゃないとだめだ。

そして戦力バランスも重要になってくる」

「ええ、少なくとも一人は究極体になれるデジモンじゃないと不安ね」

短期間で終わるのか、それとも長期間に及ぶのか全く見通しのつかない今回の試み。

これまでの経験上、デジタルワールドに長期滞在したのはデジモンカイザーの一件以来ない。

その時は、キャンプに行くという名目で親から許可を得てきた。また、危険になればすぐにでもリアルワールドへ帰って来れる環境であったことも大きい。

しかし、今回の件は別だ。

まず、行くにしても戻るにしても四聖獣の協力が必要不可欠であること。

危機的状況に陥ったからといって、安易に戻ってくることはできない。

あの頃と違い、子供達の立場を親が理解しているとはいっても、危険なことなどなるべくさせたくないというのが親心というものだ。加えて敵が七大魔王と呼ばれる強大な存在であること。

下手なメンバー構成では最悪の場合、死ぬことだってありえる。

少なくとも究極体が一体は必要だろう。完全体と究極体の差はそれほどまでに大きい。

「それじゃあ、太一さんかヤマトさん…… 大輔と一乗寺君のペアの

誰かが行かなきゃだめって事よね？」

「そうなるね。それとこれは僕の意見なんだけど……」

暗黒系に強いタケル君とパタモン、ヒカリちゃんとテイルモンのどちらか一組、できればメンバーに入ってもらいたい」

「そうですね。紋章の力が返ってくるのなら、完全体にもなれる」

「完全体になれば、そう簡単にやられたりしないよ」

究極体になれるデジモンはアグモン、ガブモン、ブイモンとワームモンの四体だけ。

ミミの言ったとおり、この四体とパートナーは確実にメンバー候補だろう。

誰が行くかは別として、これだけは揺るがない事実なのだ。

そこへミミの言葉に頷いた丈が暗黒系に強いパートナーを持つタケルとヒカリのいずれかを候補にしたいと発言。

戦力を万全に整えるのであれば、天使型に進化するパタモンとティルモンは候補として申し分ない。

その案に即座に頷くタケル。援護するようにパタモンもやる気十分な言葉を発する。

元々、闇の力を悪用する者に対して容赦ない二人だ。

七大魔王という闇の力を己のためだけに使用する者達を許しているはずがない。

「確かにエンジェモンやエンジェウーモンは七大魔王に対して強いだろうな。」

「他は？ 他にも誰か推薦したい奴はいるか？」

「すいません、一ついいですか？」

「大丈夫ですよ。どうぞ、伊織君」

「はい。少し思ったんですけど、別世界の選ばれし子供達もきっと僕達と同様に男女が存在するはずですよ。」

戦力的バランスも大切ですが、男女のバランスも必要ではないですか？」

「太一が納得するように頷くと、全員を見渡し尋ねる。」

「丈のように誰かを推薦したいというのは大切だ。推薦とは言葉通り、その人物を推すという意味。」

「それには必ず何故、推すのかという理由があるのだから。」

「見回す太一に対して、押し黙る一同。今までの情報を下に悩んでいるんだらうか、それとも推薦すべき人材がないのか？」

「そんな中、伊織が口を開ける。」

「彼が発した考え… それはつい先ほどまで悩んでいたものとは全く異なる視点からのものだった。」

「確かに自分達と同様で男女が存在している可能性は高い。」

偏った性別では異性を説得する事となった際、とても難しいものとなるだろう。

それだけ男女の考えには違いがある。

「そこは盲点でした… ナイスです、伊織君」

「いえ、ただ僕は疑問におもっただけなので……」

「そんな謙遜すんなって！ 褒められたんだからありがたくしとくもんだぜ」

光子郎に褒められ、照れたのか謙遜する伊織に対して大輔が声をかける。

確かに誰も性別など気にしてなかった。

伊織が指摘しなければ、もしかしたら男だらけのメンバーになっていたかもしれない。

究極体に進化できるパートナーを持つのは誰も彼もが男ばかりだからだ。

「なら、私とテイルモンがメンバーに入るわ。

いいでしょ、お兄ちゃん？」

「へっ？ ああ… 確かにエンジエウーモンに進化できるテイルモンは最適だけど…」

母さん達がなんていうか」

「説得すればわかってもらえるはずだ。

それにヒカリが心配ならアグモンと一緒に太一もメンバー入りすればいい。どちらにせよ、究極体は必要なのだから」

「そうだよ、太一。ヒカリが心配なら太一もついてっちゃんばいいんだ」

戦力と男女のバランスを考えた際、即在にメンバー入りを宣言したヒカリ。

同意を得ようと兄である太一へ真つ直ぐな瞳を向ける。まさかヒカリが真つ先に声を上げるとは思っていなかったようで、歯切れの悪い言葉を発する太一。

兄としての立場を考えればその反応も頷ける。

太一にとってヒカリは守るべき妹。デジモン関係に関しては親に頼れない以上、自分がしつかりしなければと思っっている。

そこへ追撃をかけた形となるテイルモンとアグモンの言葉。

二体とも太一がヒカリへ向ける気持ちに気づいていた。

テイルモンはヒカリの言葉を尊重し、戦力バランスを考えながら太一のメンバー入りを推す。

アグモンもまた太一の気持ちを慮り、メンバー入りに賛成する。

「太一さん、どうしますか？」

「…………… そうだな。よし、俺もメンバーに入るよ。」

何、母さんたちなら大丈夫さ。俺がなんとか説得してみせる」

ヒカリとデジモン達の言葉に困惑する中、光子郎が声をかける。

ここまで来たのなら、メンバーに入るか入らないか腹を決めなければならぬ。

たっぷり二呼吸ほど間を置いて、決意したように顔を上げる。

太一が出した答えはメンバーに入ること。

彼の性格から考えてもそう答えることは明白だった。

「これで二人決定だな。そして、三人目だけど…………… 僕もいくよ」

「えっ？ 丈先輩がですか!？」

自分の胸に手を当て、進言する丈。

いつも保守的な部分の目立つ彼の言葉に、空が過敏に反応する。

空だけではなく、他のみんなも似たような反応だ。

まさか丈が自分から言い出すなんて…………… そんな雰囲気を取りが醸し

出す中、当事者である丈は対して気に留めないように応える。
彼にも彼なりの考えがあったからこそその進言なのだ。

「ちゃんと考えて出した答えさ。」

別世界にも、川や海といった水場があるはずだ。そう考えたら、
僕とゴマモンは行ったほうがいいんじゃないかって」

「丈もたまには積極的なんだね。おいらも大賛成」

「そうですね、水場なら丈先輩とゴマモンがいてくれた方が戦術的
にもあります」

水上、水中に関する戦闘はゴマモンの独擅場だ。

何故なら水中に対応できるパートナーは限られている。他にいと
すれば、アルマジモンのアーマー体であるサブマリモンくらいなも
のだ。

しかし、アーマー体では戦力的に不安が残ってしまう。

その点、ゴマモンは完全体まで進化することができるため戦力とし
て申し分ない。

丈の説明に納得したように頷く一同。

これで決まったメンバーは3人。できれば後、一人か二人ほど来て
欲しいところだ。

「太一が行くとなると、俺やタケル、それに大輔と一乗寺君はだめ
だな」

「ええ？ どうしてですか!？」

「七大魔王の目的は七体全ての復活だろうけど… まさかデーモン
の目的を忘れたわけないよね？」

「あ… そうか、暗黒の種か」

「あの時は僕達への挨拶だと言っていたけど、諦めたわけじゃなさ
そうだったからね。」

十分、こちらの世界にも七大魔王は現れる可能性は存在するんだ。

僕のせいだね……」

賢に埋め込まれた暗黒の種。

それを狙いにデーモンが再び現れないとも限らない。

阻止するには究極体の力が必要不可欠だ。それも一体だけでは足りない。

その事を考慮すると別世界へ送り込める究極体は結果として、残念ながら一体だけ。

だからこそ、別世界へ向かうメンバーは単体でも完全体になれる者が相応しくなってしまう。

ジヨグレス体は確かに単体の完全体よりもスペックは高めだが、二人揃わなければいけないという弱点がある。

別世界では基本、全員で行動することになるだろうがそれも絶対ではない。

「今、男子が太一と丈先輩で二人。対する女子はヒカリちゃんだけ

……

そうね、私が行くわ」

「空さんがですか？」

「ええ。もう一人くらい女性がいたほうがいいでしょ？」

それにピヨモンが進化すれば、みんなを運ぶことだってできる。

移動手段としても空中戦の戦力にもなれるわ」

陸、海、空と戦力的バランスは整っている。

なら次に考えることは男女のバランスと移動手段だろう。

空とピヨモンならば女性であり、進化すれば全員を運ぶことも可能だろう。

空中ならば山や海もさほど関係なく行動できる。

ヒカリのジヨグレスパートナーとしてメンバー入りを考えていた京が空の言葉に反応する。

京がメンバー入りを言い出せなかったのには理由がある。

まず、ジヨグレスしなければ自分達は成熟期までしか進化できないことが一つ。

そして最大の理由は、ジヨグレスしてしまうとエンジエウーモンという極めて暗黒系デジモンに強い進化系を潰してしまう事。

これでは戦力バランスを欠いてしまう可能性がある。

だからこそ、京は言い出せなかったのだ。

「太一さんとアグモン、ヒカリさんとテイルモン、丈さんとゴマモン、空さんとピヨモン…」

これ以上はこちら側の戦力が大幅に削られてしまうので、このメンバーで決まりということでもよろしいですか？ みなさん」

大きな戦力の一柱であるアグモン。そして単体で完全体まで進化できる三人。

これ以上、戦力を割くことは出来たとしても得策ではないだろう。

そう判断しての言葉。

見回す限り、みな顔に否定の色はない。

多少、不満気な表情をしている者も中にはいるが表立って拒否する者はいなさそうだ。

太一が確認するように一つ頷くと、後ろでメンバーが決まるのを沈黙の中待っていたチンロンモンへと向き直る。

「なら、このメンバーで決定だな。

チンロンモン、悪いが今日いきなり行けっというのは無理だ。明日また、出直すってことで大丈夫か？」

「ああ、問題ない。

我々の方もまた、別世界へのゲートを開くため準備をしなければならぬからな」

「そうか。なら、出発はどれくらいになる？」

「準備が終了するのは今から二日後だが、日取りはお前達に任せよう。」

お前達にもまた、準備帰還が必要だろう」

いきなり今日行けと言われやしないかと内心ヒヤヒヤしていたが、対するチンロンモンの解答は静かなものだった。

元々、いきなり行けというつもりはなく、今日はただ子供達の意味を確認したかっただけだったらしい。

子供達が断れば、それ以上無理強いるつもりは毛頭ない。

だからこそ、別世界へのゲートは未だ準備段階の一手前で凍結してある。

これらがすべて完了するのは軽く見積もって二日後。

しかし、自分達の日程を子供達に押し付ける気もまたない。

あまり遅い日取りは流石に了承できないが、できる限り彼等の要望に応えたい。

「三日後には春休みに入りますので、それからというのはどうですか？」

「俺達はそうだったな。ヒカリ、お前達はどうか？　いつから春休

みが始まるんだ？」

「お兄ちゃん達と一緒に、三日後だよ」

「なら、出発は三日後って事で大丈夫か？」

頭にカレンダーを思い浮かべ、計算する。

三日後からは夏休みには遠く及ばないが、長期休暇である春休みが始まる。

長く学校を休むわけにもいかないのです、妥当なところだろう。

丈や空を見ると、二人とも頷いてみせる。

「そういうことだから、チンロンモン。　今から三日後でよろしく

頼む！」

「了解した」

向かうメンバーの了承がとれたところでチンロンモンへ向かい、返事を出す。

重々しく頷いたチンロンモンは、ゆるゆると巨体を揺らす。

ゲート開放への準備へ向かうのだろう、子供達を一人一人見下ろすと

「では、三日後…… 最後のホーリーストーンがある場所でまた落ち合おう」

「ああ、わかった」

そう別れの言葉を紡ぎ、巨体は雲間へと静かにゆっくりと消えていく。

三日後… 子供達は別世界へと足を踏み入れる。

それまで問題なく過ごせることを願いつつ、来るべきその日へ向かいそれぞれ思いめぐらせるのだ。

好奇心と一抹の不安を宿しながら…

そして、運命の三日後

別世界への道 後編（後書き）

後編で締めなければと少し駆け足展開になってしまいました。

それでも今までの中で最大の文字数に……

次回で第一章完結となります。

なるべく早く更新できるように努めていきます。

旅立ちの日

今、思い出せばこの三日間は、七大魔王が出現してから最も平和な日々だった

出立の時間が刻一刻と迫る中、それでも俺達は笑っていた

もちろん、楽しいだけじゃない

これから自分達が行う事を話したとき、両親は個々それぞれの反応を示した

怒られ、嘆かれ、そして… 酷く悲しませた

それでも、彼等は最後にこう言うのだ

いつてらっしやい

見送って人がいるということは帰る場所があるということだから、俺達は安心して旅立てる

全く新しい未知なる世界へ

最後のホーリーストーンが安置されている場所はデジタルワールドに存在する中華街の側。

聞くところによると、中華の泉と言われるものの中から浮かび上がったそうだ。

今では泉に沈むことなく、そのまま宙に浮いたままその役目を果たしている。

辺りに漂う香しい中華スープの香りが食欲をそそる。

「なんか、滅茶苦茶腹が減りそうなところだなあ」

「太一く、僕お腹減って来ちゃったよ」

「おいおい、ついさっきすっげえ食べてただろ？」

「もう食いしん坊なんだから」

この香りに誘われたのか、元々旺盛な食欲を刺激されているデジモン達。

特に食い意地が張っているアグモンやブイモン、アルマジモンといった辺りはパートナーにお腹が減ったと訴えている。

だからと言って、好きなだけ食べさせられるほどの蓄えは残念ながらない。

むしろ、先程朝食を食べてきたばかりなだけあっていくら食欲をそらせる香りとはいえ、そう食べたいとは思わない。

呆れたような声を出す太一とヒカリの兄妹。

その背には大きなバックを背負っている。これは別世界へ持つていくための荷物であり、嵩張りすぎるのも邪魔なのでかなり切り詰めてきた。

逆に色々と考えすぎたのか丈の荷物は取り分け、大きい。

「それにしても大きいですね。大丈夫なんですか？」

「えっ？ 大丈夫、大丈夫。うん、多分、きつと……」

「それ大丈夫って言わないぞ」

「私もそう思う」

心配そうに問われれば、大丈夫と答えてしまうのが人情というもの。語尾にかけて徐々に気迫が薄れていくのはまあ、仕方ないといえは仕方ない。

バックに入り切らず、抱え込まれている毛布類などを見てもその重量は押して計るべしだ。

備えあれば憂いなしという言葉があるが、これはやり過ぎというものに当たる。

ゴマモンやピヨモンにも突っ込まれ、うっと言葉につまるその様子もまた丈らしいと関心させられる。

そこへ更なる追い打ちが放たれた。

「丈先輩、もう一度ここで荷物を整理しましょう？」

その荷物は流石に多過ぎ……」

「僕もそうしたほうがいいと思います。その荷物では動きにくいでしょう」

「…… うん、そうだね。ごめん、ちょっと待っていてくれるかい？」

「わかった。でも、なるべく早くしてくれよ」

自分の思ったことを真つ正直に話すミミが、表情を固くさせながらもう一度みんなの前で整理するよう持ちかける。

そこへすかさず、光子郎がフォローを入れる。

おそらく別世界のリアルワールドはこちら側と大差ないと考えられる。しかし、デジタルワールドは違うかもしれない。

むしろ、違うほうが圧倒的に高いだろう。

もしかしたら、このデジタルワールドよりも荒廃しているかもしれない。

もしかしたら、このデジタルワールドよりも遥かに進歩した近未来的な場所かもしれない。

様々な考えが巡るが、結局は到着するまでわからない。

だが、どちらにせよこの大量の荷物はハッキリ言って邪魔だ。

初めは丈が一つ一つ取り出していたが、それに業を燃やしたかミミが最初に参戦。

続いて京、空と次々と女性陣が参戦していく。

凄まじい勢いで取り出されていく荷物、荷物、荷物……

小型な鍋やらちよつとしたサバイバル用品、大量の医療品に衣類とよく詰め込んだものだに関心するばかりだ。

「これはいらわないわね」

「もう少し、減らせそうですよね」

「酔い止めとかはいらないと思うな」

もはや、荷物整理は女性陣の仕事と化し、当事者である丈は既に置いていけない状態になってしまっている。

こういう場に進んで参戦するだろうと思われた大輔もまた、女性陣のかつてない勢いに吞まれたらしくこれといった行動を起こせないでいる。

そして、数分後……

彼女達が不必要と判断したものが全て抜き取られ、先程と比べ物にならないほどコンパクトとなったバックが突きつけられる。

その背後には荷物の山。

もはやその勢いに圧倒された丈はバックを受け取るしかできない。

流石にこれはやり過ぎなんじゃないかと思っただ、伊織や光子郎に荷物は責任をもって家へ戻しておくと言われ少し泣きかけた。

あのゴマモンでさえ、ぼんと丈の足を叩き慰める。

それだけ一仕事終え、清々しい表情をしている彼女達の仕分け作業は恐ろしいものだったと思われる。

「そろそろ、チンロンモンが来る時間です。

太一さん、皆さんもお気を付けて」

「おう。そんな心配そうな顔すんなって…… そっちこそ、七大魔王に気をつけるよ？」

「もちろん、気をつけるさ。

ただ、危険度ならそっちの方が圧倒的に高い。無事、戻ってこいよ」

「ああ、必ず戻ってくるさ！ 全員でなっ！」

三日前と同じように雲を空が覆い尽くしていく。

その合間を悠然と泳ぐ蒼き竜神…… チンロンモン。

徐々に近付いてくる姿に光子郎とヤマトが無事の帰還を祈るように

声をかける。

対する太一はぐつと握りこぶしを上げると、満面の笑みで応える。見送りに来ていた全員が四人に駆け寄り、思い思いの言葉をかける。その全てが彼等を案じるものばかりで、無事またこの世界へ戻ってくることを祈っている。

「太一先輩も、ヒカリちゃん… 空さんに丈さん！ 気を付けてっ！」

「こちらの世界は僕達に任せてください。そしてどうか、無事に帰ってきてください」

「ちゃんと帰ってきてね、待ってるから」

「こちらの事はなら心配しないで、頑張ってきて欲しい」

「みんなならきつと大丈夫よ！ みんな一緒に帰ってきてね」

「応援してます。どうか、無事で」

これから別世界へ行く本人達よりも不安気な表情をしながらも、気丈に応援してくれる。

本当は自分達も着いていきたいのだ。

しかし、それができない歯痒さを噛み締めて、せめて自分達にできることをやろう。

そう、この三日の間に決意したのだ。

いつでも彼等が帰ってこれるように…… この世界を守りきろうと。そんな心を感じたのだろう。言葉なくただ頷き続ける。

きつと帰る。

別世界の選ばれし子供達の協力を取り付けて、絶対にこの場所に帰る。

そう、心の奥底に刻みつける。

荘厳な気配が頭上に降臨する。

「子供達よ、準備はよいか？」

「もちろんさ！」

「ならば、最初にお前達全員に紋章の力を変換しよう……
デジヴァイスを掲げるのだ」

全てを見通す二対の瞳を向けられ、子供達は頷きを返す。

既に迷いはない。

大丈夫、自分達は必ず協力を取り付け、ここに帰る…… 帰ってくるんだ。

何の恐れも迷いもない、純粋な瞳が向けられる。

チンロンモンもまた一つ大きく頷くと、その周囲に四つのデジコアが現れる。

青、赤、緑、白…… 眩く光る四色のデジコア。

聖なるデヴァイス、デジヴァイスをそれぞれの利き手に握り締め、チンロンモンへ向かい掲げる。

四色のデジコアが更に強い光を放つ。

子供達を取り囲むように周囲を旋回し、一つが二つに分かれ合計八つの光となり子供達全てのデジヴァイスへ向かって飛び込む。

あまりの眩しさに反射的に目を瞑る子供達。

次に瞳を開けた時には既に、四色のデジコアは消失し、デジヴァイスからそれぞれ力強い力を感じ取る。

「これで、紋章の力は変換した。

自由に完全体もしくは究極体へと進化することが可能となった」

呆然とデジヴァイスを見つめる子供達に言葉が降りる。

悠然と佇むチンロンモンだが、確実にその身から力が失われてしまったようだ。

神々しさも辺りを包む荘厳さも変わらない。だが、感じるのだ。彼の力は削がれてしまったと……

何かを言いかけたヒカリだったが、寸前でその言葉を飲み込む事と

なつた。

それもそのはず。

唐突に彼等の目の前の空間が歪んだのだ。

その歪みは徐々に膨れ上がり、ぽっかりと横穴が開く。

おそらく、これが別世界へのゲートなのだろう。

決して安定しようとしないう歪みはその穴をより不気味に不安定にさせているように見える。

実際、そうなのだろう。

歪みを利用したゲート…… 果ての見えない闇だけがそこには広がっている。

「それが別世界へのゲートだ。

何も心配することはない。お前達が入りさえすれば、自ずと道は開けるようになっていく。

進むがいい… 歩みを止めずに」

太一を先頭にゲートへ一歩、また一歩と近付いていく。

頼りなさげに揺らめくゲートはまるで彼等の全てを飲み込もうとしているようだ。

ごくりと生唾を飲む。

額から流れる冷たい汗がドクドクと鳴り響く心臓を鎮めてくれる。

「行くぞ…」

「OK、太一」

太一が片足を踏み出す。

なんとも言えない奇妙な感覚が鋭く全身を駆け巡る。

だが、歩みを止めることはしない。そのまま片手を入れ、ゆっくりその身をゲートへ入れていく。

柔らかなクッションでも踏んでいるように感じられた足元だったが、

その身を入れる毎にまるでコンクリートのような強靭さを帯びていく。

そして最後に残った左足がゲートへと消える。

太一がくぐったのを見て、アグモンが何の迷いもなく飛び込む。

続いてテイルモン、ヒカリ、ピヨモン、空、ゴマモン、丈と次々とゲートへ踏み込んでいく。

最後にくぐり抜けた丈の大きなバックが消える。

次の瞬間、分かれを惜しむ間もなくゲートが消失する。

最初から何もなかったように消え去ったのだ。まるで別世界へのゲートなど元々開かれてなどいない。

そう言うように、ただ静かに消滅した。

残された者はここにきてようやく実感をもって感じ取ることができた。

そう、彼等は旅立ったのだ。

誰も知らない、別世界へと……

旅立ちの日（後書き）

これで第一章は終了です。

次からはテイマーズ編へと入ります。

別世界へとたどり着いた太一達を待つのは何か？

彼等はそこで何を知り、何を得るのか？

それはまだ、誰にもわからない……

例え、神と呼ばれる存在でさえも

一途な願い

さようなら

ありがとう

短い間だったけど、君達と過ごした日々はとても充実していたよ

別れはあまりにも唐突で悲しいと思う以上に事態が飲み込めなくて

ちゃんとした挨拶を交わすことすらできなかった

でも… それでもね、

君達と出会ったことを僕たちは決して忘れない

そうだ、

みんなで流したメッセージ

もう、君達に届いたかな？

本当は君達に直接、伝えたいんだ

これは嘘偽りのない僕達の本当の気持ち

会いたい

君達にもう一度、

会いたい、会いたいよ……

一途な願い（後書き）

第二章、プロローグです。

テイマーズの後日談であるドラマCDを聞かれると更に意味がわかると思います。

駆け出す子供達

ゲートをくぐり抜けた先、

別世界へと続く回廊は奇妙という他、表現できる言葉が見つからないほど不可解なものだった。

物体というものは見当たらない。

かと言って全てに実態がないのかと言われればそうではない。

実態はあるが、物体ではないといったところか……明らかに矛盾しているが、それだけ奇妙な空間なのだ、ここは。

そして、時間の流れもわからないと来た。

ここに来るまでにつけてきた腕時計はその仕事を放棄し、うんともすんとも動かない。

どれほど時間が経ったのだろうか？

彼等は歩き続ける。

薄く発光する光の道を、ただひたすらに進み続けている。

いつか別世界に辿り着くと信じて、足を動かしていくのだ。

「ん？ あれつてもしかして…… おい、みんなっ！」

「えっ？」

一体、どこまで続くのだろうか？

もしかして、終わりなどないのではないか？

そもそも、自分達は本当に進んでいるのだろうか？

一向に変わらない景色の中、時間の感覚もなく歩き続ける子供達の心に譜の感情が芽生え始める。

暗くもなく明るくもないそんな環境下の中、歩き続けているのだ。

当然、体力は消耗され疲弊してくる。

体調が芳しくなくなってくれば、比例するように心も疲弊する。

それが子供達の心を余計にネガティブな方向へ向かわせるのだろうか。

子供達の感情を受けてか、初めは元気よく時には慰め合っていたデジモン達も意気消沈し始めている。

そんな中、痺れを切らしたように何度も何度も単眼鏡を取り出しては、遠くを見ていた太一が声を上げた。

何かを見つけたようで、この雰囲気の中甲斐もなくどこかはしゃいでいる。

「どうしたのよ、太一？」

「俺が単眼鏡を何度も何度も覗いてたの知ってるだろ？」

「見えたんだよ！ 光がつ！ きつと、出口だぜ！」

確かに太一は単眼鏡越しに見たのだ。

うつすらと伸びる光を

今まで様々な視点から単眼鏡を覗いていたが、そんな場所は今の今まで一切目にはすることはできなかった。

十中八九、あの光が差し込む場所こそ出口だろう。

「それって本当かい？」

もし本当なら、もう少しで出口って事だよな。よかったあ、実は出口なんかないんじゃないかなって考えていたんだ」

「全く丈は小心者だなあ。四聖獣がそんなへまするもんかい」

ほっとするように息を吐き出す。

彼の言葉はヒカリや空の心境をも物語っている。

そう、彼女等も不安だったのだ。進めど進めど先の見えないこの道のりが。

四聖獣を信じたいという気持ちとは裏腹に心に芽生えかけた疑いの気持ち……

この不安定な回廊の影響もあるのだろう。

だが、それ以上に彼等はまだ親の庇護下においておかしくない年齢な

のだ。

愛しい両親や多くの友、住み慣れた土地から離れ仲間がいるとしても心細いと感じてしまうのは自然だ。

むしろ、感じないとなればそれは人間性の著しい欠陥となる。

重苦しい空気をまとっていたパートナーがようやく肩の荷を降ろした事で、すかさずゴマモンのツツコミが決まる。

ゴマモンはいつもそうだ。

持ち上げるところは持ち上げつつ、茶化することを忘れない。

茶化することができるということはそれだけに余裕があるということに相違ない。

テイルモンもまた長年の経験を経た余裕を持っているが、ゴマモンのそれとはまた違う。

「とにかく、もうすぐ到着するって事だよ。太一」

「そういう事。みんな、疲れてきていると思うが、もう少し頑張ろう！」

訪れた君達のいない二度目の春休み

この春休みが終われば、子供達は中学校へと進学する

通い慣れ、親しみ続けた通学路、校舎との別れ

でも、それは永遠の別れじゃない

この街にいれば、いつだってあるものだから

それは君達にも言えるよね？

子供達は約束した

春休みの一番最初の日、全員あの場所に集合

何かをするということはない

ただ、みんなで集まりただけだ

あの場所は君達と別れた場所
未練がましいと言われても構わない
ただ、君達との最期の思い出が残るあの場所はととても大切な
ところだから

「いつてきまーす」

「車とかには気をつけるのよ」

「わかってるって!!」

自宅の目玉商品を手に取り、口に詰め込みながら慌ただしく駆け出す少年。

その背中に母親が声をかける。

返ってきたのは元気な声。

ごくりと最後の一欠片を飲み込むと、裏口の扉が開き、そこから弾丸のように飛び出していく。

あの場所へ行く前に行っておきたい場所がある。

そこは危険だと言われ、埋め立てられてしまった“君”の家。

帰ってきたらきつとガツカリするんだらうな。

しょんぼりと頂垂れて尻尾を元気なさげに振るんだらう。

そんな“君”の姿がありありと浮かんでくる。

くすりと笑うと、更にスピードを上げて走り出す。

少年は気付かない

その背後を付け回す小さな小さな霧の塊に……

この時、気付いていたらきつと“君達”と再会することはなかった
だらう

そして、あんな悲しい思いをすることもなかったんだ

駆け出す子供達（後書き）

今回は第二章、始動編です。

別世界へと向かう太一達とある場所へ向かう少年。

錯行する思惑は既にその魔の手を伸ばす……

次回から本格的なテイマーズ編突入です。

信じる心が道を開く

太一が光を発見してからまた随分と長い間、歩き続けているように感じる。

一時は出口を発見したかと思い、覇気が戻った子供達だったがさっぱり見えない光に半ば苛立ちを感じ始めていた。

何度、本当に見たのか？と確認したことが。

その度に太一は見たと断言し、単眼鏡を再度構え、その光を確認する。

確かに光は見える。

「信じられないのなら自分で覗いてみるよっ！」

そう声を張り上げると、ついに何度も確認を入れてくるメンバーに単眼鏡を投げつけた。

皆を引つ張るため忍と耐えてきた太一だったが、ついに堪忍袋の？が切れたのだ。

彼自身もちつとも近付けない光に対して苛立っていた。

それがついに爆発してしまったのだ。

単眼鏡を投げつけられた空もまた、眦を吊り上げる。

心配そうに二人を見つめるヒカリと丈、そしてデジモン達。

アグモンとピヨモンがそれぞれ二人の服を引つ張り、「落ち着いて太一」「空、顔が怖いよ」と口々に言い募るが、一度爆発してしまった感情はそう簡単には落ち着かない。

互いに顔を背け、険悪な雰囲気のまま進み続ける。

「……お、お兄ちゃん」

このままではいけない。

そう感じたのか実の妹であるヒカリが兄に声をかけようとする。

しかし、それをテイルモンが無言で阻止する。

そしてヒカリ、そして近くにいる丈、ゴマモンにだけ聞こえるような声を発する。

「これは二人の問題。手を出してはダメ。

気が立っている間は、どれだけ正論を突き付けたとしても聞き入れられない」

「僕もテイルモンの意見に賛成だ。

太一も空君も馬鹿じゃない。お互い、ちょっと気が立っているだけだ。もう少し様子を見てみよう、ね？」

「うん… わかったわ」

太一も空も丈の言うとおり、馬鹿ではない。

彼等が醸し出すギスギスとした雰囲気はこの空間によって生み出されたといっても過言ではない。

かと言って、今の状態の彼等に正論を突き付けたとしてもテイルモンの言うとおり聞き入れられないだろう。

ここは丈の提案通り、もう少しだけ様子を見て、それでもこの雰囲気が続けるのならば苦言を呈すればいい。

団体行動を行なっている中で一番怖いことはお互いに疑心暗鬼になること。

誰の言うことも信じられなくなれば、集団としての瓦解を意味する。それだけは避けなければならぬ。

いがみ合っている太一と空も今までの経験上、それがわかっているはずなのに自分達の感情に飲み込まれてそのことを忘れている。

時間がある程度経てば、頭の冷えることだろう。

それにしても一体、この回廊はどこまで続いているのか？ 別世界へ向かう回廊とあってその総距離はとんでもないものなのかもしれない。

「太一、」

「なんだよ？」

彼等しからぬぶつきら棒な言い方を持つて返される返事。

まだ頭が冷めていないのか。そう、内心で感じながらも面には出さず先を急ぐ太一のすぐ傍まで駆け寄る。

また確認かよでも言いたげな不機嫌全開な太一に向かい、余裕ある表情で対峙する丈。

他人の放つ負の感情には怯えることも、また取り込まれることもあつてはならない。

もしそうなれば、ますます相手を興奮させてしまつのがオチだ。

だからこそ、丈は真剣な顔を崩さずに余裕ある対応を心がけながら言葉を口にする。

「すまないけど、もう一度光がある場所を見てくれないかい？」

僕が見ても確かめようのないことだから、頼むよ太一」

「そうまで言うんなら、わかった。ちょっと待ってる」

自分では確かめられない、君の力が必要なんだ。

言外にそう語りかける丈。

そこに嘘偽りはない。真摯にそう思い、感じて、考えた末に問いかけたのだ。

頭に血が上っているとはいえ、自分よりも年長者であり、信頼している仲間からの頼み事だ。

それを断るような性格はしていない。

むしろ、何を確かめたいっていうんだ？ そんな疑問を胸に抱きながら、単眼鏡を取り出し、光を見る。

間違いなく、そこには何の変化もない光が存在している。

「丈、見たぞ。一体、何を確かめたいんだ？」

「うん、ありがとう太一」。

確かめたい事っていうのは、一番最初に君が発見した時の光とつ
いさつき確認してもらった時の光…… 見え方に变化ってあったか
い？」

「見え方に变化あ？ …… ちょっと待てよ」

丈が確かめたい事に気付いた太一は、一つ驚いた表情を見せ、もう
一度単眼鏡を覗く。

今度は流し見ではなく、もっと丁寧にじっくりと観察するように見
つめる。

彼等はその光に向かって進み続けてきたのだ。
ならば、

「……ない。 変化が、全然ない！」

「お兄ちゃん！ それって本当？」

「ああ、間違いない！ 全く同じなんだ…っ 見えている部分も見
え方すら！」

「どういうことだ？」

進んでいけば近付くはずだ。

何度も何度も空に言われ、光の方向を確認してきたため逆走してい
るとは考えられない。

また、進むべき方向がずれていれば見え方が変わってくるはず。

例えば、真っ直ぐ進んでいるはずが少しずつ気付かない内に斜めにな
っていけば、その分光の見え方は微妙にだが変わってくるだろう。
しかし、それもついさつき舐めるように確認したため可能性として
は限りなく低い。

ならば、何故変化がないのだろうか？

太一の言葉に誰もが皆、愕然とする。

唯一人、なんとなくこうなんじゃないかと予想していた丈だけはさ
ほど驚いていないように見える。

「ねえ、それってどういう事？」

「お、おいらに聞かれたってわかんないよ。なあ、丈。どういこうとなんだ？」

「つまり、僕達は太一が光を発見してからそこへ向かって進んできた。

空君が何度も太一に光の方向を確認していたから、逆走しているわけがない。ちゃんと光に向かって歩き続けてきたはずなんだ。

それでも光は一向に近付かない。これが、指し示す答えは」

「俺達はここから動いているつもりで、全く動いてなかったってこと……」

クツソ！ 一体、どうしたらいいんだ？」

これ等の事から導き出される答えは一つ。

この回廊に入ってから、彼等は一步も前へ進めていなかったということ。

太一が光を見つけたのだから、キョロキョロと辺りを見回しながら単眼鏡を覗いていたからに他ならない。

歩いているから進んでいる。この考え方こそ、間違っていたのだ。

ここは別世界へと繋がる不安定にもほどがある回廊。常識が通じる場所ではない。

基本中の基本であるこの事を完全に失念し、彼等の常識で行動してしまつたために気付けなかつた部分。

そこへ着目できた丈が凄いとしか言いようがない。

だが、それがわかつたとして一体どうすればいいのか？ 皆目見当がつかない。

むしろ、今まで散々歩き続けてきた疲労に加えこの事実。

子供達の希望を打ち砕くには十分すぎた。

皆、一様にやる気をなくしてしまい、その場に座り込む。

心身ともに疲労困憊だ。

デジモン達もまた座り込み、子供達のリアクションを待っている。

「もしかしたら……」

「ヒカリ？」

重苦しいまでの沈黙が漂う中、ヒカリが小さくつぶやいた。

進めど進めど進まないこの空間の中、何かを感じ取ったのだろうか？

ヒカリは元から感受性が高い。

唯一人だけ何年も前の光ヶ丘で起きた爆弾テロ事件の真相を覚えており、更にホメオスタシアをその身に降ろせる唯一の存在。

だからこそ、この場の誰にもわからないことがわかるのかもしい。

「もしかしたら、この回廊もまた意思の力が重要になってるんじゃないかしら？」

「意思の力？」

「そう、私達がベリアルヴァンデモンを倒した異世界やデジタルワールドも意思の力が強い力を持っていたわ。」

だとしたら、この回廊でも同じことが起こるんじゃないかなって」

意思の力、

確かに今まで何度も心が折れ、くじけそうになった。

それでも諦める事無く、進んでこれたのは仲間が傍にいてくれた事とそして、必ずなんとかなると信じていたから。

ああ、そうだ忘れていた。

今の状態はあのアポカリモンとの戦いでデータに分解された時と似ていないか？

データに分解され、全く訳の分からない世界に閉じ込められたあの時と。

そうだ、あの時は自分自身を、仲間を、信じ抜いたから戻ってこれ

たんだ。

「大輔達もベリアルヴァンデモンに勝てたのは信じたからだったな……」

みんな！ 信じようぜ。俺達はこの回廊を抜け出し、別世界へ行ける事をさ！」

「そうね……私、不安に押しつぶされていた。

信じ抜かなきゃどんな道も開けないわ！」

「信じ抜こう。僕達は大丈夫、行けるんだと……」

デジモン達が見守る中、子供たちは目をつぶり胸に手を当てる。紋章とは心の形。

信じ抜くことが心の力。心こそが力を生むのだ。

四人の紋章の形が浮かび上がる。

不安定に揺れていた回廊がその形を徐々に変えていく。

まるで彼等の心が定まったことによって、本来の姿を取り戻していくように……

そして、道は開かれた

信じる心が道を開く（後書き）

子供達の情緒が不安定だったのは回廊の所為です。

歪な場所は心身共に影響を与えますので…

太一と空が回廊の餌食となりました、ファンの皆さんごめんなさい。

そして、いよいよ舞台が変わります。

ただ駆け抜ける

誰かが苛立つように舌打ちをした音が響いた

今まで、自らを封印したからというものの如何なる者も禁忌としていたこの位相の狭間に愚かにも干渉してきた輩がいる。

その輩とは別世界を異なる方法で守護する四体の究極体…… 四方をそれぞれの持ち場と定める聖獣型デジモン。

いつの頃からか“四聖獣”と呼ばれ始めた者達だ。

まさか自らを復活させた礎となっていた紋章を返還し、その上選ばれし子供を別世界に送り込むとは…… 予想外にも程がある。

内心酷く動揺しながらも、悠々と四聖獣が作り出した回廊を歩いていく子供達を、位相の狭間に封印されし者はずっと見ていた。

…… このまま行かせる訳にはいかぬ

多少でも時間稼ぎができればいいのだ。

そうすれば、後は他の者が何とかするだろう。

今はまだ準備の準備段階までしか計画が進んでいない。準備が終了するには、全てが揃わねばならない。

ならば、することは一つ。

ホメオスタシアに選ばれたとしても、所詮は子供。

容易く嵌ってくれるだろう。

クスリと小さく笑むと小さな光を作り出す。光は自分の意思を持っているかのように動けぬ作り主の代わりに回廊へと飛び込んでいく。それぞれの世界に存在する四聖獣によって成り立っているとはいえ、回廊を作り出している構造は単純明快であり、脆いものであった。

これならば、楽に惑わせることもできる。

暗い笑みを更に深くし、回廊へと光を通して介入する。

まずは子供達に進むべき道標として光の存在を知らしめる。熱心に

辺りを見回す勇気の少年は打って付けの存在だった。

光を見つけた少年は思ったとおり動いてくれた。それがまやかしかたと気付かずに、本来のルートから離れていく。

後は光に近付けないよう、空間をループさせてしまえばよい。

いずれ、子供達は歩みを止めるだろう。それが進み続けるの疲労なのか、それとも不安からなる負の感情によるのかまではわからない。面白い具合に子供達は不安に駆られ、疑心暗鬼に陥り、そのチームワークを乱していく。

いずれその歩みが止まるのは時間の問題だろうと思われた。

しかし、そんな不安に押しつぶされかけた子供達を救ったのは真の光。

ホメスタシアを降ろせる光の子供…… その言葉が負の感情に囚われかけた子供達の心を救う鍵となった。

押し寄せる紋章の光。

偽りの回廊は消え失せ、あまりの眩しさに目を背ける。

紋章の光が失せ始め、再度子供達の様子を探り見る。

子供達は回廊の出口近くまでその歩を進めていた…… おそらく

紋章の力だろう。

位相の狭間は歪みの世界。その歪みを僅かではあるが、正したことにより出口への道が切り開かれたのだ。

紋章の力さえ返還されていなければ、もう少し時間稼ぎはできただろうに……

身動き一つ取れない位相の狭間にて“ソレ”は忌々しく優麗な相貌を歪ませる。

されど、短い間ではあるが時間稼ぎはできた。

子供達は気付いていないようだが、既に現実世界では二日という時間が流れている。

欲を出せば、もう一日迷ってくればよかったが…… まあ、いいだろう。

既に“強欲”の策は動き出しているのだから……

ここはお手並み拝見といこう。

心に宿る紋章が姿を表し、不安定に揺らめくだけだった回廊は姿を変えていく。

目を開けていられない圧倒的な光の洪水の中で、自分達を取り巻く環境が変化していくのを感じ取っていた。

何がどう変わったかと言われれば、雰囲気が変わったとしか言いようがないだろう。

歪な形をしたものが少しずつ少しずつあるべき姿に戻っていく……

かなり抽象的な表現だが、本当にこのように感じるのだ。不安定だった回廊が安定感ある空間へと変化する。

役割を果たしたとでも主張するように、子供達の胸に輝いていた紋章は徐々にその光を薄れさせ、何も見えなくなつた。

微かに残る微熱だけが紋章は確かに此処にあるのだと教えてくれる。

「ヒカリ、お手柄だつたぞ」

「そんな事ないよ。思ったことを口に出してみただけだから」

すっかり元の調子を取り戻した太一がヒカリに微笑みかける。

いつもの兄の姿にほっとしつつ、褒められた事に照れたらしく顔を背ける。

その一連のヒカリの行動に表情を暗くする太一。

自分の感情が爆発していた所為もあり、顔を背けられ若干ショックを受けているようだ。

そんな兄妹の様子を微笑ましく見ていた丈が声をかける。

「みんな、見てくれ。きっと出口じゃないかな？」

「如何にもデジタルですって感じだなあ」

丈が指差す方向。

そこには何処かしらへ繋がるような光の穴が空いていた。

よく人が太陽の光を表現するために使うような四角い光が中心部に近付けば近づくほど小さくなっていく。

本来なら視覚的に捉えられない光の動きがそこにはハッキリと映し出されている。

おそらくこれが探し求めていた別世界への入口であり、この回廊の出口なのだ。

いざ、目の前にしてみると我知らずゴクリと生唾を飲みほどの緊張が全身を駆け抜ける。

「みんな、覚悟はできてるか？」

「勿論だよ、太一！ さあ、行こう！」

誰もが緊張に口をつぐむ中、太一が覚悟はできたかと問いかける。覚悟は大事だ。

どこへ行くにも、何をするにも。

覚悟がなければ、何もできないと言っても過言ではない。

その問いに真っ先に答えたのはアグモン。きつと大丈夫、心配ないさとも言いたげな真っ直ぐな瞳が太一に注がれる。

その声につき、次々とこの場にいる仲間達が言葉を発する。

「勿論、できてるわ。 そのためにここまで来たんですもの」

「そうだね、空。 あたし、頑張る！」

「ヒカリ… 何があっても守ってみせる。 だから、心配しないで」

「うん、信じてるよテイルモン」

「丈？ なんでここで覇気に満ちた言葉が出てこないかな？」

「ええ？ え… っと、ゴマモン！ 頑張ろう！」

誰もがパートナーと共に覚悟を新たにする中、ゴマモンに急かされ

た丈が出した言葉。

もつと他に何か言いようつてものがあるんじゃないか？ とでも言いたげな視線を四方八方から向けられる。

急かした張本人であるゴマモンもまた、ダメだこりゃと言った若干呆れを含んだ瞳を向けている。

頑張ろうの他に何かいい言葉ってあるの？ とでも言いたげな表情を見せる丈。

どこか締めまり過ぎていた場の空気が一気に和んだのはきつと、気のせいではない。

しかし… どうしてこうも気が抜けるのだろうか？

「おい、丈。 もう少しくうなんつーかさあ…… まあ、いいや」

「太一！ 途中で言葉を切らずにちゃんと最後まで言ってくれなきゃわからないよ」

「つまり、丈先輩はそのままですって意味ですよ」

「そうですよ。丈さんはそのままですって下さい」

「…… 何だか物凄く言葉を濁されたような気がするよ」

緊張感に包まれていた場の空気が一変。

どこか漫才のような雰囲気醸し出され、彼らの心には余裕が生まれる。

人間誰しも、心に余裕が必要だ。

極度の緊張は心身に影響を与えてしまうし、それどころか足を引っ張られてしまう場合もある。

最年長でありながら、大体のことを許容してくれる丈にみな甘えているのだ。

度を越したものはダメだが、今回程度のことなら大丈夫。

それはみんなも丈自身もわかってのこと。

一頻り、笑い合つと今度こそ出口であり入口である光に向き合つ。

「それじゃ、みんな！ 行こうぜ！」
「「「おう！」「」」

太一の合図でみな、それぞれ光へ足を踏み入れる。

踏み入れた先にあったものは0と1で構成されるデータが行き来する不思議な空間。

しかし、物珍しそうに観察する暇など彼等には用意されていなかった。

この空間へと入り、三步ほど進んだ次の瞬間：

子供達を襲ったのは真つ逆さまに落ちる落下感だった。

落下しながら子供達はいくつもの層を駆け足以上のスピードで降りていく。

突然のことに驚く悲鳴、悲鳴、悲鳴。

いつの間にも0と1から構成される層を抜けたのだろうか、子供達は一面の青が広がる空中に投げ出されていた。

ただ駆け抜ける（後書き）

駆け抜けてません。落下してしてます。

テイマーズ本編でもデジタルワールドへの道はいくつかのレイヤーを落ちながら抜けていったので本作品でもそうさせていただきました。

表現力の疎さがここでもいかなく発揮されているという罫……

誰か私に表現力をください。

たどり着いた世界

いくつかもの層を落下し続け、投げ出されたのは美しい青が広がる大空。

真っ先にその目に飛び込んできたのは、酷く乾き荒廃した砂漠のような地面だった。

そう地面……

今、子供達がいるのは地面より遙か上空の青空。

言うまでもないが、勿論重力あり。

層を抜けた事によって、若干和らいだ速度は重力の影響を受け、悪化する。

その速度とは無論、落下速度の事である。

「そっ……空っ！」

「ピヨモーション……！」

唯一人、この中で飛行能力を有するピヨモンが体制を立て直しつつパートナーの名を呼ぶ。

皆それぞれ体制を整えることもできないまま、重力に伴い落下していく。

自分の名を呼ぶピヨモンの声が聞こえたのか、懸命に首を動かしてその姿を捉えた空もまた名前を呼ぶ。

瞬間、デジヴァイスから溢れ出す進化の光。

ピヨモンを成熟期へと進化させるプログラムが飛び出し、その身のデータを上書きしていく。

「ピヨモン進化！ バードラモン！」

小さくか弱い姿から、雄大な炎の翼で大空を舞う巨鳥へと進化を遂

げる。

両翼を広げ、今なお落下してく子供達を助けるべく急降下。

難なく落下スピードを超越し、落ちる三人と二体の下へと移動を終え、その背を持って受け止める。

バードラモンの肉体は常に炎に包まれているが、心に邪念を持たない限り炎に燃やされることはない。

全身を覆う炎は柔らかなクッションのように子供達を受け止め、旋回しながらスピードを落とすにつつ地面へと着地する。

着地する際に生じた衝撃で砂漠を構成する砂塵が大量に巻き上がる。目に入られても困ると咄嗟に目を閉じた子供達だったが、数秒後恐る恐る瞳を開く。

一人ずつバードラモンの背から下り、地面に足が着くと共に礼を口々に言葉にする。

中でも空はバードラモンに抱きつきながら、お礼を言っているようだ。

「ありがとう、バードラモン。お陰で助かったわ」

「空達が無事ならよかった… この中で飛べるのは私だけだから」

その顔つきからは微笑んでいるようには見えないが、声音から微笑み心から安堵している事がわかる。

大多数のデジモン達は進化すると、見た目が巨大化し、表情の変化が乏しくなる。

故に声からその感情を読み取ることが必然、多くなってしまう。

しかし、長年パートナーシップを結んでいるだけあって、声だけでなく目やその身全体から感じられる僅かな変化から感情がわかるようになってきている。

今回もまた、声音だけでなくその身全体から今何を思っているのかを感じ取っているのだ。

よしよしと労うように口元を撫でられ、嬉しそうに一つ体を震わせ

る。

すると、唐突にバードラモンの巨体が光り輝き、進化のプログラムがデジヴァイスへと戻り退化する。

デジモンは進化すると余程のことがない限り、退化することなどありえない。

しかし、パートナーを持つデジモン達は別だ。

彼等は自力で進化するのではなく、子供達の心の力がデジヴァイスを通して貰い受け、進化するのだ。

そのため、通常の進化よりも体力消費が激しく、また子供達の心の力も永久的ではないため大体戦闘が終了するとともに退化してしまうのだ。

「ここが別世界のデジタルワールドかあ……」

見渡す限りの砂漠だな」

「本当だねえ。デジモン達の姿も見えないし……これからどうするの?」

「どうするって言ったってなあ……とりあえず、辺りを探索しちゃうわあああ……」

まず最初に動きを見せたのは勿論、太一。

お決まりの単眼鏡を取り出し、適当に周りを見回してみる。

見えるものとすれば、一面の砂漠と所々に点在する岩場くらいだろうか?

もう少し、細かく見れば何か見つかるかもしれないが、今のところデジモン達の影形すら見えない。

そんな太一のすぐ側でこちらも見回していたアグモンが問いかける。

デジモン達の姿が見えないということは戦闘の心配もない。

これからどうするのかと、尋ねるのはごく普通の考え方だろう。

単眼鏡から目を離し、ぼりぼりと頭をかく太一が次なる行動につい

ての指針を出そうとした瞬間、響いた悲鳴にも似た声。声の持ち主は丈。

彼もまた、太一同様辺りを見回していたらしい。

「みんな、上見て！ 上！」そう早口で言いつつ真上を見上げ、しきりに指を指している。

空に何があるっていうんだよ…… そう思いつつも尋常でない様子の丈に倣って全員が上を見上げる。

「なっ… なんだありゃ？」

「青い球体みたいだけど…… 何だろう、あのピンク色の光」

「ねえ、ちよつとあの辺りを見て！ 日本みたいに見えるわっ！」

「日本！？ どこだ？」

「あの辺りよ。 ほら、ここー！」

空に鎮座する青い色をした球体。

そこからは幾つものピンク色をした光の柱が無差別に動き回っている。

あんなものは自分達のデジタルワールドには存在しない。

ここがまさに別世界なのだと思わしめているように、球体はそこに当たり前のように鎮座する。

誰もが息を呑む中、空が一点を指差しながら叫んだ。

“日本みたいに見える”それが意味することは一つ… あの球体はリアルワールドを表しているということ。

太一が急いで単眼鏡でその場所を確認する。

あれがリアルワールドとなれば、大変な事になる。

彼等の常識からしてみれば、デジタルワールドからリアルワールドが見えるということは最悪の状態ということを意味する。

二つの世界の境界が揺らぎ、曖昧になっているという事を示すのだから。

「本当だ… 日本だ！ 日本だよ、アレ！」

「ということは、あれはリアルワールド！？ もうこの世界は七大魔王によって境界が歪み始めているという事か……」

早く、この世界の子供達を探さないと」

「みんな、落ち着きなさい。 ここで慌てていても仕方ないわ」

空が指し示した場所にあるのは確かに日本列島だった。

肉眼よりも遥かによく見える単眼鏡で見たのだから、間違いない。

あの球体はリアルワールドだ。

丈の言った通り、既にこの世界では七大魔王の影響が自分達の世界以上に進んでいるようだ。

早くこの世界にいるという子供達を見つけ、協力を得なければならぬ。

この場に来て、事の緊急性を再認識させられた。

焦る子供達とデジモン達。

焦燥感に駆られ、落ち着いて思案ができない状態に陥り始めている。早く見つけないと、大変なことになる。でも、どうしたらいい？

自分達は誰もその子供たちと面識もなければ顔も知らない。名前だつて知らないんだ。

そこへ待ったをかけたのはテイルモン。

「テイルモン… そうだな、俺達が焦ったらダメなんだ」

「一先ずみんな落ち着こう。 で、今後の事だけど…… 僕達は誰

もこの世界に対して知識を持ち合わせていない。

ここはこの世界の四聖獣に会うことにしないか？」

「四聖獣なら、子供達のことも知っているはずだわ！」

「お兄ちゃん、どうするの？」

その声を聞き、直ぐ様落ち着きを取り戻す子供達。

未だ、その心臓はバクバクと早鐘を打っているが、表面だけは落ち

着きを取り戻したようだ。

そこで丈が提案したのはこの世界の四聖獣に会うこと。きつと彼等なら今、この世界で何が起きているのか？ 子供達の名前や顔の特徴を知ることができるだろう。

太一が一つ頷き、その提案を実行しようとする瞬間、とてもものんきな幼い声が聞こえた。

「そこにいるのは誰ですか？ クル〜？」

たどり着いた世界（後書き）

ようやく別世界へと到着しました。

アドベンチャー側から見れば、デジタルワールドからリアルワールドが見えるというのは危機的状況であることを示します。

タイムズでは違うのですがね……

今の彼等には知る術がないわけですし、致し方ないです。

そんな子供達の前に現れる一体のデジモン。

はい、語尾でまるわかりですよ。

分断された者達

背後から唐突に聞こえた幼い声。

純粹無垢で邪悪さなど欠片も感じられない澄んだ声音だ。

殺気も敵意も感じられないことから敵ではないと思われるが、とにかく驚いた。

それだけ自分達が抜けていたのかそれとも、背後にいるデジモンが気配を消すのに長けているのか？

後者だとすれば、敵である可能性が高いと考えられる。

驚愕した感情をそのまま引きずり、勢い良く背後を振り返る。

「何だ、こいつ？」

そこにいたのは全長30センチ程度のよく見る幼年期サイズのデジモンだった。

全体的に白を基調とした体毛に覆われており、額には赤い三角を組み合わせたマークが存在する。

不思議そうに首を傾げながら、右の人差し指だと思われる指を口元に当てている。

悪意など欠片も存在しない純粹な翡翠の瞳が子供達を見つめる。

その様子からして敵とは考えられない。

もし敵だったとしても、容易く倒せるだろうと推測される。

「えっと… 君の名前はなんていうのかな？」

「くりゅー…」

丈が目線をそのデジモンに合わせるように膝を地面につきながら尋ねる。

が、返ってきた答えはとても意気消沈したような悲しげな声のみ。

おそらく言葉は解しているのだろうが、応える気は一切ないようだ。幼い子供がそうであるように、このデジモンも自分のことで手一杯なのだろう。

大きく開いていた耳だと思われる体の一部が感情に反応してか、小さく収納されていく。

ちよこんと立っていた岩場に座り込み、悲しげな瞳を向けてくる。女性である空やヒカリはこの視線に母性本能を刺激されたくらく、心配そうな視線を送る。

「どうしたの？ 何かあったの？」

「クルモン、みんなとはぐれちゃったくる…… ギルモンや啓人…… 樹莉に会いたいくる」

よしよしと優しく頭を撫でながら、尋ねてみる。

すると、白いデジモン…… 言葉からして名前はクルモンというのだろう。寂しげな表情のまま空とヒカリを見上げながら、ぼつりと咳いた。

どうやら誰かとはぐれてしまったらしい。それがこの寂しげな表情の理由だろう。

助けてあげたいと純粹に思う気持ち以上に、子供達が驚いたのは後半の言葉だ。

ギルモンとはデジモンの名前で間違いないだろう。だが、その後に続いた啓人と樹莉という言葉はおそらく人間の名前。

このクルモンというデジモンは人間と交流のあるデジモンもしくは誰かのパートナーである可能性が高い。

これは何の手掛かりもない現状において、極めて貴重な情報を持っていると見て間違いないだろう。

「その啓人や樹莉っていう子は君のパートナーなの？」

「違うくる。 啓人はギルモンでクルモンはパートナーじゃないで

「す」

ふるふると首を左右に大きく振ると、不意に立ち上がり熱弁する。感情の上下が激しいデジモンらしく、先程まで見せていた寂しげな表情がほとんど消えている。

小さな体で熱弁するその姿はとても可愛く映る。

その様子を微笑ましく見つめているとクルモンは何を思い立ったのか、唐突に太一達に背を向けると身軽な動きで岩場から飛び降りた。そしてそのまま小さな足を一生懸命動かし、どこかへ歩いていってしまう。

「逃げる…？ おーい、どこに行くんだー？」

「クルモンはギルモン達を探しに行きまーす」

「一人じゃ危ないよ？」

「危なくないです。くるっくるっ」

行動に一貫性がなく、何を考えているのか皆目見当もつかない。

逃げるという単語がふと頭の中を過ぎったが、それは違つと即座に否定する。

てくてくと歩き去っていく背中に向かって太一は声をかけた。

すると、クルモンは動きを止め体ごと太一達に向き直る。

愛らしい声をあげて、ついさっき会いたいと言っていたデジモンを探しに行くという。

どこまでも無邪気で後先何も考えていない能天気な返答にぽかんと口を開ける太一を余所に今度はヒカリが危ないよ、と注意を促す。

このまま行かせてしまうのは危険だ。

短すぎる対話の中であのクルモンというデジモンには、ほぼ攻撃できるような技を持っていない事を感じ取ったのだ。

しかし、案の定返ってきたのは能天気にもほどがある答え。

くるりと右足を軸にし、また背を向けたクルモンはまたてくてくと

歩き出す。

「なんか、危なっかしいデジモンだな」

「どうするの？ 太一」

「うーん… とりあえず、追いかけるか」

邪気な過ぎるというか、警戒心の欠片もないその後ろ姿に首をひねる。

なんとというか気が抜けた。

ここは別世界で緊張感を持って常に行動しなければならぬというのに、あのクルモンというデジモン対話し、完全に気が抜けてしまった。

自由奔放なそのペースに飲み込まれたと言っても過言ではないだろう。

完全に緊張感をなくしたアグモンが突っついてくるまで、少しばかり思考が停止していたようだ。

一度、気合を入れるように咳払いをすると自分と同じく緊張感をなくした仲間を見回して合意を得るような視線を向ける。

仲間達も半ば思考が停止していたようで、慌てた様子で了承する。

クルモンを追いかける…… そうと決まれば行動あるのみだ。

おそらく後をついて行けばギルモンというパートナーデジモンと会えるだろう。

そしてパートナーデジモンの側には選ばれし子供がいるはずだ。

走り出した太一とアグモン、その後を慌てて追いかけるヒカリとテイルモン。

やれやれとでも言うように肩をすくめて、目を合わせる空と丈。

二人のパートナーであるピヨモンとゴマモンは早くも先を行く二人と二体を追いかける。

が、すぐにその動きを止めて彼等が先行する方向とは違う方向へと視線を向けた。

何かを感じ取ったようで、その眼差しは真剣そのものだ。しかし、その言葉は普段通り。飄々としたものではあるが……

「なーんか、こっちに向かってきてないか？」

「えっ？ 本当。あのピンクの光って何なのかしら？」

首を傾げつつ、こちらに向かってくるピンクの光。

動きを止めた二体を不思議そうに思いつつも、空と丈もまたその視線の先を見る。

確かにこちらにピンクの光は向かってきている。

一体、あれはなんなのだろうか？

まだ遠いので問題はないと思うが、どこか気になる。リアルワールドから伸びてくる点といい、一体なんなんだ？

疑問を巡らせる二人に向かって、いつまで経っても追いかけてこない事に焦れた太一が声を上げる。

「おいっ！ 何してるんだよ？ 早く、行こうぜ！」

「うん、すぐ行くよ！ 太一達も待っているようだし、僕達も行こう」

「そうね。ピヨモン、行こう」

「はい、空」

のんきな雰囲気のまま、ゆっくりと移動を開始する二人と一体。

何故か動かないゴマモンが次の瞬間、慌てた様子で駆け出す。おそらく、自分が置いていかれていることに気付いたからだろう。

だが、その表情は自分を置いていった事に対して怒っているわけではなかった。

むしろ、酷く慌てているように見える。

「丈！ 空！ ピヨモン！ 早く！ ピンクの光が凄いスピードで

迫ってきた!」

「えっ!? うわっ、本当だ! 急ぐんだ二人とも!」

ゴマモンの言葉に即座に反応し、つい先ほど見ていたピンクの光を確認する。

確かにゴマモンの言うとおり。こちらに物凄いスピードで迫ってきている。

あれが何なのかわからない内は下手に触らないほうがいいだろう。

慌てた様子で空の背を押し、急ぐよう指示を出す。

しかし、彼等が駆け出そうとする頃には既に遅かったようだ。

声を上げていた太一は彼等に危険が迫ってきている事を察知し、直ぐ様彼等の下へ駆け寄ろうと走り出す。

しかし、それが間に合うことはなく、ピンクの光はあっという間に丈、空、ゴマモン、ピヨモンを飲み込み、掻き消える。

まるでそのためだけに存在していたというような鮮やかな消え具合。

「空ッ! 丈ッ!」

その姿を目前で目撃した太一はあまりの出来事に呆然と立ち尽くす。感情のまま叫んだ名は虚しく辺りに反響した……

分断された者達（後書き）

クルモンを書くのがとても楽しかったです。

テイマーズ世界では一ヶ所に留まるのは危険な行為です。

このピンクの光によって留姫が災難に巻き込まれていましたしね。
次回からは三つの視点を織り交ぜながら、進行していきます。

日常の終わり

少年が向かっている所とは、自宅から徒歩十数分ほどで到着する。1年前、デジタルワールドへの道が開いたがために埋め立てられてしまった思い出の場所。

体が大きいために家では一緒に暮らせなかったパートナーのために発見した木々でうまい具合に隠された秘密基地。

通称、“ギルモンホーム”

その名が示す通り、ここはギルモンが暮らしていた場所だ。

テリアモンのように小さくもなく、レナモンのように気配を消すことのできないギルモンのための場所。

周りは1年の歳月をかけ、時折手入れはしていたが、ものの見事に草があちらこちらから生えたい放題に生えまくっている。

「あー…、やっぱりもうちょっとやる時間増やさないとダメか」

困ったように頭を掻きながら、ギルモンホームの周囲を見て回る。

その頭にはティマーとなつてから付け始めたゴーグルはない。

元々、あのゴーグルはティマーとして自覚を持つという目的とギルモンに自分が君のティマー… パートナーであることを示すために付け始めたものだった。

あの日、ギルモンと別れてから数週間後の始業式から付けることをやめた。

いつまでも同じままではいられない。

ゴーグルを外したのもまた、自分の自覚を促すため。ティマーとしての自覚ではなく、大人へと成長しているという自覚。

きつといつか、必ず再会できると信じているからこそ、自分の成長を自覚したかった。

慣れ親しんだ感覚が消え、初めは違和感がつきまತ್ತたがすぐに慣

れた。
ギルモンと出会う前は付けてないことが普通だったので、まあ仕方ないだろう。

「集合時間までまだあるし、どうしようかな」

「啓人君」

「え？ あっ、ジエン。」

「どうしたの？ もしかしてジエンもギルモンホームを見に来たの？」

コンクリートの壁にもたれながら、近くの草をいくつか引っこ抜く。約束した集合時間まで後30分はある。

ここからあの公園までは5分とかからないので、急いで向かう必要もない。

かと言ってずっとこの場所にいるのも寂しいものがある。

さて、どうしようかなとぼんやりと考えているところへ、声がかけられた。

クラスは違えど、同じ学校の同級生であり、自分よりも早くテイマ―となっていた少年。

年の割には落ち着いており、とても頼りになる親友のような存在。彼の家はここから少し距離があるため、自転車で向かってきたようだ。

「まあ、そんなものかな。 啓人君も身に来てたんだろ？」

「うん。 久々にみんなが集まるから、ちょっと懐かしくなっちゃって……」

「行く前に見ていこうって思ってたね」

草を引っこ抜いた所為で汚れてしまった手の土をはらいながら、立ち上がり、自転車から降りてくる健良の下へ歩いていく。

そのまま特に何かを話す事なく、二人はギルモンホームを見つめる。コンクリートで入口を閉鎖され、一般の人は立ち入り禁止となってしまうが、人目を盗んではこうして見に来ることがある。

初めは名残惜しかったのか何度も通っていたのだが、その回数も梅雨を過ぎるとすくなっていた。

何かを考えることなく、ただぼんやりと見つめ続けていた中、啓人がぼつりと言葉をこぼした。

「僕達を送ったパケット… ギルモンやみんなに届いたかな」

「どうだろう… もしかしたらまだ届いてないかもしれないけど、僕は届いているような気がするな」

「ジエンも？ 実は僕も届いていると思ってたんだ」

今からおよそ2ヶ月前の冬休み中にも、今日のようにみんなが集まった日があった。

その時、送った音声メッセージ。

それぞれみんなが録音したメッセージをパケットとしてデジタルワールドへ送り出したのだ。

あれからギルモン達から返事が来たということはない。

もしかしたらまだ届いていないのかもしれない。

でも、啓人も健良もパケットはパートナーデジモン達に届いたと確証はなくとも、信じていた。

ただリアルワールドと違い、簡単に返事を出すことができないのだろうと予測している。

自分達が帰還する際も大勢の人の力を借りて、ようやく戻ってこれたのだ。

デジタルワールドから何かを送るといのは、境界が強固になってしまった今、とても難しいものだから……

この1年間、デジモンがリアライズするということもなかった。

「あんだ達、そこで何してるの？」

「留姫」

顔を見合わせて笑っているとまたまた声がかけられた。

どこか厳しいものを含みながらも、凜とした声音。

こんな話し方をする少女は彼女以外いない。二人は声の聞こえた方向へ体ごとを向ける。

そこにいたのはやはり、彼女だった。

今年のデジモンカード優勝者であり、デジモンクイーンというあだ名を持つ凄腕テイマー。

名前を留姫という。

まさかここにいるとは思わなかったという感情とやっぱりいたという感情が入り交じった微妙な表情を見せている。

「ギルモンホームを見てたんだ。留姫も、見に来たんだよね？」

「あたしはっ、たまたま近くに来たから寄っただけ」

笑顔で話しかける啓人とは対照的に、ふいと顔を背けつつそっけない返事を返す留姫。

彼女を知らない人がこの様子を見れば、なんて失礼な娘なんだと思うところだろうが、彼等は違う。

確かに最初は反発等もあったが、それでも交流を深め、苦楽を共にしてきた大切な仲間であり、友だ。

だからわかる。

留姫もまたギルモンホームを見に来たのだ。

しかし、それを素直に伝えられるような性格ではないためにこうした憎まれ口のような照れ隠しの言葉を吐いてしまっただけ。

啓人も健良も対して気にした様子も見せず、足を止めた留姫の下へ歩いていく。

「そういえば、二人とも中学の制服の採寸って終わった？」

実は僕、どこの店でしたらいいのかわからなくてまだしてないんだ」

「制服の採寸か… 実は僕もまだなんだ。留姫はもう済んだかい？」

「昨日してきた。お母さんが妙に張り切っちゃって大変だったわよ……」

当時の状況を思い出したのだろう。渋い顔をする留姫。

まあ、確かにあの母親ならば留姫のためを思って採寸に張り切ってくれる事間違いない。

簡単にその情景を思い描けた二人もまた苦笑いをする。

穏やかな時間が過ぎていく。

明日に対する不安も怯えも存在しない……それが当たり前のことだと思っている。

それがどれだけ幸せなことだとこの時の彼等は気付いていなかった。気付いていたのなら、もっとこの時を大切に扱っただろう。

あのデ・リーパーの一件から1年。

何事も起こらずに過ごせた日々が彼等の感覚を鈍らせていたのは間違いない。

だから、気付かなかった。

辺りを覆い尽くす微粒子の霧がその姿を完全に表すまで、悪意に満ちたしわがれた声が響くまで、

『揃っておるのお……』

何の前触れもなく響いた声。それは年を召した老人の声によく似ている。

そして気付く。

自分達は久方振りにデジタルフィールドの中にいるということに。辺り一面を覆い尽くす深い霧。

これはデジモンがリアライズする際、自身の体を擬似タンパク質に近づけることが発生するもの。

只の霧は水蒸気の塊であることに対して、この霧はデジモンがリアライズする際、ともに連れてくるデータが現れたものなのだ。

咄嗟に三人とも、常に身に付けているDアークと呼ばれるデジヴァイスを取り出す。

そして互いに背中を合せ、死角をなくしつつ警戒態勢に入る。

「……デジタルフィールド。みんな、気を付けて！」

「でもどうして急に？」

「そんな事、わからないわよ！ とにかく、ここはどう逃げるかを考えるの！」

警戒を強める三人をあざ笑うかのように響く嗤い声。

異様な雰囲気にかたい汗が流れ出す。

今、この場にパートナーデジモンはいない。

成長期レベルのデジモンならまだ大丈夫。しかし、成熟期よりも上だとすれば状況は絶望的。

留姫の言った通り、ここは何故現れたのを考える前にどう逃げ出すかを考えなければならぬ。

そのためにはまず相手を探し出すことが専決だ。

深い霧の中、懸命に目を凝らして当たりを伺い見る。

『命の心配をする必要はないぞ。』

『吾輩はお前達に興味が湧いておる………』

「何だつて？」

「姿も見せない奴の言うことなんて信じられると思う？」

「さつさと出てきなさいよ！」

『男よりも男らしい娘よのお。本来ならばもう少し、お前達を観察してからにしようと思っておったが……』

まあ、よかるう』

自分達を取り巻くように漂っていた気配が一点に集まり始める。黒いもやのような物体が周囲のあらゆるところから出現し、ゆらゆらと漂いながら上記の一点に集まり、姿形を形成していく。今まで感じたことのない異様な気配がついにその姿を現した。

日常の終わり（後書き）

ティマーズパートです。

ようやくティマーズ三人勢揃いです。

他の子供達も登場する予定ですが、メインはこの三人となります。

そこへ現れた敵、その正体はまだ謎です。

次は選ばれし子供達パートとなります。

夜中にもう一度更新できるかな…？

絶望を切り裂く

何が起こったのか全く理解できない。

ピンク色の光と接触したところまでは覚えている。太一が僕達の名前を叫んでいたことも。

さて、ここで問題になってくるのはここが何処なのかということ。見渡す限りの荒野だ。

しかし、先程までいた砂漠のような荒野ではない。

岩場が各所にあり、あの有名な観光地グランドキャニオンのようなところなのだ。

太一達は何処にいるのか？

ここはデジタルワールドなのか？

様々な疑問が頭を巡る中、一つだけわかったことがある。

あのピンクの光に触れると何処か別の場所へ飛ばされるということ。これ以上、訳の分からない場所へ飛ばされるのだけは避けなければならない。

先程の経験で目測により出した速度では、光の速さを見極めることは極めて困難だということもわかった。

目測で計算したために、まだ大丈夫だと根拠のない余裕を持ってしまった。

ここは自分達の知っているデジタルワールドではない。

何が起るのか予測もできない状況で余裕を見せてしまった自分達の過失だ。

「空君、大丈夫かい？」

「大丈夫だけど… 太一やヒカリちゃんとははぐれちゃったみたいね」

尻餅を抜いているところへ差し出された手。

その手を掴みながら一気に立ち上がり、お尻の土をはらう。辺りを見回しても太一やヒカリらしき人物は見当たらない。もちろん、アグモンやテイルモンもまた同様。

パートナーであるゴマモンやピヨモンと一緒にあるということが、せめての救いだ。

これでパートナーデジモンともはぐれてしまったとしたら、戦う術がなくなってしまうところだった。

「それでどうすんだ、丈。早くアグモン達と合流しないとヤバいぞ」「そうだな…… 早く合流したいのは山々だけど、ここが何処なのかわからないし。」

下手に動くと更に迷ってしまう可能性もある」

「丈先輩の言うとおり。下手に動いたら余計、合流できなくなるかもしれないし……」

着いて早々、まさかこんなことになるなんて」

「ねえ、空。デジヴァイスって確かみんなの居場所がわかる機能がついてなかった？」

それでも早々に合流しなければならぬことに変わりはない。

今、ここにいるメンバーでは七大魔王にはハッキリ言って対応することはできない。

多少の時間稼ぎ程度なら出来るかもしれないが、結果は変わらない。その結果とはすなわち敗北。悪ければ、死だ。

もしこの場にいるのが太一もしくはヒカリであれば、勝利には繋がらなくとも生き残ることだけはできるだろう。

それだけ完全体と究極体、天使型との歴然とした差が存在するのだ。悩む二人と二体の中、思い出したように顔を上げたピヨモンが爆弾を落とした。

あまりのハプニングによって、完全に忘れていた。

デジヴァイスには他のデジヴァイスの反応を拾う事ができる機能が

標準装備されているのだった。

その発言に目を丸くした丈と空は慌てて自分のデジヴァイスを取り出す。

「ピヨモン、ナイス！」

「この機能の事、すっかり忘れていたよ」

デジヴァイスを操作し、その機能を開始させる。

この場所から、南寄りにとても弱々しいが二つの反応が表示される。二人のいる場所の確認が取れ、一つ安堵の息を吐く。

何はともあれ、これで進むべき方向が確定した。二人は目を合わせると、デジヴァイスを見ながら反応のある方角へと足を進め始めた。

「それにしても… このデジタルワールドには緑がほとんどないのね」

「私達のデジタルワールドは緑でいっぱいだったもんね」

「やっぱり別世界だから構造そのものが僕達のところよりも違うのかも知れない。」

その証拠に変なピンク色をした塊がいたるところにある」

「触ってみただけど、特に何も起きなかったしね」

ころころと地面を転がる謎のピンク色をした丸い物体。

おそらく何らかのデータなのだろうが、ゴマモンが静止したものの止まらず触った結果、何も起きなかった。

触れた瞬間、電撃でも発生するのではないかと不安に思っていたため、あの時は本気で心配した。

しかし本当にこのデジタルワールドはわからない。

リアルワールドが見えていることはおそらく七大魔王の影響だと思われるが、それ以外の事だ。

あのピンク色の光といい、この丸い物体といい不可解なものが多過

ぎる。

一定の緊張感を保ちながら、軽く談笑しながら南へと歩を進め続ける。

しかし、こののんびりとした雰囲気は長くは続かなかった。

不意に感じた鋭い殺気……

まさか、七大魔王が？

バクバクと早鐘を打ち出す心臓を宥めるように深く呼吸をする。

お互い背中合せとなり、ピヨモンとゴマモンが身構える。いつでも進化し、攻撃できるようにと。

「だ……王は、こた？」

「丈先輩……！」

「わかってるよ、空君……」

地を這うような低い声の子供達のはるか上空から聞こえた。

声が響いた瞬間にいる場所をある程度、把握した子供達は上空をくまなく見回す。

赤い色をした何かが高速で移動しているのを捉えた。

体の大きさからしてデーモンではなさそうだ。

おそらくは七大魔王の手下。デジヴァイスを握り締め、その姿を目で追う。

高速で子供達の周りを旋回しながら、徐々にその距離を詰めてくる。そして、2メートルほどのところで唐突に動きを止め、手にしている鎌を振り上げる。

鬮體と化した顔に、頭をすっぽりと覆い隠すように被られた赤いマント。

肉体という概念はもはやなく、その胴体は背骨と思われる骨と肋骨のみで形成されている。

もはや足というものはなく、本来ならば骨盤があるべきところからは不気味な光が発生し、それが浮力となっているのだろう。

胸には剥き出しとなった赤く染まったデジコアが見える。

「魔 何処だ？ 魔王は… 何処だっ!？」

「メタルフロントモンだ!」

「空、気を付けて。アイツは完全体よ!」

「完全体!？」

両の腕を頭上に掲げ、両刃の鎌がパートナーデジモンを狙う。

紙一重で降りおろされた鎌を避け、刃が地面にめり込んでいる隙を
ついて一旦、距離を取る。

同時に二人のデジヴァイスが輝き、成熟期へと進化を果たす。

イツカクモンの頭上に生える一本角がミサイルとなって撃ち出され
る。

黒い角の空を破り、緑の砲撃が鎌を地面から引き抜き、追撃を放と
うとするメタルフロントモンに降り注ぐ。

しかし、そこは完全体。

降り注いだ数発のミサイルは軽く鎌を横風ぎに振るうことによって、
自身に当たる目前に誘爆させる。

カタカタと鳴る髑髏。

そこへ天高く舞い上がっていたバードラモンの火の粉が降り注ぐ。
広範囲に渡る幾つもの火の粉。されど、メタルフロントモンに慌て
た様子はない。

声もなく嗤い、火の粉の間を高速で移動し抜けていく。

あっという間にバードラモンの頭上に移動すると、今度こそ切り裂
こうと鎌を振り下ろす。

回避行動に移ったバードラモンだったが、少しばかり遅かったよう
だ。

風を切り裂く鋭い音を響かせながら、ギラつく刃が襲いかかった。

右の目元から顎にかけて切り裂かれる。鮮血を模したデータが飛び
散り、バードラモンは悲鳴を上げながら、バランスを失い墜落する。

「魔王は、何処だ？」

再び放たれたイツカクモンのミサイルをいともたやすく両断すると、
なおも問いかける。

“魔王は何処だ”メタルフロントモンが探す魔王とは十中八九、こ
の世界に封印されているという七大魔王の事だろう。

目玉そのものは回避したおかげで死守できたバードラモンが苦痛に
耐えながら、身を起こす。

相変わらず切り裂かれた部分からはデータが溢れ出しており、危険
な状態に変わらない。

「バードラモンッ！」

その姿を見た空が悲痛な声を上げると同時に、胸に宿る紋章がその
光を開放した。

デジヴァイスはその色を変え、進化の光を解き放つ。放たれた光は
紋章を通じて、更に輝きを増していく。

爆発的に上昇した進化の光を取り込んだバードラモンはその身を完
全体へと進化させていく。

肉体を包み込んでいた聖なる炎はその火力を増し、バードラモンの
全身を覆い尽くしていく。

次の瞬間、その炎を突き破るようして出現したのは鍛え抜かれた
二本の豪腕。

美しき金色の長髪を翻し、赤い羽毛に覆われた巨大な翼が唸りを上
げる。

『バードラモン、超進化！ ガルダモンッ！』

聖なる獣人は今、ここに降臨したのだ。

進化したことによって目元の傷は瞬時に癒え、力強い瞳がメタルフロントモンを射抜く。
髑髏故に表情がわからなくとも、現れた完全体に警戒を強めたようだ。

しかし、尚も問いかける“魔王はどこだ”と……

構え直した鎌からは異様な快音波が発せられる。人の耳には聞こえないほどの高い音だが、体の奥底、魂が悲鳴を上げている。

耳を抑え、恐怖に耐えるように上空を旋回するメタルフロントモンへ視線を向ける。

同格の存在であるガルダモンが両翼をはためかせ、空へ舞い上がる。右の豪腕を握り締め、風を切り裂き、拳を放つ。

放たれた拳は楽々避けられたが、豪腕によって生み出された衝撃波によって吹き飛ばされる。

肉体がなく骨のみで活動するために重みのない体は、舞い踊る枯葉のように宙を一回、二回と回転する。

体制が整っていない事を承知で、更なる追撃を仕掛ける。

体中の闘気を放出し、巨大な炎を身に纏う。

「シャドーウイングッ！」

身に纏った焰を一気に突き上げ、真空波を作り出す。

真空波は音速にも迫る勢いで放たれ、ようやく回転が止まったメタルフロントモンへ襲いかかる。

音速に近い速度で迫る巨大な鳥の形をした真空波。

避けることは不可能。瞬時にそれを理解したのか、メタルフロントモンは避ける動作一つせず鎌を振り上げる。

限りなく少ない時間の中、限界まで邪悪な力をエネルギー状の刃へ送り込む。

体と同等のサイズだった刃は邪悪な力によって膨れ上がり、その姿を巨大なものへと変貌させる。

それをそのまま目前まで迫ったシャドーウィングに向かって降り下ろす。

「ソウルプレデター」

聖なる炎を纏った真空波と邪悪な力の塊と化した刃が交わる。

凄まじい衝撃音と衝撃波が地面を抉り、辺りを吹き飛ばしていく。イツカクモンが子供達の背後へ周りその身を呈して踏みとどまらせる。

白とも黒とも取れぬ光が辺りを飲み込み、数秒後ようやく目を開けられる程まで落ち着きを取り戻す。

強烈な光に焼かれた瞳は完璧な像を結ぶことができずにいるが、戦いの場へ再度視線を向けたとき衝撃的な場面を目撃する事となった。衝撃的な場面とはメタルファントモンによって崩れ落ちるガルダモンの姿。

左肩から右腹部にかけて無残にも切り裂かれ、データを噴出させながら墜落する。

先程受けた目元への攻撃よりもはるかに深い。

その傷は表皮だけに留まらず、おそらくは内臓にまで達していると思われる。

落ちるガルダモンを目にした空はなりふり構わず、静止する丈の声も振り払い、無我夢中で走り出す。

既にメタルファントモンの事など頭から抜け落ちている。今、空にあるのはガルダモンの無事を確かめることだけ。

もう少し… もう少しで辿り着ける。

手を伸ばせば届きそうな距離まで迫ったその時、宙を漂っていたはずのメタルファントモンは空の目の前に現れた。

ニタリと笑んで、無情に降り下ろす狂気の鎌。

咄嗟に自らを庇うように両手を上げる。それで何かが変わるはずがなくとも、反射的に起こした行動。

悲鳴を噛み殺し、切り裂かれるその時を待つ。
しかし、いつまで待っても鋭利な刃がその身を切り裂くことはな
かった。

丈ではない凜とした男性の声が絶望を切り裂くように響く。

「サイバードラモンッ!!」

絶望を切り裂く(後書き)

ようやく姿を見せた完全体でしたが、空が絶体絶命のピンチに…
いくら完全体に進化できたとしても久々の感覚に体は瞬時になれま
せんから。

そこへ現れる意外？な助っ人！

デジモンの名前が出ているので、聡明な皆様ならお気づきでしょう。
彼です。

颯爽と爽やかに

空： 空が私の名前を叫んでいる
そんな心配そうな声を出さないで…… 私なら、大丈夫だよ

強大なエネルギーがぶつかりあったことで発生した強烈な光。

自分の意思とは無関係に瞳を守ろうと、目蓋を閉じたのが大きな隙をメタルフロントモンに与えてしまった。

生物として当然の反射運動。仕方ないと言えば、それまでだが、それでも相手から目を離してはならなかった。

メタルフロントモンはガルダモンと違い、光に焼かれるような目を持っていない。

その瞳は生物的なものではなく、どこまでも無機質なもの。

故に生物として本来起こすはずの瞳を守るために目を瞑るという反射運動は起きなかったのだ。

そこで明暗を分かれた。

次にガルダモンが目を開けた瞬間、飛び込んできたのは赤い刃。

避ける暇もなく、切り裂かれ血飛沫が舞うように飛び散る、刃の赤よりも鮮やかな血液データ。

声もなく悶絶し、バランスを失った巨体が苦痛にのぞけり、落下する。

うつすらと開いた瞳が駆け寄るパートナーの姿を捉えていた。それと同時に狂気の刃を振り上げるメタルフロントモンの姿もまた……

動かなくては…… 彼女を守るのは自分の役目。この力はそのためにあるのだ。

しかし、地面に激突した衝撃と刃によって穿たれた傷によって自由に動くことさえままならない。

降り下ろされる鎌。自らの身を庇うように挙げられた両腕。閉じられた瞳。

動けない我が身を呪うように両目を見開いたその時、黒い閃光がメタルファントモンを弾き飛ばした。

「えっ…?」

「空君！ 大丈夫かい？」

颯爽と現れた黒い装甲を身にまとったデジモン。

メタルファントモンを上回るスピードで一気に接近し、今まさに鎌を振りおろそうとした隙についての攻撃。

攻撃と言っても、両手の鋭利な爪で引き裂く訳ではなく、体全体を使ったタツクル。

あまりにも空とメタルファントモンの距離が近すぎたのも原因だろうが、その意力は絶大。

曇ったうめき声を上げながら、吹き飛ばすメタルファントモン。

体制が整っていないところへ更なる追い打ちをかけようと、接近する。

同時に右腕を引き、鋭利な爪を光らせながら接近する際のスピードに乗せて放つ。

しかし、鋭利な爪が引き裂いたのは赤いフード部分のみで今度はこちらの番だと言わんばかりに鎌が風を裂く。

横風ぎに抜かれた鎌を難なく回避し、一旦距離を取り咆哮を上げる。その間に呆然とする空へ駆け寄る丈。

震えが収まらない空を安心させるように肩に手を置き、二度三度と優しく叩く。

恐怖に震えている時、人は同じ人の肌を欲する傾向になる。

肩に置かれた手より感じる温かさにはうと一息つくくと、小さく謝りながら急ぎ足でなんとか上体を起こしたガルダモンへ近付く。

痛々しい傷口に顔を歪ませる。

「空、よかった…… 助けに行けなくて、ごめんね」

「うっん、いいの。ガルダモンが無事ならそれでいいから……」

自らの傷を顧みず、空のことを第一に考えるガルダモンの言葉に弱々しく首を左右になんども振ると、その体にすがりつく。

瞳から流れ出す涙は止まることを知らず、ただただ流れ続ける。

その涙は自分が救われた安堵からくるものでは決してない。そこにある感情はガルダモンが生きているという安堵のみ。

自らにすがりつき、震える空を宥めるようにガルダモンもまた自分は無事だと知らせるように体を揺り動かす。

丈とイツカクモンもまたその姿に安心を覚え、先程からメタルファントモンと激闘を繰り広げているデジモンへと視線を変える。

あのデジモンは一体、何者なんだ？　そして、先程聞こえた声の正体とは……

二体のデジモンが空中で繰り広げる戦いを見つめながら、素早く辺りを見回してみる。

そこへ更に響く先程の同じ声。

「スピードで攪乱させるんだ！　こっちに引き付けろっ！」

強い意思を感じさせる声。

適切な指示を飛ばしているところから、状況を冷静に判断している。場馴れしている……

この一言からその事を肌で感じ取る。先頭において冷静に状況を判断することは基本中の基本だ。

しかし、それを確実に実行出来る者は少ない。

何故ならば、戦況は刻一刻と変化するものであると同時に大体の者は戦闘によって生み出される空気に飲み込まれるからだ。

先の空のように。

丈が未だ自分を保ちながら、状況を冷静に判断しているのは先程の空の行動を見ているからだろっ。

いわゆる反面教師というものだ。

「丈！ あそこだっ！ 人間だよっ！」

「本当だ！ ということは… この世界の選ばれし子供なのか？」

戦況から完全には目を離さずに声の持ち主を探していたゴマモンがある場所を指差す。

そこには血色のいい顔色をした自分より年下と思われる少年が岩場に立っていた。

真剣な視線は激突する二体に向けられており、手には青い機械が握られている。

遠目ではあるが、行動力に溢れ、戦闘に対する心構えや余裕を感じさせる。

「サイバードラモン！ 接近戦を仕掛ける！ 奴の武器は接近戦に弱いっ！」

空と丈からある一定の距離を離れたことを確認したのだろう。

先程まで攻撃を回避することに集中させ、距離を引き離すことを目的としていた支持から一転。

接近戦へ持ち込むよう指示する。

メタルファントモンの武器は鎌… 鎌は中距離用の武器であり、懐に潜り込んでしまえばこちらのものだ。

しかし、そう簡単に懐にもぐり込めるはずも無く、再びあの超音波が発生する。

近距離で超音波を喰らった事によって、黒いデジモン… サイバードラモンの動きが僅かに鈍る。

そこへ間髪いれず、鎌が降り下ろされる。

唸り声を上げたサイバードラモンであったが、素早く両手をクロスさせ手甲部分で防いでみせる。

甲高い音が響きわたる。まさか、受け止められるとは思ってもなかったのだらう。

動きが止まるメタルファントモン。

クロスさせていた両腕を押し上げ、弾き飛ばすと瞬時に攻撃態勢へ入る。

「カードスラッシュ！ 攻撃プラグインV！」

右手を腰に下げているカードホルダーへ移動させ、一枚のカードを選び出す。

そのカードとは攻撃力を上げる補助プログラム。

すかさず左手に持っていた青い機械… このデジタルワールドに存在するデジヴァイス、Dアークへ滑らせる。

カードに含まれるプログラムが現出され、Dアークを通してサイバードラモンへと送られる。

これこそ、ティマーを得たデジモンだけが得られるロードとは異なる強化能力。

両腕の爪にエネルギーを集中させ、引き裂く相手の構成データを粉々に粉碎する破壊の衝動。

「イレイズクロー！」

振りかぶり、啞然と動きを止めてしまったメタルファントモンへと振り下ろす。

両サイドから襲いかかる破壊の衝動を蓄積したエネルギー波。

鋭く光る爪が確実にメタルファンとモンを引き裂いた。

両肩が粉碎され、鎌を握り締めていた両腕が量子として消えていく。それと同時に胴体部分も肋骨が守るように抱えていたデジコアごと引き裂かれ、断末魔の声ならぬ悲鳴を残して分解されていく。

またたく間に赤いデータの粒子となったメタルファントモンは直ぐ

様、青い粒子に変換されて吸収されていく。

残されるデータは一欠片とて存在しない。

このデジタルワールドの姿であり、強者だけが生き残り弱者はその餌となる。

メタルフロントモンのデータをロードし終えたサイバードラモンはゆらりと少年のすぐ近くへ降り立つ。

顔を見合わせ、一つ少年が頷くとサイバードラモンは少年を抱えて飛び立つ。

砂塵が舞い上がり、丈とイツカクモンの目の前へ着陸する。

「見ない顔だけど… 大丈夫だったかい？」

「あ、ああ。お陰様で助かったよ、ありがとう。」

「ところで君達は… 一体？」

「俺かい？ 俺は遼、秋山遼。」

そしてコイツは俺のパートナー、サイバードラモンだ。君達は？」

爽やかに白い歯を覗かせながら笑顔を見せる遼。

戦いを終えた後だというのに、戦いの余韻に浸るところか興奮も何も感じられない。

戦い慣れている… そう感じた丈の感覚に間違いはなかった。

颯爽と爽やかに（後書き）

秋山遼、参上です。

ようやく、キャラ同士が接触しました。

パワーバランス的にですが、アドベンチャー側よりもテイマーズ側のパートナーデジモンの方が戦闘力は高めです。

まず、相手に対し容赦がなく、数々のデジモンをロードしているためです。

この辺りは世界観の差ですね。

シナリオなき前座

自分たちを追いかけていたはずの空と丈、ピヨモンとゴマモンが一瞬の内に消えた。

リアルワールドから伸びるピンクの光。

何らかの意味があると思ってはいたが、まさかこのような事態を引き起こすなど思ってもいなかった。

あまりの出来事に走り出すこともできず、咄嗟に大声で叫ぶだけで精一杯だった。

太一が上げた大声に驚いたのだろう、今まで我が道を突き進んでいたクルモンもまた首を傾げてこちらを向き、立ち止まっている。

「空！ 丈！ 近くにいるなら、返事をしてくれっ！」

「ピヨモン！ ゴマモン！」

震える足を必死に動かし、先程まで彼等がいた場所まで移動する。

そこには何も残されていない。

何か一つでも手がかりになるようなものがないかどうか、必死に目を凝らしながら探す。

見渡す限りの砂漠…… 見晴らしはいいはずなのに、彼等の姿を捉えることはできない。

おそらくはもうこの近くにはいないのだろう。

まさか到着早々、このような自体に出くわす事になるとは……

自らの不甲斐なさに苛立ち、両手を強く握りしめる。

自分を責めているのだと簡単に見てわかる。クルモンのすぐ近くにいたはずのヒカリがすぐ後ろに移動したことも気付かないほどに動揺もしている。

何と言葉をかけたらいいのだろう？

悩むヒカリとテイルモン。二人とも、こんな状態の太一を見るのは

初めてではないにしろ、なんと言葉をかけてよいのかわからないよ
うだ。

アグモンもまた然り。

ここにいるのがヒカリではなく、丈ならばある程度のフォローを入
れることもできただろう。

丈はこのメンバーの中で唯一、太一よりも年上で持ち前の誠実さか
らフォローに回ることが多々あるからだ。

誰もが口をつぐむ中、状況がよくわかっていないクルモンがテクテ
クと太一まで近付いていく。

「元気出すクル。

クルモンもアレに飲み込まれて、ギルモン達とはぐれちゃったけ
ど無事クル！」

「そう、だな。俺がいつまでもしょげてちゃ仕方ないもんな。

ありがとう、えっと… クルモン」

今まで縮んでいた耳と思われる部分が出会った当初と同じように開
き、空中を浮遊しながら落ち込む太一の頭をぽんぽんと叩く。

大きな翡翠の瞳が様子を伺うように、じいつと見つめている。

そう、クルモンもまたピンクの光に飲み込まれたがために、行動を
共にしていたギルモン達とはぐれてしまったのだ。

おそらくクルモンが光に飲み込まれたのを目撃したギルモン達もま
た、今の太一達動揺心配しているのだろう。

それを感じ取ったクルモンだからこそ、太一に励ましの言葉を言う
ことができたのだ。

そこにあるのは、自分は君のことを心配しているよ、という気持ち
だけ。

自分の不甲斐なさを疎んでいた太一だったが、まさかクルモンに慰
められるとは思ってもなかったのだろう。

驚きつつも、平時の自分を取り戻す。

まあ、取り戻すと言っても内心はまだ不甲斐なさでいっぱいなのだろうけど。

「クルモンもまた、光に飲み込まれていた……」

おそらく、あの光は触れた者を別のエリアへ連れて行ってしまうのだろう。ヒカリ、デジヴァイスに彼等の反応は？」

「他のエリアに連れて行かれるだけなら…… デジヴァイスに反応が拾えるかもしれない」

頭の上に着陸したクルモンと困りながらも楽しげに格闘している太一を他所に、テイルモンが冷静にピンクの光について推測する。

飲み込まれた事で空達は消えた。つまり、触れなければ何も怒らない無害なものなのだろう。

そして、先程のクルモンの言葉。

クルモン自身も光に飲み込まれたことでギルモンというデジモン達とはぐれたと言っていた。

そこから推測されることは一つ。

あの光に飲み込まれることによって引き起こされる現象とは、今いるエリアから別のエリアへ無差別に飛ばされるということ。

テイルモンの指摘に慌ててD・3を取り出し、飛ばされた二人の持つデジヴァイスの反応を探る。

反応は割とすぐに割り出せた。

「ヒカリ、どの方向だ？」

「すごく弱いけど…… あっちの方よ、お兄ちゃん」

すっかり太一の頭上を気に入ったのかクルモンはそこを定位置にした模様。

中々離れようとしないクルモンに根負けしたのか、太一はもう頭から降ろそうとはしていない。

その体の小ささからしてさほど重量はないのだろう。苦しそうな表情は見えない。

頭上に居座るクルモンに少々驚きつつ、普段の自分を取り戻した兄の姿に安堵したヒカリはD-3が指し示す方向を指差す。

空達もまたデジヴァイスの反応を頼りに動き始めたのだろう。

少しずつではあるが、こちらへと向かってきていることがわかる。なら、するべきことは一つ。自分達も移動を開始し、彼等と合流を目指す。

幸運にも彼等もまた、自分達と合流するために移動を開始している。お互いが歩み寄っているのなら、早く合流できることだろう。

そう判断し、太一が移動しようと言葉を発しようとしたその瞬間、声が響いた。

悪意に満ちた重い声が……

『よもや、デジエンテレケイアと接触しているとは思わなんだ……
流星は選ばれし子供と言うべきかのお？』

「…… アゲモン」

「OK、太一」

飄々としているものの、底知れぬ悪意に満ち足りている。

感心している風情も滲ませながらも、そこにあるのは余裕と予想外のことに對する喜びのような歪んだ感情。

言葉には出しているものの、選ばれし子供そのものにはさほど興味はないようだ。

四方八方から感じ取る気配……一瞬にして、取り込まれてしまったようだ。

一定の緊張感を胸に抱いていたはずだが、それをこつもあつさりとは突破された。

言葉から滲み出る悪意からして味方なはずがない。

警戒心を強め、小声でアゲモンの名前を呼ぶ。

即座に太一の言いたいことを把握したアグモンは一つ頷くと、一步前に出る。

その様子を確認したテイルモンもまた一步前に出ようとしたところが、無言の太一に静止させられる。

目が語りかける。『ヒカリとクルモンを頼む』と……

依然として敵の姿が見えない今、戦う術を持つ二体ともが前に出るのはまずい。

進もうとした足を止め、逆に一步下がる。

「姿を見せたらどうなんだ？」

『ふおふお… 先の者と同じで血気盛んじゃのう。』

そう焦ることもあるまい。これはちよっとした前座よ』

気配は相変わらず、周囲を取り囲んでいる。

だが、肝心の姿が見えない。

不気味なまでに鮮明に聞こえる声だけが手掛かりだというのに、辺りに反響しているためそこから居場所を特定することは難しい。

攻撃が放たれば、居場所を特定することはできる。

しかし、それではダメだ。戦闘とは常に先制攻撃を決めたものが圧倒的に有利なのだから……

敵もそのことを充分、理解しているのだろう。

安易に姿は見せないどころか、攻撃を仕掛けてくる様子もない。

長時間の緊張は感覚を鈍らせ、心身ともに疲労する。それを狙っているのだとすれば、相当な策士だ。

現時点でどちらが有利なのか等、戦闘に詳しくない者にだって容易にわかる。

「太一、落ち着いて。これ以上、相手の策に乗ってはならない。

乗ってしまえば、見えるものも見えなくなる」

「ああ… もちろんわかってるさ。」

おい、前座ってどういう意味だ？ 何を企んでいる」
『何、大掛かりな宴の前に少し選ばれし子供とも遊んでやろうと思
うてな……』

今にも取っつかかりそうな勢いを醸し出している太一やアグモンを
咎めるようなテイルモンの声。

ヒカリとクルモンを守るため、その場から動けない彼女にできる唯
一のこと。

言葉を持って、感情のまま動き出そうとしている太一を止め、戦況
を見極めること。

一目では、落ち着いているように見える太一だが、長年の付き合いさ
ほど落ち着いていない事が手に取るようにわかる。

天真爛漫なクルモンとの交流で、多少はなりを潜めていた怒りが再
び最熱し始めているようだ。

無理もない。

先程から全ての現象に対して後手に回ってしまったている。

この状況下もまた、話しかけられるまで気付けなかったという点よ
り、後手に回っていると言えよう。

状況が錯交しているにも関わらず、得ている情報があまりにも少な
すぎる。

ここに光子郎がいれば、また違う結果が出たかもしれないが、今と
なってはどうしようもない。

別世界へ繋がる回廊を通過している最中からどうも、感情の動きを
制御しきれていない。

まだ子供だから感情を完全に制御することなどできるはずもないが、
それにしても限度がある。

いつもなら、まだ冷静に判断していられる状況であったとしてもす
ぐに感情が高ぶってしまう……

テイルモンの指摘を受けて、自分を落ち着かせるように一つ深い深
呼吸を行う。

今の自分はいつもの自分ではない。
落ち着かなければ… テイルモンの言うとおり、見えるものも見えなくなる。
深呼吸をし終え、今一度気持ち新たにしつつ、未だ姿を見せない敵に向かい、質問を投げかける。
返答はないかもしれない。
それでも何か得られれば、それは情報となり自分達のためになる。
今にも食ってかかりそうだった雰囲気は鎮火したことに、感心したのだろうか少々感嘆が入り交じった声音が返ってくる。

“大掛かりな宴”

それが何を意味するか？

今の状況ではわからない。

しかし、子供達にとって良いものとは到底思えない。

その後、続いた言葉からしてこれは単なる時間稼ぎだろう。

そうとわかれば、これ以上姿を見せない輩に付き合う暇はない。

ここは一足でも早く、空や丈と合流し、この世界の選ばれし子供の協力を仰ぎ、七大魔王の封印を死守しなければ。

おそらく、この敵の目的は自分達を足止めた上で封印を解くつもりなのだろう。

そうはさせない。

決意を新たに、ベルトに付けているデジヴァイスに手を伸ばす。

ここはアグモンを体格の比較的大きいグレイモンへ進化させ、砂漠の砂を用いてとっとと退散してしまおう。

戦うよりそちらの方が余程、効率的だ。

考えはまとまった。後は実行するのみ……

しかし、この考えが実行されることはなかった。

デジヴァイスを握り締め、いざ進化をさせようとした間際の言葉。

子供達には既に退散するという選択肢は与えられていないという事

を痛感させられたのだ。

H23・10・15 加筆修正

シナリオなき前座（後書き）

太一とヒカリパートです。

時間軸としては選ばれし子供達は同時刻で行動を起こしていますが、リアルワールドのティマーズ組とは明らかな時差が生じています。

次回更新は少し遅くなります。

詳しくは活動報告をご覧ください。

卑劣なる戯れ（前書き）

前話、『シナリオなき前座』の後半部分を大幅に加筆修正しました。そこから話が繋がっていますので、どうかご容赦ください。

卑劣なる戯れ

『ふおふお、逃げるような無粋な真似はせん方がよいて。

「この世界の子供を救いたくばな」

「ッ！ どういう意味だ……？」

お前の考えていることなど手に取るようにわかるとでも言いたげな
声音。

先程の感嘆が含まれていたものとは異なり、これは嘲りに満ちたも
の神経を逆なでする部類のものだ。

自身の力に対する絶対的な自信と余裕。

成熟していない子供の策などあつてないようなものだとも思つて
いるようなそんな感情が含まれている。

気付かれないように動いていたはずなのに、簡単に見破られた。

その事実に一瞬、動揺してしまつたが、すぐにその動揺を隠すよう
に飲み込む。

ここ数分のやり取りでわかつた。

この相手の上等手段は自分の身を隠しつつ、相手の同様を誘い、そ
の際に付け入ることだろう。

感情に身を任せがちな子供ではまるで相手にならない。

だからこそ、いつの以上の忍耐と冷静さが必要なのだ。自分が揺れ
ないためにも。

しかし、そんな太一の思いもまた簡単に打ち砕かれた。

既に相手は子供達の目的の一つである、この世界の選ばれし子供に
その魔の手を伸ばしていたのだ。

おそらく、相手は自分達がこの世界に何の目的があつて訪れたかそ
の理由を知っている。

『何、単なる戯れよ。』

折角、選ばれし子供達がわざわざ次元の回廊を通ってまで別世界まで来るのだ… これは楽しまなければ損というものじゃろ？

遊戯は至極単純。どちらが早く、この世界のパートナーデジモンを見つめるか… これだけよ。

最も、拒めばこの世界の子供諸共、パートナーデジモンにも死んでもらう』

もはや、子供達に拒むという選択肢はない。

子供達の目的は何度も言うが、七大魔王の封印の死守とこの世界の選ばれし子供に協力を取り付けること。

その目的の一つである子供たちとそのパートナーデジモンの命が関わってくるというのならば、断るわけにはいかない。

後手に回るところか、相手のいいように弄ばれている。

それだけ、相手は子供達の情報を手に入れ、それを下に綿密な計画を練っていたのだろう。

「太一、どうするの？ このままだと、この世界の子供達とデジモン達が…」

「どの道、私達に選択肢等与えられていない。答えは決まっている

… そうでしよう、ヒカリ」

「悔しいけどその通りだね。 お兄ちゃん、どうするの？」

「……………クソッ。 わかった、お前のいう遊びに付き合っでやる！
でも、遊びっでいうのは対等な条件でやるもんだぜ！」

アグモンを筆頭に誰もが太一の決断を待っている。

答えは既に決まっている。

子供達を… デジモン達を見殺しになんかできない。 できるはずがない。

掌の上でいいように踊らされている事に憤りを感じつつ、相手の策に乗ることを了承する。

しかし、タダで乗るわけにはいかない。
今のままでは圧倒的に子供達の方が不利。ならば、少しでも遊びに
参加する者の条件を等しくしなければ。
相手は策士ではあるが、先程の会話から楽しみたいという思いを抱
いている。
全てではないにしろ、多少は情報を提供してくれるだろう。その方
が、より長く面白く楽しめるのだから。

『元より、そのつもりよ……』

この戯れ… 吾輩は一切参加せずにお主等と同じくパートナーデ
ジモンの顔も名も知らぬ部下を使う。

更に… 手掛かりとしてコイツを渡しておこうかの『

なんの前触れも無く、太一達の前に黒い粒子が集まり金色の縁どりが
施された白い機械が現れる。

重力と共に落下しようとしたソレを危なげなく掴み取る。

丁度、自分達の持つデジヴァイスと同じくらいの大きさの機械。

片側の側面には何かを通すためと思われる隙間が存在し、画面には
矢印のようなものがくるくると回っている。

どうやら、これがパートナーデジモンを探す手がかりとなるらしい。
おそらく参加させるといふ部下も同じものを持っているのだろう。

元より、お互いを同じ条件下に置き、どうなるか高みの見物と洒落
込む算段だったようだ。

周囲を漂っていた気配は唐突に途切れ、既に何も感じられない。
ゲームスタートという事なのだろう。

「ふざけやがって……」

ヒカリ、空と丈のDターミナルに連絡を入れてくれ。合流する前
に早くこの遊びとやらを終わらせる」

「うん… わかった。ちょっと待って」

敵に渡された機械を覗きながら、そう指示を出す。
おそらくこの矢印の方向にパートナーデジモンがいるのだろう。様々な方向に機械を向け、矢印が安定する箇所を探す。

声から身を隠すようにヒカリの腕の中にいたクルモンが、抜け出してくる。

メールを打つためにDターミナルを取り出そうとした間をくぐり抜けたようだ。

そのまま機械を片手に体ごと、方向を変えている太一の頭へ飛び乗る。

瞳を輝かせ、今度は頭から腕へ飛び降りると耳を広げ宙に浮く。

「啓人のだくる〜」

「啓人？」

「クルモン、その機械を知ってるの？」

「うん」

とても嬉しそうに首を縦に降る。

出会った当初に聞いた啓人という名前が再度、この口から発される。小さな指で何度ももつつきながら、懐かしさからかその瞳を嬉しそうに輝かせている。

クルモンにとってこの機械はほぼ1年ぶりに見るものだ。

啓人を筆頭に、パートナーデジモンを持つ子供達が必ず持ち合わせているもの。

人とデジモンとの絆の象徴でもあるそれは、

「もしかして、その機械って…… 私達のものとは形も全然違っけど、」

「デジヴァイス」

黒いもやが一転に凝縮し、現れた一体のデジモン。
体調の半分以上はあるかと思われる髭を顎から伸ばし、煌びやかな
装飾を施されたローブを身に纏う。

背には灼熱を思わせる赤い蝙蝠のような羽が三対生え、これまた長
い白銀の髪が風に揺れる。

金色をした仮面で口以外の箇所を覆い隠し、耳や手の色からして体
色は灰色とわかる。

鋭い爪を生やした指先には豪勢な宝石の指輪がはめられており、そ
の腕には黄金でできていると思われる腕輪が……

とにかくお金がかかっているような装飾品の数々が光り輝いている。
左手には長い杖を所有し、先の方に付いている頭蓋骨の口の中には
禍々しい気配を放つ紅い宝玉が。

「一体、何なのよ！ アンタはっ！」

「ふおおお、そうカリカリするものではないぞ。」

「少しぐらい肩の力を抜いたほうが疲れぬぞ、ほれ力を抜かんか」

おそらくこれでも抑えられているだろう濃厚な闇の気配に心がくじ
けそうになりながらも、弱さを見せることを嫌う留姫が吼える。

啓人や健良もまた、萎えそうになる気持ち奮い立たせながら真正
面から視線をぶつける。

が、そのような子供達の懸命な姿が実に滑稽とでも言つような態度
を取るこのデジモン。

おそらく、今まで戦ってきたデジモンの中でも一位、二位を争う力
量を持っていることは間違いない。

下手をすれば、あの四聖獣すら超えているようにも感じられる。

「僕達に興味があると言っていたが… 一体、何が目的だ！」

「そつだよ。名前くらい教えてもいいじゃないか！」

「中々勇ましい事のお、流星は四聖獣にも立ち向かったとでも言うべきか……」

吾輩はバルバモン。この名をよよく覚えておくがいい、今後のためにもの」

自分達はパートナーデジモンを持っている事以外は何の変哲もない子供だ。

相手の興味とは十中八九、デジモンについてだろうと推測されるが、それが全てではない。

恐怖に震えながらも、挑む姿勢を失わない三人により一層興味を惹かれたのだろうか、実に楽しそうな声音だ。

未だ目的を明かそうとはしないが、名前だけは名乗る。

この場にパートナーがいれば、直ぐ様Dアークで情報を知ることができるというのに……

数々のメディア展開がされている中、こんなデジモンは見たことも聞いたこともない。

だが、雰囲気からしておそらくはウィルス種の究極体。

これは逃げるどころの話ではない。

「そう震える事もあるまい。命の奪うという事はせんわい……まあ、今はだかの。」

全ては時期に現れる選ばれし子供達次第というところか」

「選ばれし子供……？」

「知る必要はないことよ……」

お前達は吾輩のため、少々手を貸してくればよい」

選ばれし子供達……聞き慣れない言葉に首を傾げる三人。

どうやらその言葉が意味する存在が何かをしない限りは殺されるといふ心配はなさそつだ。

それでも、危険が去ったわけではない。

そして放たれた手を貸すという言葉。勿論、手を貸すつもりなど毛頭ない。

しかし、この状況からしておそらくは強制的に手を貸す事となってしまうのだろうか……

どうすれば、この状況を打開できるのか全く予想も立たない。

三人が一步、距離をとるように後退する。

「わざわざ、この老体が出てきたのじゃ……

逃げんでくれ」

無意識にとった行動が、バルバモンの琴線に当たってしまったらしい。

今までの醸し出されていた余裕が瞬時になりを潜め、赤い瞳が三人を見据える。

放たれた殺気にも似た波動。

恐怖に氷つき、動きを止めた三人を包み込んだのは冷たい闇だった

……

卑劣なる戯れ（後書き）

強欲のバルバモンが遂にその姿を現しました。

策士として悪名高い存在ですので、とにかく余裕ある振る舞いを心がけました。

時間軸に狂いがあるのでは…？と感じられる方もいらっしゃると思いますので少し補足を…

太一達が回廊に入り込む　ティマーズとバルバモンが接触　太一達別世界へ到着

という時間を辿っております。わかりにくくてすいません。

また、何が疑問に思うことがあれば、遠慮なくおっしゃってください。

できる限り、正確に答えたいと思います。

懐かしい香り

何も知らないままなら

あの頃と同じように、共に歩めたのだろうか……？

地面に顔を近付け、鼻を鳴らしながらふんふんと何らかの臭いを辿っているように見える赤い恐竜型のデジモン。

そのすぐ近くには長い耳を持った姿形がよく似ている二体のデジモンもまた、何かを探しているように辺りを見て回っている。

驚くべきは共通の意思を持ち、集団行動をしているところだろう。

本来ならば、デジモン同士が出逢えばその力を奪うため戦うのが常であるこのデジタルワールドにおいて別種同士が共生するなど有り得ない。

しかし、現実として彼等はお互いに仲間意識を持ち、協力し合って生きている。

「ギルモン、クルモンの臭いつてあつたあ？」

「ん… ない」

「そっかあ。クルモン、何処まで飛ばされたんだろう？ レナモンもちよつと前から、どっか行っちゃうし」

長い耳を持ったデジモンの内、額に一本の角を持つデジモンがのんびりとした口調で問いかける。

どこか緊張感の抜ける声音だが、そこにはクルモンを案じる心を端々に感じることができる。

ギルモンと呼ばれた赤い恐竜型デジモンはもう一度、鼻をひくつかせると一つ頭を振る。

犬並みの嗅覚を持つギルモンだが、ピンクの柱に飲み込まれ、ここ

とは異なる階層に飛ばされてしまったクルモンの臭いは流石にわからないらしい。

その言葉にガツクリと肩を落とした一本角のデジモン。クルモンがピンクの柱に飲まれてから、早三日……

ずっと探し続けているが、未だに見つかる気配すらない。

「いずれ必ず見つかる。そう、気を落とすな」

「モーマンタイ……」

脱力してしまったデジモンを慰めるように、まるで双子のようによく似た姿をしたデジモンが声をかける。

その額には三本の角。色は茶色を基調としており、緑を基調としている一本角のデジモンとは様々な点で違いが存在する。

元々、生まれも育ちも全く異なるため彼等を知れば知るほどのその差異は顕著となっていく。

慰められ、多少は元気が出たのか身軽な動きで鼻をひくつかせているギルモンの下まで向かう。

いつもなら、こちら側まで無邪気な様子で駆け寄ってくるのに今日は来ない。

疑問に思っていたところ、ギルモンは唐突に頭上を見上げ、更に匂いを嗅ぎ分けるように鼻を鳴らす。

「ギルモン、どうしたのさ？」

「啓人…… 啓人の臭いがしたような気がした」

「ええ？ 啓人！？」

それはおよそ1年ぶりに感じた臭いだった。

自分が生まれてからずっと傍にあった臭い…… 自分を生み出した創造主であり、大切な友達であり、ティマーでもあるとても大切な存在。

つい1ヶ月前くらいに届いた音声メッセージ。

久々に聞いたその声に喜んだのと同時に、自分達からは何もできないことに酷く落ち込んだ。

“会いたい”そう、言ってくれたティマー達。

それはデジモンだって同じだ。

いつかもう一度、会えたらいい…。いや、きっと必ず再開してみせる。そう思いながら過ごしてきた。

もし、ギルモンが捉えた臭いが本当に啓人のものだったらきっと他のティマー達もいるのではないか？

若干の期待が胸に過ぎる。

「うん、あっちの方！」

「あっち？ って、ギルモンちょっと待って！ クルモンがまだ見つかってないんだよー」

目的ができれば一目散に行ってしまうギルモン。

そういえば、啓人がいた時でさえその制止を振り切って本能のまま行動していたな…。そう、思い出し頭を抱える。

最近ではそういうことも少なくなってきたが、やはりそう簡単には治らないようだ。

しかし、それも致し方ないだろう。

何せ、気のせいかもしれないほど微弱ではあるが、確かに自分のティマーの臭いを嗅ぎとったのだから気が逸るのも無理はない。

完全に置いて行かれた二体のデジモンは顔を見合わせると、一息を吐き、後ろ髪引かれる思いを感じながらもギルモンを追いかけることに。

リアルワールドから降り注がれるデータの塊である、あのピンク色の柱。

それに触れれば最後、このデジタルワールドを構成するいずれかの階層、または別の場所へと飛ばされる。

何処に飛ばされるかは完全にランダムで予想を立てることすらできない。

一日目はテイマーを持つデジモン達、全員で近くを搜索していたが、見つからず創作範囲を広げるために二組かに分かれることにした。分け方は単純明快。飛べる者と飛べない者で一先ず分かれることにしたのだが、二日目の創作時に一体のデジモンが途中で離脱した。その一体のデジモンというのが先の会話で少し出たレナモンだ。

何かを見つけたのかもしくは感じたのかはわからないが、『すぐに戻る』と言って一人で行ってしまった。

元々、単独行動の多いデジモンであり、単体での戦闘力はこの中でもトップクラス。

そう簡単には倒されるということはないだろう。

二組に別れてからというものの、こうした単独行動に歯止めがかからなくなっているのは何故だろうか？

しばらく悩んでいた一本角のデジモンだったが、小さく「モウマンタイ」と呟くと耳を広げギルモンの後を追いかける。

砂を蹴り上げ、小さな足跡が転々と続いてく。

この後、彼等は出会うことになる

自分達の他にもテイマーを持つデジモン達と……

懐かしい香り（後書き）

ティマーズデジモンパートです。

時間軸的には太一達がバルバモンとの接触直後です。

パートナーデジモンメインは初めてだったので、少々時間がかかりました。

彼等には早くティマー達と再開を果たして欲しいです。

異世界コミュニケーション

岩場が密集している中、合間を抜けるように歩く六つの影。

先頭に行くのは黒き装甲を身に纏うデジモン、サイバードラモンとそのテイマー秋山遼。

その後ろには並んで歩く丈と空、さらにその後ろにはピヨモンとゴマモンが背後を固めている。

しばらくデジタルワールドに来ていなかったとはいえ、この中で地理をほぼ完全に把握している遼とサイバードラモンが先頭に行くのは当然だろう。

また、先程の戦いからして戦闘能力も高い。

戦闘が終わるとほぼ100%の確立で退化してしまう自分達のパートナーとは違い、サイバードラモンは完全体を維持している点から見ても歴然とした差が確認できる。

現在、彼等は分かれてしまった太一達との合流を目指して移動しているところだ。

さほど目的というものがなかったらしく、遼は率先して案内を申し出てくれた事により、迷うことなく進めている。

もちろん、デジヴァイスの反応が有力な手掛かりとなっている。

「秋山君が案内してくれて本当に助かったよ。

僕達だけじゃきつとデジヴァイスの反応だけを頼りに迷うことになっただろうからね」

「ええ、本当に助かるわ。でも、よかったの？」

秋山君もデジタルワールドでしたい事があったから、来ていたのよね」

「ん？ いや、特に何かしたい事があったから来た訳じゃないんだ。

ただ、サイバードラモンに会いたくてね… 偶然、デジタルワールドへのゲートが近所に開いていたから来ちゃったって感じさ」

どこまでも爽やかに受け答えをする遼。

困ったように白い歯を見せながら、照れ笑いするところから邪気は感じられない。

それにしても丈達にとって、彼と会えたことは本当に助かった。

出会って早々、メタルフロントモンから助けてもらい、今はこうしてデジタルワールドの案内をもらっている。

慣れた様子からして、相当この世界についても知っているはずだ。

光子郎が入れば、きつと質問の嵐に翻弄されていることだろう。

ほのぼのとした空気の中、交流を深めていく一行。

デジヴァイスの反応は相変わらず変化がない。

「近所に開いていたからって… 遼のデジヴァイスにはゲートを開ける力はないのか？」

「そんな力はないなあ… って、君達のデジヴァイスはゲートを開けるのかい!？」

「私達のこのデジヴァイスにはないんだけど、一緒に来たヒカリちゃんって女の子が持つデジヴァイス… D-3って呼んでいるものにはそういう力があるのよ」

近所に開いたため飛び込んだ… あまりにも短絡的な理由に啞然となりながらもゴマモンがマイペースに質問する。

遼の持つデジヴァイスは丈や空の持つデジヴァイスやD-3ともまた違う形をしている。

なら、自分達のものにはない機能を持ち合わせいるはずだ。先程のカードを読み取った機能と同様に。

しかし、先程の言葉からしてゲートを開くような力はないように見える。

だが、D-3というデジヴァイスが存在する以上、もしかしたらあるのかも… ふと自然に思い浮かんだ疑問。

勘が鋭いのか、ゴマモンの言葉からゲートを開く力のあるデジヴァイスの存在を感じ取ったのか驚いた表情で振り返る。

その反応からして、彼のもつデジヴァイスにはゲートを開く力はないようだ。

だとすれば、あまりにも無謀なのではないか？

パートナーが強いためにさほど命を危険にさらすような事はないだろうが、リアルワールドにいつ帰れるのかわからないなど不安にはならないのだろうか。

そう、内心で思いながらも驚く彼の疑問を解消するための答えを示す。

感心した風情で何度も首を縦に振る遼。そこへ苦笑いをしていた丈が話の流れを変えるように一言。

「そういえば、秋山君はあのリアルワールドから出ているピンクの光について何か知っているかい？

あの光に触れた所為で僕等は仲間と別れてしまったんだ」

「ピンクの光？ ああ、情報の柱の事だね。」

あれに触れるとこのデジタルワールドのいずれかの階層にランダムに飛ばされてしまうんだ。気をつけるに越したことはないよ」

「という事は、あの光は昔からあったってことなの？」

「そうさ。あのピンクの光はね、リアルワールドから流される情報の流れみたいなものだ。」

それに、君達の世界の事はよくわからないけど…… こっちはデジタルワールドからリアルワールドが見えることは当たり前だからね」

そう言い切ると楽しそうに笑う。

遼からしてみても、別世界から来た自分と同じパートナーデジモンを持つ存在はとも興味深いものらしい。

勿論、この別世界には遼意外にもパートナーを持つ子供は存在する。

しかし、事が別世界となれば話は別だ。

以前： 遼がまだ小学生の頃、一度だけこのデジタルワールドとは違う場所で年下の男の子と一緒に冒険したことがある。

その事を思い出したのだろう。どこか昔を懐かしむような目をふとした瞬間に見せるのは。

だが、そんな遼の変化など今の空と丈は気付かなかったようだ。

先程遼が口にした、“デジタルワールドからリアルワールドが見えるのは当たり前”という言葉に酷く衝撃を受けたらしい。

それもそうだろう。

彼等からしてみれば、見えないことが当たり前だったのだから。

もし互いの世界が見えるようになれば、それは世界に危機が最終段階まで進んでいる事を示しているに相違ない。

おそらく遼自身に他意はないのだろう。よかれと思って言ったことに違いない。

明確に示された互いの世界の違いに愕然とする二人と二体を尻目に、唐突に唸り声を出し始めたサイバードラモンに視線を動かす。

「ウウウ……………」

「どうした、サイバードラモン」

「強い… 強者の気配を感じた…… が、すぐに消えてしまった…」

「サイバードラモン、今はダメだぞ」

唐突に雰囲気を変えた遼とサイバードラモンに現実に戻されたらしく、視線を向けるが異様な雰囲気に足を止める。

頻りに喉の奥で唸り声を上げながら、闘争本能をむき出しにするサイバードラモンに対し多少の恐怖を感じたのも関係あるだろう。

遼自身もまたパートナーの変化に即座に気付き、デジヴァイスを右手に持ち、いつでも止めることのできる準備を整える。

闘争本能を剥き出しにした今のサイバードラモンは危険だ。何をし

でかすかわかったもんじやない。

今は口で静止するだけに留めているが、独断行動に移るつもりなら即座に拘束するつもりでいる。

まさに一触即発の状況。

この状況に慣れている遼意外の者が無意識に息を呑む。

一体、何が始まるうとしているのかが全くわからず、ただ様子を伺うことしかできない。

数十秒ほど経った後、強者の気配を完全に感じ取れなくなったのかサイバードラモンが唸ることをやめる。

ほっと息をつく遼の姿。彼等の間柄は自分達のものとは違うことをマジマジと見せつけられた。

別世界なのだからテイマーとパートナーの関係が異なるのも理解はできる。

どうやら、自分達が考えている以上にこの世界は複雑なものなのかもしれない……

「驚かせてすまない。

サイバードラモンは強い奴と戦うことが生き甲斐なんだ。だから、強者の気配を察知すると……こう闘争本能が剥き出しになってしまうってね」

「……そうなのか。ああ、別に謝らなくても大丈夫だよ。少し驚いただけだからね。」

「そうそう。デジモンにだって色んな奴がいるからね」

まるで敵と対峙しているような真剣な雰囲気醸し出していた遼とサイバードラモン。

落ち着きを取り戻したことを確認すると、足を止めている彼等の方へ向き直り、軽く頭を下げる。

おそらく怖がらせてしまったことに対する謝罪だろう。

その姿に慌てて左右に首を振ると、フォーローの言葉を入れる丈とゴ

マモン。

デジモンにだって様々な種類がいて、それぞれ個性を持っている。強者と戦いたがるデジモンがいても不思議ではない。

彼等の醸し出す雰囲気には圧されてしまい、少々恐怖を感じてしまっただがそれは仕方ない。

別に好き好んでしたわけではないのだから。

丈達の言葉を聞き、もう一度謝罪の言葉を口にしながら顔を上げる。そんな男子組の姿を微笑ましく見ていた空がふと、自分のポケットに入っているDターミナルのバイブに気付く。

おそらくは太一達からだろう。

メタルフロントモンとの戦い等ですっかりDターミナルの存在を忘れていたが、こちらからも無事だとメールを送らなければ… そう考えながらDターミナルを開く。

慣れた手つきでメールボックスを開き、ヒカリから届いたメールの本文に目を通す。

そこに書かれている事に啞然とする。

「丈先輩！ 秋山君！ 太一達の方で、大変な事が起こっているみたい！」

「えっ？」

慌てた様子で二人の間に突っ込む空。

そこには余裕を感じられない。酷く慌てていることが口調とその態度からありありとわかる。

驚く一同に自分の持っているDターミナルのメールを読ませる。

すると、若干空の勢いに押されがちだった表情が一変。

特に遼の表情は暗く、思いもの変わる。

「“この世界のパートナーデジモンに危険が迫っている” だって？ 留姫達のパートナーの事か！ 不味いぞ… 今の彼等は進化する

「ことができない…っ！」

「太一達は先行して探すみたいだね」

「私達も、探しましょう？ 秋山君なら名前や特徴を知っているんじゃない？」

パートナーデジモンは多少の例外はあるにしろ、通常はテイマーがいなければ進化することはできない。

つまり、今この広大なデジタルワールドにいる留姫達のパートナーは進化することは疎か、自分たちに危険が迫っていることさえも知らない。

これは非情に危険な状況だ。

すぐにでも探し出し、危険が迫っていることを伝えなければならぬ。

最も、そのことがわかつているはずの遼が出した答えはパートナーデジモンを探し出すというものではなかった。

「いや、俺達はこのまま君達の仲間と合流することを最優先としよう」

異世界コミュニケーション(後書き)

交流って大切だと思います。

こういうほのほのシーンは書きやすくもいいですね。

さて、いよいよ事態が加速していきます。

次かその次くらいに、どちらかの組がギルモン達と接触します。

第二章、これでやっと半分くらい書けました。

今月で終われそうかな…？

幕間：退屈が終わる時

故意に空間を歪ませ、生み出した穴の前に影はいた

つい先刻、覚醒したばかりだというのに行動が早いものだ

邪悪な意思の下、穴は貪欲に注ぎ込まれる力を吸収し、肥大化していく

その様子に満足そうに一つ頷くと、ニタリと仮面に隠されていない口元を歪ませる

そこへ響く何処かしら侮蔑と興味が入り混ざった女性特有の高い声音

『随分と楽しそうねえ』

長い灰色の表皮に包まれた耳がピクリと動く

何をしに来たかなど最初から分かりきってはいるが、気分を害された事には変わらない

しかし、そんな感情を表に出すような存在でもないため、平静を保つたまま声のした方向へ顔を向ける

そこにいたのは紫の衣を纏った絶世の美女、色欲の魔王だった

色っぽく腕を組みながら、体制を斜めに崩しながら漆黒の闇の中から現れる

『楽しいに決まっておろうが。』

ようやく永きに渡った封印が解け、自由に欲のままに動けるのだから。そういうお主もまた楽しげではないか』

『これから始まる事を考えれば、当たり前じゃない。』

今生の選ばれし子供も中々、可愛い子供が多いようだし…… 今から、楽しみで仕方ないわあ』

今から始まる宴に既に酔っているのだろうか、うっとりとした表情

を見せる

金の籠手で覆われた指先を口元に当て、恍惚と瞳を輝かせる
その様子をたつぷりとした長く白い髭を弄びながら、無感情な瞳で
見つめる

相変わらず変わりのない様子に辟易しているようにも見える

形成していた異世界へと続く穴は既に完成したようで、ゆらゆらと
蠢いているように見える

まるで全てを呑み込むような不気味な雰囲気醸し出しているが、
それを気にするような者はここには欠片も存在しない

『そういえば… 傲慢が伝えてきたのだけど、子供達がついさつき
異世界へ向けて出発したそうよ』

『ほう。もう少し、慎重に動くかと思っていたが… どうやら当て
が外れたのお』

不意に恍惚とした表情を消し、思い出したように言葉を口にする美女
当初の目的はコレを伝えに来たのだ

ほぼ完成に近付いていたゲートとどこか年甲斐もなく、はしゃいで
いる様子の老賢者に気を取られ忘れていた

いけないいけないと思っではいるが、どうしてもその場の勢いに乗
ってしまいがちな一面が美女には存在する

だが、それが隙や弱点となる場合は限りなく低い

何故なら、美女はソレ等を自覚しており、あえて直さず残している
のだ

その方が楽しいから

片や、美女の報告を受けた老賢者は自分の読みが外れた事に若干の
苛立ちを含ませながらも、冷静に分析する

どうやら、今生の選ばれし子供は割と楽観的な思考を持つ者が多い
ようだ

前回と同じような面子を想像していた老賢者にとって、これは想定

外と言つてもいいだろう
だが、だからこそ戦略の幅が広がるというもの

『趣旨を変えてみるのもまた、一興……』

『あら、策を変えちゃうの？ わらわは楽しめれば何だって構わな
いけど』

『なあに、もう少し直接的な事をしようと思っただけよ。』

そちらの方が、今生の子供達も楽しめるといふものじゃろうて。
ふおふお』

ぽつりと呟いた一言

別に誰かに聞いて欲しくて呟いたわけではない
唯の独り言だ

しかし、計らずもその言葉は美女の耳に聞こえていたようだ
まあ、さほど距離もなく美女の聴力なら楽に拾える音量だったこと
も会い合つての事

聞かれて困ることでもないの、首を傾げる美女に軽く説明する
楽観的思考を持っているのならば、直接的な策を用いて翻弄し、自
身の無力さを思い知らせばいい

そちらの方が、断然面白みもあり、また屈辱を与えられるだろう
選ばれし子供といつても無力な人間風情がデジタルワールドを守る
とは片腹痛い

善意を振りかざし、自分は間違っていないと何の迷いもなく信じて
いる姿など反吐がでる

だからこそ、どん底まで落ちてもらうのだ

我等が味わった千…… 否、万の苦しみの一欠片でも味わえるように

『ふうん…… 貴方がやる気満々だなんて、早々ある事じゃないわあ。
お手並み拝見といこうかしら？』

『好きにせえと言いたいところじゃが、自分のすべき事はするのだ

ぞ？』

『わかってるわよ、そんな事。

でも、貴方はいいわよね……子供達と直接遊べるんだから、わらわは完全裏方よ？』

愛らしく頬を含まらせる美女

そう、彼女は老賢者と違い、子供達の目の前に現れることなく、徹しなければならぬことがある

ソレが成功したとき、彼等の目的はまた一步前進するのだ

むしろ、老賢者のすべきことよりも美女がしなければならぬことの方が、彼等にとって重要な意味がある

『そう言うでない。計画からすれば、お主の行うことの方が重要なのだぞ』

『それはそうだけど、やっぱり感情っていうのがあるから納得できないのよねえ……』

やっと封印から解放されたんだから、楽しまないと損じゃない』

そう、楽しまなければ損ではないか

重要な意味を持つ仕事でもなんでも、楽しまなければその時間は無為と言っても過言ではない

美女の目的は自身が楽しみつつ、自らの欲を満たすこと

子供達と“遊ぶ”ことは自身の欲を満たすことにも、楽しむことにも繋がるのだから

如何に重要で今後必要となる要素を含んでいるとはいえ、直接相対することのほうが楽しいに決まっている

『されど、この策が成功すればお主とて表で遊べるじゃろつて……』

所詮、今回の件は今後のための予行演習にすぎん。楽しみは後にとって置くのも一興じゃぞ、色欲よ』

『ふうん。そうね、そういう考え方なら納得できるわ。
それじゃあ、さっさと終わらせちゃいませよ。わらわの楽しみ
のため、そして……』

開かれた異界への穴を見つめる

その先には未だ封印されている同胞の姿がありありと浮かぶ
もうすぐ……

もうすぐで永く退屈な時間が終わる……

幕間：退屈が終わる時（後書き）

魔王パートです、はい。

時間軸的には本文で出た通り、太一達が回廊を通っている最中です。この後、老賢者と美女は別世界へと侵入します。

以下、語録説明

老賢者⇨バルバモン

本来は二文字で表現したかったのですが、老人や玄人とは何か違う気がしたので三文字になりました。

近づく赤

金色の縁どりが施されているデジヴァイスと思われる機械が指し示す方向へと、歩を進める太一達。

無論、空や丈の事を忘れたわけではない。

本当は直ぐにでも彼等を探しに飛び出したい……しかし、そうすることで自分達がこの世界へ来る事となった目的の一つが消されなるとも限らない。

彼等なら大丈夫だ。

パートナーが究極体に進化はできずとも、数々の戦いを共に切り抜けてきた大切な仲間だ。

心配していないと言えば、嘘になる。だが、それ以上に太一も光もそしてパートナーであるアグモン、テイルモンは彼等を信じていた。必ずや、自分達と合流を果たしてくれると……仲間だからこそ、真摯に信じられるのだ。

太一を先頭に黙々と進み続ける。

赤い矢印が画面上でクルクルと回りながら、進むべき道筋を示してくれる。

おそらくこれは自分達のデジヴァイスで言うと、相手の位置を知る機能と同等のプログラムなのだろう。

矢印が方向を指し示すだけで、どれだけの距離があるのかなど全くわからない。

だからこそ、しわがれた声を持つデジモンはコレを渡したのだろう。

「それにしても……さっきのデジモンは何者だったんだろうな」

ただ黙々と画面に表示される矢印を見続けながら、歩いていた太一がぼつりと呟く。

そう、この場にいる誰もが気にかかっていたあの声の正体。

感じた威圧感からして、並のデジモンではないだろう。

おそらくは七大魔王の一体もしくはそれに順ずる者… 究極体クラスなのは疑いようがない。

誰もが沈んだ表情で考え込む中、クルモンだけは太一の手握られている機械を懐かしげにそしてどこか寂しげに見つめている。

それもそうだろう。

この機械を手にした時、クルモンは“啓人のもの”と発言していたのだから。

子供が持つ機械の中で、パートナーデジモンの居場所を示すようなものは一つしかない。

それこそがデジヴァイス。

形は全く異なるが、コレがこの世界のデジヴァイスなのだろう。

そして、このデジヴァイスの本来の持ち主はクルモンの言う啓人という名前からして、男の子のものだと推測される。

人とデジモンを繋ぐ絆の象徴のようなものでもあるデジヴァイスを、そう簡単に手放すとはどうしても思えない。

既にこのデジヴァイスの持ち主である啓人という子供はあの声に囚われている… おそらくは他の子供達も同様に… そう、考えるのが妥当だろう。

今の子供達にできる唯一の事は、命を狙われているこの世界のパートナーデジモンを最初に見つけ、その身柄を保護すること。

保護すれば、きっとあの声はもう一度子供達の目の前に現れる。

その時こそ、囚われているはずの啓人等、この世界の選ばれし子供を救出できる唯一のチャンスだろう。

このゲームが終わるまで、あの声は現れない。

「私達の目的を知っていたということとは… 多分、七大魔王の關係者なのは間違いないと思うけど……」

「どうして、私達の動きを知っていたのかしら？」

「もしかしたら、私達の動きを監視している者がいるのかもしれない」

い……

「いずれにしても、注意深く行動するよう心がけるしかない」

自分達が予想していた以上に敵の行動は早かった。その事に驚きが隠せない。

何故、敵は自分達の動きを事前に察知できたのだろうか？

この世界に現れることは四聖獣からの情報でわかっていた……

もしかして、七大魔王にも情報を提供してくれる存在がいるのではないか？

その存在が自分達の動きを調べ、事前に七大魔王に知らせているのではないのだろうか。

あの日……自分たちの目の前に今一度現れたデーモンとその仲間であるリヴァイアモンから感じた圧倒的な戦闘力。

その力に恐れをなして協力するデジモンがいたとしても不思議ではない。

デビモンと筆頭に自分達が戦ってきた暗黒を故郷とするデジモン達は例外なく、部下を率いていた。

よくよく思い出してみれば、あのデーモンが現実世界に現れた際も部下を率いてきたではないか……！

例えば長年封印されていたとしても、部下など楽に作れるのだろう。勿論、そこにあるのは力による隷属と支配。心からの忠誠などなき

に等しい烏合の衆。

先の声が言っていた部下というのも七大魔王の力に恐れをなして、隷属している者に違いはない。

だからと言って、手加減してもいいのかと言えばそうではないと応えるしかない。

何故なら、恐怖で押さえつけられているということはその恐怖の象徴たる存在が消えなければ開放されることなどないのだから。

「……ねえ、太一。あっちの方に見えるあの赤いのなんだろう

？ こつちに近付いてきてるみたいだけど」

「赤いの？ 赤いのってなんだよ、アグモン」

不意にアグモンが矢印の示す方向へ指を指しながら、声を上げる。どうやら何かを見たようだ。

色だけしか識別できなかったらしく、とても抽象的な表現に首をひねる太一が単眼鏡をのぞき込む。

確かに、アグモンの言うとおり赤い色をした何かが砂漠の彼方より、ゆらゆらと左右に揺れながらこちらに向かってくるのが見える。

距離がそれなりにあるためか全貌を把握することはできない。

ただ、ここがデジタルワールドという所からして向かってくる赤い何かは十中八九、デジモンだろう。

自分達同様にこの世界のパートナーデジモンを探している敵ではないと思うが、先程の件もある。

すぐにでも動けるようにアグモンとテイルモンが一步前に出て先行する。

「くるっ」

「どっしたの？」

そんな中、ヒカリの腕に抱かれていたクルモンが片耳をピクリと動かし、身じろぎする。

声が退いた後も震えていたところを見かねたヒカリがずっと腕に抱えていたのだ。

確かに底知れぬ悪意に満ちた声は不気味だった。

闇の力をより敏感に感じ取ってしまうヒカリもまた、何かにすがりつきたい気分だったのだろう。

震えるクルモンを見かねたという部分が大いにあるが、それと同じくらいヒカリも怯えてしまっていた。

だからこそ、お互い身を近付けることによってその恐ろしさを軽減

しようとしたのだ。

一人で抱え込めないものでも他人と共有することができれば、とても心強いものとなるから。

あの声が去ってからでも大人しく抱かれていたクルモンが唐突に反応を示したのだ。

小さな手足をバタつかせ、ヒカリの腕から脱出する。

そのまま耳を広げ、アグモンが指さした方向を見つめたまま滞空する。

「あーれはもしかして、もしかするです」

「わっ！ クルモン、前に行っちゃ危ないよっ！」

自分の中で整理がつき、答えが見つかったのか、滞空しながら警戒するアグモン達の目に飛び出る。

まさか自分達の前に飛び出してくるとは思っていなかったのだろう。アグモンが驚いた声を上げると同時に、テイルモンが一つ呆れの混じった息をつく、軽快な動きで飛び上がる。

まるで風船のようにふよふよと滞空していたクルモンを難なく捕まえると、そのまま空中で一回転をし、音も無く地面に着地する。

捕まえられた事に抵抗するようにクルモンが手足をバタつかせるが、そう簡単にテイルモンからは逃げられない。

逆に抱え込まれて、動きを制限されてしまう。

「何するんですか」

「相手の正体がわからない内は無闇やたらに動いては危険よ。

ここはもう少し様子を見ましよう、わかるでしょ？」

どうして捕まえられたのかわからないらしく、疑問に満ちた瞳を向けてくるクルモンに対し、テイルモンは静かに言葉を紡ぐ。

クルモンの突拍子のない行動には既に慣れ始めたらしく、自分のペ

「入を崩さず案じるような感情を言葉の端々に織り交ぜながら語りかける。

そんなテイルモンの言葉が届いたのか、シユンと耳を引っ込めながら懇願するような瞳を向ける。

「でも、クルモン。あつちに行きたいんでくる」

以前にもこのような事をされ、この言葉を発した事があった。

あの時とは押さえ込まれている相手も自分が立たされている立ち位置も全く異なるが、どちらにも共通している事がひとつある。

それはこれ以上進むことは危険だということ。

勿論、クルモンにもわかっている。

あの時はデジモンを消去してしまうプログラムデータ、デ・リーパーに向かおうとした所を止められた。

今回は先程の恐ろしい声を聞いた直後の事であるからだ。

危険度としては上記の方が遥かに高いが、それをテイルモンが知る由もない。

小さく首を横に振られ、その要求は却下される。

「まあまあ、クルモン。」

あつちには俺達も向かうんだ、一緒に行こうぜ」

「急がなくても、逃げたりしないわ。だから、ね？」

「わかつたくる。クルモン、急ぐの我慢するクル」

シユンと落ち込んでしまったクルモンを元気づけるように二人が優しく声をかける。

そう、矢印が指し示す方向はクルモンが行きたがっている方向と一致する。

遅かれ早かれ、向かう予定なのだ。

ここは独断行動させずに共に向かうほうが安全であり、確実だろう。

自分を案じての行動だとクルモンも理解している。
ティルモンの腕の中で自分を見つめる彼等の瞳を見上げながら、一
つ頷く。

自己中心的で自分勝手と見られがちなクルモンだが、実は他人が自
分に対して抱いている気持ちをしつかりと理解できる頭は持っている。
る。

だが、どうしても自分のこととなると何処かしら他人事で掴み所を
見いだせない。

自分の命を多少評価しているわけではない。ただ、よくある思考の
罫に嵌っているだけ。

自分だけは大丈夫という過信という罫に。

ティルモンの腕からヒカリの腕へと移動したクルモンは身を乗り出
しながら、瞳を自分が行きたがった方向へ向けている。

「それじゃ、気を取り直して進むか！」

「おう！」

自分達がこうして立ち止まっている間に、赤い色をした何かは確実に
に近付いてきている。

今はまだその全貌を掴めないほどに距離は離れているが、すぐにそ
の全貌を掴めるところまで進むだろう。

その時、何が起こるかなんてわからない。

ただ、今は進む先にいる存在が敵ではじゃないことを祈るばかりだ。

近づく赤（後書き）

ユニークが5000を超えました。

これも、暖かく見守って下さる皆様の御陰です。

ありがとうございます。

今後とも、よろしくお願い致します。

さて、今回は太一組パートです。

まだ彼等はクルモン意外のテイマーズ組と対面していません。

遼と出会った空や丈と違い、この世界に対する知識はなきに等しいです。

次回は戦闘シーンが入る予定です。

少し、更新が遅れるかもしれないので、お願い致します。

案じる思いと信じる心

「どうして？ 秋山君は狙われているデジモン達が心配じゃないの！？」

悪までも淡々と感情を表に表さないよう、言葉を発した遼。

おそらくはこの場にいる誰よりも、彼等の事を案じているはずの彼が何故、即座に動こうとしないのか？

何故、面識のない空と丈の仲間に出会うことを優先するのか？

彼の考えが理解できず、多少その態度に対する非難の感情が籠った声を上げる。

言葉として表していないが、勿論丈の空の意見に賛成だ。

誰かを探すのであれば、大勢で手分けして探したほうが効率的であり、早く見つけることができるだろう。

遼もちゃんとその事をわかっている。

わかっていながらも、あえて“探しに行こう”という選択を選ばなかったのだ。

「勿論、心配さ。俺達は彼等と友達だし、本当はすぐにも探しに行きたい。

でも… 我武者羅に探したって、意味がない。むしろ、無駄に時間をロスするのは目に見えているからね。

ここはやっぱり、君達の仲間と合流して何があったのか事情を詳しく聞いてから行動したほうがいいと思うんだ」

現時点で分かっていることはあまりにも少なすぎる。

この世界のパートナーデジモン… それは十中八九、自分の知るデジモン達の事だろうと予想は着いている。

しかし、その居場所までは流石の遼も知る由はない。

一種の人工知能生命体であるデジモン達は自分で考え、行動する存在だ。いつまでも同じ場所などにいることなどありえない。

そう…… 遼はこのデジタルワールドに来た当初、件のデジモン達と再会を果たしている。

理由は単純明快、サイバードラモンが件のデジモン達と行動を共にしていたためだ。

そのため、ある程度の予測を立てることはできるが、それが絶対というわけではない。

だが、その事を口にした瞬間、空達は確実に予測を聞き出し、そこへ向かおうとするだろう。

しかし、それは大変危険な行為だ。

遼はこの時点で既に一つの結論に辿り着いていた。

「……秋山君の言葉も最もだ。

今の僕等にはヒカリちゃんから来た一通のメールしか手掛かりがない。青山君がデジモン達の顔を知っているとはいえ、効率はあまり上がらないだろうね」

「でもさ、おいら達がアゲモン達と合流するまで無事って保証はどこにもないんだ。

それでもいいのかよう？」

腕を組み、遼の言った言葉を考える丈。

やはり年長者らしく、ここはどちらの意見にも揺れることなく中立の立場を貫こうとしている事がよくわかる。

無論、彼自身の心情を慮ると答えは空と同じで、太一達とは別ルートでこの世界のパートナーデジモン達を探しに行きたいのだ。

そのことを察したゴマモンが確認とばかりに口をはさむ。

中立を保とうとする丈の判断はこの上なく、正しい。

空と遼、双方の言い分はどちらも感情だけでもものを言っているわけではないのだ。

まあ、比較してしまえば理性的に判断しているのは遼の方ではあるが、理屈だけで物事が進められるかといえはそうではない。だからこそ、丈のように中立を保とうとする存在が必要なのだ。どちらの言い分も認めながら、ちょうどいい討論の着陸地点を見つけないければならない。

だからと言って、いつでも中立を保つ事は精神衛生上、いいとは言えない。

中立を保つということは本当に自分がしたいことを時には押さえ込まなくてはならないからだ。

故に、ゴマモンは普段通り軽い調子ではあるが確認を取ったのだ。

丈は、本当はどうしたいのか？ したいことがあるなら、ハッキリ口にしろという想いを込めて。

「うん、そうなんだよね… ゴマモンの言つとおり。僕等には時間がない。

先に見つかってしまえば、多分…… 言いたくはないけどさ」

「なら、やっぱり手分けしてでも探した方がいいんじゃない？」

秋山君の言いたいこともわかるけど。ここは情報収集よりも探し出す方に集中した方が効率的だと思う」

「そう簡単に倒されるほど、彼等は弱くないよ。

体は小さくても、究極体が一体いるわけだし… そう簡単に倒されることはない」

遼が探しに行くという選択肢を選ばなかった理由のうちの一つ。

そう簡単に件のデジモン達が倒されるはずがないという確信を持っているため。

個体差があるとはいえ、成長期の時点で成熟期やアーマー体を倒せる実力を持つ者が存在し、更にはデジモン達の究極の形である究極体がそこにはいるのだから。

それも、かのデ・リーパー戦を生き残った猛者だ。

その事を知っている遼だからこそ、件のデジモンの無事を信じ抜くことができるのだ。

元々、持っている戦闘能力の高いデジモン達が揃っている。

例え究極体が襲ってきたとしても、同じ究極体がいるのだ… そう簡単に負けることはない。

随分と歩いてきたような気がする。

太一はもう一度、単眼鏡を取り出し迫ってくる赤い何者かを確認する。

先程よりも更にお互い近付いているようだ。

赤い何者かの全貌もぼんやりとだが、分かり始め、どうやらアグモンと同じような恐竜型のようなようだ。

更にその後ろには白と茶色の色をした先頭を切る赤色よりも小柄な二体のデジモンが見え始めた。

それ以外、見えないことから以上の三体が近づいてきているのがわかる。

こちらに気付いていないのか、攻撃するような気配は一切ない。敵である可能性はないとは言い切れないが、少ないだろう。

そう思った矢先の事… 唐突に近付いてくる三体の動きが素早くなる。

「どうしたんだ？ いきなり凄い勢いでこっちに迫ってきてる」

「おそらく、相手が私達に気付いたのだろう。敵の可能性が高くなってしまった… アグモン、準備はいい？」

「勿論だよ。太一達は下がって」

なんの前触れもなく、動きがおかしくなった迫り来る三体に警戒を強めたテイルモンとアグモンが子供達を守るために更に一步前に出

る。

いつ攻撃を受けても、回避し追撃を放てるように。無闇やたらに怪しいからと言って、こちらから攻撃を仕掛けることは得策ではない。

戦いの場において、先攻を取るとは事を有利に進める上でとてもなく重要だ。しかし、それは相手が敵だと確定している場合のみ。もし、敵ではなかったとしたら、本来なら戦う必要のない相手と戦う事になるばかりか、説得することは困難に近い。戦わなくて済むものならば、それに越したことはない。

だからこそ、二体は待つのだ。迫り来る三体が敵なのかどうなのかを知るために……。

先頭を歩いていたギルモンが唐突に立ち止まった。

顔を前に出し、臭いを判別するようにふんふんと鼻を鳴らす。どうやら、何らかの臭いを嗅ぎとったらしい。

「ギルモン、どうしたの？」

「これ、クルモンの臭い！ それと啓人の臭いがちよつとする」

「ええ！ 本当？」

何度も鼻をひくつかせ、確信を持った風情で後ろにいる二体のデジモンを振り返る。

この臭いは間違いない。

クルモンがこの先にいるのだ。そして、啓人の臭いの元も……

ここまで近付いてもほのかに香る程度の微弱な臭いから、啓人本人がデジタルワールドに来たわけではなさそうだ。

むしろ、啓人一人だけで来るはずがない。

もし、来るとすれば他のテイマー達も一緒だろう。

自分達が探し求めていたクルモンが啓人の臭いの元にいる。

半信半疑だった事態が次第に現実味を帯びてくる。推測だが、クルモンは啓人達が以前デジタルワールドに来た際、残っていた何かを見つけたのだろう。しかし、その推測は無残にもギルモンが次に呟いた言葉によってかき消された。

「それとね… 啓人やジェンとは違う人間の臭いもする」

「それは真か？」

「うん！ そして、クルモン意外のデジモンの臭いもするよ」

嗅いだ事のない臭い。

今までギルモン達が出会ったことのない存在の臭いだ。

敵なのか味方なのか？ クルモンが普通にその場に居ることから敵であることはないだろうが……

もし、クルモンの正体がバレてしまえばどうなる？

白と茶色の毛並みをした双子のようなデジモン達は目を見合わせて、ギルモンを急かすように押す。

「ギルモン！ ソレが本当なら、クルモンが危ないかもしれないよ！」

「急ぐことを推奨する。さあ、早く！」

「クルモンが危ないの？ ギルモン、急ぐ！」

二体の必死の形相から事態の重さをようやく理解したギルモンが身を翻し、走り出す。

いきなりギルモンが走り出したため、力を入れるバランスを崩した二体が地面に転びかける。

何とか両足で踏ん張り、体制を整えるとさっさと先に行ってしまったギルモンを追いかけるようにこちらもまた走り出す。

砂漠に三種類の足跡が着いていく。

その後ろ姿を凝視する眼
ギョロリと眼球を動かし、一つ瞬きをする
口元を邪悪に歪ませ、小さく呟く

『見つけた……』

と

案じる思いと信じる心（後書き）

戦闘シーンは次回へ持ち越しとなりました。

空・丈・遼チームが何だかバラバラです。お互い、相手を知らなすぎることがね。

望んだ出会いと暗躍の影

辺りを侵食するかのように闇が広がっていく

一点の光も刺さぬ漆黒の中、紫の衣が翻る

湿った空気が周囲と一体化することなく、揺れる黒髪にまとわりつく鬱陶しそうに左手で手ぐしを入れる

それにしても… 嗚呼、なんてここはこれほどまでに濃厚な負の感情が溢れているのだろうか？

紅をさした口角をゆるりと上げ、妖艶に笑む

この先… この先に目指すべきモノがいる
自らと同じ称号を持つ存在が……

急くように速度を上げた赤いデジモン。

一体、何が目的なのか？ 何も分からないまま、構えを取るアグモンとテイルモン。

太一とヒカリもまた、真剣そのものの表情の浮かべ、何が起きても動じないよう心の準備を整える。

いざとなれば、即座に進化できるようにとデジヴァイスを手に取りながら、赤いデジモンを筆頭とする三体のデジモンが目視できるその時を待つ。

そろそろ、構えを取り始めてから3分ほど経っただろうか。

神経が張り詰めている分、時間の流れが早く感じる。ゴクリと口内に溜まってきた生唾を飲み込み、目を凝らす。

赤いデジモンが目視できる範囲に到達する。

遠目で見たとおり、全体的に赤を基調とした体毛に覆われ四肢や顔など随所に黒い三角を四つ組み合わせたような模様が浮かぶ。

どことなくアグモンに似た容姿を持つ爬虫類型デジモン。

その後ろからは体色意外、ほとんど同じと言って過言ではない双

子のようなデジモンが着いてきているようだ。

目視できるとは言っても、距離的な問題から赤いデジモンに比べ、幾分か小柄な二体のデジモンに対しては詳細な姿形を知ることではできない。

全長から推測しておそらくは成長期…… 先程よりも警戒感を若干強めたテイルモンは口には出さないが、内心で推測する。

そこへ響いたこの場に似合わぬ能天気な声。

その発生源は勿論、

「あーっ！ ギルモン達でくるっ！」

「えっ！？」

今まで聞いてきた声の中でも一際、嬉しそうな声音。

収縮していた耳が一気に開かれ、その言葉に驚いたことで緩んだヒカリの腕の中からひょいと脱出を果たす。

啞然とする一同を尻目にふよふよ浮かびながら、赤いデジモンに向かって一目散に飛んでいく。

その行動を止めるものは誰もいない。

あのテイルモンでさえ、クルモンの一言に度肝を抜かされたようだ。それもそうだろう。ギルモンと言えば、現在太一が所持する金色の縁どりが施されているデジヴァイスと思われる機械の所有者である啓人という少年のパートナーデジモンの名だ。

確かに矢印は赤いデジモン達が来る方向を示していたが、まさか彼等が件のデジモンだとは考えもしなかった。

このゲームに巻き込まれた事といい、後手に回らざるを得ない状況が太一達から柔軟な考えを奪っていたらしい。

後手に回りすぎて、思いの外警戒心を強めてしまっていたようだ。

本来な太一やヒカリならば、向かってくるデジモンを安易に敵だと決めつけずに情報提供を願っただろう。

勿論、パートナーであるアグモンとテイルモンもまたしかり。

無意識に焦っていた部分が今回のように柔軟さの欠いた考えに囚われてしまった一番の理由。

信じられずに額に掌を当てる太一。

警戒することは何も悪いことではない。ただ、今回はそれが裏目にでてしまった。

柔軟さを保ちつつ警戒を忘れないようにしなければと、自身に言い聞かせる。

そこへ響く、戯れの声。

クルモンとギルモンが互いの存在を認識し、再会の喜びに浸っているようだ。

「くるる〜!!」

「あー、クルモンだ！ 大丈夫？ 怪我してない？」

「ちゃんと気を付けないとダメだよ、クルモン」

「見たところ大きな怪我などはなさそうだ。無事に何よりな… だよ」

抱きつくようにギルモンの頭にしがみつくクルモン。

その変わらない様子にほっとしつつ、素直に再会を喜ぶギルモン。

頭にしがみつかれていた事など対して気にしていない様子だ。

その様子からして、慣れているのだろう。

そこへ残る白と茶色の体色をした二体のデジモンがほっとした風情に近付いていく。

下から見上げる形になるが、ぱっと見た感じどこにも怪我をしたような所がないようなので、ようやく一心地ついたのだろう。

脱力気味な声音だ。

茶色のデジモンもまた、ほっとした様子で頷きながら理由はわからないが、語尾を訂正する。

喜びに浸っている中、水を浴びせるのもなんだしと気を使ったのか太一達は一定の距離を保ちながら、様子を伺っている。

とても喜んでいるようなので、こちらとしても何となく嬉しい気持ちにさせてくれる。

だが、自分達の成すべきことを忘れたわけではない。成すべきこととは、無論力を貸してもらおうよう頼むことでもあるが、それ以上に優先すべきことがある。

それは彼等の身柄の保護。

あの声言っていたゲームはおそらくまだ終わっていないだろう。ゲームが終了したのであれば、何らかの反応を示すはず……しかし、現段階ではなんの反応も返ってくる気配さえ感じない。

まあ、自分達の目の前に現れた時も突然のことだったので、気配を消すことには長けているのだろうが。

「それで、クルモン。」

「あつちの人とデジモンって誰？ 知り合い？」

「太一とヒカリと、アグモンとテイルモンです」

「一緒にギルモン達を探すのを手伝ってくれたくるっ」

満面の笑みを浮かべながら、太一たちの方向を見ながらそう応えるクルモン。

先程まで沈んでいた表情が嘘のような笑顔だ。本当に会いたくて仕方なかったのだろうと素直に感じられるほど裏の感じられないあどけない表情だ。

お互い警戒していたのだろうが、すっかり毒気が抜かれてしまった。太一とヒカリが顔を見合わせると、一步一步と近付いていく。彼等には伝えなければならぬことがある。

おそらくは赤い爬虫類型デジモン、ギルモンと共に来た双子のようにそっくりなデジモン達もまた、パートナーデジモンだろう。

そうでなければ、一緒に行動する意図が見当たらない。

デジモンとは本来、種族が異なる者同士が固まって行動するということをしない生き物だ。

まあ、幾つかの例外はあるが、その数は少ない。礼を言おうとしたのだらう、不意に茶色いデジモンが太一達に近付いてくる。

しかし、放たれた言葉は礼とは程遠いものだった。

「汝、そのデジヴァイスを何処で見つけた？」

「コイツの事か？」

一瞬、驚いた表情を見せたことからこのような事を言うために近付いてきたのではないというのはわかる。

子供達と別れて行動している事から推測すると、自分達がアポカリモンを倒した後と同じような状態なのだろう。

子供達はリアルワールドへ帰還し、デジモンはデジタルワールドに留まる。

永遠の別れではないと思いたいが、デジヴァイスを見る彼等の様子からして、相当長い間子供達とは会っていないことが伺える。

握り締めていた手を開き、その上に乗るこの世界のデジヴァイス。矢印はギルモンを指さしたまま動くことはない。

「俺達にもよくわからないんだ。

ただ、このデジヴァイスの持ち主が危険な状況にあることは間違いないと思う」

「啓人が危ないの？ どうして？」

掌に乗る自分と啓人の絆の象徴であるデジヴァイスを見つめながら、疑問符を浮かべながら近付いてくるギルモン。

その瞳には不安が宿り、居ても立ってもいられないとでも言いたげな雰囲気醸し出している。

そう思ってしまうのは至極当然、当たり前前の事。

太一が持つそのデジヴァイスは色といい、染み付いた懐かしい臭い

といいまさしく啓人のもの。

学校に行くときでも手放さず、とても大切に扱っていたはずなのに何故、赤の他人である太一の手握られているのか？

状況から言っただけでも、不安を煽るといふのに先程の言葉……
クルモンを筆頭に、白と茶色のデジモン達もまた不安気である。

「ねえ、それってどういう意味？

もしかして啓人だけじゃなくて、ジエンや小春にも危険が迫っているって事」

「……！」

詳しく聞かせてもらいたい。もし、そうだとすれば我等も出来る限りの行動を取らねばならない」

ジエンと小春…… 啓人や樹莉ともまた違う子供達の名前。

おそらくその人物こそ、この二体のパートナーなのだろう…… どうか余裕のあった表情から一変、真剣そのものな表情がそれを物語っている。

自分達の知らない所でパートナーが危険な状況に陥っている。

そう知ったとき、何を思うのだろうか？

無論、答えは決まっている。何が何でも救出し、無事な姿をもう一度見せて欲しいと願うだろう。

そこで感情的にならない部分から見て、相当な修羅場をくぐり抜けている事は明白だ。

心配で心配で今すぐにも駆け出して行動に移りたいに決まっている。しかし、そこを理性で抑え状況の把握に務めたのだから。

「ええ。でも、さっきお兄ちゃんが言ったとおり私達も何が啓人……君達に起こったのか詳細は知らないの。」

「ごめんなさい」

「私達の知っていることは断片的過ぎる……」

けれど、情報を共有することで見えるものもあると思う」「その通りだ。けど、どう話せばいいんだろうな」

困ったように表情を曇らせた太一は考えをまとめるように頭をかく。ヒカリもまた、自分達の不甲斐なさや目の前のデジモン達に向けた心配そうな眼差しに心を痛めたようだ。

小さく頭を下げ、謝る必要のないことだとわかっていても謝ることしかできない。

そう、彼等の持つ情報は本当に少なく、また断片的なものだ。

そもそも啓人等、この世界の選ばれし子供が危険にさらされているというのも物的証拠は何一つない。

声の告げた内容と今、手にもっているデジヴァイスから読み取った状況証拠から推し量っただけに過ぎないのだ。

さて、どう説明しようと思いい悩む太一達を尻目に突然、ギルモンや白と茶色のデジモンが警戒態勢を引く。

瞳の瞳孔が縦細くなり、闘争本能を露にするギルモン。

なんの前触れもなしに変化したデジモン達の様子を訝し暇も無く、辺り一面に鋭い殺気が立ち込める。

即座にデジモン達の変化の理由を理解する。

「ヒカリ… アグモン…!」

「太一、来るよ!」

先程までただの平地だった部分が盛り上がり、砂塵が発生した風に飛ばされ、辺にちらばる。

徐々にその輪郭を明らかにしていく一体のデジモン。

吹き上がる闇の気配と殺気からして、間違いなく敵と思われる。

白いボディに頭上に輝く単眼が太一達を残忍に見下ろす。

背には悪魔のごとき赤い翼… その身に宿る莫大な闇の力が真の開放を待ち望むように渦巻く。

感じる威圧感は以前戦ったダークマスターズと同じかそれ以上だ。

『先を越されたが、ゲームはまだ終わらない……』

何故なら、そこにいるデジモンだけが全てではないからだ』

低く落ち着いた声音で紡がれる言葉。

そこから感じられるものは底知れぬ余裕のみ。

強者のみが発することを許される絶対的な自信と余裕からして、おそらくこのデジモンは……

望んだ出会いと暗躍の影（後書き）

ようやく、太一達もクルモン意外のデジモンと出会いました。

もう少し淡泊な描写にする予定だったのですが、大分増量しました。

そのため、戦闘シーンが次話に……

しかし、折角の出会いを台無しにするように現れた敵。

迷惑以外の何者でもないですね、太一達からしてみれば

気高き竜人と大天使 前編

荒れ果て、朽ち果てた砂漠の階層

そこに住まうデジモンとはまた異なる生命体が脅えるように、各所に点在する岩場に身を隠していた

限りなく白に近い黄色い体色をしており、額には赤い逆三角形の模様を浮かべ、ボディには紫色の何らかの文様を刻んでいる

彼等の名はデジノーム

デジモンとはまた別のプログラムデータが独自進化した言葉によるコミュニケーション能力を持たない存在

されど、決してコミュニケーションを取ることのできない存在などではない

彼等は言葉を持たない代わりに行動によって、コミュニケーションを計ろうとする本能を持っている

その本能が起こすものとは、俗に言う奇跡と呼ばれる類のものが数多く

デジモン、人間分け隔てなく与えられるものである

その存在が脅えている

表情に変化はなく、一見しただけでは脅えていると判断することは極めて難しいが、小さな体を震わせている様子から脅えていると見て取れるのだ

恐ろしいものが胎動を開始している

それは1年前、このデジタルワールドを半壊まで追い込んだものではない

底なしの悪意に満ちた、歪な心を持つ何かだ

！

今、更なる胎動が始まった

微弱に少しずつ、誰にも知られぬようにひっそりと蠢き続ける
デジノーム達はもう一度、大きく身を震わせ天に浮く青い球体を見
つめるのだった

久々に感じる圧倒的な闇の力と迸る殺意……

無意識に恐怖に怯える心と、極度の緊張がその身を駆け抜ける。

冷たい汗が額から頬にかけて滑り落ち、その冷たさが逆にいい刺激
となって怯えた心を何とか奮い立たせる。

戦闘態勢に入るデジモン達。

特にギルモンの変貌は凄まじいの一言に尽きる。

短いながらもクルモン達からの会話から見ても無邪気な性格の
持ち主だと思っではいたが、まさかここまで戦意を漲らせると思
いもしなかった。

彼と共に来た白と茶色の二体もまた、アグモンやテイルモン以上の
敵意を見せながら距離を計る。

ギルモンが本能に任せた戦闘態勢だとすれば、この二体は理性に基
づいた戦闘態勢をとっている。

どちらにせよ、戦い慣れている事は間違いない。

しかし、彼等が如何に戦い慣れていようとおそらくあのデジモンに
勝つことは愚か、傷一つ付けることはかなわないだろう。

感じる歴然とした力の差から、おそらくは……

「究極体……！」

「ふふふ、さよう。察しの通り、私は究極体。

しかし…… ただの究極体デジモンとは格が違うぞ」

単眼を細め、険しい表情を見せる太一とヒカリ…… この場にいる選
ばれし子供を見やる。

敵意を発しているデジモン達等、眼中にない様子だ。

それもそのはず。この場にいるパートナーデジモンの中で進化することができるのはアグモンとテイルモンのみ。

ギルモンを筆頭に、他の3体はパートナーがいなかったため進化することができない。

例えデジヴァイスがこの場にあると言っても、その真の力を引き出せるのは持ち主であるティマーしかない。

更に、このデジモンは七大魔王の尖兵。

今まで戦ってきた暗黒系デジモン達の誰よりも強い力を持っているのだらう。

それにしても、まさか初めて戦う七大魔王の尖兵が寄りにもよって究極体とは、予想外にも程がある。

あのダークマスターズでさえも、自分達と同じ究極体の部下など引き連れていなかった。

それだけ七大魔王は格が違うという証明とも言える。

「貴方達は下がっていなさい」

「どうしてさ？ 僕達も戦えるよ」

相手の様子を伺いながら、何か動きがあればすぐにでも攻撃できるようにしていた三体にテイルモンが声をかける。

視線を相手から外すことなく、不機嫌そうな声を白いデジモンが返す。

一瞬でも視線を外すことはできない。それは先頭においての常識。外すということは相手に隙を与えるということ。

そんなことをするのは余程先頭経験のない馬鹿かもしくは、自分の力に絶対的な自信を持つ愚か者だけだらう。

「アイツの狙いは君達なんだ」

「それは真か？」

「そうよ… それに今の貴方達にはパートナーがいない。進化することもできない状態で、究極体に挑むのは無謀よ」

アグモンの言葉に反応を示すこの世界のデジモン達。

まさか敵の狙いが自分達だとは思わないだろう。

何故なら、今の自分達は脆弱な成長期。例えロードしたところで大した力にはならない。

それ以外の理由として挙げられるものがあるとすれば、パートナーデジモンを倒しロードすればリアルワールドへ行けるといいう根拠のない噂だ。

しかし、それを本気で信じている者は既に希少。

故にパートナーデジモンだからと言って、狙われる理由としてはまズないだろう

ならば、何故？

たかが成長期を究極体が狙うなど余程の理由がない限り、ありえない事。

今より1年程前、リアルワールドへ行くためとは別の理由で自分達を狙った者がいなかったわけではない。

しかし、それは悪までも敵対していた勢力からの刺客としてだ。

最終的にはその勢力と和解とまではいかなくとも、滅多なことがない限り干渉しない事となっている。

「確かに進化できない僕達じゃ、足でまといだけど……」

アイツの狙いが僕達なら、尚更背中を向ける訳にはいかないよ。

それに

「？」

そう、確かに今の成熟期にすらなれない自分達は足でまといでしかない。

しかし… 相手が自分達を狙ってきていると分かった以上、背中を

向けて逃げるなどできない。

まして、初対面の彼等に全てを押し付けて逃げるなんて、できるはずがない。

逃げるどころか、ますます戦闘態勢を強化した3体にテイルモン達は目を細めるが、彼等の決意の程を感じ取り、共に戦うことを決意する。

自分達も同じ立場に追い込まれば、同じ行動を取るだろう。これは理屈では説明できないものなのだ。

後半、白いデジモンが呟いた言葉は誰の耳にも入らず、消えてしまったが、聞き返す余裕などない。

一先ず啓人という少年のデジヴァイスを服のポケットに落とさないよう大切にされると、自分のデジヴァイスを手取る。

そして、天に向かって掲げながら自分のパートナーに声をかける。

今、この場を打開できる可能性を秘めたのはお前だけだ…… そう
いう感情を込めて高らかに叫ぶ。

「こっちも、進化するぞ。」

アゲモンツ！ この中で究極体になれるのは、お前だけなんだ。

頼むぞ」

「OK、太一！」

二人の決意が眩き光となって、デジヴァイスが輝き出す。

究極体へと進化するために必要となる紋章の力を超えた進化の光が放たれる。

古代の伝説に乗っ取り、光の矢に自身が撃ち抜かれることで手に入れた究極の力、

『アゲモン、ワープ進化！』

放たれた進化の光がアゲモンの体内へインストールされ、その姿を

進化させる。

成熟期、完全体…そして、究極体の姿へ。
黄金色をした超合金、クロンデジゾイドの鎧を身にまとい、背中に背負った盾には勇気の紋章が刻まれている。

両腕にはドラモンキラーを呼ばれるドラモンタイプのデジモン対し、圧倒的な威力を誇る歴戦を切り抜けてきた鋭い爪。
数多の暗黒系デジモンを屠ってきた竜人が今、その姿を現す。

『ウォーグレイモンッ！』

両のドラモンキラーをきらめかせ、構えを取る。
翡翠の瞳を輝かせ、撃つべき敵をその鋭い眼光を持って見据える。
彼こそ、選ばれし子供の最強戦力の一体。

頭上で光る巨大な単眼を細めながら、自身と同格である究極体デジモンの力量を見極めようと見つめる。
なるほど、確かに数多の戦いをくぐり抜けてきているようだ。
歪んだ笑みの形に表情を変え、久方振りにこの力を奮える事に喜びを見出す。

「ダークマスターズを倒した実力… この魔王デスモンに見せてくれ」

「言われなくても、見せてやる！ 行くぞ、ウォーグレイモン！」
「任せろ、太一！ 行くぞ！ デスモンッ！！」

土を蹴り上げ、ゆったりと両の腕を前に出すデスモンへ向かい飛びかかる。

右のドラモンキラーを引き、相手の体に風穴を空ける勢いを持って突き立てる。

貫くとは単純故にスピードが乗りやすい戦法だが、同時に必ず一直線上を突き進むため、その軌道を読まれやすい。

凄まじい勢いでその身を貫こうと迫る鋭い爪を、楽々とクロンデジゾイドの装甲を身に付けていない腕の内側を弾かれ、起動をずらされる。

スピードの乗った攻撃のためそのまま体制が崩れ始めるが、そこは歴戦を戦い抜いたウオーグレイモン。

焦った様子一つ見せずに、即座に頭を切り替えると、地面に右の掌をつけ難なくバランスを取る。

そのままスピードを落とさずに下半身を片腕だけで上げると、遠心力をも味方に付けた回し蹴りを披露する。

「うおおおおおお！」

「ほう」

そこは同じ究極体デジモン。

間髪入れずに繰り出された連続攻撃を前にしても余裕を失わず、感心した声を出しながらも、僅かに体を後退させ避ける。

目の前を通り過ぎる両足を見送りながら、右の掌を静かに向ける。掌に埋め込まれた単眼が怪しい光を帯び、瞬時にエネルギー弾として照射される。

「デスアロー」

暗黒の力を秘めたエネルギー弾が着弾する間際、左の掌をも地面につけ腕の筋力を利用し、バック転を決めるように宙を舞う。

紙一重の攻防：まさにウオーグレイモンを貫こうとしたエネルギー弾は地面を無残にえぐりとる。

砂塵が舞い上がり、互いの姿を目視することが困難な状態となる。しかし、そこで攻防が終わるわけではない。

バック転の反動で宙に浮いたウオーグレイモンはそのまま宙に踏みとどまり、両腕のドラモンキラーを天に向ける。

体を真つ直ぐに固定すると、高速で回転を始める。

風が回転に巻き込まれ、小規模な竜巻と化し、砂塵の中から掌をウオーグレイモンに向けるデスマンに向かい、直進する。

「ブレイブトルネードッ！」

「デスアロー！」

一閃の竜巻と二本のエネルギー弾がぶつかりあう。

猛々しいオレンジと禍々しい赤が互いに一步も譲らず、空中で火花を散らす。

前後する二つの力。

そこに立ち入る事は不可能。

誰もが息を呑む中、ついにその均衡が破られ、一閃の竜巻は消え去りその中からウオーグレイモンが姿を表し、二本のエネルギー弾は上空へと打ち上げられ霧散する。

地面に両足をついた両者が今一度、にらみ合う。

「ヒカリ！ 私達もウオーグレイモンの援護をつ！」

「ええ、行くよ。テイルモン！」

第一回の攻防を終え、両者ともに間合いを計る中、テイルモンが声を上げる。

先の攻防からしてデスマンの実力はウオーグレイモンを超えている事は明らかだ。

相対するその様子からは未だ余裕が感じられる。

おそらく先程のデスアローは相手の実力を見極めるために威力を半分程度に抑えられていた。

ウオーグレイモン一体だけでは勝つことは不可能。

援護が必要だ。

ヒカリのデジヴァイスから進化の光が放たれ、紋章を突き抜ける。

聖なる力を何倍にも秘めた光がテイルモンの体にインストールされていき、その姿を完全体へと進化させる。

『テイルモン、超進化！』

小柄だった体が成熟した女性のものへと変化し、両手を包み込むように存在した手袋が外されていく。

右手には桃色の羽衣が巻きついていき、左手には真白き肘まで覆う手袋が装着される。

背には聖なる者の明かしたる八枚の白き翼が輝き、顔の上半身を覆い隠すように鋼の仮面。

邪なる者を貫く、光の使者… その名を、

『エンジェウーモン』

気高き竜人と大天使 前編（後書き）

究極体同士のバトルがついに始まりました。

次回は、究極体&完全体VS究極体となります。

更に空・丈・遼組の様子も入ります。

戦闘描写があると、ただでさえ多い描写が更に多くなる謎。

デジモン達の搜索を優先すべきか、それとも情報収集を徹底するか

……

未だ、答えのでない問答を続けている子供達とそのパートナーデジモン。

デジモン達の搜索をすれば、はぐれている太一達とは違う方向へ進まなければならない。当然、合流は遅れ、情報はこれ以上増えることは難しい。

逆に情報収集を徹底すれば、必然太一達の後を追う事となるので合流は早まるが、搜索範囲は狭まり、また被ってしまう恐れがある。双方共に納得できる答えが見つからないまま、話は平行線上を辿ってしまっている。

どちらの意見も現段階では重要なものであるから、尚更妥協点が見つかりにくいというのも事態を進展できない原因の一つだろう。唯一、中立的立場を守っている丈もまた、悩んでいる様子で答えを出すような雰囲気ではない。

「まいったなあ……でもまっ、仕方ないか」

しばらく無言で睨み合う……否、その言い方は語弊であろう。

搜索を優先すべきと主張する空達から視線を明後日に外しながら、困ったように右手で頭をかく。

先程の討論、そしてつい今しがたまで続けていた目による対話からして、その意思の強さと決意の程を再認識し、おそらくこれ以上問答を続けたとしても永遠に平行線のままだと判断したのだろう。

それほどまでに空の瞳に宿る光は強かった。

遼自身も意思の強さはそう簡単に他人に負けるはずがないと思っている。

だが、それが意固地になっていいという理由にはならない。

お互いの意思が強い場合、一度意見を違えれば、どうしても受け入れ難くそのまま対立してしまう場合が多い。

意見が一致した場合、強い団結力を示す一方で副作用と言えるだろう。

「少し遠回りになるコースから進んでみようか。

情報なら、君達のその… メールを送れる機械で送ってもらえば大丈夫だろうし」

「いいのかい？」

そう、情報収集ならばメールでも充分だ。

そこには情報を送ってくれる相手が自分達と同様に余裕をもっていることが重要となるが。

遼自身も情報というものに執着しすぎたところがあったようだ。

確かに情報というものはあって損はないものだ。しかし、集めることだけが全てではない。むしろ、百聞は一見に如かずということわざがあるように、行動することも必要不可欠だ。

元々、遼は思い立つたらず行動あるのみという根っからの肉体派だ。

ただ今回は、あっさり納得したとはいえ、別世界から来たという自分と同じパートナーデジモンを持つ存在が目の前にいたり、とてもじゃないが楽観的に行動すればいいというものではない状況ではなかった。

一方的に遼を攻めることはできないだろう。

むしろ、理論的に行動しようとした遼の方が周りをよく見ていえるといえる。

物事を後に引つ張らないようフォローを入れつつ、考え方を方向転換したところは流石ベテランティマーといえるべきか……

爽やかに考え方を変えた遼に対し、遠慮がちに言葉を濁す丈。

本来は自分が二人を仲裁し、双方共に納得できる答えを出すべきだったと考えているのだ。

誠実の紋章を持つ者として、その誠実さは長所だが、時としてそれは諸刃の剣となりかねない。

誠実とは物事を真つ直ぐに貫き通すという意味。

いい意味で働けば、それは信頼に繋がり、お互いの絆を深くするだろう。

しかし、悪い意味で働けば、それは頑固となり、絆を深めるどころか真逆の方向へ生きかねない危険性を帯びているのだ。

彼が生きてきた今までの人生、誠実という特性が悪い意味で働いたことは片手で数える程度しかない。

どちらにしろ自らの特性とうまく付き合えているということなのだろう。

「気にしないでくれ。」

俺も少しばかり、情報を集めることに集中しすぎていたみたいだし。彼等が心配なのは一緒だからね」

まるで気にしていないとでも言いたげな爽やかな笑顔を浮かべる。

先にも書いたが、遼もまた彼等… この世界のパートナーデジモン達の安否が心配で仕方ないのだ。

彼の中ではさっさと空と丈をはぐれた仲間達と再開させ、自分は別行動で探すつもりだった。

はつきり言つて、地理に全く詳しくない者が何人いたとしても搜索にはさほど役に立たない。

一人で探したほうが自由でかつ、臨機応変に好き勝手に動くことができる。

これだけでは彼が自分勝手な性格の持ち主に見えかねないが、そこにはちゃんとし根拠と理由が存在する。

空と丈、そしてそのパートナー達は自分達と違い、戦いに対する覚

悟というものが欠落しているようにも感じられる。

先のメタルフロントモンの戦いもそうだが、どこか相手に遠慮をしているように見受けられたのだ。

同時に生死をかけた戦いの場での立ち振る舞い方にも問題がある。

確かにパートナーが倒れば、心配するのは当然だろう。しかし、その後の行動に問題があった。

後先考えずに感情だけで動くなど、戦いの場では決してあってはならないことだ。

この行為は自分の命を危険にさらすだけではなく、戦いの場において邪魔でしかない。

そう、他のまだ戦えるデジモン達の足枷にもなりかねない行為なのだ。

デジモン達の経験は自分達に及ばずとも、相当な場数を踏んでいるにも関わらずこの体たらく。

そこから推測される答えは一つ…… 彼等は長い間、戦いの場から離れていたということ。

例え経験を積んでいたとしても、ブランクが長ければ長いほど感覚を取り戻す事は難しくなる。

彼等はそこが甘かったのだ。

だからこそ、同格の完全体であるメタルフロントモンに倒されかけたのだらう。

たった数瞬、戦いを見ただけでそこまで感づいた遼の観察眼はまさにベテランならではの言葉よう。

だからと言ってそれを指摘するような気は一切ない訳だが。

「…… あの、秋山君。」

その…… ごめんね。我儘ばかり言っちゃって」

「謝らなくても、いいって。」

それじゃ、意見もまとまったところで行くこうか」

結果として遼が考え方を譲る形で落ち着いてしまった以上、若干の罪悪感を持ってしまったのだろう。

声音から申し訳ないという謝罪の気持ちが伝わってくる。

空自身もあそこまで頑固に言い募るつもりはなかったのだ。ただ、自分の気持ちが付いていかないまま悪化していく状況に心が追いつけていなかったのだろう。

元々、責任感の高い空の事。先の異空間での出来事や、現状についてこうしていればよかったのではないか。そういう気持ちが強いのだろう。

責任感が高いことは決して悪いことではない。しかし、それに囚われてはならない。

囚われてしまえば、自分自身を縛り上げる枷にしかならないのだから。

そんな空の感情を読み取ったのだろうか、先程と同じ爽やかな表情のまま、さして気に留めていないような声音で返事を返す。

そのまま、意識を次に向けるような言葉を告げて、先頭をきって歩き出そうとする。

しかし、その歩を止めたのは空でもまして、丈ではなかった。

「遼、少し待て」

「どうした、サイバードラモン」

呼び止めたのは今まで沈黙を守ってきたサイバードラモンだった。

サイバードラモンが自主的に言葉を発する機会はある、とても少ない。

まあ、十中八九発する言葉は強い奴が出ただの戦いたいだのそういう類のものばかりではあるが。

おそらく、今回もそうだろうと察しはしたものの、本当にそうなのかは聞いてみなければわからない。

唸りながら、空達の仲間がいると思われる方向を睨みつける勢いで

見ながら言葉を発する。

「強い気配が二つ、戦っている…… 感じる力からして…… 究極体同士だ」

「究極体!？」

「今、もう一つ増えた。これは、完全体か……?」

案の定、強い相手が現れたという報告だったが、その内容は驚きの一言に尽きる。

まさか、究極体同士が戦っている等という報告を受けたのは初めてだ。

今までは強い奴と言って、戦いたいと伝えてきたのは完全体デジモンばかりだった。

そもそも究極体とはその名が示すとおり、デジモン達の究極の姿形を意味する。

その領域に踏み入れることは生半可な事ではないため、絶対的に希少種となってしまうのだ。

遼自身が知っている究極体デジモンといえば、自分と同様にテイマーを持つデジモンの進化系もしくは最下層に属するレイヤーに住まう四聖獣と呼ばれる四体のデジモンだけ。

1年前: データ除去プログラム、デ・リーパーからデジタルワールドを守るため、数多くの究極体デジモンが誕生したが、その9割はデ・リーパーとの戦いでその命を散らした。

今、このデジタルワールドにいる多くのデジモンは成長期・成熟期クラスがほとんどであり、完全体と呼ばれる種も少ない。そんな現状で伝えられた究極体同士の争い。

これは十中八九、野生のデジモンによるものではない。

「まさか、太一達が究極体と遭遇したのか……?」

「もしそうだったら、大変だよ! 助けに行かないとっ!」

「でも、助けに行っちゃったら探しに行けなくなるよ。 どうするの？ 空」

「えっと……」

誰もが認めたくないが、丈の言葉通りの可能性が高いだろう。

七大魔王の尖兵は自分達に襲いかかってきた。それが太一達の身に起こったとしても不思議はない。

自分達は完全体デジモンであったが、サイバードラモンの言葉を信じるのならば、太一達はおそらく究極体デジモンと遭遇してしまっただらう。

太一達には究極体に進化できるアグモンが付いていると言っても、長年のブランクはそう簡単には埋まらない。

それはガルダモンと同じであろう。

最悪、七大魔王の尖兵だとすれば相手はおそらく暗黒系デジモン。

暗黒系に強いテイルモンがいるのだから、簡単にやられるなんていうことは可能性として低いだろう。

だが、勝てるのかと言えばそこは頭を捻らざるを得ない。

「助けに行くのなら、早く決めたほうがいい。

遅くなれば、遅くなるほど無事で居る可能性は低くなる」

「空君。 ここは太一達と助けに行くべきだ。

究極体が相手なら、きつと僕等の助けも必要になる」

「ええ、わかってるわ。 わかっているけど……」

折角、遼が考え方を譲り自分達が進むべき方向が定まったというのに…… また、唐突に変わる状況に踊らされている。

どうにも歯切れの悪い空。

空自身もわかつてはいるのだ。今、本当にすべきことが何か。

勿論、パートナーデジモンを探し出すのは重要だ。しかし、それ以上は今この時に危険にさらされている仲間を見殺しにするわけには

いかない。

一つ迷いを振り切るように頭を振ると、まっすぐな瞳を二人に向ける。

考え迷う時間は、ない。今はただ、前に進むとき。

思い悩むのは物事が一段落した時でもいいじゃないか。そう気持ちを新たに、

「行きましょう。太一達のところへ！」

光を纏い、降臨する女性の姿をした大天使型デジモン。

忌々しい聖なる輝きに目を細めるデスモンだったが、即座に余裕を取り戻す。

例え、暗黒系に強い天使型デジモンであろうと相手は完全体。究極体である自分が負けるはずがない。

「悪しき力を持つ者よ、早々にこの場から立ち去りなさい」

「そうはいかん。

私にもすべき事がある…… お前達と同様にな」

威風堂々とした宣言に怯むことなく、余裕と共に言葉を返す。

普通の暗黒系デジモンであれば、この宣言に多少なりとも怯んでしまっただろうが、デスモンは究極体であり、魔王型のデジモン。

闇を統べる能力を持つがゆえにそのようなこけおどしに屈するような脆弱な精神など持ち合わせていない。

逆に挑発するように単眼を細め、口元に邪悪な笑みを浮かべる。

そう、デスモンにもやらねばならない任務がある。

例えその任務が主の暇つぶしのようなものであると、完璧にこなさねばならない。

もはや問答するつもりもないと言いたげに、上空で構えを取るエン

ジエウーモン。

ウォーグレイモンもまた、それに倣う。

空中のエンジエウーモンと地上のウォーグレイモン……

双方に両腕を向けながら、じりじりと間合いを図り始める。

砂漠の砂が崩れる音が合図となり、飛び出すウォーグレイモン。

その後ろにはエンジエウーモンが左手をデスモンへ向け、聖なる力を貯め始める。

右のドラモンキラーを振りかぶり、まさに今切り裂こうとした瞬間、背に生えた蝙蝠のような翼を勢い良くはためかせる。

発生した強風により、舞い上がった砂に視界を奪われ、無意識に動きを止めたウォーグレイモンを尻目に、空中へ飛び上がったデスモンはエンジエウーモンに左手を向ける。

「ホーリーアローツ！」

「デスアロー」

聖なる矢と邪悪なる一本のエネルギー波。

相反する力がぶつかり合い、壮絶な力の押し合いが始まる。

行き場をなくした白の閃光と赤黒い閃光が縦横無尽に周囲を駆け巡る。

しかし、その均衡は瞬時に破られた。

弓から発射された一本の矢と、持続的に放射されるエネルギーではそもそも拮抗が長く保つ可能性は皆無。

四方に割れ、飛び散る聖なる矢の中を突っ込む邪悪の一撃。

真っ直ぐ向かってくるエネルギー波から逃れるように八枚の翼を動かし、更に上昇することで避ける。

さらなる追撃を放とうとエネルギーの放射をやめた左腕を上げるが、地面を蹴りデスモンのいる高度まで飛び上がってきたウォーグレイモンによって阻止される。

「むう」

「敵はエンジェウーモンだけじゃないぞっ」

気高き竜人と大天使 中編（後書き）

更新遅れて申し訳ございません。

少々、リアルの方が慌ただしくなり時間を取ることができませんでした。

さて、分かれてしまった空・丈・遼組も合流に向かって動き始めました。

少々空が悩みすぎかなという描写になりましたが、無印時代からして悩むとことんまで自分を追い詰めてしまいそうなので押し通しました。

V.S.デスマンもコンビネーションを駆使して追い詰めていきたいと思いません。

気高き竜人と大天使 後編

言葉と共に、右足を振り上げ回避のため上昇したエンジェウーモンを追い、照準を合わせようとした左腕を蹴り飛ばす。

そのまま間髪入れずに左腕のドラモンキラーを横に一閃させる。

今度は切り裂くのではなく、相手を吹き飛ばすための打撃としての一撃。

案の定、デスモンは即座に右手を盾のように構え、難なく受け止めるが、それだけですべての勢いを殺すことはできなかった模様。

力が作用するドラモンキラーによる一閃と全く同じ方向： ウォーグレイモンの右側を通り過ぎ、吹き飛ばされる。

蹴り飛ばされた故、自由の効かぬ左腕の支えがない状態及び、空中という足を踏ん張ることもできない立地条件の悪さ…これが地上であれば、これほどまで吹き飛ばされることはなかった。

無意識に苛立ちを含んだ唸り声が漏れる。

しかし、それは一瞬。直ぐ様、先ほどと同じ自己の優位性が失われていることを示すように余裕を醸し出す。

そう、彼等は何も知らない。

己の真実に…

この魔王デスモンが一体どういった存在であるのかということは何一つとして知らないのだ。

太一の持つこの世界の選ばれし子供のデジヴァイス本来の力を引き出すことができれば、現在自分達が立たされている立ち位置がわかっただろうに……

「ウォーグレイモンとエンジェウーモンを相手にしながら、余裕だな」

「何か隠しているのかも……」

究極体と完全体を相手にしているというのに、未だ余裕をもって対峙するデスマンの態度が気にかかる。

デジモンは大まかに分けると、ワクチン・データ・ウイルスという三つの属性に分類することができる。

この三つの属性はそれぞれ、じゃんけんのように三すくみの関係を築いている。

すなわち、

ワクチンはウイルスに強く、データに弱い

データはワクチンに強く、ウイルスに弱い

ウイルスはデータに強く、ワクチンに弱い

例外的な属性があれど、現存するデジモンたちの多くはこの三つの属性に振り分けられている。

魔王型であるデスマンは十中八九、ウイルス種のデジモンだろう。

今まで遭遇してきた魔王型は皆、ウイルス種であった事と全身から立ち上る闇の気配からして間違いない。

対するウォーグレイモンとエンジェウーモンはワクチン種である。

上記の力関係から考えると、子供達の方が圧倒的に有利な状況であることがわかる。

それは例え、七大魔王の配下だとしても野生で生きているデスマンも承知のはず。

それでも失われぬ余裕に、子供たちの経験が警鐘を鳴らしている。デスマンは今まで戦ってきた暗黒系デジモンとは何かが違うと。

何も考えずに戦えば、敗北すると彼等の経験が告げているのだ。

「テリアモンっ！ 汝、今すぐ戻るべし！」

太一と光が放たれる余裕に招待について思案している間に戦場では変化が起こったようだ。

焦った幼い声音が響き渡り、子供達は現実へ引き戻される。

白いデジモンが茶色いデジモンの静止を振り切り、戦場に向かって

走り出している。

何かに気付き、それに対してとても驚きつつ同時に若干の怒りと多大なる焦りを感じている様子だ。

先の会話からして、自分のペースを乱すことがないどこか冷めた部分を持つデジモンだと思っていた。

おそらくその認識ははずれてはいない。

ただ、白いデジモン… テリアモンの琴線に触れるものをデスモンが持つていただけなのである。

現時点ではそれが何なのかはわからない。

戦場では相変わらずウォーグレイモンとエンジェウーモンの連携を前に、余裕をもって対峙するデスモンの姿。

究極体であり、全身のクロンデジゾイドの鎧で堅めたウォーグレイモンが接近戦を仕掛け、エンジェウーモンは一定の距離を保ちつつ後方から支援に徹している。

次々と繰り出されるドラモンキラーの突きを左右に体を揺らしながら避け続けるデスモンに対し、背後から狙いを定めたホーリーアローを放つ。

されど聖なる矢はデスモンに当たることなく、ことごとく片手の掌より放たれるデスアローに粉碎され、成果を挙げられない状況だ。そんな戦況の中へ、単身成長期の身でありながら、飛び出したテリアモン。

戦闘種族が持つ鋭い敵意を宿した瞳でデスモンを睨みつける。

「お前っ…！ どうして、ジェンのDアークを持っているっ!？」

「えっ……?」

ジェン… 啓人や樹莉と同じように人間の名前だろう。

そして、おそらくはテリアモンのパートナー……

Dアークとは何なのかまではわからないが、きつと二人にとってとても大切なものなのだ、必死な声と表情からわかる。

自身のターゲットの一体であるテリアモンが前に出たことに若干の驚きを含みながらも、さほど動じていないデスモンは喉で押し殺したような笑い声を漏らす。

それはとても楽しげで同時に邪悪な笑い声だ。

神経を逆なでし、戦いの場で決してなくしてはならない平静をなくさせるような精神に打撃を与える力が含まれているのかもしれない。我知らずと生唾を呑み込んだ太一はどう動きべきか悩んでいる。

テリアモンとデスモンの距離が近すぎる。

うかつに動けば自分もただでは済まない。むしろ、共倒れする可能性が高い。

ウォーグレイモンとエンジェウーモンも攻撃をやめ、自体を静観するしか術がない。

テリアモンに最も距離が近いのは実を言うと、デスモンではなく、接近戦を繰り返していたウォーグレイモンだが、それほどの差はない。

むしろ、テリアモンを救出するため動けば相手に背を向ける形となり、エンジェウーモンが支援をしているとはいえ、攻撃のスピードは圧倒的にデスモンに有利だ。

だから、動けない。

ようやく笑いをやめた、デスモンは単眼の瞳をテリアモンに向けながらおもむろに一つの機械を左手に取り出す。

そこにあつたのは、

「デジヴァイス…!？」

間違いない。

太一が持つ啓人という少年が本来持つべきデジヴァイスと同等の形をした機械。

縁どりの色だけが金色ではなく緑という点を除けば、全てが同じ。それを見て子供達は思い出す。

姿を現さなかった“声”が出した条件を……

『吾輩は一切参加せずにお主等と同じくパートナーデジモンの顔も名も知らぬ部下を使う。』

更に… 手掛かりとしてコイツを渡しておこうかの『

手掛かりを渡していたのは自分達だけではなく、部下も同様だったのだ。

互いを同じ土俵に立たせ、自分は高みの見物を堪能する。

このゲームは完全に“声”が楽しむためのものであって、それ以外の意味はないのである。

絆の象徴であるデジヴァイスを赤の他人… それも敵が持っている
と知ったときの衝撃は計り知れない。

自分のペースを乱さないテリアモンが、後先考えずに飛び出すのも無理はない。

それだけ彼等にとってデジヴァイスは特別なものだから……
太一達は知らないのだ。

この世界のデイヴァイス… 通称Dアークは、絆を重んじるのだと
絆を深め、それを第三者に認められなければ決して得ることは叶わ
ない代物だということ。

「何故、私がこの機械を持っているのか知りたいか？」

「……………」

「お前の上… 七大魔王の誰かから与えられたんだろっ！」

デスモンの体格からしてみれば、小さすぎるDアークを手の内で弄
びながら、楽しくて仕方がないとも言いたげな声を出す。
その言葉に当たり前だとも言いたげな鋭い視線を向けるテリアモ
ン。

いつの間にかギルモンや茶色のデジモンまで前に出ている。

こちらの都合など知ったこっちゃないとも言いたげな行動に、あまり気の長くないエンジェウーモンが何処かしら呆れたような雰囲気
気を若干であるが放つ。

が、そんな些細な雰囲気の変化に気付くような勘のいいデジモンは
いない。

気付きそうなたリアモンや茶色のデジモンはそれどころではないの
で、尚更誰にも気付かれない。

二の次が告げないデジモン達に代わり、太一が一步足を踏み出すと、
勢い良く啖呵を切る。

そう、このデスモンは七大魔王の尖兵。

自分達と同じように“声”に手渡されたはず。そして、それは当た
りだったようだ。

「その通りだ。

ならば、今この機械の持ち主がどういった状況に立たされている
か… わかるだろう？」

「貴方達！ 一体、この世界の選ばれし子供に何をしたの!？」

デジヴァイスが手元がない。

それが示すことは一つしかない。

誰もその事実気付いている… しかし、それがどれほど信憑
性の高いものであるかと所詮は推測の域を出ない。

だからこそ、ヒカリは叫んだのだ。

この場にいる誰もが思い、考えた言葉を……

デスモンは単眼を笑みの形へと歪ませ、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

それは彼等に起こった悲劇。

いつものように穏やかに、楽しく過ごすはずだった日常が壊れた瞬
間の一部始終である。

気高き竜人と大天使 後編（後書き）

また日が空いてしまい、申し訳ございません。

多少、リアルの方が落ち着いてきましたので更新速度を上げていきたいと思えます。

さて、今回は時間を遡りティマーズに何が起こったのか大まかな説明に入りたいと思えます。

戦闘はまだ続きます。

デスマンにはまだ秘められた力もあるので……

「抵抗せん方が身のためじゃぞ。」

全ては、招かれざる客人… 選ばれし子供達とそれを援護した四聖獣を怨むといい」

ゆっくりと近付いてくるバルバモン。

そこに姿を現した当初には若干ながらも存在した柔らかさは無い。あるのはただ絶望を告げる邪悪さのみ。

ティマー達は忘れていた… デジモンにも人と同じように決して交わることでない存在がいることを。

ニタリと嗤い、再度杖を頭上に掲げる。

周囲を満たしていく闇と共に、暗転していく意識。

景色は歪み、確かだった形が全て崩れていく。

コンクリートだった地面が消え、何の抵抗もできないまま、ただ重力に従い落下していく。

狭まっていく視界…

真似からざる客人、選ばれし子供… そして四聖獣

一体、何が起こっているのか？ 彼等は何もわからない、知らない、知るはずもない。

事態だけが悪化の一途を辿っていることにさえ、気付いていない。そして、全てわからなくなった。

ここはリアルワールドとデジタルワールドを境目。

0と1が漂うだけの空間である。ここを更に下へと進んでいくと、デジタルワールドへと到着する。

まあ、到着する以前にこの世界の子供達… ティマー達と別世界の子供達… 選ばれし子供もまた同じ経験をする羽目になる。

つまり、自由落下である。

幸いにもデジタルワールドはリアルワールドと違い、重力そのもの

があつてないような存在であるため、落下したとしてもさほど怪我を負うという事態には陥らないのがせめてもの救いだらう。

本来ならば、留まる事のできない空間はソレはいた。

白い髭を撫ぜながら、片方の手に先程入手したばかりのとあるモノが握られている。

金、緑、青… それぞれの色の縁どりが施されているデジヴァイス

… 通称、Dアークである。

さて、これをどう使おうか？

もうすぐ選ばれし子供達がこの世界へ到着する。

予定していた時間よりも遥かに遅れたご到着だが、それはそれで様々な策を巡らせるいい時間稼ぎとなった。

今はまだ種を蒔いたに過ぎないが、いずれ結果が出てこよう。

バルバモンは面白そうに口元を笑みの形へと歪める。

楽しくて仕方がない。

全てが順調に進んでいる。後は時間の問題だらう。別行動をとっている他の魔王も既に準備は終了したと聴いている。

時が味方していると思えない。

Dアークを一度、掌に収め一度握りしめ、また開く。

まるで手品のように消えたDアークの代わりに三枚のカードが姿を現した。

カードには先程、対峙した… 否、対面したティマーたちの姿がそれぞれ映し出されている。

「少々、遊びすぎたようじゃな……」

しかしまあ、構わんじやろうて。興味はあれど、所詮コレも時間稼ぎの一つに過ぎん。

せいぜい楽しませてもらおうか。そう思わんか？」

長年の封印から開放されたのだ。気分が高揚しているのは致し方ない。

バルバモンはそつと三枚のカードをロープの中へしまい込むと、視線を動かし、後方を見る。

後方… すなわち魔王の背後には数多のデジモン達が蠢いている。これら全てはバルバモンに忠誠を誓う者達ばかり……

封印されていようとなかろうと、軍備は着々と整えている辺りは知略の魔王と言われる所以だろう。

まずは我等の真の目的から子供達の目をそらすために一体。

そしてもう一つ… 捉えたタイマー達を使つての時間稼ぎ、誘導を行つために一体。

さて、どの部下を使おうか？

一つは完全体でよかろう、もう一つは究極体… それも七大魔王の力を示す存在がいい。

と、なれば…

「デスモン… そしてメタルフロントモン、前に出よ。

お前達にそれぞれ策を委ねる。失敗するでないぞ」

「御意に」

「お任せを」

即座に一步前に出る二体。

僅かに身を翻したバルバモンは先程、何処かへと消したDアークの内、緑のフチドリが施されているものをデスモンに放り投げる。

弧を描きながら投げ渡されたDアークを危なげなく掴み取ると、何をさせたいのかまるで意図がわからず口元に笑みを浮かべるバルバモンを見つめる。

それは無論、隣にいるメタルフロントモンも同様だ。

ただ、髑髏であるが故にその表情を知ることが一切できない。

「メタルフロントモン、お前は選ばれし子供達を探せ。

そして伝えよ、『魔王は何処か』と… 隙あらば殺しても構わぬ。

デスモン：「お前はしばし待機せよ。準備が整い次第、追って指示を出す。」

他の者はそうよな、色欲の護衛でもすればよい」

全ては大いなる目的のため。

願わくば、このまま策の通り忠実に動いてくれればいい。

部下も子供達もそして、他の七大魔王でさえも……

後にデスモンに与えられた指令は、選ばれし子供達にティマー達の危機を伝え、そのパートナーデジモンをいたぶること。

場合によっては殺してしまっても構わないし、生かしておいてもいい。

所詮、これはただの時間稼ぎに過ぎない。

封印されている魔王復活までの間、自分に注目を集めればいいだけの事。

だからこそ、折角収集したDアークを双方に与え、不安を仰ぎ、戦いの場で断片的な情報を与える。

今、子供達が知り得たことは、この世界の選ばれし子供……つまりティマー達は既に七大魔王の手の内に落ち、いつでも殺すことが可能なことだけ。

時間稼ぎという言葉は一つも与えていない。

子供達が来たもう一つの目的、封印されている七大魔王から目を背けさせ、今の状況につなぎ止める事。それこそ、デスモンに与えられた任務。

面白いように食いつく姿は滑稽そのものであり、バルバモンの用意周到さが容易に見て取れる。

それ以上に自身のティマーを人質に取られたことを知ったパートナーデジモンの怒りは半端ない。

勝てる見込みのない相手に今にも飛びかかりそうな勢いだ。

それをしないのは身を守ろうとする生存本能故かそれとも、別の何かか… デスモンには理解できないし、しようとも思わない。

「話は以上だ。」

この世界の子供を助けたくば、私を倒し彼の方の下へたどり着くしかない……

そう簡単にいかぬがな」

「くそ…っウオーグレイモン、この戦い… 絶対に負けられない！」
「わかつている、太一！」

あざ笑うような声音。

明らかに見下した態度それに伴う自分達の計画性のなさに、体中を流れる血液が怒りで沸騰しているような錯覚を覚える。

自分達がこの世界に赴かなければ、この世界の子供達に危険が及ぶことはなかったはずだ。

例え、この世界に七大魔王の一体が封印されているとしても来るべきではなかったともいえる。

何故ならば、今の状況からして自分達が来ても来なくても結果は同じだからだ。

七大魔王の復活を食い止めることは決してできないという事。

ならば、自分達が来た意味とは何だったのか？

楽観的に考えていた自分達の配慮のなさにこそ、太一は怒りを覚えていた。

心のどこかで全てうまくいくという根拠のない自信を持っていた。

その結果がコレである。

復活を食い止めることもできない。危険が及ぶことのなかったこの世界の子供達を巻き込んでしまった。

爪が食い込み、血が滲み出るほど強く握りしめる両手。

今できる最善の行動を取ろうと、パートナーの名前を呼ぶ。出た声は怒りに震え、どこか涸れていた。

応じるウォーグレイモンの声も怒りに震えている。

自分たちの不甲斐なさと七大魔王の容赦ない策略に対し、怒りのまま特攻を仕掛ける。

「うおおおおおおお！」

「愚かな」

通り過ぎる策略（後書き）

カードを使うティマーがカードにされる。

皮肉を込めたつもりです。

とにかくバルバモンは用意周到な魔王だとわかっていたただければ光栄です。

怒りに震える太一とウォーグレイモン。

次回はまたまた戦闘パートです。

仲間と枷

策もなく我武者羅に突き進むウオーグレイモン。

太一の感情に引きずられ、冷静な判断力もなく両のドラモンキラを幾度となく突き立てる。

ただ衝動のままに振りかざされる刃など鞘がついているのと同じもの。

当たるはずも無く、悠々と体を小さく左右に揺り動かすだけの動作で避けられていく。

まさに愚かな攻撃だ。

元々、選ばれし子供のパートナーとなるべく生み出されたが故に、他の野生で生きてきたデジモンとは明らかなる差が存在する。

しかし例え差があるとしても、明確にどちらかが劣っているという訳ではない。

ならば、その差とは何か？

まず一つ目にするのが、進化の早期化だ。

本来デジモンの進化とはある程度の経験と成長が必要となる。すなわち、進化までに大量の時間を必要とするのだ。

そしてそれはランクが上がることに更に高まっていく。

だからこそ、野生の完全体や究極体は極端にその数が少なく、成長期や成熟期といったクラスが圧倒的な数を占めているのはこれが理由なのだ。

しかし、パートナーを持つデジモンは違う。

勿論、経験や成長が必要なことに変わりはないが、それをデジヴァイスや紋章といった媒体を通すことによって一時的に補完することが可能なのだ。

故に凄まじい速さで成熟期や完全体に進化することが可能であり、条件さえ揃えば究極体へも進化が可能になるという訳だ。

だがその分、デメリットも発生する。

結局、デジヴァイスや紋章といった媒体を使っているが故に、本来必要なことが抜けているのだ。

そのため、ある一定の時間が経つと本来なら起こりうるはずのない現象を起こし、最もデータが安定している姿へと退化してしまうのだ。

一度進化すれば退化することのない野生のデジモンとの明確な差がコレだ。

そしてもう一つ…

人の心と密接な関係を持つパートナーならば誰にでも起こりうる事。元来、メリットとデメリットは表裏一体。こちらにももちろん、存在する。

そして、今の太一とウォーグレイモンを明確に示すものだ。

すなわち、パートナーの感情、心に動きによって戦闘能力が左右される点。

向上心やそれぞれ子供達の心に合った特性が最も良い方向へ向いた場合と、全く真逆の方向へ向いた際の落差が激しいのだ。

例を挙げて見るとすれば、今より約四年前の出来事…

独りよがりな身勝手な勇気を振りかざし、進化させたアグモンの完全体、スカルグレイモンの件から見ても明らかだ。

あれは太一の良き特性である勇気が真逆に働いたがために、生まれた進化であり、圧倒的な破壊力を持ちながらそこに介入すべき理性が何もなかった。

それが昇華され、生まれた真の勇気を持った進化体、メタルグレイモン。

スカルグレイモンに勝るとも劣らぬ力を持ちながら、理性を保つことに成功している。

今とは状況が違うが、似たような感情に陥りかけていることは間違いない。

その証拠が今の攻防。

太一の感情がデジヴァイスという媒体を通り、ウォーグレイモンに

直接伝わっているのだ。
当然、怒りという感情にブレーキというものはない。ただ振り回されるだけ。
大振りすぎる攻撃は簡単に避けられ、それでも攻撃し続ける。
体力だけが消耗され、いずれ上記に書いたとおり退化するのも時間の問題と言える。

「動きが鈍っているぞ？」
「ッ！」

何度目からの攻防。
唐突に呟いたデスマンの言葉に言い返せるはずもなく、動揺したその瞬間を狙われ右頬を殴り飛ばされる。

そのまま体制を崩し、2メートルほど吹き飛んだところへ間髪いれず放たれるデスアロー。
避け入れず、両のドラゴンキラーをクロスさせることによって何とか体への直撃を防ぐ。

が、そこで攻撃の手を休めるほどデスマンは甘くはない。
次々と両の目から放たれる暗黒の波動。

如何にクレンジゾイドで作られているとはいっても、連続で攻撃されればその耐久性は確実に落ちてしまう。

ひび割れのきしむ音が聞こえ、ついに放射状のヒビが幾つも走り始める。

砕け散るのもまた時間の問題。壊れた瞬間待ち構えているのは、デスアローの直撃。

全身を鎧で覆っているとしても、そこに下にあるのは生身。また、覆われていない部分も存在しないわけではない。

耐え忍ぶしかない状況で一筋の光明を指す声が響く。

「ホーリーアローッ！」

我武者羅に特攻を繰り返したウォーグレイモンに集中していたためか、エンジェウーモンが移動していることに気付いていなかった。元々完全体ごときが自身に傷をつけられるわけもないとタ力をくくっていたのもその原因の一つに挙げられるだろう。

暗黒を断罪する光の矢が一直線に飛び、デスアローを撃つため挙げられていた左腕を直撃する。

貫通するとまではいかなかったものの、聖なる力の集合体であるホーリーアローは相当堪えたようだ。

短いながらも苦悶の叫びを上げ、庇うように左腕を引っ込める。

突き刺さった矢じり周辺の肉は焼き爛れ、今もなおその惨禍を広げようと黒い煙が立ち上る。

慌てた様子で引き抜いたはいいが、体を構成する表皮のレイヤーが量子分解を始め、データが流出する。

ギロリと自身の頭上から見下ろす女天使を睨みつける。

「完全体風情が、よくも……」

明らかに憤怒をふくんでいる声音。

完全体であるエンジェウーモンに手創を負わされたことが余程、癢に触ったらしい。

魔王型デジモンとはどこまでも自我が強く、自己中心的な考え方を持つものが多い… デスモンも例に漏れずその傾向が強いようだ。

これは逆に子供達にとって好機でもある。

自我が強いということは間接的にプライドが高いことを示しており、このようなタイプの存在は自身のプライドを傷つけられることを何よりも嫌う。

一度傷つけられれば、他の全てを投げ売ってでも取り戻そうと躍起になるものだ。

冷静さを欠いた攻撃ほど避けやすいものはない。

この法則を当てはめれば、おそらくデスモンは自身に傷を負わせたエンジェウーモンを狙うだろう。

それは、身動き取れなかったウォーグレイモンの開放を意味し、再度二体による攻防が可能となる。

固唾を呑んで事態を見守る中、エンジェウーモンが挑発するように声をかける。

「完全体といって、舐めれば痛い目にあうのは当然でしょ？」

「……確かに、そのとおりだ。」

私はお前達、選ばれし子供を舐めていたのやもしれん。そう……最初からこうしておけばよかったのだ」

未だ収まらぬ怒りの炎が垣間見えるが、挑発されたことによって逆に冷静さを取り戻させてしまった様子。

徐に右腕を上げると、ウォーグレイモンでもエンジェウーモンでもない全く別方向へ掌を向ける。

一体、何が狙いなのか……？

険しく目を細めた二体だったが、すぐにその本意を知り、表情を一変させる。

冷静ではあるのだ。しかし、怒りを忘れたわけでは決していない。

だからこそ、恐ろしいまでに冷めた頭でどのようにすれば自身に傷を負わせた憎き大天使を屈辱の底へと突き落とせるか瞬時に悟ったのである。

パートナーを持ったがために得た弱点……それはパートナーである子供達。

彼等を狙えばどちらにせよ、何らかのダメージを与えられる。

子供達が死ねば、主達の妨げとなる者を排除でき、パートナーデジモンはただの野良デジモンと同等もしくはそれ以下の存在に成り果てる。

また、子供達が死ななくとも、頭上という死角に潜むエンジェウー

モンから距離をとることができる。
どちらにしても狙って損はないということだ。

「間に合うのかな？ デスアロー」

「逃げてっ、ヒカリ！」

「太一ッ！」

全てが同時だった。

表情を一変させた二体のパートナーデジモンが子供達の下へ身を翻す。

ニタリを邪悪な微笑みを浮かべ、右の掌から覗く瞳から闇の波動が放たれる。

自らを狙い打つ邪悪なる波動に震え上がり、避けるため動かさねばならない足はまるで棒のように動かない。

ウォーグレイモンとエンジェウーモンが悲痛な声を上げる。

間に合わない。

そもそも移動速度が天と地ほどの差があるのだ。

自らの肉体を動かし、駆け抜ける速度と相手に当てるために放たれる波動ではまず比較の対象にすらならない。

この中で最も機動力に優れているのは究極体であるウォーグレイモンだろう。

同じく究極体であるデスモンだが、その巨体故に機動力はウォーグレイモンに劣る。

唯一の完全体エンジェウーモンもまた、移動速度は並みの完全体より上の存在であり、その機動力はデスモンと同等か多少劣るところにいる。

デスモンが自分自身で特攻を仕掛けたのなら、間に合ったであろう。しかし、そう簡単に物事は進まない。先の出来事がその証明。

また、デスモンは自らの能力について恐ろしいまでに客観的であり、怒りを感じていようと頭の奥底は冷めている。

そんな存在がわざわざ自ら特攻を仕掛けるはずがない。

そして彼等は思い知るのだ。

七大魔王とその傘下達は今までとは比べ物にならないほどの存在だと。

そう…今の今まで誰一人として経験することはなかったのだ。

いつも戦うのはデジモン達。子供達は守られているだけ。その子供達が命の危険にさらされるのはいつだってデジモン達が敗れた後。

今回のように未だ戦えるデジモン達がいる目の前で、子供達が狙われるという緊急にも程がある事態に陥ったことはない。

守るべきものがある事は素敵なことだ。だが、同時にそれは自身を縛る枷でもある。

仲間と枷（後書き）

今まで以上に描写が多過ぎる展開です。

また、今回も独自解釈が多量に含まれております。

第二章が終わった時点で第一章を含め、現時点の設定をまとめたいと思います。

恐るべき者 前編

遠距離攻撃で最も重要なことは、命中率である。

相手の懐に入り、その身を狙う近距離攻撃と違い、距離があるため生半可なものでは容易く避けられるためだ。

そのため威力よりも重要視されるのが、スピードである。

着弾する時間が短ければ短いほど、相手が避けるために必要な動作を得られなくすることが可能となる。

それならば、近距離攻撃は更に避けられるのではないかという問題になってくるが、そもそも近距離と遠距離を同じ尺度で考えるものではない。

しかし、そのどちらにも共通点はある。

それは敵を倒すという、なんとも単純で尚且つ複雑怪奇な部分である。

デスマンが放つデスアローは威力もさることながら、その実スピードもかなりのものがある。

ほんの数秒… 十秒もかからず子供達が立ちすくむ場所まで到達する。

二体のパートナーデジモンは何も考えられず、その場へ急ぐが間に合うことは絶望的だ。

選ばれし子供が死ねば、パートナーデジモンの存在意義… すなわちアイデンティティは失われる。

存在意義を奪われた者に待つは緩やかなる精神の崩壊とその身の破壊のみ。

戦いを楽しむ者は決して行わぬ行いだが、デスマンは戦いに楽しみを見出すようなデジモンではない。

ただそこにあるのは、冷徹なまでの目的遂行の精神のみ。

そして訪れる着弾の時……

非常なまでの爆発音と、吹き荒れる砂塵の舞。

凝縮された破壊の衝撃は無残に土をえぐりあげ、子供達は同時に発生した砂塵によってその姿を隠す。生存は絶望的だろう。

何もかもがスローモーションのように感じられる。空を掴んだ掌が間に合わなかったと… 助けられなかったのだと、二体を苛む。

「人間とは、かくも脆いものだな」
「貴様ツ！」

全く面白みのないとも言いたげな軽蔑の含まれた声。例えるならば、周囲を飛び回る鬱陶しい羽虫を叩き落としたかのような、何の感慨もない言葉だ。

本当にそれ以上もそれ以下もない。興味など何一つない。道端の草を踏みにじっただけ。人間などデジモンには必要ない… デスモンは言外にそう告げているのだ。

それはパートナーデジモンを全否定すると同意であり、自らのパートナーを守れなかったと後悔する二体はふつつつと沸き上がる怒りを覚えさせるには充分だった。

普段、温厚でのんびりとした気性のウオーグレイモンが怒りに震えた声をカラカラに乾いた喉からひねり出す。

血が滲み出すほど力を込め、ドラモンキラーを握りしめる。そしてそのまま声にならぬ怒号と共に飛びかかる。その勢いは先程の比ではない。

「これは中々…」

されど、デスモンの余裕を削ぎ落とすことは叶わない。

力任せに叩き込まれるドラモンキラーを容易く指先でつまみあげる

と、驚愕に動きを止め、頭となった腹部にデスアローを叩き込む。曇った悲鳴が響き、腹部の鎧はいとも簡単に碎け散る。

今まで放ってきたデスアローとは威力が違う。

鋭く研ぎ澄まされた矢じりは鎧の接合部分を射抜き、内側の肉をえぐりとる。

クロンデジゾイド合金の鎧の破片が幾つも宙を舞い上がると同時に、吹き出た血液データがその身を濡らす。

しかし、頭に血が登った今のウォーグレイモンはそんなものにせず余裕めいた笑みを浮かべたデスモンの横つ面を力いっぱい殴り飛ばす。

そしてそのまま片膝を地面へ力なく下ろす。

暗黒の力が籠った一撃を喰らったのだ： 気が失うほどの激痛がその身を貫いているにも関わらずの反撃に流石のデスモンも予想してなかつたらしい。

避けることもできず、横つ面を殴られ、力が作用する方向へ体を傾ける。

なんとか両足に力を入れ、吹き飛ばすことは避けたが、久しく感じる頬の熱さに思わず意識をそらしてしまった。

そこを狙ったようにエンジエウーモンが両手を天に掲げ、凄まじい聖なる力を集中させる。

聖なる力はやがて両手を囲うかのような円の形を描き、ゆっくりと上昇を開始する。

「セイントエアーツ！」

円形へと姿を変えた力はまるで天使の輪のように頭上に光り輝く。

そこから降り注ぐ冷酷無慈悲な力の雨。

全てのワクチン種に力を、全てのウィルス種に枷を与える天上の輝き。

未だ癒えぬ傷口から吹き上がっていた血液データがその流出を減少

させていく。

体の奥がこの上なく熱い… 聖なる力が内なるワクチン種としての力を引き上げていく。

最後の力を振り絞り、立ち上がる。

おそらくはこの攻撃が最後となるだろう。決して避けさせるわけにはいかない。

両腕を天高く上げ、そこへ大地の力を集中させる。

エンジエウーモンもまた、天使の輪となった力の象徴から邪悪を消滅させる聖なる矢を形成する。

されど止むことなく降り注ぐ天上の光がデスマンの力を奪っている… はずだった。

「ククク… クツ…… ハーッハッハッハ！」

唐突に響いた高らかな笑い声。

この状況下で何を笑うことがあるのだろうか？ 疑問が頭を過ぎるが、これは絶好のチャンスだ。

避ける素振りすら見せぬデスマンは宙へ浮いた二体を笑んだ瞳で見つめる。

そこにあるのはやはり余裕。

ウィルス種であろうデスマンはセントエアアの効力により、その力を減少されているというのにも関わらず、だ。

何故、笑うことができる？

何故、余裕を崩さない？

何を考えているのか全く理解できない。

そもそも、ワクチン種にはウィルス種がわからない。所詮、相反する存在なのだ。分かり合うことなど不可能。

宙に浮かぶ両者ともに攻撃の準備は整った。

後は打ち込むのみ。

「さあ、全ての力を消費するといひ……」

小さく紡がれた言葉は発した本人以外、聴く者はいない。

ウォーグレイモンは、頭上に圧縮した大地の力を振りかぶる。

エンジエウーモンもまた、手にした今までは比喩物にならない聖なる矢を構える。

チャンスはこの一度きり。

外すことは許されない。

そして、時はきた。

「ガイアフォースッ!!」

「ホーリーアローッ!!」

放たれた二つの力は真つ直ぐデスマンへと向かう。

対するデスマンもまた、今から放つ技に備え、体を支えるため両足を広げる。

頭部に位置する一際大きな単眼が怪しく光る。

デスマローのエネルギー量など足元にも及ばぬほどの力の本流がそこに集中されているのだ。

そして、単眼が赤く輝いた瞬間、そのエネルギーは爆発する。

直径1mはあるうかと思われる特大のエネルギー波が迫り来る二つの力を迎え撃つ。

「エクスプロージョンアイ」

ぶつかり合う正反対の力。

されど拮抗することはない。

渾身の力で放ったガイアフォースとホーリーアローは無残にも撃ち抜かれ、爆風と共に霧散する。

その中を突き進むは邪悪な波動、エクスプロージョンアイ。

技を使う場は完璧だった。
ただ、この場にいる誰もが気付くことがなかっただけ。
自らの経験が生んだ大いなる勘違いに。
避けることすらできず、ただ驚愕と疑問の中、二体のワクチン種は
突き進んできた力の波動に飲み込まれる。
そして、訪れるは静寂……

凄まじいエネルギーの爆発が見えた。
走る三人と三体はエネルギーの衝突によって生じた強風に煽られな
がらも、真つ直ぐその方向へと目を向ける。
おそらくは先程の衝撃は、互いに必殺技を出した所為で起こったも
のだろう。

戦いは終わったのだろうか。
次なる衝撃波は襲ってこない。
デジヴァイスが離れてしまった仲間の居場所を指し示している限り、
負けてはいないだろう。
ならば、勝ったのか？

「終わった……のか？」

我知らず呟いた言葉。

本当に小さな声だったが、それはシツカリと皆に届いていたらしい。
誰もが固唾を呑んで見守る中、気配に敏感なサイバードラモンが唸
るような声を上げる。

その様子からしてどうやら、まだ終わってはいないようだ。
なら、急ぐに越したことはない。
きっと自分達の力も必要だろう。

何せ相手はサイバードラモンの言葉を信じるのなら、究極体。

数は大いに越したことはない。

「急ごう。何か、嫌な予感がする」

歴戦の経験が告げる。

戦いの中、攻撃が止むのは互いに戦闘を続行するほどの力が残っていない場合と、両者の力が拮抗している場合の二択。

できれば後者であって欲しい。

後者であれば、自分達が到着した瞬間、事態を好転することが可能しかし、その可能性は極めて低いのではないかと遼は感じ取っていた。

先のメタルファントモンとの戦いからして、彼等は自分達より肉体的にも精神的にも弱い。

おそらくその実力には相当の差があるはずだ。

急がなくては…

取り返しのつかない事態になる前に。

互いの顔を見合わせ、一つ頷く一行は再び足を進め始める。

全ては既に終わっていると知らずに、ただ無事であることを祈り続け……

恐るべき者 前編（後書き）

戦闘不能者が続々と出てきました。

唯の魔王型相手にコレだと、七大魔王と対等に渡り合えるのか？
書いている作者自身、わからなくなってきました（え

アンケートの方、終了いたしました。

貴重なご意見、誠にありがとうございます。

第二章、終了と共に方針の方を発表します。

恐るべき者 中編

……？

沈む意識の水底で、感じていた

それが何かはわからないけれど…

自分にとって必要なものだと認

識できた

流れ込む力の奔流

意識は未だ、朧気なまま

邪悪を凝縮した波動、エクスプロージョンアイは相反する存在であるワクチン種の攻撃をいとも容易く貫いた。

何が起こったのかわからず、唾然とする二体のワクチン種。

どうして？ 何故？

そういつた疑問が頭に過ぎる。しかし、考える暇はあいにく与えられなかった。

無慈悲に迫る邪悪な波動はただ、狙うべき者達に向かって突き進み、全てを飲み込み、爆発する。

圧倒的な闇の波動になす術もなく、舞い散る木の葉のように翻弄される。

全身を貫く激痛。クロンデジゾイドの鎧も、その役目を全うすることなく粉々に吹き飛んでいく。

優美であった八枚の翼は、その姿を無残に散らせ、黒く焦げた幾枚もの翼が宙を舞う。

残ったものといえば、静寂のみ。

究極体であり、暗黒の力を味方に付けているデスマンの必殺技をまともに受けたのだ… 無事で居る保証などどこにもない。

攻撃の余波が残る中、空中から落下する二体。

共に退化した姿である。

元々デスアローの直撃を食らっていたウォーグレイモンのダメージは尋常ではない。

究極体という姿へ進化するだけでもその体にかかる負担は大きいというのに、今回のこのダメージ。

もはや成長期の姿を保つこともできないのか、コロモンという幼年期まで戻ってしまっている。

ぐったりと閉じられた瞳は開くことを忘れてしまったかのような。に対するエンジエウーモンもまたダメージは深刻なようだ。

聖なる存在であるエンジエウーモンにとって暗黒の力は相反するもの。

故に今まで戦ってきた暗黒デジモンに対し、エンジエウーモンやエンジエモンといった聖なる力の代弁者ともいえるデジモン達の力は非常に有効だったのである。

ならば、その逆はどうだろうか。

幾度と戦ってきたが、天使型デジモンが暗黒系のデジモンに直接的な攻撃を受けたことなど皆無と言ってもいいほどない。

だからこそ、知らなかったのだ。

光と闇は常に表と裏であり、だからこそ弱点でもある事を。

故に暗黒の力を持つ者の弱点は聖なる力であり、聖なる力を持つ者の弱点もまた暗黒の力などである。

テイルモンという成熟期の姿ではなく、プロットモンという成長期の姿に退化した事は至極当然という事なのだ。

まるでボロ雑巾のように、力なく重力に従って落下する。

「なんとも、拍子抜けさせてくれる……」

何故、彼の方々はこのような存在を危惧されるのだ？　これほどまでに弱い相手を」

身じろぐことすらできぬほど衰弱した二体のデジモンを見下ろしな

がら呟く。

この二体は選ばれし子供のパートナーデジモンだ。主より探すことを命じられたデジモン達とは根本的な部分からして異なる者達。

他の七大魔王も危惧していたほどの存在がこうまで弱いとは、呟いた言葉通り拍子抜けさせられる。

何故なら、今のデスモンの姿は本来の姿ではないのだから。

本来の姿ではないからこそ、扱える暗黒の力もたかが知れている。その状態でここまで追い詰めることができた。

これを弱いと称して何が悪い。

確かに進化した当初、感じられた力は曲がりなき聖なる力。暗黒の存在である自らを脅かすに相応しい……そう感じ取ることができた。しかし……この体たらくはなんだ？

これでは、七大魔王を倒すことなど夢のまた夢。傷一つ負わずことなどできないだろう。

「……一網打尽にしてしまったほうが手っ取り早いから」

あの様子では逃げることなどできはしないだろう。逃げるとしてもその移動距離はたかがしれている。

辺りを走る光の柱に連れ去られなければ、だが。

既に飽いたというわけなのだろう。コロモンとプロットモンを見つめる瞳にはなんの感情も宿っていないように見受けられる。

それに加えて、進化の出来ない成長期デジモンなどともに相手をする必要もない。

ならば、一度に葬り去ってしまったほうが楽というもの。

すっかり視線から外していたが、あの三体のデジモンは一体どこへ行ったのだろうかと辺りを見回す。

自身の手の内にD-3がある限り、逃げ出すようなことはしないだろう。

特にコレは三体いた内の一体のパートナーのものである。

しかし、幾度も見回せどその姿を視認することはできない… 一体、どこへ行った？

D 3の反応は相変わらずこの辺りを示している。

周囲は砂漠。身を隠せるような岩場も存在していない。なら、どこへ行ったのか……

「下、か」

隠られる場所はもはや下… つまり、地面の中としか考えられない。

しかし、地面を掘ることが得意なデジモンなどいたか？

あの場にいた成長期デジモンは見たことのない赤い爬虫類型と、双子のように似通ったデジモンだけだ。

その中で穴を掘れそうなのは爬虫類型だが、このような短時間できるわけがない。

眼球を下へと向け、しばし思案する。

主より無計画にこのデジタルワールドを傷つけてはならぬと言われている。

デスマン自身も無意味な破壊をしようとは思わない。では、どうするか……

所詮、奴等は逃げられぬ。ここは強者として様子を見ることが得策。フワリと背に生えた蝙蝠とよく似た翼を動かし、宙へ浮く。

「さて、選ばれし子供達のお手並み拝見といくか」

自身の主が何を考えているのかはわからないが、おそらく自分の行動は時間稼ぎだろうとつつすらとではあるが、デスマンは理解していた。

現在、復活している七大魔王の目的は全魔王の復活。

これは子供達を翻弄し、時間を稼ぐと共に主自身の娯楽だろう。性格はそう簡単に変わることはない。

そこを考慮したこの予想はおよそ9割方当たっている。

皆まで言わずとも、大体の事を察してくれる部下はそう何人もいない。だからこそ、任されたのだ。

その期待には応えなければならぬ。

時間稼ぎが本来の目的なのだ。ここに自分がいれば、必ずやその姿を現す。

満身創痍のパートナーデジモンを見捨てるほどの冷酷さを生憎、彼等は持ち合わせていないだろうから。

なら、もうしばらく付き合ってやろう。

この愚鈍な隠れんぼに……

「静かになつたね……」

視界の効かぬ土の中、すっかりいつもの調子に戻ったテリアモンが小さくつぶやいた。

そのすぐそばには仲間であるギルモン達は当然として、デスアローによって吹き飛んだはずの太一とヒカリの姿もある。

テイマーのいない彼等にとって、究極体と戦うなど以ての外。

しかし、だからといって逃げるようなこともできなかった。

出来ることといえばこうして姿を隠し、機会を伺う事くらい……

それが如何に自分達が非力な存在であると証明するものであったとしても、何もしないわけにはいかなかった。

デスモンが同じ究極体であるウォーグレイモンや天敵ともいえる聖なる力を持つエンジェウーモンに集中し始め、自分達が視界から外された時に彼等は彼等で独自に動き出した。

双方共に戦いに集中していたこともあり、誰にも悟られなかったことも大きいだろう。

今にも飛びかかりそうな勢いを見せていたギルモンとテリアモンを止めたのは、テリアモンによく似た茶色のデジモンだった。

元々、このデジモンは四聖獣に仕え、その聖域を守るために作られた存在。

そう簡単に情に流されることはない。

ましては今この場にパートナーたるタイマーはいないのだから、尚更だろう。

そしてその行為は功を成したのだ。

デスアローにて狙い撃ちされた子供達はあまりの恐怖に体中の筋肉という筋肉が固まり、あのままでは確実に直撃し、命はなかったはず。

しかし、子供達は生存し、今この場にいる。それは全て、彼等が独自に動いていたからに他ならない。

そう……着弾する寸前にギルモンが掘った横穴は子供達のすぐ真下まで到達したのだ。

コンマ一秒でも遅れていれば、全てが終わっていた。

空洞となった足場は当然ながら、子供たち二人分の体重を支えきることにはできない。よって、起こることは足場の倒壊。

真つ逆さまに堕ちた子供達は想定外のことには驚き、呆然としていたが、頭上より聞こえた爆発音と爆発によって起こった熱にすぐに我に帰る。

近くにいたギルモンが二人の腕を掴み、奥に追いやることによってほぼ無傷で助かったといえよう。

だが、彼らは知らない。

元々あのデスアローは子供達を狙ったように狙ってなどいなかった事実……

しかし、それでもすぐ近くに被弾するようになっていたのだから、ただでは済まなかっただろうが。

デスモンに子供達を殺そうという算段は一つもなかったのである。

「なら、戦いは終わったのか……？」

「おそらくは終わりを告げたのだろう。」

しかし、どちらが勝ったのかはわからぬ。故に、しばらくは様子を見ることを推奨する」

今すぐにもパートナーの下へ駆け寄りたいたい。

おそらく彼等は自分達の姿が見えない事から、守れなかったと自責の念に駆られているはずだ。

それを癒さなければならぬ。

そして、癒すことができるのはパートナーたる子供達だけ。

胸中に過ぎる気持ちは痛いほどわかる。しかし、それを制したのもまた茶色のデジモン。

任を解かれたとはいえ、四聖獣との関係が破綻したわけではない。

テリアモン達にも話してはいないが、茶色のデジモンには四聖獣から直々に命が下っている。

“選ばれし子供達を我等の代わりに見極めよ”との命が……

恐るべき者 中編（後書き）

ウォーグレイモン&エンジエウーモン戦闘不能。

デスマンの実力はベルアルヴァンデモンを超えているので、この敗北は云わば必然です。

この後、子供達は更に追い詰められていくので……

時にはスカツとした勝利を描きたいものです。

そしてギャグを……

恐るべき者 後編 上

「それにしても何て奴だ。

デジモンを無視してタイマーを直接攻撃するなんてさ」

苦虫をゆっくりと噛み砕いたような面持ちで再度呟くテリアモン。そこに含まれる感情は怒りと恐れだ。

今回は自分達がいたから、今戦っているデジモン達のパートナーは死なずに済んだ。

しかし、いつもこのようにうまくいくとは限らない。むしろ、うまくいかない可能性の方が高いだろう。

その理由とは至極単純明快である。

パートナーデジモンが戦うのは無力な子供達を守るという事が大前提として存在する。

故に守るべき対象のすぐ近くで交戦などできるはずもない。必ずある程度の距離を取ることが必要となるのだ。

距離が近くなれば近くなるほど戦いの余波は子供達に及び、怪我をする可能性が高まる。

それは果たして守るといえるのだろうか？

確かに命は守れるだろう。しかし、怪我をさせるということは守れなかったという証でもあるのだ。

無意識の内に距離を取ることが仕方ないことなのである。

しかしその場合、今回のような子供達を直接狙われれば、確実に救出は難航するだろう。

そうなった場合、自分はパートナーを守ることができるのだろうか？ そう恐れを抱いてしまったこともまた仕方ない事だ。

特にこの世界のデジモン達は今回の件に強い衝撃を受けたことは言うまでもない。

デジモンにとって戦いとは存在意義である。それは野生であっても

パートナーデジモンであつても大差ない。

それを取り上げることなどできるのだろうか？

存在理由を取り上げられた者に待つのは破滅であり、自身のアイデンティティの崩壊である。

しかし、ここで知っておいて欲しいことがひとつ存在する。

先に記した“戦いはデジモンの存在理由”というものは、実のところ選ばれし子供達のパートナーデジモンにはハッキリ言って通用しないのだ。

彼等は子供達のために作られたデジモン。

普通のデジモンとは生まれも負荷された存在理由も異なる存在なのである。

それこそ、世界の違いなのかもしれない。

同じパートナーデジモンだからといって、テリアモン達は本来野生で生きていた個体だ。当然、戦いを求める本能をどこかに持っている。

例えばタイマーである子供達に戦うことを禁じられようと、戦いがあれば勇んで参ろうとするのは理屈ではなく本能なのだ。

それは生まれがあまりにも特殊すぎるギルモンであつても同じこと。むしろ、生まれたばかりの赤子同然だったからこそ、戦闘本能を上手く御することができずにいた。

今では大分マシになってはいるけれど、他のデジモン達と比べまっさきに戦闘態勢に入るところは変わっていない。

「まさか俺達を狙ってくるなんて考えてもいなかった……」

ウォーグレイモン達、大丈夫なのか？」

「きつと、デスモンは私達が今まで戦ってきたデジモンとは根本的に違うのよ……」

そして衝撃を受けたのはデジモン達ではなく、子供達も同様。

ヒカリが言ったとおり、今回の敵……七大魔王は今まで戦ってきた

デジモンとはかけ離れた存在なのだろう。

考えてみれば、今この状況に置かれているそもその原因はこの世界の選ばれし子供達が人質に取られてしまったためだ。

その事から考慮すると、相手がデジモン達を無視し、子供達を直接狙うのはわかりきっていたことだ。

しかし、この場にいた誰もがそのことを全くもって考慮していなかった。

それが今の状況を作り出したとも言えるだろう。

先程まであれほど伝わってきた戦闘音が今では不自然なほど聞こえてこない。

それが示すものは戦闘の終わり。

力が拮抗しているために出方を伺っているとは考えられない。心配そうに頭上を見上げる太一とヒカリ。

しかし、目に映るのは砂ばかりであり、パートナーの無事を確認することはできない。

「僕とギルモンだけ外に出て、様子を見てこようか」

「うん、わかった。」

ちよつと待つて、穴掘るから」

そんな太一とヒカリの様子を見て、自身のタイマーのことを思い出しのだろう。

テリアモンが様子を見に外へ出ることを伝える。

敵であるデスモンがDアークを持っていること事態、内心穏やかでいられないというのに、まざまざと見せつけられた今回の戦い。

タイマーがいなければ進化することのできない情弱な我が身をこれほど疎んだことはない。

進化さえできれば、彼等のパートナーを助けに行くことができるのに……

それだけではない。進化ができれば、Dアークを取り戻すことも、

自分達のタイマーのことも聞き出せるかもしれないのに……

何故、自分達はこうも無力なのだろうか？

成長期という我が身は究極体とまともに戦い合うことすらできない。野生の勘が告げている。この状態で戦っても万に一つも勝ち目などないことを。

だからこそ、今出来ることを最大限に行うのだ。

究極体同士の戦闘はそれだけでも多大なるエネルギーを周囲に放出する。そのエネルギーに彼等が気付いてくれれば、もしかしてら戦況を覆せるのではないか？

いや、きつと覆して見せるだろう。

横穴を広げていくギルモンの姿。テリアモンは様々な鬱屈とした思いを胸に秘めながら、見つめていた。

未だメタルフロントモンに負わされた傷が癒えていないために、進化することのできないピヨモン。

進化さえできれば、丈や遼を連れて何の障害物もない空を飛び、一直線に太一達の元へ迎えるというのに……

今、この場にいる唯一飛行することが可能なサイバードラモンはその体格からして、全員を運ぶことは無理だろう。

重量的には何の問題もない。しかし、人間三人と成長期のデジモンを抱きかかえられるのかという微妙なところだ。

なまじ出来たとしても、攻撃する手段を封じられてしまう。

今から向かう場所はおそらく究極体による戦いが行われている死闘の場。

そのような状態で飛び込むなど愚の骨頂。簡単に狙い撃ちにされ、全員先頭不能に陥るか悪ければ命を落とす。

だから心が焦りに支配されようとも、必死に足を進めるしかないのだ。

誰も何も言葉を発しない中、一人立ち止まった遼が一心不乱にある

きつづける二人に爆弾を投げつけた。

「君達、ひとつ約束して欲しい。

今、究極体と戦っているだろう君達の仲間がもしも、負けていたらすぐに戦線から離脱してくれ」

「えっ!？」

裏表の存在しない真剣な表情はこの一言が心から言っていることを示している。

しかし、何故…ここにきてすぐに戦線離脱するように忠告するのだ？

確かに自分達は完全体までしか進化することはできない。しかし、それを彼は知らないはずだ。

彼が見たのはガルダモン一体のみ。

ゴマモンが一体何に進化するかなど知るはずもなく、また究極体に進化できないという判断はできるはずがない。

何故なら、彼等が戦っていたのは完全体のメタルフロントモンだ。完全体相手だ、究極体で挑む必要はないと経験豊富な彼なら察することは不可能ではないだろう。

「おいおい、それってどういう言う意味だよ？

おいら達にアグモン達を見殺しにしろっていう意味か!」

「私だつてまだ戦えるわ!」

真つ先に反論したのはデジモン達。

それもそうだろう。自分達の仲間が今、戦っているのだ。

もしもだろうがなんだろうが、“負けた”などと思いたくない。負けということはずなわち、死を意味する。

うまく逃げていることを願うが、究極体相手では難しいだろう。

それ以上に彼等が激しい感情を見せることとなったのは、最後の—

言： “戦線離脱してくれ” という言葉だ。

遠まわしではあるが、それはある種の戦力外通告である。完全体までしか進化することはできないといっても、彼等はダークスマスターズやアポカリモンという究極体デジモンを相手に果敢に立ち向かった実績を持つ。

遼が知らないだけで、究極体相手の実践ならば何度も積んでいるのだ。

今すぐにでも駆けつけてともに戦いたいと願っている彼等にとって、この一言は重い。

「君達の力をあてにしない訳じゃないんだ。

ただ、もし君たちの仲間が負けて動けない場合、安全な場所まで避難させてあげて欲しいという意味なんだよ。

言葉が少し足りなかったみたいだ、すまない」

まさかそこまで激しく反論されるとは思っていなかったようで、詫びる遼。

彼はどこまでも現実的だ。

そして、今までサイバードラモンという非常に強力なパートナーデジモンと二人だけで何度も苦境を乗り越えてきたという実績を持っている。

だからこそ、忠告する。

先程の戦いの傷の癒えていないピヨモンはまず戦いに参戦させること事態、無謀だ。

そして、ゴマモン。

彼は先の戦い、ほとんど子供達の護衛についており目立った怪我などはしていない。むしろ、無傷といってもいいだろう。

しかし、その姿から分かるようにゴマモンの得意とする戦場は水中だ。

見て分かるとおり、ここは砂漠地帯。水など存在していないといっ

ても過言ではない。

100%の実力を出せない以上、戦場に出すことは出来る限りしないほうが得策だということだ。

だが、この事を彼等に伝えることはできない。

仲間が戦っているという事が大前提に存在するからだ。

ただ、自分達の実力不足が指摘されているような理由を語るわけにはいかない。

なら、もっともらしい理由を付けてしまえばいい。

ハッキリ言つて、先程の大爆発：そして今の静寂からして、負けた可能性が高いと遼は踏んでいる。

もう既にロードされている可能性だつてあるのだ。

自分自身はキチンと対話したことはないが、一人パートナーデジモンと永遠の別れを体験しているティマーがいる。

ここはそういう世界なのだ。

パートナーデジモンといえども、負ければ確実に死が待っている。

だからこそ、私情に流されながら戦つてはならない。感情任せの攻撃など攻撃ですらない。

そのことを彼等に教えてしまえば、どれだけ楽になるか……

しかし、それをしないところは遼の優しさだ。

先の発言で少々頭に血が登ってしまっていたデジモン達も落ち着きを取り戻し始めている。

ほうと気付かれないように息を吐く。

今、ここで亀裂をいれるわけにはいかない。

デジヴァイスの反応からして、戦いの場まであと僅かなのだから……

恐るべき者 後編 上（後書き）

更新遅れてすいません。

月末に近いということもあり、少々仕事を立て込んでおります。多少なりとも、更新スピードが今後とも遅れてしまう恐れがあります。

どうかご容赦ください。

小説内の表現ですが、

アドベンチャー視点とティマーズ視点の二つが混合している場所あります。

ティマーズの事を選ばれし子供と呼ぶのはアドベンチャー視点
ロードやティマーという単語が出る部分はティマーズ視点となります。

第二章は知り合っていないということを前提としておりますので、少々面倒な表現方法をとっております。

ギルモンにより着実に掘り進められる横穴。

様子を見るためとはいえ、警戒を疎かにしてはならない。むしろ、様子を見るためだからこそ警戒しなければならぬといえよう。

そして同時に既に掘られている部分から覗くのではなく、新たに掘り進めるのは子供達の安全のためだ。

デジモンと違い、人間の身は本当に脆弱だ。

それをパートナーである彼等は本能ともいえる深い部分でよく理解している。

故に少しでも様子を見るといふ危険を伴う行動から距離を取らなければならぬ。本来のパートナーがいない今では至極当然だろう。

しかし、だからと言って、あまりに距離を離しすぎるのはよくないと先の件で学んでいる。

Dアークがあつたとしても持ち主であり、絆の体現者であるティマ―がいなければ彼等は進化することはできない。

まあ、かなりの低確率で自主進化をすることもなきにしもあらずであるが……

「ギルモン、そろそろ外に出てみよう」

「うん、わかった」

不意に後ろを振り返り、ある程度の距離を確保できたか確認する。

一応、万が一を考えて子供達の側には茶色のデジモンに付き添ってもらっている。

彼は自分達とは違う。

元々、彼は四聖獣の一体であるデジモンが住まう場所へと通じる門を守る守護者的役割を持っていたデジモンだ。

そんなデジモンが何故、ここにしかも成長期の姿でいるのかは、姿

形がよく似ており、かつ共に住んでいるテリアモンにも詳しいことはわからない。

ただ、紆余曲折あつてとある子供のパートナーデジモンとしての立場を得たことは間違いない。

そして、そのために崇め敬つてきた四聖獣の怒りにふれ、任を説かれてしまったこともまた知っている。

今では自分達と同様、タイマーの力を借りねば進化することはできないが、それでも実力は同じ成長期の中であつても高い。

ここにもう一体… 別行動となつてしまったデジモンがいれば、どんなに心強かいことか……

しかし、いない者を頼つても仕方ない。

今、自分達にできることをしなければ… それが、自分達のタイマーとの再会に繋がるようなそんな気がするのだ。

「何か見えた？」

「うーん…… ツ!？」

ギルモンに肩車してもらつうように、上に登ると、小さな手を器用に動かし、頭上の土を掘つていく。

爪が短い分、掘り出すのに苦労しているようだが、さほど層は厚くないようで数分後には小さな穴を開けることに成功する。

今まで暗い穴の中にいたために、差し込む太陽光は目が眩むようなまぶしさを感じる。

僅かに目を細めながら、辺りを警戒しつつゆっくりと地上へ顔を出す。

敵に悟られないように、体の小さな自分が様子を見る大役を買って出たのだ。失敗は許されない。

まあ、理由はそれだけではないのだが……

茶色のデジモンならいざ知らず、あまり周囲に警戒を払うということが苦手でありかつ、体の大きなギルモンでは見つかる確率が上が

つてしまう。

だからと言って、戦闘能力もなく、まず警戒することのないクルマは論外だ。

しかし、茶色のデジモンには子供達に付き添うという重要な役割があるため、様子を見に行く…。つまり偵察に行くことはできない。ここまで考えると、偵察することができるのはテリアモンのみという答えが導き出される。

元々、自身のタイマーのDアークを持っているという一点においても、言葉として表現できない複雑な感情を持っているだけにむしろ、喜んでその役割を引き受けた。

しかし、ここで彼等は一つ重要な過ちを犯していた。それに気づくは顔をのぞかせた直後…

「テリアモン、どうしたの？ 何があったの？」

警戒しているために口少なかったが、勇んで覗き込んだテリアモンが唐突に動きを止めた。

何を見たのか？ 何を感じたのか？

何も分からないギルモンはただ疑問の声を上げるのみ。

しかし、テリアモンは何も答えない。否、答えられないと言ったが正しいだろう。

見ていないものは知る由もない。見ているものだけが知りえる事実。目の前に広がるのは戦場の爪痕。巨大なクレーターに焦げ臭い煙の臭い…。それはまあ、想定内のことだ。

究極体二体と完全体による死闘である。痕が残らない方がおかしい。先の大爆発は、両者の必殺技がぶつかりあった際に起きた衝撃音。

そして、その後を訪れた静寂からして決着はついたものだ。テリアモンは考えていた。

そして、訪れた静かすぎる静寂から子供達のパートナーデジモンは敗れたのだと薄々感づいていた。

だからこそ、クレーターから少し離れた位置もしくは中に二体のデジモンが横たわっているのは理解できる。
だが…

「……無傷、だって？」

眼前で宙に浮かんでいるのは、多少のかすり傷はあるもののほぼ無傷であるデスマンの姿。

邪悪な単眼はようやく出てきた獲物を前に、蘭々とした輝きを持つて見つめる。

そこにある感情は、どのように惨たらしく殺してやるつかという殺意のみ。

対するテリアモンは表面に出さないが、内心明らかに動転していた。まさか、あれほど気配を消しながら出てきたというのにあっさり見つかるとは考えてもいなかった。

否、それ以上に同じ究極体と完全体の中でもウィルス種には強い天使型デジモンと死闘を繰り広げたというのに怪我という怪我が見当たらないとはどういうことだ？

コイツは自分達が考えていた以上の力を持っているのか？
ぐるぐると同じ思考が頭の中を回る。

どうすればいい？ そう考えれば考えるほど、導き出される答えは“死”のイメージのみ。

「ようやく出てきてくれたな。そろそろ、待つのに飽いてきたところだ。」

他のデジモンや選ばれし子供も近くにいるのだな？

「……そう簡単に僕が教えると思う？」

「成長期風情が強がるな。己の命が惜しければ、素直に話せばいい」

圧倒的実力差を感じ、臆病風に吹かれかける心をなんとか律し、真

正面が見据える。

自分と相手との実力差が顕著な場合、このような対応はよろしくないが、今現在自身の置かれている状況からして、逃げ果せるとは考えられない。

ならば、無理をして敬語を使うよりも等身大で尚且つこの鬱憤を晴らさせてもらおうではないか。

思ったとおり、デスモンは気分を害したようだ。

テリアモン自身を知る魔王型デジモンは一体のみ。彼もまたプライドがこれ以上ないほど高かった。

それが魔王型特有のものであるとすれば、このデスモンも同様と考えての狼藉だ。

見た目に反して毒が強い。

下で踏み台にしているギルモンもただならぬ気配を感じているのだろう。臨界体制をとっている。

例えダメージを与えることができなくとも、少しでも子供達が逃げられる時間を稼がなければ……

ごめんね、すまない…… そんな思いを胸に秘めつつ、剣呑に目を細めるデスモンを見やる。

しかし、全てを諦めたわけではない。

何故なら、その瞳は絶望したわけではない。むしろ、希望に満ち足りている。

「そうだね、素直に話せばいいだろうけど……」

僕は素直じゃないデジモンだからねっ！」

勢い良く地面の中から飛び出すと、肺を大きく膨らませるように息を吸い込む。

体内の中で吸い込んだ酸素を高温の焰へと変え、幾つもの熱気弾として口より打ち出す。

同時に地中で様子を伺っていたギルモンもまた、テリアモンが攻撃

態勢に入ったことを察し、その姿を地中より現す。既に口内には灼熱と考えられる炎が溜められており、数秒遅れはしたが、ほぼ同時のタイミングで火炎弾を放つ。

「ブレイジングファイア」

「ファイアーボール！」

まさに一糸乱れぬ連携攻撃と言えよう。

しかし、所詮は成長期同士の攻撃力……究極体であるデスモンにダメージを与えられることはない。

むしろ、火に油を注いだとしか言えない愚かな行為だ。

避ける必要すらないのだろう。幾つもの小さな緑色の熱気弾と凝縮され打ち出された火炎弾を真正面から受け止める。

僅かな煙が視界を遮るが気にすることはない。

巨大な単眼は愚かな行為に走った成長期デジモンを捉えて離さない。デスモンは嗤った。

なんとも愚かしい……そして、あまりにも弱い。

その程度で力で魔王に逆らうなど、怒りを通り越して哀れみを感じる。

ならば、一思いに殺してやるのが一興。

「そうまでして、死に急ぐか。」

よかるう、慈悲をくれてやる。デスア……ッ!？」

右腕を上げ、宙をその巨大な耳で浮くデジモンとその足元付近にいる成長期デジモンに向ける。

二体の間にはさほど距離はない。

ならば、デスアロー一つで充分殺すことは可能。

残虐な暗い光を瞳に移し、まさに今、死を与えようと力を集中させ始めたその瞬間……なんの前触れも無く感じる背後の鋭い痛み。

かろつじでうめき声を上げずに済んだものの、何が起きたのかと慌てて背後を振り返る。

そこにいたのは黒き装甲に身を包んだ一体のデジモン。

鋭い右の鉤爪には貴様を斬り付けたのは俺だとても主張するように、赤い血液データが付着している。

そして、その遙か向こう側にはこのデジモンのテイマーと思われる青年が厳しい視線を向けているのがわかる。

「そう、お前の思い通りにさせるものかっ!」

恐るべき者 後編 中（後書き）

大変、更新が遅れてしまい申し訳ございません。

年末もすぐということもあり、仕事が大変立て込んでおります。

それでも、今後は週二回は更新していきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

さて、ここでようやく二手に分かれてしまった子供達がようやく合流か？

“恐るべき者”というタイトルの意味が次でようやく明かされるかと思えます。

恐るべき者 後編 下

初めてまともな傷をつけられ、表面上は平静を装っているが、内心激しく動揺していた。

気を抜いていたとはいえ、攻撃を受けるまで全く気配を感じなかった。

今ではその気配を確実につかんでいるが、瞳にその姿を映すまで全くわからなかった。

先程戦った選ばれし子供とは明らかに場数が違う。

パートナーデジモンとテイマーの距離の取り方といい、感じる気迫といい完全体とは思えない。

大きく羽を広げると、一度距離を取るため上昇しつつ後退する。

こうなれば、いつでも殺せる成長期は後回しだ。

まずは、自身にまともな傷をつけたこのデジモンを殺すことが先決だろう。

「デスモン、データ種、究極体、魔王型デジモン、必殺技はエクスブロージュンアイ」

戦闘態勢に入ったデスモンを睨みつけながら、冷静に相手の情報を検索する。

Dアークは選ばれし子供達が持っているデジヴァイスとは異なり、単なる進化補助装置ではない。

パートナーデジモンが視認し、定めた相手の情報をネット上から検索することができる。

それはデジタルワールドでもリアルワールドでも変わることのない機能。

いわば、戦闘をより有利に進めるためのものなのだ。

確かに進化させることでデジモン達は強くなることができる。しか

し、それは所詮デジモン達自身の力であり、子供達が補助すべきところではない。

戦うのは常にデジモンであり、子供はただその姿を見て応援するだけ。

つまり、進化するためには必要不可欠であるが、進化さえしてしまえば、その必要価値は大幅に下落する。

それはD 3でも変わらない。様々な機能が付加されたが、結局子供達が戦闘にかんじて行えることは一切、増えていないともいえよう。

それを補うことができるのがこの世界のデジヴァイス、Dアークだ。Dアークの機能についてはソレを持つに至ったティマー達の世界に大いに関係しているといえよう。

デジモンのデータ検索機能に以前、遼が使用したカードによる能力の向上、そして今はまだ知られぬ機能が搭載されている。

これらは全て戦闘における子供達のサポートを可能とする画期的な機能といえよう。

そのために備わっていない機能も少なからず存在するが、それは今の段階では必要ないことだ。

「……………データ種？」

「ッ!? まずい、サイバードラモンッ! 距離を取るんだ!」

Dアークに映し出された情報を見て、遼は慄いた。

その姿形からして、遼自身も太一やヒカリ同様にデスモンをウィルス種だろうと安易に決めつけていたからだ。

しかし、そこはベテランティマーと名高い遼。

まず始めに相手の情報を調べる事を怠らない姿勢が彼等の二の舞を演じることを回避したのだ。

安易に決めつけた情報で戦っていれば、おそらくは負けていただろう。

相手は究極体であり、ワクチン種に強いデータ種なのだから……
だからこそ、即座に自身の考えを翻し、サイバードラモンを後退させる。
相性の悪い相手と戦う場合はどういった状況においても、まずは距離を離すことが重要だ。

例え、相手の主な攻撃手段が遠距離型だとしても、だ。

「……中々、頭が回るようだな」

デスモンが交代した以上、サイバードラモンが後退する必要はないのだが、あえて後退した相手を見て感嘆したように呟く。

先の攻撃より、デスモンが後退した距離はサイバードラモンのスピードをもってすれば、さほど問題となるようなものではない。

むしろ、一気に距離を縮め、今度こそ必殺の一撃を放つことは可能。そのまま何も考えずに攻撃を仕掛けられていれば、先の攻撃同様、負傷を負うのは違いない。

しかし、攻撃が終わった瞬間待っているのは痛烈な反撃である……デスモンは究極体であり、データ種。一段階劣る完全体であってワクチン種であるサイバードラモンの必殺技をまともに喰らったとしても倒せる確率は極めて低い。

しかし、相手はデスモンが予想していたよりも遥かに頭が回るようだ。

現在の状況が有利だからといって慢心せず、冷静に戦況を分析し、次へと繋げる。

だからこそ、後退するよう指示を出したのだ。目先の利益ではなく、その先を見越して……

「サイバードラモン、」

「……………」

返事は返ってこない。

しかし、それでいて十分な意思疎通はできている。いわば、阿吽の呼吸というものだろう。

遼はDアークを握りしめ、腰に装着しているホルスターよりカードをいくつか抜き取る。

大切なのはカードを使うタイミングとコンボ。

相手が何を仕掛けてくるかを見極め、的確に使用し、目的を達成させる。

そう、勝利が目的はない。遼の目的はデスモンの目的と同じく、時間稼ぎ。

目の前で倒されかけていたギルモン達が距離をとるために必要な時間。そして、彼等が仲間を助けに行くための時間である。

サイバードラモンもデスモンも動かない。両者ともに相手の出方を伺っているのだ。

「本気を出させてもらおうか……」

「本気、だって？」

先に動きを見せたのはデスモンだった。

単眼を細め、一際大きく羽をはためかせる。同時に巻き起こる竜巻にも似た突風。

砂漠を形成する砂塵が舞い上がり、遼とサイバードラムンの視界を奪う。

砂漠の砂というものは海辺の砂浜と同様で粒が細かい。目を庇おうと目蓋が降りるのは反射運動であり、一時的な視界の喪失となる。

しかし、もし砂が少しでも目に入れば、痛烈な視界不良を起こしかねない。

ここは反射運動に任せて多少の視界の喪失は受け入れる。この瞬間、デスモンが攻撃を仕掛けてくる可能性もあるが、遼は仕掛けてこないだろうという確信を持っていた。

だからこそ、この一時的な視界喪失を受け入れたのである。

舞い上がる砂塵の中、吹き上がる力の波動。禍々しくもどこか凜とした静寂にも似た力だ。

まだ上がって行く… まだまだ、上がる。しかし、限界のない力など存在しない。

存在しないのだが、

「!？」

次の瞬間、爆発的に放たれた波動。

デスモンを中心として新たな砂塵が吹き荒れ、何十にもサイバードラモン、そして遼の体を容赦なく叩き付ける。

第一波として放たれた砂塵から目をかばう目的で片腕を上げていたが、これには耐え兼ね両手で顔を覆うようにかばう。

両足に力を入れ、大地を踏みしめるが、力及ばず徐々に後退し、最終的には吹き飛ばされる。

サイバードラモンも同様だ。

遼と違い、上空にいたため足に力を入れる事もできず、せめてもの抵抗とばかりに体を小さく丸める。

風の当たる表面積を小さくすることにより、威力を最低限に抑えるためだ。

それでも、噴出した力の波動の前には踏みとどまることはできず、遼同様吹き飛ばされる。

「……なんて奴だっ」

ようやく収まり始めた暴風。

身体中を砂と埃にまみれながら、即座に上半身を起こし、デスモンの様子をうかがう。

砂埃を払う暇など存在しない。

暴風にさらされ、宙返りを二度、三度と繰り返してしまったサイバードラモンもまた、警戒を強め、未だ砂塵の渦の中にいるだろうデスモンをにらみつける。

本能が理性を上回り始めたのか、先ほどから唸り声を上げ続けている。

本格的に戦闘態勢に入ったサイバードラモンの状態をある程度把握しつつ、Dアークを握りしめる。

先ほど取り出したカードの数枚は暴風によって手から離れてしまった。

無意識のうちに勝負を焦っていたのだろう。顔をしかめつつ、砂塵の中より出でる魔王の鵜方をその瞳に移す。

そこにいたのは先ほどまでのデスモンではない。

灰白色だった肉体は、これこそ魔王と呼ぶにふさわしい漆黒へと変貌し、感じ取る力は先の比ではない。

明確な殺気が全身を刺し貫く。

「デスモン、ウィルス種、究極体、魔王型デジモン、必殺技はエクスプロージュンアイ……」

恐るべき者 後編 下（後書き）

大変、期間が置いてしまい申し訳ございません。

12月中には第二章を終わらせるつもりですので、今後は一週間に二回更新を目標に執筆作業に励ませていただきます。

デスモンvs遼&サイバードラモン開始です。

簡単には勝たせてくれる相手ではないので、まだまだvsデスモン編は続きます。

長いです。

幕間：堪能する余興

リアルワールドとデジタルワールドの境目に、その魔王はいた
全身を指す鋭く禍々しい力に目を細める
左手に握る魔杖、デスルアーに備え付けられる紅い宝玉を幾度も幾度も愛おしそうに撫でる

『ついに本気を出しおったか……』

重力も何も関係ないこの境目において、ふわりと佇む魔王は一人笑む
長いローブがゆらゆらと揺れ動き、衣ずれの音だけが響く
この邪悪な力の本元は自らが遣わせた、一体の魔王型デジモンのも
のだ

もう一体遣わせた完全体デジモンは既に抹消されてしまっている
己を含める七体の魔王とは比べるまでもない脆弱な存在だが、その
力は多くのデジモンにとって脅威となろう
うまくいけば、選ばれし子供の一人でも始末してくれるやもしれぬ
まあ、大して期待はしていないが……

『気付いておるか？ この力の濁流に』

問いかけるはカードへと封じ込めた、この世界の選ばれし子供達
否、この世界に選ばれし子供などというものは存在しない
そう、形容するならばデジモンに指示を与える存在テイマーと言っ
たところだろうか

彼等には実に興味深い研究対象だ
だからこそ、策を講じる一手でありながら、わざわざ捕獲し手元に
置いている

その力の源… どういう原理を用いてデジモンと一体となるのか？

久方振りに感じる大いなる好奇心を前に魔王は興奮を隠せないでいた
得たいものがあるのなら、如何なる手を用いても奪い取れ
知りたいことがあるのなら、自ら出向き引き出そう
己の欲に忠実までに動くその姿はまさしく、“強欲”を司るに相応しい

『ギルモンは… ギルモン達は絶対にお前達にやられたりしないッ
』！

『進化すらできぬ成長期デジモンが究極体に勝てるでも思っているのか？

だとすれば、なんとも面白い夢物語じゃな』

くつくつと喉の奥で嗤う魔王

威勢良く啖呵をきつたものの、自らとそしてパートナーの置かれた状況を思い知らされ、悔しげに表情を歪める
信じている

生きてもう一度、再開できることを
でも、どこか心の片隅でもう無理なのかな… そんな諦めが顔を覗かせる

『いい気になっていられるのも、今の内だけよっ！

レナモンを… あたしは信じてる。何でも、思い通りにいくな
んて思わないでよね』

『留姫の言うとおりだよ、啓人。』

僕達は絶対に諦めない。お前が何を企んでいるのか知らないけど、
テリアモン達はきつと乗り越える』

それでも、再会できると信じている

確かに常識的に考えて、成長期が究極体に勝てるはずがない

でも… それ以上に、テイマー達は自分達のパートナーを信じていた自分達もパートナーも一人じゃない
かけがえのない大切な友が、仲間がいる
だから、もう二度と、あんな悲しい別れが来ることはない
だから、必ず再会できる

『ほう… こつも絶望的な状況を目の前にしても絶望せぬか。
くくく… ますます興味深い童共じゃ』

それぞれ力強い光りを宿した眼が向けられる

なんとも浅はかで、愚かしく、滑稽なまでの純粹さだ
先の戦争で垣間見た人間達と、うり二つともいえる

選ばれし子供ではないとしても、同じパートナーデジモンを持つ者
として似た部分はあるようだ

此度の戦争も面白くなりそうだ

『案ずるでない。全てがうまく重なれば、お前達とパートナーデジモン達は再会できよう。』

じゃが、その代わりに、別の何かを失うことにはなるかの……』

カードに封じ込められつつも、敵愾心を失わなかったテイマー達の
様子が変わる

それもそのはずだろう

まさか、敵である魔王から再開できるなどと言われたのだから
本当なのか嘘なのか… 何を失うのか…？

疑問に揺れる視線を受け止めつつ、魔王は余裕ある振る舞いを崩さ
ない

既に、此度のために講じた策は完遂したも同然

後はこの余興を思う存分、堪能するだけ

幕間：堪能する余興（後書き）

全ては七大魔王の掌の中
テイマー達の身も、繰り広げられる戦いも、巡る状況すらも

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1090w/>

七つの災厄

2011年12月23日01時51分発行